

2017 年度

青山学院大学審査学位論文

指導教員 小田 光宏 教授

学校図書館利用指導の再構築

－教科教員との協働型モデルに関する研究－

The Reconstruction of School Library Instruction

A Study on the Model for Collaborative Practices between
School Librarians and Subject Teachers

教育人間科学研究科

教育学専攻

庭井 史絵

目次

1 章 研究の背景と目的

1.1	研究にあたっての問題意識	2
1.1.1	学校図書館利用指導の現状	2
1.1.2	教育現場における実践上の課題	4
1.2	用語の定義	5
1.2.1	図書館利用教育としての「学校図書館利用指導」	5
1.2.2	学び方の指導・情報リテラシー教育と「学校図書館利用指導」	7
1.3	先行研究の検討	10
1.3.1	日本における学校図書館利用指導研究	10
1.3.2	海外の学校図書館における利用者教育研究	15
1.3.3	学校図書館員と教員の「連携」という視点	17
1.4	本論文の目的と方法	22
	注・引用文献	25

2 章 学校図書館における利用者教育

2.1	日本における学校図書館利用指導の変遷	32
2.1.1	文部省の基準が示した学校図書館利用指導の内容	32
2.1.2	全国 SLA の体系表が示した学校図書館利用指導の内容	39
2.2	今日の学校図書館利用指導で取り扱われている知識・技能	43
2.2.1	調査の目的と方法	43
2.2.2	調査の結果と考察	45
2.3	学校図書館利用指導の理論的背景	55
2.3.1	ソース・アプローチからプロセス・アプローチへ	55
2.3.2	情報探索プロセスから探究プロセスへ	58
2.4	海外の学校図書館における利用者教育の動向	61
2.4.1	アメリカ合衆国	61
2.4.2	カナダ	64
2.4.3	オーストラリア	65
2.4.4	イギリス	66
2.4.5	フランス	67
2.5	本章のまとめ	69
	注・引用文献	70

3章 教育課程における「情報の探索と利用の指導」

3.1	学習指導要領と学校図書館利用指導	75
3.1.1	学習指導要領における学校図書館の位置付け	75
3.1.2	学校図書館から見た学習指導要領	77
3.2	学校図書館利用指導の近接領域	83
3.2.1	学び方の指導	83
3.2.2	情報活用能力の育成	90
3.3	教科における「情報の探索と利用の指導」－中学校社会科を例に	97
3.3.1	学習指導要領と解説における取り扱い	97
3.3.2	教科書・教師用指導書における取り扱い	102
3.4	教科書にみる「情報の探索と利用の指導」	107
3.4.1	研究の目的と方法	107
3.4.2	結果と考察	111
3.4.3	結論	117
3.5	教師用指導書にみる「情報の探索と利用の指導」	120
3.5.1	研究の目的と方法	120
3.5.2	結果と考察	126
3.5.3	結論	129
3.6	「学校図書館利用指導における役割分担の構造」の導出	131
	注・引用文献	134

4章 「情報の探索と利用」に関する知識・技能と生徒の習得状況

4.1	学校図書館スキル評価シートの開発と試験的实施	140
4.1.1	研究の背景と目的	142
4.1.2	研究の方法	143
4.1.3	結果	149
4.1.4	考察	157
4.1.5	結論	158
4.2	探究学習の過程で活用される知識・技能とその指導	160
4.2.1	研究の背景と目的	160
4.2.2	研究の方法	164
4.2.3	結果	169
4.2.4	考察	173
4.2.5	結論	175
4.3	本章のまとめ	176
	注・引用文献	180

5 章 学校図書館員と教科教員の協働による「情報の探索と利用の指導」	
5.1 研究の目的と方法	184
5.1.1 研究の目的	184
5.1.2 研究の方法	184
5.2 学校図書館員と教科教員の役割分担	187
5.2.1 分析の方法	187
5.2.2 結果と考察	187
5.2.3 結論	192
5.3 役割分担の形成プロセス	194
5.3.1 分析の方法	194
5.3.2 分析の手順	195
5.3.3 結果と考察	198
5.3.4 結論	209
5.4 本章のまとめ	211
注・引用文献	215

6 章 協働の構造が示す学校図書館利用指導の意義	
6.1 「学校図書館利用指導における協働の構造」の導出	217
6.2 協働型学校図書館利用指導の意義	223
6.3 本論文の成果と課題	226
注・引用文献	229

添付資料

第4章1節 試作版評価シート	附-1
----------------	-----

初出一覧	附-3
------	-----

参考文献	附-5
------	-----

※ 論文の目次や見出しは「章」以下の「節・項」について「1.1.1」のように記したが、本文では「1章1節1項」と表した。

1章 研究の背景と目的

はじめに

本論文は、筆者が中学校で取り組んできた学校図書館利用指導を主題としている。利用指導は、学校図書館法に定められた、司書教諭や学校司書が行う教育的活動であるにも関わらず、その内容や方法について明確な指針がない。文部省は、1970年に、“学校図書館の利用指導は直接的には図書館の利用に関して必要とされる知識・技能・態度の育成を意図するものではあるが、指導の究極的ねらいは、あくまでも、生涯にわたる自己教育を支える学習技術（スタディ・スキルズ）とか、あらゆる教科等の学習において必要とされる情報の検索・組織化・処理の能力などを育成することに存する”¹（下線は筆者）と定義している。しかし、学習指導要領（2008年公示）で、学校図書館利用指導は、教科教育や総合的な学習の時間と関連づけられていない。

1998年の学習指導要領改訂で、総合的な学習の時間や教科「情報」が新設され、情報教育への関心が高まると同時に、いわゆる「調べ学習」が学校現場に普及し、教科書以外のさまざまな資料・情報を使って「調べたり」「まとめたり」「発表したり」する学習活動が活発化している。つまり、学校図書館利用指導が、情報の探索と利用に関する教育の一環として、教育課程の展開に寄与する可能性は大いにあると言える。しかし、学習指導要領では、各教科や総合的な学習の時間における学校図書館の「活用」が謳われているものの、学校図書館利用指導は特別活動における学級活動のひとつに位置付けられているに過ぎず、司書教諭や学校司書がどのような教育的役割を果たすのかについては説明されていない。

本章では、まず、学校図書館利用指導の現状に基づく問題意識について述べ、日本と海外の文献レビューを通して先行研究における課題を明らかにした上で、本論文の目的と方法を示す。

1.1 研究にあたっての問題意識

1.1.1 学校図書館利用指導の現状

学校図書館法は、第 5 条で“学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない”²としている。ここで言う「学校図書館の専門的職務」とは、“一 図書館資料を収集し、児童又は生徒及び教員の利用に供すること。二 図書館資料の分類排列を適切にし、及びその目録を整備すること。三 読書会、研究会、鑑賞会、映写会、資料展示会等を行うこと。四 図書館資料の利用その他学校図書館の利用に関し、児童又は生徒に対し指導を行うこと。五 他の学校の学校図書館、図書館、博物館、公民館等と緊密に連絡し、及び協力すること”を指している。

司書教諭が行う「教育的活動」には、図書館利用指導と読書指導の二つがあると考えられるが、前者が、学校図書館法が定める専門的職務「図書館資料の利用その他学校図書館の利用に関し、児童又は生徒に対し指導を行うこと」に相当する。

しかし、学校現場に、司書教諭が利用指導という教育的活動を行う環境が整っているとは言えない。課題の一つは、司書教諭の配置状況であり、もう一つは、学校図書館利用指導の内容や方法を示す指針の不備である。

まず、司書教諭の配置状況について述べる。文部科学省による「平成 26 年度学校図書館の現状に関する調査」³結果によると、中学校の司書教諭配置率は、発令が義務付けられている 12 学級以上の学校で 97.2%、11 学級以下の学校では 29.8%であるが、そのうち、司書教諭の授業時間数を軽減している学校は、12 学級以上の中学校で 10.3%、11 学級以下の学校で 11.0%に過ぎない。小学校や高等学校においても同じ状況である。

配置されている司書教諭のほとんどが兼任で、中学校では担任や教科担当をしながら学校図書館業務を担っている。その理由は、学校図書館法第 5 条に「司書教諭は、主幹教諭（養護又は栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭を除く。）、指導教諭又は教諭（以下この項において「主幹教諭等」という。）をもつて充てる」と書かれているためである。すなわち、養護教諭や栄養教諭とは異なり、教職員定数法（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律）による定数措置がなく、いわゆる「充て職」として位置付けられているため、私立学校やごく一部の公立学校を除き、学校図書館の運営や教育活動を専門的に担う教員は配置されていない。

次に、利用指導の内容や方法を示す指針の不備について述べる。学校図書館利用指導は、学習指導要領上、特別活動のなかの「学級活動」に位置付けられている。そのため、教科のように教えるべき内容を示した基準がない上、教科書も作成されていない。仮に司書教諭が利用指導のカリキュラムを作成する場合、全国学校図書館協議会（全国 SLA）が作成した「資料・情報を活用する学び方の指導（利用指導）体系表」⁴や、日本図書館協会が作成した「図書館利用教育ガイドライン」⁵が参照されることが多い。これを見ると、利用指導が、単に図書館の使い方を教えるものではなく、情報を収集し、分析し、利用する過程で求められるさまざまな知識や技能を取り扱っていることが分かる。

情報の探索と利用に必要な知識や技能は、教科における「学び方指導」や「言語技術教育」としても取り上げられてきた。例えば、1980 年代に木下是雄が中心となって試作した言語技術のテキストブック『ことば』の目次は図表 1-1 のような内容で構成されている。

図表 1-1 言語技術の教科書の目次

ことば 1 ※1)	ことば 2 ※2)
富士山に見える日ー事実と意見 その1	はっきり言おう
サケの放流ー事実と意見 その2	新聞を読む
意見を述べる 意見を読むー事実と意見 その3	事実と意見の書き分け
説明をする	分かりやすい表現
人前で話す (スピーチ)	段落 (パラグラフ)
話を聞き取る	ノートをとる
説得をする	口頭発表
討論をする	レポート
段落 (パラグラフ) ー段落話題と中心文	レポートを書く (人文・社会系)
レポートを書く (社会科)	資料の使い方
図書館で調べる	推論の組み立て方
速読に慣れる	ディベート

【出典】 1) 言語技術の会編. ことば 言語技術. 言語技術の会, 1984, 目次より
 2) 学習院言語技術の会編. ことば 言語技術 2. 学習院言語技術の会, 1988, 目次より

言語技術の教科書で取り上げられている内容と, 全国 SLA の利用指導体系表 (図表 1-2) を比較すると, 両者に多くの共通点があることが分かる。

図表 1-2 「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」(中学校) の内容

	内容	指導項目
I	学習の方法を考える	いろいろな学習方法, 学習計画の立て方
	情報・メディアの種類や特性を知る	印刷メディア, 視聴覚メディア, 電子メディア, 人的情報源
	図書館の役割を知る	学校図書館, 公共図書館, その他の施設, ネットワーク
II	図書館を利用する	分類の仕組み, 配架の仕組み, 目録の種類, レファレンスサービス
	各種施設を利用する	博物館, 資料館, 美術館, 行政機関, その他の施設
	目的に応じてメディアを利用する	参考図書, 新聞・雑誌, ファイル資料, 視聴覚メディア, 電子メディア
III	情報を収集する	各種メディアの活用, 人的情報源の活用
	効果的な記録の取り方を知る	ノートの作成法, カードの作成法, 切り抜き・ファイルの作成法, AV 機器等を使った記録の取り方, コンピュータを使った記録の取り方
	情報を分析し, 評価する	目的に応じた評価, 複数の情報の比較・評価
	情報の取り扱い方を知る	インターネット, 著作権, 情報モラル, 個人情報
IV	学習の結果をまとめる	評価した情報の整理, 伝えたいことの整理, 自分の考えのまとめ方, レポートのまとめ方, 紙面によるまとめ方, コンピュータを使ったまとめ方, 資料リストの作成
	まとめたことを発表する	レポートによる発表, 口頭による発表, 展示・掲示による発表, 実演による発表, 写真・AV 機器を使った発表, コンピュータを使った発表
	学習の過程と結果を評価する	調査・研究の方法, 調査・研究の過程, 成果の評価, 相互評価

【出典】 全国学校図書館協議会. 情報を学習につなぐ: 情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説. 全国学校図書館協議会, 2008, p.47.

2008 年に改訂された学習指導要領でも, 探究的な学習に必要な知識や技能として「学び方」の指導が求められているが, それらは, 利用指導の領域ではなく, 教科の内容として位置付けられた。中学校の教科書を見ると, 国語科だけではなく, 社会科や理科, 技術家庭科に, 「学び方」の学習を含む単元が設定されている。しかし, 学校図書館については,

“学校図書館などを活用して学習することを通して、資料の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表の仕方などの学び方やものの考え方を身に付ける”（学習指導要領解説 国語編）⁶などと書かれているものの、司書教諭の役割や、利用指導と「学び方」指導との関係については説明されていない。また、2004年に作成された全国SLAの利用指導体系表も、新しい指導要領改訂に合わせた見直しが行われていない。

このように、学校図書館利用指導は、司書教諭が行う教育活動として学校図書館法に定められていながら、それを実施する人の配置や、教育内容や方法を示す基準が整っておらず、「情報の探索と利用の指導」が求められる昨今においても、それに寄与することができているとは言えない状況が続いている。

1.1.2 教育現場における実践上の課題

筆者は、中学校図書館で利用指導を行うにあたり、どのような内容を取り扱うべきかという課題に向き合ってきた。特に、総合的な学習の時間や情報教育が教育課程に導入され、さまざまな教科の教員が「情報の探索と利用の指導」に関わるようになる中で、司書教諭として何をどのように教えればよいのか再考することが必要であった。

学習指導要領で、学校図書館利用指導が取り扱ってきた知識や技能の多くが教科の領域に位置付けられていることを踏まえると、司書教諭（または学校司書）に教育的な役割—学校図書館法が定める「図書館資料の利用その他学校図書館の利用に関し、児童又は生徒に対し指導を行うこと」—は期待されていないとも言える。

一方で、「学び方」の指導や情報活用能力の育成が教科に位置付けられていても、実際には、教科の枠組みでは取り上げにくいものがあるのではないかと感じることもある。すなわち、教科教員では指導が難しい内容があり、それらは学校図書館利用指導として司書教諭（または学校司書）が担うべきではないか、とも考えられる。

しかし、司書教諭（または学校司書）と教科教員との連携を考えるにあたっては、両者の指導領域がどのように重なり合い、どのように異なるのかを明らかにしなければならない。司書教諭（または学校司書）が、利用指導にせよ、読書指導にせよ、何をどのように教えるのか説得力のある指針が持てない背景には、教科教育と利用指導の関係について十分検討されていないからではないか、というのが、本論文に取り組むにあたっての問題意識である。

1.2 用語の定義

1.2.1 図書館利用教育としての「学校図書館利用指導」

本論文では、学校図書館法第4条で“図書館資料の利用その他学校図書館の利用に関し、児童又は生徒に対し指導を行うこと”⁷と定められている職務を「学校図書館利用指導（文中では「図書館利用指導」、または「利用指導」も用いる）」の語で表す。中心となって指導するのは、同法で“専門的職務を掌る”とされている司書教諭、並びに、“専ら学校図書館の職務に従事する職員”とされている学校司書である⁸。

司書教諭と学校司書が利用指導を担う根拠として、学校図書館のあり方を示した資料を挙げる。まず、2009年3月に、文部科学省初等中等教育局のもとに設置された子どもの読書サポーターズ会議がまとめた『これからの学校図書館の活用の在り方等について（報告）』は、学校図書館と授業との関わりについて、

図書や新聞、インターネット等のデジタル情報など多様なメディアを提供して、資料の探し方・集め方・選び方や記録の取り方、比較検討、情報のまとめ方等を学ばせる授業の展開に寄与する。更に、司書教諭によるこれらメディアを活用した利用指導等の取組を通じ、情報活用能力を高めるための授業を自ら企画・実施する⁹

と述べている。

また、『これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について（報告）』は、学校司書の職務の一つに“教育的指導に関する職務”を挙げ、“図書館資料や検索ワードの選択に関する助言”，“目次・索引等の利用方法に関する説明”，“オンライン・データベース、情報源の検索方法等の助言”，“情報検索、情報の収集・記録・編集のアドバイス”，“辞書の引き方、目次・索引の利用法、日本十進分類法（NDC）等の図書館資料の活用の仕方についての説明”¹⁰といった項目を例示している。これらは従来より、学校図書館利用指導の内容と考えられてきた項目である。

以上の理由から、本論文では、利用指導を司書教諭と学校司書双方の職務として捉え、両職種を総称する場合「学校図書館員」と表す。

図書館で資料や情報を利用する能力を育成するための教育活動は、公共図書館や大学図書館でも行われており、「利用指導」の他に、「図書館利用教育」や「利用者教育」の語が用いられている。『図書館情報学用語辞典（第4版）』（2013年）は、図書館における「利用指導」あるいは「利用(者)教育」を表す語として、「図書館利用教育（Library Use Education）」を採用し、

図書館の利用者および潜在的利用者の集団を対象に計画、実施される、組織的な教育活動。文献利用指導や図書館オリエンテーションなどを含む。図書館サービス、施設、設備、資料などの活用にかかわる知識や技能の修得を主な目的とするが、近年では、情報環境の変化などを背景に教育内容が拡大、多様化し、図書館を含むさまざまな情報（源）の効果的利用に必要な知識や技能（情報リテラシー）の修得を目指す種々の活動を包括する用語と解される。利用者教育など、同義に使われる用語は多く、教育の代わりに指導、案内、ガイダンスといった言葉も使われる。¹¹

と説明している（下線は筆者による）。

「文献利用指導 (bibliographic instruction)」とは、同辞典によると、“図書館利用者に、情報をより効果的に入手し利用する方法を修得させることを意図した計画的活動。この目標に基づき、図書館の組織体系への理解ならびにレファレンスブックの利用能力の育成を図る”¹²ことを指す。又、「図書館オリエンテーション (library use orientation)」とは“主に潜在利用者の集団を対象に、特定の図書館におけるサービスの種類や概要、施設と設備の配置、開館日と時間、文献探索や貸出の方法、利用規則などの案内ならびに説明を行うサービス”¹³を意味し、「情報リテラシー (information literacy)」は、“さまざまな種類の情報源の中から必要な情報にアクセスし、アクセスした情報を正しく評価し、活用する能力”¹⁴と定義されている。

図書館利用教育と同様の目標と内容を持つ活動に対し、学校図書館では「図書館利用指導」の語が充てられることが多い。その経緯については本稿第2章1節で述べるが、第二次世界大戦後に、アメリカから来日した学校図書館コンサルタントの支援を受けて作成された学校図書館運営の手引の中で、「図書および図書館利用法の指導 (Instruction in the Use of Books and Libraries)」の語が用いられていたことに端を発する。その後、「図書館教育」の語が使われた時期もあったが、1961年に文部省が「利用指導」に統一した¹⁵。

戦後40年間にわたる利用指導の変遷について整理した笠原良郎は、「図書館教育」という表現について“読書指導と同義語にとらえられていたり、「図書および図書館に関する教育」のほか、「図書および図書館による教育」までも包含するものと考えられるなど、さまざまな捉え方があり、(中略)かなり混乱して使われていた”¹⁶と述べ、「利用指導」の語を用いることによって、学校図書館を学習に活用する際に必要な知識や技能の指導に内容を収斂させることができたと評価している。

今村秀夫は、文部省による利用指導の定義の変化を整理し、『学校図書館の管理と運用』(1963年)や『小学校における学校図書館の利用指導』(1966年)と、『小学校、中学校における学校図書館の利用と指導』(1983年)に継続性や一貫性が見られないことを指摘した上で、このことが、学校現場での利用指導の実践に混乱をもたらしたと結論付けている¹⁷。また、文部省の定義が“利用指導を図書館の系譜の中で探るよりは、学校教育の系列の中でという意識に立脚”¹⁸したものであると批判し、利用指導を、学校図書館を活用した教育を包括するものではなく、図書館界一般でいうところの「図書館利用教育」として捉え、“利用案内と情報源探索、情報処理についての skills の指導に集約”，さらには“図書館利用に立脚した情報教育ないしは学習スキル (study skills) に集約”¹⁹していくべきだと述べている。

一方、塩見昇は、「利用指導」の語を用いてスキルの指導に限定することは、“手ぎわよく所与の情報を処理する能力の学習という、文字通り「スキル」指導に終始する危惧がある”²⁰と否定的な姿勢を示し、「図書館教育」の語を用いることによって、より包括的な学校図書館活用が実現すると主張している²¹。

渡辺信一も、学校図書館で行われる情報の探索と利用に関する指導について、その取り組みの意義を認めつつも、「図書館利用指導」の語を充てることによって、指導する学校図書館員や教員の主体性ばかりが強調され、指導される側の生徒の自主性が軽視されやすいという問題提起をしている。また、教育目標や方法の変化、あるいは情報環境の変化に応

じて、利用指導の語によって想起される図書館利用技術 (library skills) に留まらず、学習技術 (study skills)、情報処理技術 (information skills/ literacy) と言われる一連の能力への対応が求められていると述べている²²。

塩見や渡辺が指摘するように、学校図書館利用指導が有する可能性を鑑みると、「図書館の利用の仕方の指導」と狭義に受け取られかねない語を使うことを全面的に是とすることはできないが、学校図書館や教育関係者のコンセンサスが得られる適切な語がまだないことも事実である。そのため、このような課題があることを念頭に置きつつ、本論文では、文部科学省の使用に倣って、日本の学校図書館で生徒に対して実施される利用者教育を「学校図書館利用指導（あるいは、図書館利用指導や利用指導）」とし、他館種や国外の実践も含め利用者教育全体について言及する時は「図書館利用教育（あるいは利用教育、利用者教育）」の語を用いることとする。

尚、利用指導に含まれる内容は、教育課程や情報環境に応じて変化してきたが、その変遷と現状については、本稿第2章1節で取り上げる。

1.2.2 学び方の指導・情報リテラシー教育と「学校図書館利用指導」

「学校図書館利用指導」やその内容を指す語は、日本だけではなく、海外でもさまざまな用語が充てられている。ストリートフィールド (Shaper Streatfield) は、イギリスの中学校を対象とした電子アンケートを行い、1,044 人の学校図書館員から回答を得た。情報活用能力をどのような語を用いて表しているかと質問した結果、Information Literacy が最も多く 29.3%、次に Information Skills が 19.7%であった。その他、Library Skills や Research Skills, Study Skills も用いられていることが分かった (図表 1-3)。尚、回答の「その他」には、Independent Learning や Learning to Learn, Learning Skills が含まれている。

図表 1-3 生徒の情報活用に用いる用語

	司書の 有資格者	%	その他	%	合計	%
Information Literacy	153	29.3	94	18.0	247	23.7
Information Skills	103	19.7	55	10.5	158	15.1
Library Skills	47	9.0	75	14.4	122	11.7
Research Skills	38	7.3	54	10.3	92	8.8
Study Skills	44	8.4	36	6.9	80	7.7
その他	25	4.8	17	3.3	42	4.0
特定の用語を使っていない	82	15.7	118	22.6	200	19.2
無回答	30	5.7	73	14.0	103	9.9

【出典】Streatfield, David; Shaper, Sue; Markless, Sharon; Rae-Scott, Simon. Information literacy in United Kingdom schools: evolution, current state and prospects. Journal of Information Literacy. 2011, vol.5, no.2, p.12.

ストリートフィールドは、情報を検索し、入手し、評価し、利用するためのスキルを表す語として Information Skill ではなく Information Literacy が使われるようになったのは最近のことであり、このアンケートはそのような傾向を裏付けるものであると述べている。回答者の中には、パートナーとなる教員の好みに応じて、ある時は情報リテラシーを、別の時にはリサーチスキルの語を使うと述べる者や、連携を円滑にするために、目的に応

じて使い分けしているとコメントする者もあり、定義よりも、戦略的に用語を使い分けしている傾向があると指摘している²³。

日本でも、**Information Literacy**（情報リテラシー）や **Study Skills**（学習スキル）と、利用指導の目標や内容を結び付け、図書館における「学び方の指導」あるいは「情報リテラシー教育」と表現することがある。

例えば、1972年に発行された学校図書館の手引には、利用指導を学習スキルの指導の一つとして捉える考え方が示されている。文部省は、“学校図書館の利用指導は直接的には図書館の利用に関して必要とされる知識・技能・態度の育成を意図するものではあるが、指導の究極的ねらいは、あくまでも、生涯にわたる自己教育を支える学習技術（スタディ・スキルズ）とか、あらゆる教科等の学習において必要とされる情報の検索・組織化・処理の能力などを育成することに存する”²⁴と説明している。

学習技術は、学習指導要領で重視されている「学び方」と軌を一にするが、利用指導の内容と共通点が多い。そのため、全国学校図書館協議会（全国 SLA）が作成した利用指導の体系表は、「資料・情報を活用する学び方の指導（利用指導）体系表」（1992年）、「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」（2004年）と命名されている。利用指導と「学び方の指導」の関係については、本稿第3章2節1項で論じる。

また、図書館情報学用語辞典でも触れられているように、近年では、利用者教育を情報リテラシー教育の一環として位置付けることが多い。国立国会図書館が2008年にまとめた報告書『子どもの情報行動に関する調査研究』で、利用指導を扱った文献のレビューを行った堀川照代は、“利用者教育は従来、図書館及び図書館資料の利用法の指導が中心であったが、今や学校図書館という枠を超えて、学校全体における情報リテラシー教育に関わることへと拡大してきた。利用者教育は、情報リテラシーという概念をもとに、再構築されてきているとも言える”²⁵と述べている。このような傾向は、全国 SLA の機関誌『学校図書館』や、公益財団法人学習ソフトウェア情報研究センターによる『学習情報研究』で、情報リテラシー教育の特集の中に、利用指導の実践が報告されていることから伺える。

情報リテラシー（information literacy）という語は、1974年に、アメリカ情報産業協会（Information Industry Association）の会長であったザウコスキー（Paul C. Zurkowski）が、アメリカ図書館情報学委員会（National Commission on Library and Information Science）への提言のなかで、“職業上の諸問題に対して情報による解決を行う際に、広範な情報ツールならびに基本的な情報源を利用するための手法や技能”を指す言葉として用いたのが最初であると言われている²⁶。その後、コンピュータの普及に伴う情報化社会の到来によって、その重要性が広く共有されるようになった。特にアメリカでは、コンピュータリテラシーに偏向するのではなく、情報そのものを扱う知識や技能の総称として情報リテラシーを定義し、情報行動研究の成果を踏まえた教育の必要性を指摘したのが図書館界、並びに図書館情報学の研究者であった。

情報行動とは、人の情報探索行動や情報利用行動を含む幅広い概念で、さまざまな分野で研究の対象となっている²⁷。図書館情報学においては、“システムによる情報問題解決やシステム構築を目的する工学的（システム・アプローチ）ではない、利用者側が情報の探索や検索にあたって直面する問題点の解明、というユーザ・アプローチ”²⁸による研究がすすめられてきた。情報探索プロセスモデルを提唱したクルトー（Carol C. Kuhlthau）が、学校図書館でレポート執筆に取り組む高校生の情報利用過程を分析したように、情報行動研究

と図書館の結びつきは強く²⁹、様々な研究の成果を踏まえた情報リテラシー教育を、図書館の利用者教育の目標の一つに位置づけることは必然的な流れであったと言える。

一方、日本の学校教育では、情報リテラシーに対して、情報活用能力という語が充てられているが、教員や研究者など学校教育に関わる者が、情報活用能力の育成に学校図書館が重要な役割を果たすという認識を共有していると言えない。情報活用能力の育成と利用指導の関係については、本稿 3 章 2 節 2 項で取り上げて論じる。

1.3 先行研究の検討

わが国における、学校図書館利用指導を対象とした研究は、主に、(1)利用指導の成立過程とその変遷、(2)利用教育モデル、(3)教育課程における利用指導の位置付け、(4)利用指導の教育的効果、という観点から進められてきた。特に、1998（平成10）年の学習指導要領改訂による「総合的な学習の時間」や教科「情報」の創設で、情報の探索と利用のプロセスを含む教育がカリキュラムに導入されると、先行する欧米の学校図書館基準や利用教育モデルに注目が集まり、これらを検討した研究の成果が、日本の利用指導の内容や方法に大きな影響を与えた。本節では、まずレビュー論文を取りあげた後、(1)から(4)の観点に沿って日本の利用指導研究を概観すると共に、日本の利用指導の研究と実践に影響を与えた海外の研究動向について取り上げる。

1.3.1 日本における学校図書館利用指導研究

1.3.1.1 レビュー論文

国内の学校図書館利用指導のみを対象としたレビュー論文はなく、学校図書館研究のレビュー、あるいは、他館種を含めた利用教育全体を取り扱ったレビューの中で、学校図書館利用指導の研究について取り上げられている。

学校図書館研究のレビューでは、まず、2000年から2004年の日本国内の研究動向をまとめた中村百合子が、“学校図書館における情報リテラシーの育成に関する研究が、一般的な翻訳書のほかにほとんど見られない”と指摘している³⁰。中村に続いて2005年から2009年の文献レビューを行った河西由美子は、「情報教育（情報活用能力・情報リテラシー）と学校図書館」の章を立て、情報教育分野、教育学分野に学校図書館をフィールドとした研究が出てきたことを評価しつつ、学校図書館関係誌では実践報告が中心で、本格的な実証研究が不足していると述べている³¹。

図書館利用教育全般に関するレビューとしては、安藤友張が、1999年から2001年の利用教育・情報リテラシー教育の動向を館種別にまとめている³²。学校図書館についても取り上げており、大学図書館や公共図書館のように利用教育の実態に関する悉皆調査がなく、外国研究や理論研究に関する論文が中心であると指摘している。また、野末俊比古は、2001年から2003年の文献を整理し、大学図書館や公共図書館では、国内の利用者教育・情報リテラシー教育を対象としたレビュー論文³³が出てきた点を新たな特徴として挙げている。しかし、学校図書館については、アメリカの学校図書館基準『インフォメーション・パワー』の翻訳版が日本の利用指導に影響を与えていると述べるにとどまる³⁴。また、増田和子は、海外の情報リテラシー教育事情を紹介する論考のなかで、「学校図書館と情報リテラシーの育成」「初等教育における情報リテラシー育成の研究」についてまとめている³⁵。

その他、国立国会図書館が作成した報告書『子どもの情報行動に関する調査研究』（2008年）に、堀川照代による「公立・学校図書館に関わる子どもの情報行動」の先行研究レビューがあり、利用者教育と情報リテラシー教育に関する文献がまとめられている³⁶。

1.3.1.2 学校図書館利用指導の成立過程とその変遷

戦後、日本における利用指導の内容と方法は、文部省が作成した学校図書館運営の手びきによって方向付けられてきた。文部省が、利用指導について初めて言及した資料は、1948

(昭和 23) 年に発行された『学校図書館の手引』である。その後、1983 (昭和 58) 年の『小学校、中学校における学校図書館の利用と指導』まで、合計 11 冊の手引が作成されている。

占領下の日本におけるアメリカ学校図書館の影響について研究した中村百合子は、この最初の手引の編集過程で、日本人執筆者が参照したと考えられるアメリカの資料を特定し、特に影響の大きかった 5 冊を『学校図書館の手引』と比較している。その結果、日本における利用指導が、米国の Library Instruction に倣って図書館利用法と図書を用いた学習に必要な知識や技能の指導を取り入れただけではなく、独自に読書指導の項目を付け加えて構成されたことを明らかにした³⁷。芦谷清は、この基準をもとに各地の学校で作られた利用指導テキストブックを分析し、昭和 20 年代には司書養成のような内容であったものが、30 年代には、研究調査の仕方の指導が中心になったと述べている³⁸。

利用指導の内容に関する論考は、主に、全国学校図書館協議会 (全国 SLA) が発行している専門誌『学校図書館』の特集の中にみられる。同誌が利用指導に関する「特集」を組んだのは、以下の号においてである。

- 1962 年 10 月号「特集・学校図書館の利用指導」
- 1969 年 5 月号「特集・学校図書館の利用指導」
- 1971 年 4 月号「特集・利用指導をいかに定着させるか」
- 1974 年 5 月号「特集・利用指導はもっと活発にならないか」
- 1979 年 10 月号「特集・利用指導テキストとその活用」
- 1981 年 11 月号「特集・利用指導の新展開」
- 1985 年 9 月号「特集・自学能力を高める利用指導－実践と問題点」
- 1988 年 3 月号「特集・「図書館・学びかたノート」を活用した利用指導」
- 1990 年 7 月号「特集・学力としての利用指導」
- 1992 年 7 月号「特集・資料・情報を活用する学び方の指導」
- 2004 年 5 月号「特集・利用指導体系表の展開」

2004 年は、全国 SLA が利用指導の体系表である「資料・情報を活用した学び方の指導体系表」を最後に改訂した年であり、それ以降、『学校図書館』誌で「利用指導」の語を冠した特集は組まれていない。代わって「調べ学習」や「探究学習」と利用指導や情報リテラシー教育を関連づける見出しがつけられるようになった。

- 2006 年 12 月号「特集・学校図書館と情報教育」
- 2011 年 7 月号「特集・司書教諭は教育課程にどのようにかわるか」
- 2012 年 4 月号「特集・調べ学習を問い直す」
- 2013 年 4 月号「特集・学校図書館を活用した情報活用能力の育成」
- 2015 年 6 月号「特集 探究的な学習を提案する」

一方、1960 年代までは、「利用指導」という語だけではなく、「図書館教育」という表現も用いられており、この語を用いた論考としては、1951 年の加賀英治による「図書館教育－如何に図書及び図書館利用法を指導すべきか」と題する 3 カ月連続の記事³⁹や、1955 年の芦谷清による「図書館教育における諸問題」という記事⁴⁰がある。

また、利用指導の変遷については、主に文部（科学）省の手引と全国 SLA の体系表を取り上げて、1969 年に深川恒喜⁴¹、1990 年に笠原良郎⁴²、1991 年に今村秀夫⁴³、1992 年に堀川照代⁴⁴がそれぞれ整理している。

1.3.1.3 利用教育モデル

アメリカを中心とする英語圏の国々では、1980 年代から 90 年代にかけて利用教育の理論化が進み、情報探索プロセスを組み込んだ利用教育モデルが学校図書館の実践に取り入れられるようになった。このような海外の動向を分析し、日本での応用可能性について検討した論文が、1990 年代以降集中して発表された。

福永智子は、1980 年代以降のアメリカにおける利用教育の変化を、「理論化」と「制度化」の両面から検討している⁴⁵。それによると、アメリカの学校図書館における利用教育は、教科教育との関係からみて、＜関連なし段階＞＜関連段階＞＜統合段階＞へと発展してきており、それぞれに代表的なアプローチが存在する。第 1 段階はソース・アプローチで、従来の「図書館」利用教育を指す。第 2 段階がパスファインダー・アプローチで、資料探索例を生徒に示すことによって探索の方法を概念的に理解させることを目的とした指導を指す。第 3 段階がプロセス・アプローチや批判的思考アプローチ、統合アプローチなどで、情報探索の過程そのものを学習対象とし、テーマの設定から情報の選択や評価に至る一連の活動に必要な能力を身につけさせようとする指導を指す。福永は、アメリカにおける利用教育発展のプロセスが、日本の利用指導の参考になるとしながらも、問題解決型の学習が取り入れられていないという日本の学校教育の現状を鑑み、＜統合段階＞ではなく、＜関連段階＞を目指した取り組みが現実的であると述べている。

平久江祐司は、プロセス・アプローチを採用した利用教育モデルの一つである Big6 Skills を情報活用能力の育成という観点から検討している。Big6 Skill は、情報探索プロセスに「情報問題解決」という概念を組み込むことによって、教科教育と利用教育の統合を可能にしたことから、このモデルが、教科と学校図書館が連携して情報活用能力の育成を進めるための理論的枠組みとして有効であると結論づけている⁴⁶。

この他にも、須永和之が、プロセス・アプローチを採用しているイギリスの利用教育モデルとして、EXIT モデル、NCET モデル、SLA ガイドライン、PLUS モデルを取り上げて検討している。特にヘリング（James Herring）が提唱した PLUS モデルが、シンプルで分かりやすく汎用性があると評価し、日本での活用可能性を示唆している⁴⁷。また、徳岡慶一は、カナダのアルバータ州教育省が作成した探究モデル（Inquiry Model）を検討している⁴⁸。ここで挙げたそれぞれのアプローチや利用教育モデルについては、本稿 2 章 2 節で取り上げて論じる。

以上のように、1990 年代から 2000 年代前半にかけて、福永、平久江、須永、徳岡の研究や論考によって情報探索プロセスを組み込んだ利用教育モデルが日本にも知られるようになり、同時に、アメリカの学校図書館基準が翻訳出版されたことも重なって⁴⁹、日本の利用指導の基準にも情報探索プロセスが取り入れられるようになった。

例えば、日本図書館協会（Japan Library Association: JLA）の利用教育委員会が作成した『図書館利用教育ガイドライン—学校図書館（高等学校）版—』（1998 年）では、利用教育を“情報の生産・流通・利用・検索・獲得・加工・保管・消費・表現・評価などあらゆる側面に関する知識・技能の修得を支援する教育、すなわち情報リテラシー教育”⁵⁰の一端

を担うものと定義し、指導目標を「印象づけ」「サービス案内」「情報探索法指導」「情報整理法指導」「情報表現法指導」の5つに分類して示している。

1.3.1.4 教育課程における利用指導の位置付け

情報探索プロセスという概念が利用指導の内容と方法に取り入れられると同時に、日本の教育課程における利用指導の位置付けが議論されるようになった。

例えば、平久江は、自己教育力と批判的思考の育成という教育目標と利用指導の関係について検討している。前者では、自己教育力が「問題解決能力」「自己学習能力」「情報活用能力」の3つで構成されていると定義し、全国SLAの「情報・メディアを活用した学び方の指導体系表」が、この3つの能力の育成を目指していることから、利用指導が自己教育力育成という教育目標の達成に貢献できる教育活動であると結論付けている⁵¹。また、後者では、アメリカにおけるクリティカルシンキング教育の実践を踏まえ、批判的思考が情報の評価スキルとして応用可能であることを指摘し、日本の学校図書館における利用教育に批判的思考の概念を取り入れる意義について論じている⁵²。

堀川は、情報リテラシーの育成という観点から、学習指導要領で重視されている「探究的な学習」や「言語活動の充実」に、学校図書館における利用指導が有効であると述べている⁵³。また、野末は、学校図書館が情報リテラシー教育に携わる意義として、(1)目標となる情報リテラシーの到達点・達成点を設定しやすい、(2)対象者である児童・生徒の能力や経験などがある程度一律に想定できる、(3)学校図書館員(司書教諭・学校司書)の教育的役割が期待され、また発揮しやすい、という条件が整っている点を挙げている⁵⁴。

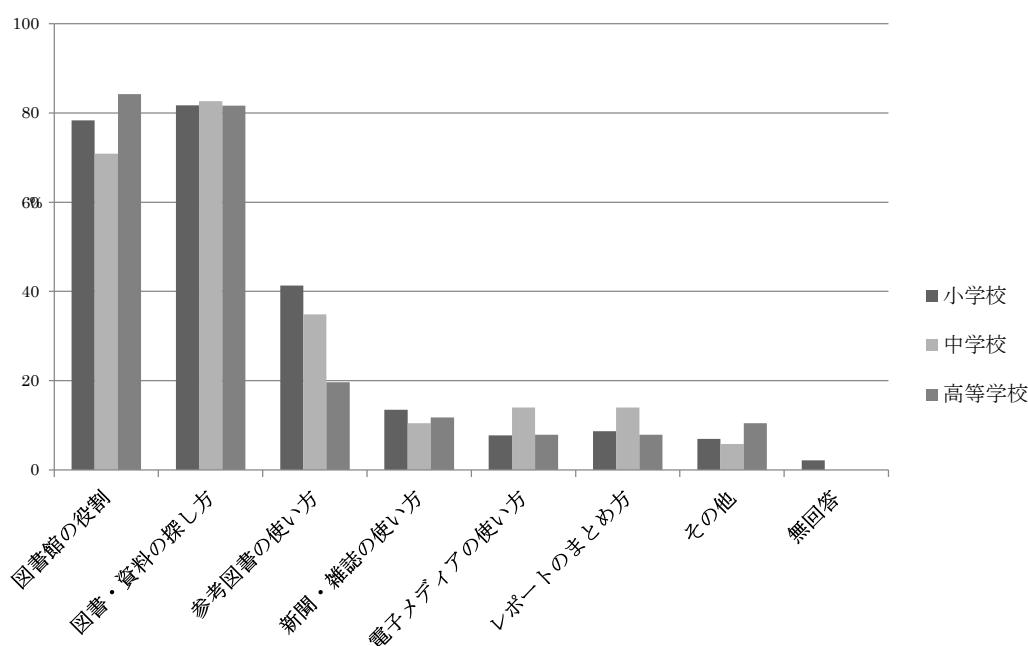
小田光宏と野末俊比古、古賀節子は、教科「情報」で行われる「問題解決学習」で必要となる技能を教科書を用いて分析し、それらが、図書館情報学で扱われているものに依拠していることを明らかにした。「問題解決学習」は、コンピュータだけではなく、図書館や資料の利用を前提に組み立てられているが、そのような技能は情報科教員の養成課程において十分扱われていないことから、図書館情報学に基づいた知識や技能を有する司書教諭との連携によって、授業の内容を補完することができるとしている⁵⁵。野末と小田は、この研究を含め、問題解決学習を実践するにあたっての問題を検討した一連の研究結果を踏まえ⁵⁶、問題解決学習カリキュラムを設計するためのガイドラインを提案し、その中で、学校図書館や司書教諭の役割を強調した⁵⁷。

しかし、中村や河西が指摘しているように(1.3.1.1を参照)、日本では、情報リテラシー教育や情報活用能力の育成と学校図書館の関係を実証的に検討した研究はほとんど行われていない。例外的に河西が、博士論文において、欧米の情報リテラシーと日本の情報活用能力の概念整理を行い、情報リテラシー教育を日本の教育課程に統合するためのカリキュラムを提示した上で、同カリキュラムを日本の初等中等教育(一貫教育校)に導入して、その課題と意義について検討している⁵⁸。

1.3.1.5 学校図書館利用指導の実践

利用指導のあり方や位置付けについて議論される一方で、本章1節で述べたように、学校現場における実践は十分行われてこなかった。全国SLAが2009年に行った全国調査(図表1-4)によると、半数以上の中学校で実施されている利用指導は、「図書館の役割」「図書・資料の探し方」の2項目にとどまっている⁵⁹。

図表 1-4 2008 年度に実施された利用指導の項目



【出典】全国 SLA 研究調査部. 特集 '09 子どもの読書と学校図書館の現状 2009 年度学校図書館調査報告. 学校図書館. 2009, no.709, p.14

堀川は、全国 SLA の調査や、北島武彦・小山郁子による全国調査⁶⁰の結果と、全国 SLA の機関誌『学校図書館』に掲載された実践事例の分析を通して、利用指導の実践を報告している記事の内容に一貫性がなく、理論と実践が乖離していると指摘している⁶¹。

原勝子は、図書館利用教育の必要性に対する意識の違いに着目して、日本とカナダの小学校教員を対象とした調査を行い、カナダの教員に比べて、日本の教員は図書館利用教育の必要性を認識している割合が低いことを明らかにした⁶²。その原因として、カナダのリソースベース学習のように、資料を活用する教育が一般的ではない日本の教育環境下で、教員は情報の利用と探索の指導が必要だとは考えにくいとしている。

学校図書館員による教育活動の実態を調べた研究としては、山口真也による、沖縄県内の学校司書に対する調べ学習支援・指導の状況調査がある⁶³。公立小・中学校の司書を対象とした質問紙調査の結果、学校司書は調べ学習において「資料提供」業務を介した支援や、フローワークによる「テーマの決定」から「情報収集」までの支援を行っており、情報の取捨選択や整理、分析、まとめといった学習活動への指導・支援はあまり行っていないことが明らかになった。山口は、高等学校の司書教諭に対する調査も行っており、「調べ学習の指導計画の立案」「計画時における他教員への指導事例の提供、指導案作成の支援」「調べ学習の補助（ティーム・ティーチング：TT）」「情報検索能力の指導」「情報モラルの育成」「カリキュラムの進行状況の把握」という 6 つの設問項目すべてで、実施率が 1 割程度であることを明らかにした⁶⁴。教員との連携が進まない要因として、山口と望月は、“学校図書館担当者が計画段階から入り難いような組織性や文化性が築かれてしまっている”⁶⁵からではないかと述べている。

このように、利用指導を行っている学校図書館が限られていたため、教育的効果に関する研究は、海外の事例から意義を考察する論考が中心であった。例えば、福永は、アメリカワシントン州における利用教育プログラムを取り上げ、その効果と意義について論じている⁶⁶。日本で、情報探索プロセスを組み込んだ利用指導の実践が報告されるようになり、その効果を検討する研究が始まったのは、1998年と2008年の学習指導要領改訂により、総合的な学習の時間や探究学習が導入された後である。

小田光宏と北本正章、古賀節子は、総合的な学習の時間に行われる学習様式に着目し、課題解決の6ステップ（前述した Big 6 Skills）を導入した授業の実証実験を幼・小・中・高等学校（一貫教育校）で行っている⁶⁷。

また根本彰は、図書館を利用した調べ学習のコンクール上位入賞者へのインタビュー調査を行い、探究学習に必要なスキルを特定すると同時に、それらを習得させるために必要な指導を“①調べるテーマ選択の指導、②文献調査やネット調査の指導、③フィールド調査（観察、実験、体験等を含む）の指導、④文章表現や文章構成の指導、⑤文献引用や文献参照の指導、⑥口頭発表、プレゼンテーションの指導”であると結論づけ、学校図書館員が①②⑤の指導について専門的な立場から支援を行う意義について論じている⁶⁸。

塩谷京子と堀田龍也は、小学5年生と中学1年生に対する質問紙調査を行い、図書を使った調べ方、複数の情報源の利用、情報の整理やまとめに関するスキルの習得率が低いことを明らかにした。また、中学生と高校生に対する調査⁶⁹の結果、百科事典やデータ集を使うこと、参考文献の記録の仕方、わかりやすい構成のつくり方などの習得率が低く、本を使って調べるスキルや、情報をまとめて伝えるスキルが、小学校で習得されなかった場合、その後も習得されにくいという仮説を提示している⁷⁰。

塩谷と堀田は、この仮説をもとに、児童生徒が教科学習で習得しにくい情報活用スキルの指導に、司書教諭が関わる効果についても調べている⁷¹。司書教諭が教員と一緒に指導計画を立てて指導にあたっている学校と、そうでない学校の生徒に対する質問紙調査を実施し、前者において、情報活用スキルの習得度が高いことを示した。

桑田てるみと法土明子も、高等学校の国語の授業におけるPOP作成の課題に、司書教諭が計画段階から関わり、国語科教員と一緒に指導にあたった実践の教育的効果について分析している。担当者と見学者による研究協議、および授業を受けた生徒に対するグループ・インタビューの結果、司書教諭が授業に加わることによって、多様なメディアの利用とその指導が可能になり、生徒に対するメディアリテラシー教育に効果があることが明らかになった。

1.3.2 海外の学校図書館における利用者教育研究

これまで見てきたように、日本の利用指導は、アメリカを中心とした英語圏で進められてきた利用教育研究の成果に基づいて議論されてきた。そこで本項では、日本で参照された研究を中心に、欧米の学校図書館研究の動向について述べる。

1960年代以降、アメリカの学校教育に「少人数教育」「オープン・クラスルーム」「ティーム・ティーチング」「リソース・ベース学習」が取り入れられるようになったことが、図書館利用指導に大きな影響を与えた⁷²。すなわち、教室の中で教科書を使って教える教育から、さまざまな情報源を活用した教育への変化が、学校図書館コレクションを利用する必要性を生み出し、図書館や図書館資料の利用の仕方を生徒に指導する時間がカリキュラム

に組み込まれるようになった。同時に、教育の費用対効果という観点から、学校図書館による教育プログラムの意義をデータとして示すことが予算や資金獲得のために必要になったため、成果を客観的に測ろうとする研究も行われた⁷³。

1970年代になると、図書館利用指導の目標は、資料の使い方を教えることから、図書館あるいは情報の自立した利用者に育てることへと変化した⁷⁴。しかし当時の図書館利用指導は、非常に限定的な内容のみ取り扱っており、**bibliographic instruction**（文献利用指導）あるいは**library instruction**（図書館利用指導）と言われる資料や図書館の利用法が、各学年で繰り返し指導されていた。バウムバッハ（Donna Baumbach）の調査によると、アメリカ各地の学校の64%で、系統的な利用指導が行われていたが、その内容は、情報源の利用法、検索の仕方、文献の評価に限られていた⁷⁵。

1980年代に入ると、学校図書館で学んだスキルが、大学でのリサーチに役立っていないという現場の声を、図書館情報学の研究が立証するようになった⁷⁶。例えば、グーディン（Elspeth M. Goodin）は、大学生が図書館スキルを新しい状況に応用することができないばかりか、リサーチそのものに十分取り組めていないと指摘した⁷⁷。ケスター（Diane D. Kester）も、300人以上の大学1年生を対象とした調査で、85%の学生が学校で図書館スキルを学んだと答えたにも関わらず、それが大学で役に立っていないことを明らかにした⁷⁸。エリソン（John W. Ellison）は、利用指導がうまくいっていない原因として、学校図書館員の関心が教育内容や順序、提示技術に集中し、生徒の学習上のニーズが配慮されていない点を指摘し、学校図書館員中心の指導から生徒中心の指導に変える必要があると述べている⁷⁹。

伝統的な利用指導では成果があげられないことが分かると、研究者や現場の学校図書館員は、その原因と解決策を模索し始めた。デービス（Richard A. Davis）は、インフォメーションスキルの習得を阻害する要因として「教科との連携の欠如」「計画時間の不足」「カリキュラム計画の不備」「教科書の不足」を挙げている⁸⁰。

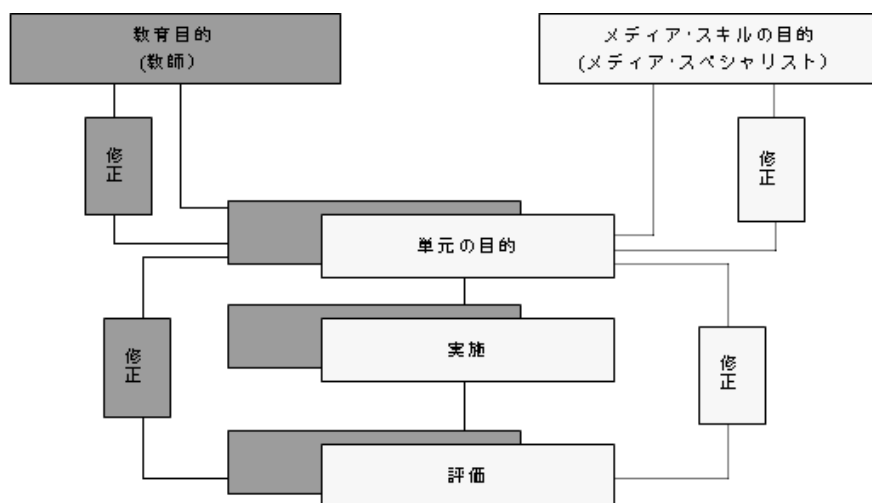
また、「情報処理」という概念に注目した研究者たちは、情報と学習の関係について分析するようになった。その結果、生徒が情報を利用するプロセスに関心が集まり、図書館情報学や認知心理学分野の研究成果である、人間の情報行動を説明するモデル⁸¹が利用指導に応用されるようになった。情報探索行動の代表的なモデルが、クルトーの情報探索プロセス（Information Search Process: ISP）モデル⁸²である（本稿2章2節参照）。

生徒の学習と情報探索プロセスを関連づけるアプローチは、利用指導のパラダイムシフトを起こし、学校図書館員は、情報源を見つけるだけでなく、学習そのものを支援することを目指すようになった。その結果、利用指導をカリキュラムに位置付けるために、教員と教育目標を共有することが必要になった⁸³。

代表的な手法が、ウォーカー（Thomas H. Walker）とモンゴメリー（Paula K. Montgomery）による統合アプローチである。ウォーカーらは、利用指導と学校カリキュラムの関係を「Related Model（関連モデル）」と「Integrated Model（統合モデル）」として示した⁸⁴。関連モデルとは、教員と学校図書館員が、それぞれ学習目標を設定し、活動を計画し、評価を行う。それに対して統合モデル（図表 1-5）では、教員と学校図書館員の目標はひとつの単元目標としてまとめられ、両者が協力してひとつの活動計画をたて、共に評価を加える。このようなアプローチを用いることで、学校教育と利用指導は完全に統合さ

れ、生徒が“図書館や資料を利用する技能だけではなく、情報を活用し、自立した学習を行うために必要なより幅広い技能の修得を目指して学習する”⁸⁵ことが可能になる。

図表 1-5 統合モデル



【出典】 Walker, H. Thomas; Montgomery, Paula Kay. Teaching Media Skills: an instructional Program for elementary and middle school students. Littleton, Colo. Libraries Unlimited, 1977, p.25.

統合モデルを実現するためには、教員と学校図書館員が共有できる目標を設定することが必要になる。例えば、マンコール (Jacqueline C. Mancall) は、批判的思考スキルの育成を図書館利用指導の中心的課題とすることによってそれが可能だと主張している⁸⁶。

1990年代に入ると、利用指導がカリキュラムに統合されることによって、どのような教育的効果が得られるかという実証的な研究がすすめられた。例えば、トッド (Ross J. Todd) は、シドニーで実施したケーススタディの結果、インフォメーションスキルの指導を科学のカリキュラムに統合した場合、生徒の学習到達度が上昇することを示した⁸⁷。クルトーも、図書館プログラムをカリキュラムに取り入れている学校で、生徒の学習環境が改善され、学力向上に結び付いていることを明らかにした⁸⁸。

1.3.3 学校図書館員と教員の「連携」という視点

利用指導をカリキュラムに統合し、学校図書館員と教員によるチーム・ティーチングが志向されるようになると、両者の連携に関する研究が増加した。図書館利用教育関連の文献レビューを毎年掲載している Reference Services Review 誌は、2001～2010年の学校図書館を対象とした利用教育研究の重要なキーワードとして、協働 (collaboration)⁸⁹とパートナーシップ (partnerships) を挙げている。特に、2005年から2009年に公表されたの文献の20%が、協働をテーマにしており、その大半が「教員と学校図書館員の協働」に関する研究や論考であったとしている⁹⁰。

カリソン (Daniel Callison) は、学校図書館メディア・スペシャリストが目指すべき協働 (collaboration) を“一緒に計画し (co-planning), 一緒に実践し (co-implementation), 一緒に評価する (co-evaluation)”⁹¹と定義している。ドナム (Jean Donham) は、“生徒

が、探究プロセスにおける情報のアクセス・評価・処理・適用に関するスキルの指導を一緒に計画し、指導し、評価するとき、教員と学校図書館メディア・スペシャリストは真に協働していると言える”⁹²と述べている。一方、ウェルチ（Marshall Welch）は、教育学をはじめとするさまざまな分野における「協働（collaboration）」の定義を整理し、図書館学においてもこれがどのような教育活動を指すのか明確になっていない上、理論的基盤も構築されていないと指摘している⁹³。モンティエル - オーヴァーオール（Patricia Montiel-Overall）は、90年代から2000年代にかけて発表された文献のレビューを行い、「協働（collaboration）」を、「連携（coordination）」や「協力（cooperation）」と区別して扱うために、モデルが必要であると述べている。

ローチャー（David V. Loertscher）は、学校現場における学校図書館員と教員の協働（collaboration）のあり方を調査し、その結果を両者の関わり方という概念から、8または11のレベル別に類型化した（図表 1-6）⁹⁴。

図表 1-6 ローチャーのタキソノミー

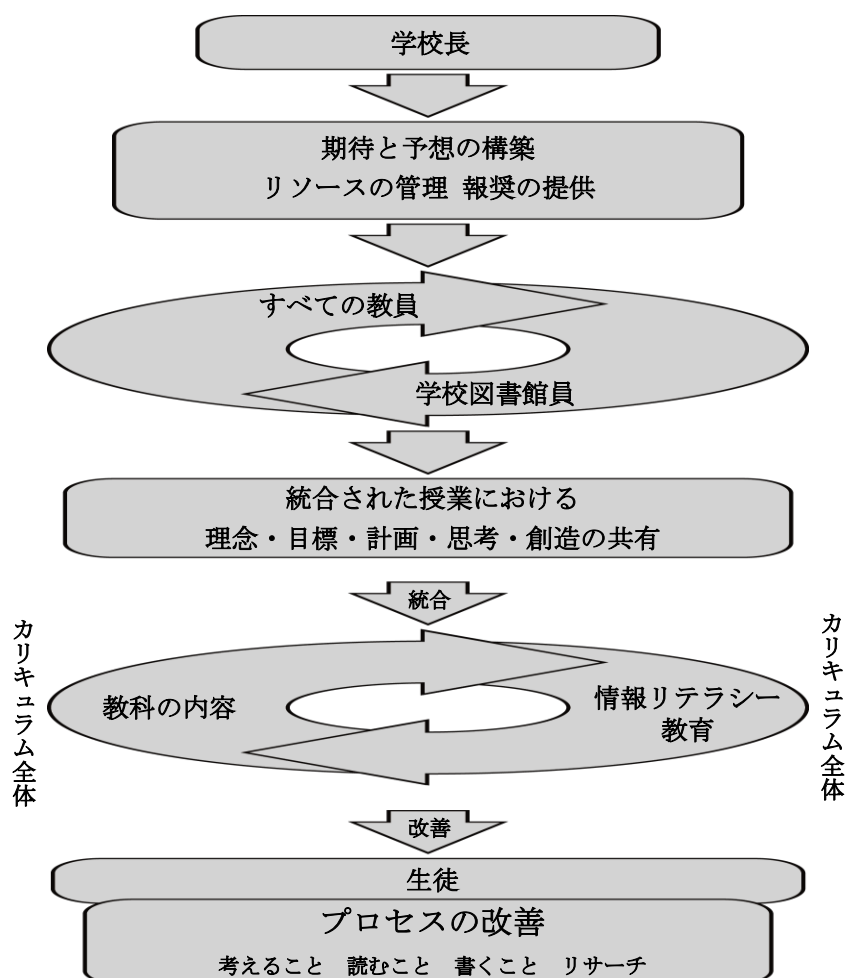
	学校図書館員のタキソノミー	教員のタキソノミー
Level 1	関与なし。メディア・センターの存在は意識されていない。	メディア・スペシャリストやメディア・センターが所蔵する資料との接点なし。
Level 2	生徒が必要に応じて資料を利用する。	教室での資料収集を行う。メディア・センターとのやり取りはほとんどない。
Level 3	教員や生徒から特定のテーマに関するリクエストがある。	教室で利用するための資料を、学校図書館や公共図書館から借りる。
Level 4	一時的な支援のための資料を収集する。	メディア・スペシャリストが、授業のためのアイデアを提供したり、関連資料を推薦したりする。
Level 5	食堂など学校内のさまざまな場所で、教員と非公式な打ち合わせをする。	メディア・センターの資料を単元の補助資料として使う。
Level 6	必要な資料について教員から事前に打診される。	メディア・センターの資料やサービスが、単元の補助的なものではなく、統合され不可欠なものになる。
Level 7	メディア・センターを効果的に運営するために教員と協力し合う。	メディア・スペシャリストが指導上のパートナーとなり、情報リテラシー教育を単元の中で行う。
Level 8	リソースベース学習を取り入れた単元の計画を教員と一緒に立てる。	メディア・スペシャリストを、カリキュラム改革の相談相手と認識する。
Level 9	リソースベース学習を取り入れた単元の計画、実施、評価を教員と一緒に行う。	
Level 10	リソースベース学習がメディア・プログラムに統合された単位となり、教員と指導を行う。	
Level 11	学校全体の指導計画を教員と一緒に立てる。	

【出典】Montiel-Overall, Patricia. A theoretical understanding of teacher and librarian collaboration (TLC). *School Libraries Worldwide*. 2005, vol.11, no.2, p.33-34.より作成

ローチャーのタキソノミーについて、モンティエル - オーヴァーオールは、学校図書館員と教員のレベル同士が、1と11以外は関連していないと指摘し、新たに、両者の関係性を表現した4つのモデル（A～D）を提唱した⁹⁵。モデルA（共同 Coordination）は、学校

図書館員と教員が情報交換し、お互いの活動や実践を関連づけようとする段階を表している。学校図書館員は、複数の教員の授業計画を調整し、学校図書館の利用が重複しないようにスケジュールを考えたり、授業のなかで必要な指導や支援を行ったりする。モデル B（協力 Cooperation）は、学校図書館員が教員をサポートすることを目的として、授業に参加する段階を表している。両者は対等な関係ではなく、学校図書館員は教員の要請に応じて資料を準備したり、生徒の作業を援助したりする。モデル C（統合された指導 Integrated Instruction）は、教科の内容と図書館教育の内容が統合され、学校図書館員と教員がそれぞれの目標を達成するために共に授業を計画・開発し、実践する段階を表している。ここでは学校図書館員も「教員」であり、授業における責任を共有している。モデル D（統合されたカリキュラム Integrated Curriculum）は、各教科の授業がモデル C のように構築された結果として、学校全体のカリキュラム計画に学校図書館員が参加する段階を表している。モデル D では、学校全体のカリキュラム作成に、教育目標、資源の活用、人的配置など関わってくるため、学校長の役割が重要とされている（図表 1-7）。

図表 1-7 Montiel-Overall が示したモデル D（統合された指導）



【出典】 Montiel-Overall, Patricia. Toward a Theory of Collaboration for Teachers and Librarians. School Library Media Research, 2005, vol.8. <http://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ965627.pdf> より作成

モンティエル - オーヴァーオールは、このモデルをもとに行った実証研究で、協働のレベルが高いほど、生徒の学習達成度が高くなるという結果を示した⁹⁶。

学校図書館員と教員による連携の意義や効果に関する研究のうち最も大規模なものは、コロラド・スタディと呼ばれるランス (Keith C. Lance) らによる一連の調査である。1992年に実施された最初の調査では、予算規模が大きく、学校図書館員が教員と一緒に学習計画を立て、指導的な役割を果たしている学校では、生徒の学力がより向上していることが明らかになった⁹⁷。以後10年に渡って、ランスとその他の研究者たちは、アラスカ州、ペンシルベニア州、オレゴン州、コロラド州 (再調査)、オハイオ州、アイダホ州、スコットランドで調査を重ね、最初のコロラド州の結果を裏付けていった⁹⁸。

しかし、学校図書館員と教員の連携が教育的効果を生み出すという研究成果にも関わらず、学校図書館現場で十分な関係が構築されているとは言えなかった。例えば、ピッカード (Patricia W. Pickard) が10の学校図書館で実施した調査によると、ローチャーのタキシノミーで示された高いレベルの実践を実現している学校図書館員は1校だけであった⁹⁹。クーパーとブレイ (O. P. Cooper & Marty Bray) も、雑誌に報告されている実践事例を分析した結果、メディア・スペシャリストが教員チームの一員と認められるようなレベルの連携はほとんどないと述べている¹⁰⁰。

そこで、学校図書館員が教育的な役割を果たす環境を生み出す条件、あるいは阻害する要因を分析する研究が行われた。リンゼイ (Karen Lindsay) は、学校図書館員と教員の連携に関する文献をレビューし、校長の支援を得られること、学校図書館員が教育者として十分な資格を持ち、学校のリーダーとして認められることが、指導的役割を果たすための条件だと結論付けている¹⁰¹。また、学校図書館員の指導的役割に対する学校長や教員の認識を調査した研究もいくつか実施されている。例えば、アセリン (Marlene Asselin) の調査によると、学校図書館員の70%が、一緒に働いている教員は学校図書館員や図書館の役割について理解していないと答えている¹⁰²。学校図書館に対する校長の認識が低い理由として、ハーツェル (Gary Hartzell) は管理職研修や管理職向け雑誌での学校図書館が低いこと¹⁰³、アセリンは打ち合わせの機会が少ないこと¹⁰⁴を挙げている。

このように、アメリカを中心として進められてきた利用指導研究は、情報探索プロセスという概念を取り入れた新しい教育モデルを生み出し、教科教育との統合という理念を実践に活かす方法として、学校図書館員と教員の「連携」を志向するようになった。「連携」に関するこれまでの研究は、連携の定義、連携することによる教育上の効果、連携を成功させる (あるいは阻害する) 要因という観点から行われており、日本の学校教育という文脈においても、前項1.3.1.5で取り上げたように、塩谷・堀田や桑田が教育上の効果について検討している。

しかし、学校図書館員と教員が指導上のパートナーとなり、連携して教育を行う意義が強調される一方で、両者の指導領域の共通点と相違点については十分検討されていない。連携を阻害する要因の一つとして、管理職を含む教職員が学校図書館員の役割を理解していない点が指摘されているが、学校図書館員が具体的にどのような役割を有しているのか、その役割が教員とどのように異なり、教員の指導をどのように補完するのかは、海外においても日本においても明らかになっていない。

この問題について桑田は、欧米で取り入れられている探究学習が、言語技術のような情報を論理的に扱うスキルの習得を前提としている点を指摘し、国語教員の指導領域を踏ま

えたうえで、学校図書館員が担う役割を再検討する必要性があると述べている¹⁰⁵。また、小田光宏と野末俊比古は、教科や総合的な学習の時間で、生徒の情報リテラシー（情報活用能力）を育成することが求められる「情報科」教員と司書教諭の技能を比較した結果、それぞれの「情報技能」には違いが認められる一方で、指導する内容が、各教科での応用を前提しているという点で共通していることから、教科教員も含めた相互の役割の明確化と連携のあり方を検討する必要があると指摘している¹⁰⁶。

すなわち、本論文の問題意識として1章1節で述べたように、筆者が学校図書館の現場で感じてきた課題－司書教諭として何をどのように教えればよいのか－を明らかにするためには、海外の研究成果を待つのではなく、日本の学校教育という文脈で実証的に研究することが必要であると言える。

1.4 本論文の目的と方法

これまで見てきたように、日本の学校図書館における利用指導研究は、歴史研究と、利用教育モデルの応用可能性の検討に始まり、近年は、学校図書館員と教員が連携する意義、あるいは利用指導の効果について検証されるようになった。すなわち、利用指導という教育活動がどのように成立したのか、利用指導をどのように行えばよいのか、利用指導にはどのような教育的効果があるのか、というテーマが取り上げられてきたと言える。その結果、探究学習など、情報の探索と利用のプロセスを含む学習活動の中で、学校図書館員と教員と一緒に指導するというモデルが採用され、その効果についての実証研究も緒に就いた。しかし、学校現場で利用指導を実践している学校図書館員が少ないこともあり、研究の積み重ねは質的にも量的にも不足している。

さらに、これまで取り上げられていない課題がある。それは、教員と学校図書館員が協働し、指導上のパートナーとなる場合、両者がどのように役割分担するのかという問題である。特に、学校図書館員が指導上の役割を有することを多くの教員・管理職が認識していない現状を踏まえると、学校図書館員が教員とは異なる指導ができること、協働によって教員の指導を補完できることを示さなければ、学校現場における両者の連携は進まないだろう。全国 SLA の機関誌『学校図書館』等に見られる実践報告で、学校図書館員の役割が資料提供や紹介（ブックトークなど）に留まる事例が多いのは、資料の管理・提供は学校図書館員の職務として広く認識されているため、連携しやすいからだと考えられる。

モンティエル - オーヴァーオールが示した協働モデル D は、教員と学校図書館員の指導領域を「教科の内容」と「情報リテラシー教育」に分けて示している。しかし、日本の教育課程において、「情報の探索と利用」が教科の内容にも含まれ、教科書に掲載されていることを考えると、情報リテラシー教育を学校図書館員だけの指導領域とすることはできないだろう。このことから、日本の教育課程における、学校図書館員と教員の「協働モデル」を形成するには、教科と学校図書館による指導の共通点と相違点を明らかにし、学校図書館員が授業に加わる意義を示す必要があると言える。

そこで本論文は、学校図書館員と教員が協力して行う利用指導のあり方を示すことを目的とし、「情報の探索と利用の指導」における教科と学校図書館の領域はどのように分けられるかという課題を設定して、文献調査による仮説の形成と、質問紙、並びにインタビュー調査による検証を行う。

具体的には、本論文は全 6 章から成り、その全体像は図表 1-8 に示すとおりである。

1 章(本章)では、研究を始めるにあたっての問題意識の提示と先行研究レビューを行い、本論文の目的と方法について述べた。

2 章では、文献調査を通して、学校図書館利用指導の内容と方法の変遷を整理し、利用指導が、単なる「図書館の使い方」の指導ではなく、「情報の探索と利用」に関するさまざまな知識・技能の習得を目指す教育活動であることを示す。また、利用指導の方法として多くの国で採用されている「プロセス・アプローチ」(問題解決や探究学習のプロセスに沿って、情報の効果的な利用法を指導する手法)と、その理論的根拠となっている「情報探索プロセスモデル」について論じる。最後に、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、フランスを取り上げ、各国の学校図書館が行っている利用教育の内容と方法について述べる。

3 章では、文献調査を通して、教科の枠組みで行われている「情報の探索と利用の指導」の内容を整理し、利用指導と比較することによって、両者の共通点と相違点を明らかにする。また、利用指導の近接領域として、「学び方指導」「情報活用能力の育成」を取り上げ、それぞれが取り扱う知識や技能を概観する。

2 章と 3 章の結果を踏まえ、学校図書館と教科が役割分担することによって、「情報の探索と利用の指導」を網羅することができるという仮説を立て、学校図書館員と教科教員が、それぞれの専門領域を生かしてチームで指導するモデル（学校図書館利用指導における役割分担の構造）を提示する。

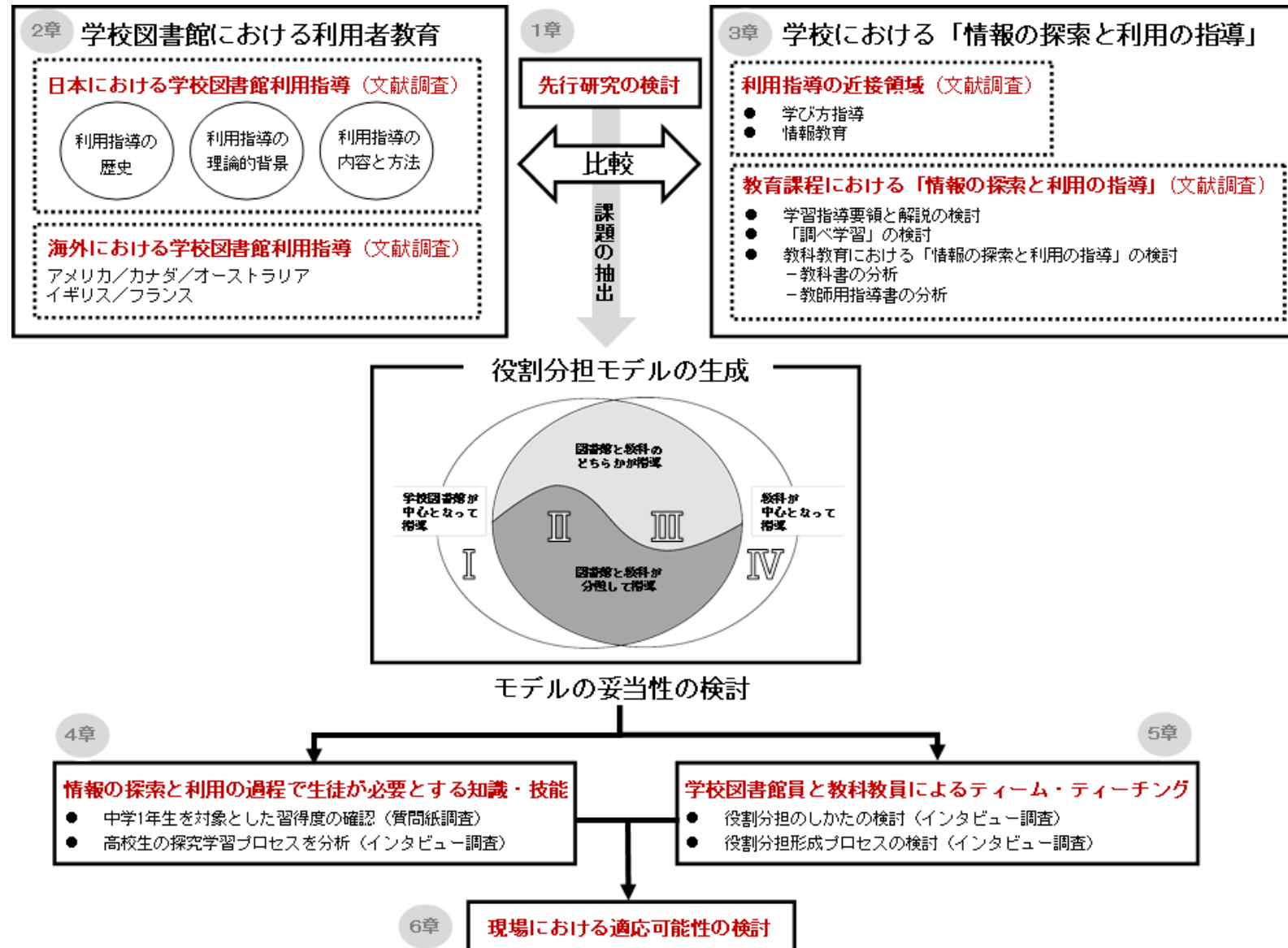
4 章と 5 章では、学習者である生徒や、指導者である教員と学校図書館員を対象とした実証的な研究を行い、モデルの有効性を検討する。まず、4 章では、生徒に対する質問紙調査とインタビュー調査によって、探究学習の過程で生徒が用いている知識や技能を明らかにし、利用指導で取り扱うべき内容を精査する。5 章では、教員と学校図書館員に対するインタビュー調査を行い、両者の役割分担について検討する。

6 章では、4 章と 5 章の結果を踏まえ、先進的な学校図書館における利用指導実践を例示しながら、「学校図書館利用指導における役割分担の構造」について考察する。また、学校図書館と教科が協働で「情報の探索と利用の指導」に取り組む意義について述べる。

最後に、結論として、学校図書館利用指導の新たな内容と方法を示し、学校図書館員が、利用指導を通じて教育的役割を果たすために、今後解決すべき課題について述べる。

尚、本論文は、中学校における筆者の実践から生まれた問題意識に基づき、教科教員の指導領域と学校図書館員の指導領域を比較することを想定しているため、教科担当制を採用している中学校を研究対象とし、特に断りがない限り、学習指導要領や教科書も中学校版を取り上げて分析する。教科の枠組みや教員免許状の種類が異なる高等学校についても、必要に応じて参照するにとどめる。

図表 1-8 本論文の全体像



 注・引用文献

- 1 文部省. 小学校における学校図書館の利用指導. 大日本図書, 1970, 208p.
- 2 学校図書館法. <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S28/S28HO185.html>, (参照 2017-01-10).
- 3 文部科学省. “平成 26 年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について”. 文部科学省. 2015-06-02. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1358454.htm, (参照 2017-03-15).
- 4 笠原良郎. 特集・「読書科」「図書科」の実践: 「資料・情報を活用する学び方の指導」体系表をまとめて. 学校図書館, 1992. no.477, p.9-13.
- 5 日本図書館協会利用教育委員会. 図書館利用教育ガイドライン. 日本図書館協会, 1998, 23p.
- 6 文部科学省. 中学校学習指導要領解説 国語編. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/04/15/1234912_2_1.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.106.
- 7 学校図書館法. <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S28/S28HO185.html>, (参照 2017-01-10).
- 8 2014 年の学校図書館法改正で, 学校司書を“専ら学校図書館の職務に従事する職員”とする第 6 条が新たに加えられた。但し, 学校司書の資格や養成のあり方については, 今後の検討課題とされ, 学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議による報告書がまとめられている。(学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議. “これからの学校図書館の整備充実について (報告)”. 文部科学省. 2016-10. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/10/20/1378460_02_2.pdf, (参照 2017-01-10).)
- 9 子ども読書サポーターズ会議. “これからの学校図書館の活用の在り方等について (報告)”. 文部科学省. 2009-03. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373_1.pdf, (参照 2017-01-10).
- 10 学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議. “これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について (報告)”. 文部科学省. 2014-03. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/04/01/1346119_2.pdf, (参照 2015-09-08).
- 11 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版, 丸善, 2013, 284p. 引用は p.183.
- 12 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版, 丸善, 2013, 284p. 引用は p.220.
- 13 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版, 丸善, 2013, 284p. 引用は p.173.
- 14 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版, 丸善, 2013, 284p. 引用は p.110.
- 15 文部省. 小・中学校における学校図書館利用の手びき. 東洋館出版社, 1961, 229p.
- 16 笠原良郎. スキルの指導から学びかたの教育へ: 利用指導の 40 年. 学校図書館. 1990, no.482, p.44-51.
- 17 今村秀夫. 「利用指導」と「利用と指導」: 利用指導をめぐる最近の混乱について. 学校図書館. 1985, no.419, p.44-48.
- 18 今村秀夫. 学校図書館における利用者教育の動向. 実践女子大学文学部紀要. 1991, no.34, p.145-162. 引用は p.150.
- 19 今村秀夫. 学校図書館における利用者教育の動向. 実践女子大学文学部紀要. 1991, no.34, p.145-162. 引用は p.152.

- 20 塩見昇. 『学校図書館の利用指導』を成り立たせる要件. 教育学論集. 1973, vol.2, p.139-146. 引用は p.143.
- 21 塩見昇. 「図書館教育」の復権. 図書館界. 2004, vol.56, no.4, p.214-222.
- 22 日本図書館学会研究委員会. 図書館における利用者教育: 理論と実際. 日外アソシエーツ. 1994, 248p.
- 23 Streatfield, David; Shaper, Sue; Markless, Sharon; Rae-Scott, Simon. Information Literacy in United Kingdom Schools: Evolution, Current State and Prospects. *Journal of Information Literacy*. 2011, vol.5, no.2, p.5-25.
- 24 文部省. 小学校における学校図書館の利用指導. 大日本図書, 1970, 208p.
- 25 国立国会図書館. “子どもの情報行動に関する調査研究”. 図書館調査研究リポート No.10. 2008-06, 169p. http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf. (参照 2017-01-10).
- 26 野末俊比古 “第 5 章 情報リテラシー”. 情報探索と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p.229-278. 引用は p.254.
- 27 三輪真木子. 情報行動: システム志向から利用者志向へ. 勉誠出版, 2012, 205p.
- 28 河西由美子. “子どものウェブ検索行動”. 子どもの情報行動に関する調査研究. 国立国会図書館. 2008-06, 図書館調査研究リポート No.10. p.59-71. http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf. (参照 2017-01-10).
- 29 田村俊作編. 情報探索と情報利用. 勁草書房, 2001, 218p. 引用は p.5.
- 30 中村百合子. 研究文献レビュー: 学校図書館に関する日本国内の研究動向. カレントアウェアネス. 2004, no.282, p.24-28.
- 31 河西由美子. 研究文献レビュー: 学校図書館に関する日本国内の研究動 学びの場としての学校図書館を考える. カレントアウェアネス. 2010, no.304, p.24-30.
- 32 安藤友張. 図書館利用教育・情報リテラシー教育をめぐる動向: 1999～2001. 情報の科学と技術. 2002, vol.52, no.5, p.289-295.
- 33 例えば, 赤瀬美穂. 情報リテラシーと利用教育. 図書館界. 2001, vol.53, no.3, p.314-321.
- 34 野末俊比古. 研究文献レビュー: 利用者教育「情報リテラシー」との関わりを中心に. カレントアウェアネス. 2003, no. 278, p.15-18.
- 35 増田和子. 情報リテラシー教育の研究動向. 図書館情報学研究. 2003, no.2, p.39-63.
- 36 国立国会図書館. “子どもの情報行動に関する調査研究”. 図書館調査研究リポート No.10. 2008-06, 169p. http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf. (参照 2017-01-10).
- 37 中村百合子. 『学校図書館の手引』にみる戦後初期の学校図書館論の形成. 日本図書館情報学会誌. 2005, vol.51, no.3, p.105-124.
- 38 芦谷清. 利用指導テキストとその活用: 利用指導とテキストの変せん 昭和二〇・三〇年代を中心に. 学校図書館. 1979, no.348, p.45-48.
- 39 加賀栄治による連載は以下の号に掲載されている。図書館教育: 如何に図書及び図書館利用法を指導すべきか(1). 学校図書館. 1951, no.9, p.45-51. 図書館教育: 如何に図書及び図書館利用法を指導すべきか(2). 学校図書館. 1951, no.10, p.42-47. 図書館教育: 如何に図書及び図書館利用法を指導すべきか(3). 学校図書館. 1951, no.11, p.31-34.
- 40 芦谷清. 図書館教育における諸問題. 学校図書館. 1955, no.61, p.26-29.
- 41 深川恒喜. 「学校図書館の利用指導」の「これまで」と「これから」. 学校図書館. 1969, no.223, p.14-18.
- 42 笠原良郎. スキルの指導から学びかたの教育へ: 利用指導の 40 年. 学校図書館. 1990, no.482, p.44-51.
- 43 今村秀夫. 学校図書館における利用者教育の動向. 実践女子大学文学部紀要. 1991, vol.34, p.145-162.
- 44 堀川照代. 学校図書館利用指導の現状と課題. 島根女子短期大学紀要. 1992, vol.30, p.33-42.

- 45 福永智子. 学校図書館における新しい利用者教育の方法: 米国での制度的・理論的展開. 図書館学会年報. 1993, vol.39, no.2, p.55-69.
- 46 平久江祐司. 学校図書館利用教育における情報活用能力の育成: M. B. Eisenberg の情報問題解決アプローチの視点から. 図書館学会年報. 1997, vol.43, no.4, p.177-186.
- 47 須永和之. イギリスの学校図書館利用教育について: James Herring の PLUS モデルを中心に. 学校図書館学研究. 1999, vol.1, p.37-47.
- 48 徳岡慶一. 「探究」型学習に関する一考察: カナダ・アルバータ州教育省教師用手引き書 "Focus on Inquiry" の分析を通して. 教育実践研究紀要. 2008, vol.8, p.119-128.
- 49 例えば, 1988 年の基準 Information Power: Guidelines for School Library Media Programs が 1989 年に「インフォメーション・パワー: 学校図書館メディア・プログラム指針」として, また, 1998 年の基準 The Information Literacy Standards for Student Learning が 2000 年に「生徒の学習のための情報リテラシー基準」として翻訳出版されている。
- 50 JLA 図書館利用教育委員会. 学校図書館を情報教育の拠点に: 図書館利用教育ガイドライン(学校図書館:高等学校版)案. 図書館雑誌. 1996, vol.90, no.10, p.796-799. 引用は p.797.
- 51 平久江祐司. 自己教育力を育成するための学校図書館利用指導: 教育改革の観点から. 図書館学会年報. 1996, vol.42, no.2, p.111-127.
- 52 平久江祐司. 学校図書館利用教育における批判的思考の育成: 情報の評価スキルとしての役割. 図書館学会年報. 1996, vol.42, no.4, p.181-198.
- 53 堀川照代. 学校図書館を活用した教育/学習の意義. 明治大学図書館情報学研究会紀要. 2012, vol.3, p.2-11.
- 54 野末俊比古. “情報リテラシー”. 情報探索と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p.229-278. 引用は p.245.
- 55 小田光宏, 野末俊比古, 古賀節子. 情報活用教育カリキュラムの諸要因に関する考察: 「情報科」における問題解決学習の技能. 年会論文集. 2002, no.18, p.240-243.
- 56 例えば, 野末俊比古, 小田光宏. 「情報科」における「問題解決学習」の位置づけに関する基礎的検討: 検定教科書の調査結果と分析. 青山学院大学文学部紀要. 2002, no.44, p.11-23.や, 野末俊比古, 小田光宏, 古賀節子. 問題解決学習の技能の構造に関する考察: 「情報科」と「総合的な学習の時間」を比較して. 日本教育情報学会第 19 回年会論文集. 2003, no.19, p.50-53.
- 57 野末俊比古, 小田光宏. 問題解決学習カリキュラムの設計をめぐる課題: ガイドラインの提案. 日本教育情報学会第 19 回年会論文集. 2004, no.20, p.254-257.
- 58 河西由美子. 初等中等教育における情報リテラシーの育成に関する研究. 東京大学, 2008, 博士論文.
- 59 全国 SLA 研究調査部. 特集 '09 子どもの読書と学校図書館の現状 2009 年度学校図書館調査報告. 学校図書館. 2009, no.709, p.34-52.
- 60 以下の 3 点による。
- (1) 北島武彦, 小山郁子. 中学校における学校図書館利用指導の実証的研究: 都内中学校における実態調査を中心に. 図書館学会年報. 1973, vol.19, no.1, p.35-43.
- (2) 北島武彦, 小山郁子. 高等学校における学校図書館利用指導に関する実証的研究: 全国実態調査を中心として. 共立女子大学文芸学部紀要. 1973. no.21, p1-16.
- (3) 北島武彦, 小山郁子. 小・中・高等学校における学校図書館利用指導の現状と課題: 総合報告. 図書館界. 1976, vol.27, no.6, p186-191.
- 61 堀川照代. 学校図書館利用指導の現状と課題. 島根女子短期大学紀要. 1992, vol.30, p.33-42.
- 62 原勝子. 学校図書館利用教育に関する実証的研究. 風間書房, 2004, 150p.

- ⁶³ 山口真也. 調べ学習における学校図書館担当者の支援・指導状況に関する調査: 沖縄県内の小中学校司書を対象とするアンケート調査から. 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 2010, vol.15, no.1, p.37-64.
- ⁶⁴ 山口真也. 「調べ学習」における学校図書館担当教員の指導・支援状況に関する考察: 沖縄県内の公立高等学校の司書教諭・図書館主任・図書館係教諭を対象とする調査より. 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 2009, vol.14, no.1, p.1-21.
- ⁶⁵ 山口真也, 望月道浩. 調べ学習における支援・指導業務に関する職務区分意識: 沖縄県内の小中学校司書を対象とするアンケート調査から. 沖縄県図書館協会誌. 2010, vol.14, p.70-85. 引用は p.79.
- ⁶⁶ 福永智子. 学校図書館を対象とした利用者教育のプログラム: 米国ワシントン州タコマ市における事例. 文化と情報. 1999, vol.1, p.89-98.
- ⁶⁷ 小田光宏, 北本正章, 古賀節子. 幼・小・中・高の学習課程における総合的な学習の時間の体系的展開: 情報活用能力の活性化に向けての課題と方法. 教育情報研究. 2001, vol.16, no.3, p.3-12.
- ⁶⁸ 根本彰. 探究学習と図書館: 調べる学習コンクールがもたらす効果. 学文社, 2012, 157p.
- ⁶⁹ 塩谷京子, 堀田龍也. 中学校・高等学校の生徒の情報活用スキル習得度の調査. 日本教育工学会研究報告集. 2008, no.4, p.15-20.
- ⁷⁰ 塩谷京子, 堀田龍也. 各教科等の指導における情報活用スキルの習得度の調査. 日本教育工学会研究報告集. 2009, no.1, p.47-52.
- ⁷¹ 塩谷京子, 堀田龍也. 児童生徒の情報活用スキルの習得と司書教諭の指導効果に関する検討. 教育メディア研究. 2011, vol.17, no.2, p.25-39.
- ⁷² Laverne, Carroll Frances. Recent Advances in School Librarianship. 1st ed., Pergamon Press, 1981, 249p.
- ⁷³ Aaron, S. L.. A Review of Selected Doctoral Dissertations about School Library Media Programs and Resources: January 1972- December 1980. School Library Media Quarterly. 1982, vol.10, no.3, p.210-240.
- ⁷⁴ Liesener, James. W.. Learning at Risk: School Library Media Programs in an Information World. 1988, p.5-24. <http://files.eric.ed.gov/fulltext/ED243889.pdf>, (参照 2017-01-10).
- ⁷⁵ Baumbach, Donna T.. Information Skills for the Information Age: the State of Our States. School Library Media Annual. 1986, vol.4, p.278-285.
- ⁷⁶ Kuhlthau, Carol Collier. An Emerging Theory of Library Instruction. School Library Media Quarterly. 1987, vol.16, no.1, p.23-28.
- ⁷⁷ Goodin, Elspeth M.. The Transferability of Library Research Skills from High School to College. School Library Media Quarterly. 1991, vol.20, no.1, p.33-41.
- ⁷⁸ Kester, Diane D.. Secondary School Library and Information Skills: Are They Transferred from High School to College?. The Reference Librarian, 1994, no.44, p.9-17.
- ⁷⁹ Ellison, W. John. Effective library Instruction and the Learning Process. Catholic Library World. 1981, vol.53, no.4, p.182-184.
- ⁸⁰ Davis, Richard A. Educating the Library Users in the Senior High School. Educating the Library User. Lubans, John ed.. R. R. Bowker Co, 1974, p.39-52.
- ⁸¹ 「情報行動」の概念整理を行った三輪は, 情報行動を“一般に, 情報ニーズ, 情報探索, 情報利用, 情報共有の全体を含むプロセス”と定義している。(三輪眞木子. 情報行動: システム志向から利用者志向へ. 勉誠出版, 2012, 205p. 引用は p.23)
- ⁸² Kuhlthau, Carol C. Seeking Meaning: a Process Approach to Library and Information Services. 2nd ed. Libraries Unlimited, 2004, 247p.
- ⁸³ Pickering, Thomas Nancy; Crow Sherry R.; Franklin Lori L.. Information Literacy and Information Skills Instruction: Applying Research to Practice in the 21st Century School Library. 3rd ed. Libraries Unlimited, 2011, 261p.

-
- ⁸⁴ Walker, H. Thomas; Montgomery, Paula Kay. *Teaching Media Skills: an Instructional Program for Elementary and Middle School Students*. Littleton, Colo. Libraries Unlimited, 1977, 189p.
- ⁸⁵ 福永智子. 学校図書館における新しい利用者教育の方法: 米国での制度的・理論的展開. 図書館学会年報. 1993, vol.39, no.2, p.55-69. 引用は p.63.
- ⁸⁶ Mancall, Jacqueline C.. *Educating Students to Think: The Role of the School Library Media Program*. *School Library Media Quarterly*. 1986, vol.15, no.1, p.18-27.
- ⁸⁷ Todd, Ross J. *Integrated Information Skills Instruction: Does It Make a Difference?* *School Library Media Quarterly*. 1995, vol.23, no.2, p.133-38.
- ⁸⁸ Kuhlthau, Carol Collier. *Student Learning in the Library: What Library Power Librarians Say*, *School Libraries Worldwide*. 1999, vol.5, no.2, p.80-96.
- ⁸⁹ 本論文では collaboration の語に「協働」の訳語を用いる。ただし、英語文献における用語の定義（例えば、collaboration と cooperation の違いなど）を説明する際には「協働 (collaboration)」と「協力 (cooperation)」のように英語表記を併用する。
- ⁹⁰ Sproles, Claudene; Detmering, Robert; Johnson, Anna Marie. *Trends in the Literature on Library Instruction and Information Literacy 2001-2010*. *Reference Services Review*. 2013, vol.41, no.3, p.395-412.
- ⁹¹ Callison, Daniel. *Expanding Collaboration for Literacy Promotion in Public and School Libraries*. *Journal of Youth Services in Libraries*. 1997, vol.11, no.1, p.37-48.
- ⁹² Donham, Jean. *Collaboration in the Media Center: Building Partnerships for Learning*. *NASSP Bulletin*. 1999, vol.83, issue 605, p.20.
- ⁹³ Welch, Marshall. *Collaboration: Staying on the Bandwagon*. *Journal of Teacher Education*. 1998, vol.49, no.1, p.26-37.
- ⁹⁴ Loertscher, David V.. *Taxonomies of the School Library Media Program*. Libraries Unlimited, 1988, 336p.
- ⁹⁵ Montiel-Overall, Patricia. *Toward a Theory of Collaboration for Teachers and Librarians*. *School Library Media Research*, 2005, vol.8. <http://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ965627.pdf>, (参照 2017-01-10).
- ⁹⁶ Montiel-Overall, Patricia. *Teacher and Librarian Collaboration: A Qualitative Study*. *Library & Information Science Research*, 2008, vol.30, no.2, p.145-155.
- ⁹⁷ Lance, Keith Curry. *The Impact of School Library Media Centers on Academic Achievement*. *School Library Media Quarterly*, 1994, vol.22, no.3, p.167-70.
- ⁹⁸ Francis, Briana Hovendick; Lance, Keith Curry. *The Impact of Library Media Specialists on Students and How It Is Valued by Administrators and Teachers: Findings from the Latest Studies in Colorado and Idaho*. *Tech Trends: Linking Research and Practice to Improve Learning*. 2011, vol.55, no.4, p.63-70.
- ⁹⁹ Pickard, Patricia W.. *The Instructional Consultant Role of the School Library Media Specialist*. *School Library Media Quarterly*. 1993, vol.21, no.2, p.115-121.
- ¹⁰⁰ Cooper, O. P.; Bray, Mary. *School Library Media Specialist-Teacher Collaboration: Characteristics, Challenges, Opportunities*. *Tech Trends: Linking Research & Practice To Improve Learning*, 2011, vol.55, no.4, p.48-55.
- ¹⁰¹ Lindsay, Karen. *Teacher/Teacher-Librarian Collaboration: A Review of the Literature*. *School Libraries in Canada*. 2006, vol.25, no.2, p.8-21.
- ¹⁰² Asselin, Marlene M. *Factors of Effective School Libraries: A Survey of Perspectives of Teachers, Teacher-librarians, and Principals*. *The Annual Conference of the International Association of School Librarianship*, Auckland, NZ. 2001.
- ¹⁰³ Hartzell, Gray. *The Principal's Perceptions of School Libraries and Teacher-librarians*. *School Libraries Worldwide*. 2002, vol.8, no.1, p.92-110.
- ¹⁰⁴ Asselin, Marlene M. *Factors of Effective School Libraries: A Survey of Perspectives of Teachers, Teacher-librarians, and Principals*. *The Annual Conference of the International Association of School Librarianship*, Auckland, NZ. 2001.

¹⁰⁵ 桑田てるみ. “学校図書館が用いる探究型学習モデルに内在する言語スキルの問題: 英語母国語教育とわが国の国語教育との差異に着目して”. 日本教育学会大会研究発表要項. 2009, vol.68, p.310-311.

¹⁰⁶ 小田光宏, 野末俊比古. 学校教員に求められる情報技能の特性に関する序論的考察: 「情報化」教諭ならびに司書教諭の場合を比較して. 青山学院大学文学部紀要. 2000, vol.42, p.33-49.

2章 学校図書館における利用者教育

はじめに

学校図書館利用指導は、戦後制定された学校図書館法の中で、司書教諭が行う教育活動として挙げられているにも関わらず、1968年まで学習指導要領に位置付けられてこなかった。その後も、学校図書館機能の不備と相まって、ごく少数の事例を除き、体系的な指導が展開されることはなかった。そのため、今日の学校現場で、司書教諭や学校司書が利用指導を教育課程に組み込もうと考えても、そのような教育を受けた経験のない教員や管理職が、具体的な内容や方法を思い浮かべることは難しく、指導の必要性を学校図書館員と共有することができない。

1章2節で述べたように、学校図書館では、文部（科学）省が「利用指導」の語を用いているが、同様の活動は公共図書館や大学図書館でも、利用者教育（user education）、あるいは図書館利用教育（library use education）として実施されている。『図書館情報学用語辞典第4版』では、「図書館利用教育」が見出し語として採用されており、“図書館の利用者および潜在利用者の集団を対象に計画、実施される、組織的な教育的活動。文献利用指導や図書館オリエンテーションなども含む”と定義されている。ここでいう「文献利用指導（bibliographic instruction）」とは、同書で、“図書館利用者に、情報をより効果的に入手し利用する方法を修得させることを意図した計画的活動。この目標に基づき、図書館の組織体系への理解ならびにレファレンスブックの利用能力の育成を図る”（下線は筆者による）を指す。

野末俊比古によると、図書館利用教育の内容は、(1)図書館オリエンテーション（library orientation）、(2)図書館利用指導（library instruction）、(3)文献利用指導（bibliographic instruction）、(4)情報管理教育（information orientation）に分類することができる¹。学校図書館利用指導の内容も、ガイドラインなどでは、情報の探索と利用に必要な知識や技能を包括している²。

しかし、学校図書館で「利用指導」の語を用いる時は、野末の分類でいう(1)図書館オリエンテーション、あるいは(3)文献利用指導、すなわち、図書館における図書の分類（日本十進分類法）と配架の仕組みと、辞書や事典、統計資料などのレファレンスブックの利用法の指導を指すと捉えられることが多い。すなわち、利用指導とは何か、を論じるにあたっては、理念と実践に大きな隔たりがあることを踏まえる必要がある。

本章は、研究の枠組みとなる「利用指導の内容と方法」を提示することを目的とするが、実践を伴わない理念上の項目も含めて検討する。すなわち、研究の方法として文献調査を採用し、利用指導の歴史的変遷と、国内外の利用指導の内容と方法を整理することによって、利用指導の内容一覧を作成する。また、利用指導の理論的根拠となっている情報探索プロセス・モデルと、情報探索プロセスを組み込んだ利用教育モデルについても論じる。

2.1 日本における学校図書館利用指導の変遷

文部省は、第二次世界大戦後の教育改革の一環として、学校図書館運営の指針である『学校図書館の手引』³を発行した。その第4章第2項の「図書および図書館利用法の指導」が、戦後最初の学校図書館利用指導のガイドラインである。これ以降、日本における学校図書館利用指導（以下、利用指導）は、文部省や全国学校図書館協議会（以下、全国SLA）が作成する手引きや体系表（図表 2-1）によって、方向性や基準が示されてきた。本節では、学校図書館利用指導の内容を明らかにするために、1948（昭和23）年から2004（平成16）年にかけて、文部（科学）省と全国学校図書館協議会が作成してきた利用指導の基準や体系表を概観し、それらで取り扱われている知識や技能を整理する。また、これらの基準や体系表が、現在の教育課程に合わせて改訂されていないことを踏まえ、学校図書館法が改正された1997（平成9）年以降に発行された学校図書館関係の文献を用いて、本論文の枠組みとする「利用指導の内容一覧」を作成する。

図表 2-1 文部省と全国学校図書館協議会が作成した利用指導の基準・体系表

ID	タイトル	発行年	編著者
文1	『学校図書館の手引』	1948	文部省
文2	『学校図書館基準』	1949	文部省
文3	『学校図書館基準』（案）	1953	文部省
協1	『学校図書館教育』（学校図書館実践叢書5）	1954	全国学校図書館協議会
協2	『図書館教育カリキュラム』（案）	1956	全国学校図書館協議会
文4	『学校図書館運営の手びき』	1959	文部省
文5	『小・中学校における学校図書館利用の手びき』	1961	文部省
文6	『学校図書館の管理と運用』	1963	文部省
文7	『高等学校における学校図書館運営の手びき』	1964	文部省
文8	『小学校における学校図書館運営の事例と研究』	1966	文部省
協3	『学校図書館の利用指導体系表』	1967	全国学校図書館協議会
文9	『小学校における学校図書館の利用指導』	1970	文部省
協4	『学校図書館利用指導の計画と方法』	1971	全国学校図書館協議会
文10	『中学校における学校図書館運営の手びき』	1972	文部省
協5	『自学能力を高める学校図書館の利用指導』	1982	全国学校図書館協議会
文11	『小学校、中学校における学校図書館の利用と指導』	1983	文部省
協6	『資料・情報を活用する学び方の指導（利用指導）体系表』	1992	全国学校図書館協議会
協7	『情報・メディアを活用する学び方の指導体系表』	2004	全国学校図書館協議会

2.1.1 文部省の基準が示した学校図書館利用指導の内容

文部省が、利用指導について戦後初めて言及した資料は、1948（昭和23）年に発行された『学校図書館の手引』である。これらは、学校図書館コンサルタントとしてアメリカ合衆国から招聘されたグラハム（Mae I. Graham）と、その後継者であるバーネット（Paul J. Burnette）のもとで、主に、深川恒喜、滑川道夫、坂本一郎が中心となって執筆・編集した。この本の第4章第2節に「図書および図書館利用法の指導」⁴があり、“米国における研究を参照して考えるに、小学校から高等学校の範囲で行われる「図書館利用法」の指導事項としては、およそ次のようなものがある”⁵として、以下の14領域が挙げられている。

- A. 図書館の見学（1.諸室の案内、2.図書・小冊子・切り抜き・印刷物等の展示）

- B. 図書館の機能と利用（1.公共図書館と学校図書館との相違・関係等，2.読書生活の中心としての図書館の意義，3.図書館の参考的機能，4.入館および借覧の訓練等）
- C. 館内において市民としてふるまうこと（1.図書および諸備品をたいせつにすること，2.他人の権利を尊重すること，3.図書係りおよび他の生徒の手伝いをする事等）
- D. 図書の構成（1.表紙，2.本文，3.本の構造等）
- E. 図書の印刷部分（1.標題紙，2.版權，3.序文および緒論，4.内容・目次，5.本文，6.索引，7.その他（献辞・地図・挿図・専門語・注記）等）
- F. 分類および図書の排列 1.十進分類法その他の分類法，2.請求番号，書架上の図書の見つけ方等）
- G. カード目録（1.性質，2.種類，3.使用法の説明と実習等）
- H. 辞書および百科事典（1.排列法，2.内容，3.特長と欠点，5(マ).使用法，6.重要な辞書，7.百科事典）
- I. 参考書（1.重要な参考書の名，2.特色，3.使用法）
- J. 雑誌および雑誌索引（1.価値，2.使用法，3.知っておくべき雑誌の名等）
- K. 図書目録の作りかた（ある主題についての書目の作り方ー1.形式，2.価値，3.作成の資料）
- L. ノートの取りかた
- M. 討論法と時事問題（1.討論法の原理と実習，2.世論と世相，3.情報のよりどころ）
- N. 文献の評価（図書および著者をいろいろの観点から評価すること）

占領下の日本におけるアメリカ学校図書館の影響について研究した中村百合子は、『学校図書館の手引』の編集過程で、日本人執筆者が参照したと考えられるアメリカの資料を特定し、特に影響の大きかった 5 冊の目次と内容を『学校図書館の手引』と比較している。それによると、第 4 章第 2 節の「図書および図書館利用法の指導」は、節のタイトル「図書および図書館利用法の指導」が、『Teacher-Librarian's Handbook』（American Library Association (ALA), 1947 年）の第 6 章「Instruction in the Use of Books and Libraries」の翻訳とみられ、指導事項は『The Library in the School』の一節である「Units of Instruction Commonly Suggested」の指導単位とほぼ一致している⁶。『The Library in the School』は、1957（昭和 32）年に『学校の図書館』という邦題で翻訳、出版されているが、その「第二編 機能と活動－5. 図書館利用の指導」に「Ⅱ生徒が学ばなければならぬこと」として、12 項目が挙げられており、それと『学校図書館の手引』の 14 項目と比較すると、図表 2-2 のようになる。

図表 2-2 『The Library in the school』と『学校図書館の手引』の指導事項の比較

Units of the Instruction Commonly Suggested “The Library in the School” p.85-86	通常提唱される指導単元 『学校の図書館』 p.104-105	「図書館利用法の指導事項」 『学校図書館の手引』 p.88-89
I Orientation in the library use	I 図書館利用の準備教育	A 図書館の見学 B 図書館の機能と利用
II Library citizenship	II 図書館道德	C 館内において、よい市民としてふるまう
III Parts of the book	III 図書の各部名称	D 図書の構成 E 図書の印刷部分
IV Classification	IV 分類	F 分類および図書の排列
V The card catalog	V カード目録	G カード目録
VI The dictionary	VI 辞書	H 辞書および百科事典
VII The encyclopedia	VII 百科事典	
VIII Reference books	VIII 参考図書	I 参考書
IX Periodicals and periodical indexes	IX 定期刊行物とその索引	J 雑誌および雑誌索引
X Bibliography making	X 書目作成	K 図書目録の作り方
XI Note-taking and briefing	XI ノート取りと要約	L ノートの取り方
XII Book selection and book buying	XII 図書選択と購入	N 文献の評価 M 討論法と時事問題

『学校図書館の手引』における利用指導に関する記述は、4章2節の7ページ分しかなく、上に記した指導項目の紹介以外には、アメリカにおける指導の具体例として「図書の分類」と「カード目録」を扱った4・7年生および7・9年生の指導例と、日本の旧制中学で週1時間の「作業科」のなかで講義を行った事例が短く紹介されているにすぎない。阪本は、手引が発行された1940年代に“利用指導はそれほど重視されてはいなかった”⁷と述べているが、この手引の発行後、図書や図書館の使い方を指導するためのカリキュラムが各地の先進的な学校で作られようになった⁸。

尚、第2節「図書および図書館利用法の指導」の後には、第3節「読書指導の実施」があり、その指導内容には、以下のように、辞書、雑誌、新聞の利用法に関する以下の項目が含まれている。

(四) 辞書・新聞および雑誌についての指導には、次のような点に注意をする。

- (1) 辞書のひき方について
- (2) 雑誌の取り扱い方と読み方。
- (3) 新聞の読み方と利用のしかた。

第3節には、この他にも、読書に親しむ態度の涵養や、読み物の選択、本の取り扱い方、読書記録のとり方、学級文庫や図書館の利用などが取り上げられている。このような読書指導に関する目次は、参照されたアメリカの学校図書館関連図書にはないが⁹、阪本は以下のように述べている。

当時私どもの見ることできた利用指導の資料は、ダグラスの編集した「北カロライナ学校図書館ハンドブック」（旧版）その他 2～3 点しかなく、これらには読書指導の章がなかった。なかったのにもかかわらず、あちらの指導で作ったわが国最初の「手引」に、読書指導の項を並列して入れたことは、（当時の事情は忘れてしまったが、）歴史的に大きな意義を持つのである¹⁰。

以上のように、戦後、アメリカの事例を参考に取り入れられた利用指導は、Library Instruction に倣って、図書館の利用法と図書を用いた学習に必要な知識や技能に、日本独自の読書指導の項目が付け加えられた内容として導入された。

『学校図書館の手引』が出版されたのと同じ 1948（昭和 23）年、学校図書館協議会が文部大臣の諮問機関として組織された。同協議会による答申として、1949（昭和 24）年 5 月に「学校図書館基準」が策定されている。この基準以前に、8 つの基準（案）が作成されているが、もっとも初期の「小学校図書館設置基準（草案例）」と「中学校設置基準案」（1948 年 10 月 22 日付）には、それぞれ「図書及図書館利用の指導」と「図書及図書館（クニガマエにト）使用に関する指導要領アウトライン」という章があった¹¹。中村によると、この「図書及図書館使用に関する指導要領アウトライン」は、『Teacher-Librarian's Handbook』の「VI. Instruction in the Use of Books and Libraries」の記述を下敷きにしたと考えられるが、結局これらの章は、最終的な学校図書館基準には残されなかった¹²。

1953（昭和 28）年、「学校図書館基準」の改訂版である「学校図書館基準」（案）が作られ、このなかには「I. 図書館教育」として 15 の指導領域が示されている。

- (1) 学校図書館の概要
- (2) 図書・図書館の歴史と現状
- (3) 図書館道德と読書衛生
- (4) 図書の構成と取扱方
- (5) 図書の選択
- (6) 分類と排列
- (7) 図書の目録
- (8) 辞書・事典・索引類の利用
- (9) 年鑑・統計類の利用
- (10) 雑誌・新聞類の利用
- (11) インフォメーション・ファイルの利用
- (12) 視聴覚資料の取扱と利用
- (13) 読書法
- (14) 参考書目の作り方とノートのととり方
- (15) 校外の読書施設・文化施設¹³

1959（昭和 34）年の『学校図書館運営の手びき』は、1948（昭和 23）年の『学校図書館の手引』に続いて、文部省が示した学校図書館運営の指針であり、1953（昭和 28）年に制定された学校図書館法を踏まえて、学校図書館のあり方を具体的に示したものである。

執筆に関わった深川は、『学校図書館の手引』と比較して、“第一作が啓蒙的であったのに対して、研究的な要素や背景があるようにしかつ教育改革の全体をみわたしたうえでの学校図書館経営の決定版で百科事典的なものにしたいと考えていた”¹⁴と述べている。

全 17 章からなる『学校図書館運営の手びき』の第 13 章に「図書および図書館の利用指導」がある。章の見出しには、利用指導の語が用いられているが、「1. 図書館教育の意義と必要」「2. 図書館教育の内容と計画」という節見出しからも分かるように、本文中では主に「図書館教育」の語が使われている。図書館教育とは、“図書と図書館の内容や機能について広く知り、これをみずから自由に使いこなしていく技術や態度を身につけさせる組織的な指導”¹⁵と定義されているが、「2 図書館教育の内容と計画」を見ると、図書の取り扱いに関する指導、読書に関する指導、図書館に関する指導の 3 領域からなる 10 の指導項目が挙げられており、読書指導と利用指導を包括した言葉として用いられている。

- A. 図書資料について
 - (a) 図書の意義
 - (b) 図書の入手、図書の管理
 - (c) 造本・修理、各部の機能、図書の愛護
- B. 読書活動について
 - (d) 読書の領域
 - (e) 読書技術
 - (f) 読書態度
 - (g) 読書の衛生
- C. 図書館について
 - (h) 図書館への親近
 - (i) 図書館資料の検索
 - (j) 図書館道徳¹⁶

読書指導が図書館教育のひとつとして扱われている理由について、本文中では以下のよう

に説明されている。

在来、読書指導と呼ばれる指導の分野がある。このことばは、広義には、読書に関するあらゆる指導を含むものと解されているが、その中でも、学習指導の領域における読書指導と、ガイダンス、あるいは生活指導の領域における読書指導とは、それぞれ目的・方法・内容などを異にして二つの大きい領域をなしているが、図書館教育は、これらの各領域にまたがって、図書と図書館の利用についての基礎的な指導を扱うものと解してよいであろう¹⁷。

この手びきが示した定義に対し深川は、“この考え方は、いわゆる読書指導といわれるものを図書・図書館の利用指導の概念やワクの中に納めこんだもので、利用指導をたいへん広義に解したものということができる”¹⁸と批判的に述べている。

文部省は、1960（昭和 35）年、『学校図書館における図書以外の資料の整理と利用』で、資料センターとしての学校図書館のあり方を示し、さらに 1961（昭和 36）年には『小・中

学校における学校図書館利用の手びき』で、それまで用いていた「図書館教育」の語を、本格的に「利用指導」へと改称し、学校図書館利用指導を“学校図書館および学校図書館資料の利用に関するスキルの指導をさす”¹⁹と定義し直した。利用指導の内容は、1953年の「学校図書館基準」(案)と同じ15項目である。

しかし、1963(昭和38)年『学校図書館の管理と運用』では、図書館利用指導を広義と狭義に分け、①狭義における学校図書館の利用指導(「学校図書館基準」(案)(1953年)と同じ15項目)、②学習の効果を高めるための利用指導、③読書指導、④レファレンス・サービスの4つを包括して、広義の利用指導とした。そして、狭義における学校図書館利用指導の定義を“図書館および図書館資料の利用に関する基礎的な知識・技能・態度を育成するための指導”とした。

1970(昭和45)年の『小学校における学校図書館の利用指導』は、前年(1969年)に小学校学習指導要領が改訂され、小学校における「特別活動」の「学級指導」の内容として図書館利用指導が挙げられたことをうけて作成された基準である。学習指導要領解説では“学校図書館の利用指導においては、学校図書館を利用するのに必要とされる基礎的な知識・技能・態度を育成することによって、望ましい学習態度と読書習慣を身につけさせることをねらいとし、分類と目録、参考図書の利用法、図書以外の資料の利用法などについての指導を行う”²⁰とされている。

この基準は、利用指導の定義を“直接的には図書館の利用に関して必要とされる知識・技能・態度の育成を意図するものではあるが、指導の究極的ねらいは、あくまでも、生涯にわたる自己教育を支える学習技術(スタディ・スキルズ)とか、あらゆる教科等の学習において必要とされる情報の検索・組織化・処理の能力などを育成することに存する”²¹と定め、図書館の利用法だけではなく、学習過程全般にわたる知識や技能と捉えた点で重要である。そして、その内容については、「学校図書館基準」で定められた15の指導項目を踏まえながらも、“これらの中に、必ずしも学校図書館の立場で強調する必要のない主題や、また、実施上不自然なものなどが見いだされることも否定できない”²²とし、以下のように、3つの主題領域からなる18項目を設定している(下線は筆者による)。

- ア 知識や情報の検索方法に関する内容
 - (ア) 情報と資料
 - (イ) 分類と排列
 - (ウ) 目録の利用
 - (エ) 目次・索引などの利用
 - (オ) 百科事典の利用
 - (カ) 年鑑類の利用
 - (キ) 図鑑類の利用
 - (ク) 雑誌・新聞の利用
 - (ケ) インフォメーション・ファイルの利用
 - (コ) 視聴覚資料の利用
- イ 知識や情報の処理方法に関する内容
 - (ア) 書目づくり
 - (イ) ノート・記録のとり方

- (ウ) ファイル資料の自作
- (エ) 発表法
- ウ その他、図書館利用についての基礎的・関連的な内容
 - (ア) 図書館の概要
 - (イ) 資料の物理的構成
 - (ウ) 利用上の心得
 - (エ) 読書法

新しく加わった項目に焦点を合わせると（下線部）、例えば、「情報と資料」は、①われわれはどんな方法で必要な知識や情報を入手したり、利用しているか、②知識・情報と資料の関係、③資料の種類・特性と目的に応じた使い分け方、という内容で構成されている。また、「発表法」は、①資料から得た知識・情報を文章にまとめたり、口頭で発表したりする場合の内容の要約方法、②必要に応じて図形・グラフなどを用いて発表できる、③出典を示す、といった内容が示されている。

また、「読書法」については、①読書の意義と必要性、②目的に応じた読書方法（速読、通読、精読、多読、摘読、音読、黙読など）、③読後の整理方法があるが、読書に親しむ態度や読書材の選び方などは含まれておらず、情報の読み取りや整理に焦点を合わせた項目が精選されているといえる。

すなわち、利用指導の定義にもあるように、学習技術（スタディ・スキルズ）の習得という観点から、情報の収集だけではなく“組織化・処理”といった領域にも指導の対象を広げ、情報を活用した学び全体に関わっていこうという姿勢を読み取ることができよう。

1983（昭和58）年には、新たに『小学校、中学校における学校図書館の利用と指導』が発表された。この基準では“児童生徒の情報を的確に処理する能力を育成する”という目的をより明確にするために、以下のような、4領域21項目の指導内容が示された。しかし、領域Dにみられるように、読書指導に該当する項目が復活し、広義の利用指導観を採用したことから、“せっかく明確になってきた利用指導の概念をあいまいなものにしかねない”²³ といった批判が生まれた。

- A 図書館及びその資料の利用に関する事項
 - ① 図書館資料の種類や構成を知って利用する
 - ② 学校図書館の機能と役割を知って利用する
 - ③ 公共図書館の機能と役割を知って利用する
 - ④ 地域の文化施設の機能と役割を知って利用する
- B 情報・資料の検索と利用に関する事項
 - ① 図鑑の利用に慣れる
 - ② 国語辞典、漢和辞典などの利用に慣れる
 - ③ 百科事典、専門事典などの利用に慣れる
 - ④ 年鑑などの利用になれる
 - ⑤ 図書資料の検索と利用に慣れる
 - ⑥ 図書以外の資料の検索と利用に慣れる
 - ⑦ 目録、資料リストなどの利用に慣れる

C 情報・資料の収集・組織と蓄積に関する事項

- ① 必要な情報・資料を集める
- ② 記録の取り方を工夫する
- ③ 資料リストを作る
- ④ 目的に応じた資料のまとめかたを工夫する
- ⑤ 目的に応じた伝達の仕方を工夫する
- ⑥ 資料の保管の仕方を工夫する

D 生活の充実にに関する事項

- ① 望ましい読書習慣を身に付ける
- ② 集団で読書などの活動を楽しむ
- ③ 進んで読書などの活動を中心とした集会活動に参加する
- ④ 進んで読書などの活動を中心とした学校行事に参加する²⁴

学校図書館における利用指導の内容を示した文部省の手引きや基準は、1983（昭和 58）年の『小学校、中学校における学校図書館の利用と指導』を最後に改訂されていない。すなわち、学習指導要領の改訂で新たに求められた、「学び方」の指導や「情報活用能力」の育成に学校図書館利用指導がどのようにつながるか、文部省の指針は示されていない。

2.1.2 全国 SLA の体系表が示した学校図書館利用指導の内容

文部省の手引きとは別に、全国学校図書館協議会（全国 SLA）は、独自の利用指導カリキュラム案や指導体系表を作成している。これらは、文部省の手引きより後の 2004（平成 16）年版まで改訂されているため、現在、さまざまな自治体や学校で作成される利用指導計画のモデルとなっている。そこで、各体系表にどのような知識や技能が取り上げられているかを整理する。

戦後、全国 SLA が利用指導に言及したもっとも初期の資料は、1954（昭和 29）年の『学校図書館教育』（学校図書館実践叢書 5）であり、その後、1956（昭和 31）年に「図書館教育カリキュラム」（案）が作成された。このカリキュラム（案）は、“当時使用されていた教科書に掲載された図書館教育関係の教材を分析、昭和三一年に義務教育九か年間に指導すべき項目を、学年別にまとめたもの”²⁵で、作成にあたって参照されたアメリカの事例にはない「図書の歴史」「図書館の歴史」「図書の生産と配給」など知識的、文化的事項や、「図書の選択」「読書の衛生」「読書の技術」といった読書指導の分野事項が独自に加味され²⁶、以下のような 20 項目が挙げられている。

- (1) 図書の意義
- (2) 図書の歴史
- (3) 図書の構造
- (4) 図書各部の機能
- (5) 図書の取扱い
- (6) 図書の生産と配給
- (7) 図書の選択
- (8) 読書の技術

- (9) 読書の衛生
- (10) 辞書・事典の利用
- (11) 図鑑・年鑑の利用
- (12) 新聞・雑誌の利用
- (13) ファイル資料の整理と利用
- (14) 図書館の意義と機能
- (15) 図書館の歴史
- (16) 図書館の資料と施設
- (17) 図書館利用のエチケット
- (18) 図書の分類と目録
- (19) 学級文庫の利用
- (20) 校外の図書利用²⁷

その後“必ずしも大きくとりあげる必要のない項目、逆に重点を置いて指導しなければならない項目等が、日時の経過につれ明らかになってきた”²⁸ことから、1971（昭和 46）年に『学校図書館の利用指導の計画と方法』が刊行され、精選された指導事項として、以下のような 13 領域からなる「学校図書館の利用指導体系表」が示された。

- (1) 図書の意義
- (2) 図書各部の機能
- (3) 図書の取り扱い
- (4) 書目づくり
- (5) 読書衛生
- (6) 辞書・辞典の利用
- (7) 図鑑・年鑑の利用
- (8) 新聞・雑誌の利用
- (9) ファイル資料の利用
- (10) 図書館の意義と機能
- (11) 図書館利用とエチケット
- (12) 図書の分類と目標
- (13) 視聴覚資料の利用

さらに、1982（昭和 57）年に『自学能力を高める学校図書館の利用指導』を刊行し、「学校図書館の利用指導（図表 2-3）」を示した。利用指導の定義は“児童生徒に図書館および資料の利用法を修得させることにより、主体的に学習する能力を育成する指導”²⁹と改められ、学習過程に合わせた 6 つの領域ごとに（Ⅰ図書館とその利用、Ⅱ図書とその取り扱い、Ⅲ資料の探し方、Ⅳ参考図書の利用法、Ⅴ図書以外の資料の利用法、Ⅵ調査研究のまとめ方）、小学校の低学年から高学年、中学校、高等学校という 5 つのグレード別に指導内容を示す形をとり、同じ指導内容が、学年が上がるにつれて深まるように構造化されている。

図表 2-3 「学校図書館の利用指導」体系表（1982 年）

	I 図書館とその利用	II 図書とその取り扱い	III 資料の探し方	IV 参考図書の利用法	V 図書以外の資料の利用法	VI 研究調査のまとめ方
中学校	中学校生活における図書館の利用	図書各部の機能	図書の分類と配架 目録の利用法	参考図書の利用法	新聞・雑誌の利用法 視聴覚資料の利用法 ファイル資料の利用法	ノートの作成法 レポートの作成法

【出典】笠原良郎. 利用指導の新しい基準--全国 SLA の利用指導体系表をまとめて（特集・利用指導の新展開）. 学校図書館. no.373, p14-15 より作成

1986 年に発行された『学校図書館の運営と利用指導』では、この体系表の意義や活用法について解説されているが、そこで、利用指導の定義について

児童生徒が学校図書館やその他の図書館などを利用したり、必要な資料・情報を収集・活用して主体的な学習活動を行うとともに、広く生活諸場面での必要に応じ、かつ生涯学習において資料・情報を活用する能力・習慣を形成するために必要な知識、技能、態度の指導³⁰

と説明し、“資料・情報の検索・評価・選択・活用・再創造という情報処理のプロセスに従って指導内容を設定したこと、「調査研究のまとめ方」を指導領域として独立させたこと”³¹を、本改訂の特色として指摘している。

利用指導が「学び方を学ぶ」ための教育活動であるという姿勢は、1989（平成 1）年の学習指導要領改訂に対応して作成された「資料・情報を活用する学び方の指導（利用指導）体系表」（1992 年）でさらに明確になった。例えば、自学に不可欠な調査研究技術に関する項目が、第 4 領域「情報のまとめ方」として取り上げられている（図表 2-4）。

図表 2-4 「資料・情報を活用する学び方の指導（利用指導）体系表」（1992 年）

	I 情報と図書館	II 情報源の探し方	III 情報源の使い方	IV 情報のまとめ方
中学校	情報化社会と私たち 中学校生活と図書館	資料の分類と配架 目録の利用	参考図書の利用 新聞・雑誌の利用 ファイル資料の利用 視聴覚資料・電子メディアの利用	資料リストの作成 調査研究の記録 調査研究結果の発表 資料の自作と整理

【出典】笠原良郎. 利用指導の新しい基準--全国 SLA の利用指導体系表をまとめて（特集・利用指導の新展開）. 学校図書館. no.373, p12-13 より作成

さらに、2004（平成 16）年には、情報環境の変化や「総合的な学習の時間」における調べ学習の導入などに対応した「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」（図表 2-5）を発表し、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめと評価という学習の全過程に利用指導を関連づけた。

図表 2-5 「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」(中学校)の内容

	内容	指導項目
I	学習の方法を考える	いろいろな学習方法, 学習計画の立て方
	情報・メディアの種類や特性を知る	印刷メディア, 視聴覚メディア, 電子メディア, 人的情報源
	図書館の役割を知る	学校図書館, 公共図書館, その他の施設, ネットワーク
II	図書館を利用する	分類の仕組み, 配架の仕組み, 目録の種類, レファレンス・サービス
	各種施設を利用する	博物館, 資料館, 美術館, 行政機関, その他の施設
	目的に応じてメディアを利用する	参考図書, 新聞・雑誌, ファイル資料, 視聴覚メディア, 電子メディア
III	情報を収集する	各種メディアの活用, 人的情報源の活用
	効果的な記録の取り方を知る	ノートの作成法, カードの作成法, 切り抜き・ファイルの作成法, AV 機器等を使った記録の取り方, コンピュータを使った記録の取り方
	情報を分析し, 評価する	目的に応じた評価, 複数の情報の比較・評価
IV	情報の取り扱い方を知る	インターネット, 著作権, 情報モラル, 個人情報
	学習の結果をまとめる	評価した情報の整理, 伝えたいことの整理, 自分の考えのまとめ方, レポートのまとめ方, 紙面によるまとめ方, コンピュータを使ったまとめ方, 資料リストの作成
	まとめたことを発表する	レポートによる発表, 口頭による発表, 展示・掲示による発表, 実演による発表, 写真・AV 機器を使った発表, コンピュータを使った発表
	学習の過程と結果を評価する	調査・研究の方法, 調査・研究の過程, 成果の評価, 相互評価

※ I: 学習と情報・メディア, II: 学習に役立つメディアの使い方, III: 情報の活用の仕方, IV: 学習結果のまとめ方

【出典】全国学校図書館協議会. 情報を学習につなぐ: 情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説. 全国学校図書館協議会, 2004, p.47.より作成

2.2 今日の学校図書館利用指導で取り扱われている知識・技能

2.2.1 調査の目的と方法

以上のように、日本の学校における図書館利用指導の内容は、文部省と全国 SLA による基準や体系表によって示されてきたが、前者が 1983（昭和 58）年の『小学校、中学校における学校図書館の利用と指導』、後者が 2004（平成 16）年の「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」以降改訂されていない。本論文で利用指導のあり方を検討するためには、まず、指導項目の全体像を把握する必要がある。そこで、学校図書館法改正（1997 年）から調査時（2014 年）までに発行された学校図書館関係資料を用いて、どのような知識や技能が、利用指導の内容として取り扱われているかを分析した。

調査の対象とする文献を 1997 年以降としたのは、(1)同年に学校図書館法が改正され、司書教諭が 12 学級以上の小中高等学校に必置となり³²、その養成課程も見直されたこと、(2)「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報化の推進等に関する調査研究協力者会議」の第一次報告『体系的な情報教育の実施に向けて』（1997 年）や、学習指導要領改訂（1998 年公示、高等学校は 1999 年公示）を踏まえた利用指導の見直しが必要になったこと、から 1997 年以降に利用指導の内容や方法が大きく変化したことによる。

文献の選択は、以下の手順で行った。まず、国立国会図書館サーチを使い、A：司書教諭講習の科目に準拠したテキストブック（「学習指導と学校図書館」、「情報メディアの活用」）、B：利用指導に関する記述のある図書（利用指導に焦点を合わせたもの、学校図書館を活用した探究学習・総合学習・情報教育についてまとめたもの、司書教諭や学校司書の職務に関するもの、学校図書館の教育的役割に関するもの）、C：学校図書館の実践を紹介している図書、の 3 つをすべてリストアップした。この中で、1997 年の学校図書館法改正以降に出版されたものは 115 冊であった。これらすべての内容を確認し、既存の体系表を引用しているだけのものや、教科による学校図書館活用の事例やアイデア紹介のみで、必要な知識や技能の指導について触れられていないものを除き、73 冊を選択した（図表 2-6）。

図表 2-6 分析の対象とした利用指導関連図書の一覧

NO	書名(出版社)	出版年
① 司書教諭講習 テキストブック	1 情報メディアの意義と活用（樹村房）	1999
	2 学習指導と学校図書館（樹村房）	1999
	3 学習指導と学校図書館（SLA）	2000
	4 情報メディアの活用（SLA）	2002
	5 学校図書館概論（勉誠出版）	2002
	6 学習指導と学校図書館（樹村房）	2002
	7 情報メディアの活用（樹村房）	2002
	8 情報メディアの活用と展開（青弓社）	2009
	9 学習指導・調べ学習と学校図書館（青弓社）	2009
	10 学習指導と学校図書館（SLA）	2010
	11 情報メディアの活用（SLA）	2010
	12 情報メディアの活用（放送大学教育振興会）	2010
	13 学習指導と学校図書館（放送大学教育振興会）	2010
	14 学校図書館概論（図書館情報メディア研究会）	2013
	15 情報メディアの活用（学文社）	2010

② 利用指導や、 学校図書館を活用した学習についてまとめた本	16	学習指導と学校図書館（学文社）	2013
	17	図書館利用教育ガイドライン：学校図書館(高等学校)版（JLA）	1998
	18	子どもが生きる学校図書館（ぎょうせい）	1999
	19	学び方を養う学校図書館-司書教諭の職務とサービス（学芸図書）	2000
	20	学校図書館教育のデザイン（アドバンテージサーバー）	2001
	21	新学校図書館入門ー子どもと教師の学びをささえる（草土文化）	2001
	22	学校図書館を活用する学び方の指導ー課題設定から発表まで（SLA）	2002
	23	司書教諭はじめの一步（TRC）	2002
	24	学ぶ喜びを広げる司書教諭の活動ー司書教諭マニュアルー（SLA）	2003
	25	司書教諭のあなたに期待する（SLA）	2003
	26	インターネット時代の学校図書館（東京電機大学出版局）	2003
	27	学びを豊かにする学校図書館（関西学院大学出版会）	2004
	28	学びの力を育てよう（ポプラ社）	2005
	29	調べるって楽しいな-不思議だなと思う気持ちを育てる（TRC）	2005
	30	学習に学校図書館を活用しよう（ポプラ社）	2005
	31	人とメディアをつなぐ学校司書のしごと（SLA）	2006
	32	図書館情報専門職のあり方とその養成（勉誠出版）	2006
	33	学校図書館における新聞の活用（SLA）	2006
	34	教育を変える学校図書館（風間書房）	2006
	35	学校図書館の光と影ー司書教諭を目指すあなたへ（八千代出版）	2007
	36	学校図書館で育む情報リテラシー（SLA）	2007
	37	学校図書館学びかた指導のワークシート（SLA）	2007
	38	しらべる力をそだてる授業！（ポプラ社）	2007
	39	このまま使える学習ガイド（TRC）	2008
	40	図書館・学びかたノート 小学校中学年用（SLA）	2008
	41	図書館・学びかたノート 小学校高学年用（SLA）	2008
	42	情報を学習につなぐ（SLA）	2008
	43	小学校における学び方の指導ー探究型学習をすすめるために（SLA）	2009
	44	実践できる司書教諭を養成するための学校図書館入門（ミネルヴァ書房）	2009
	45	問いをつくるスパイラル-考えることから探究学習をはじめよう！（JLA）	2011
	46	学校図書館教育指導計画作成の手引（時事通信）	2012
	47	中学生・高校生のための探究学習スキルワーク（SLA）	2012
	48	教育改革の動向と学校図書館（八千代出版）	2012
	49	赤木かん子の読書力アップ!学校図書館のつかい方（光村図書出版）	2012
	50	司書教諭が伝える言語活動と探究的な学習の授業デザイン（三省堂）	2013
	51	探究的な学習を支える情報活用スキル（SLA）	2014
	52	授業で活用する学校図書館-中学校・探究的な学習をめざす実践事例（SLA）	2014
③ 利用指導の実践事例を紹介した本	53	司書教諭の任務と職務（SLA）	1997
	54	教育を変える学校図書館の可能性（教育史料出版会）	1998
	55	「総合的な学習」を支える学校図書館（SLA）	2001
	56	「総合的な学習」に司書教諭はどう関わるか（SLA）	2002
	57	こうすれば子どもが育つ学校が変わる（国土社）	2003
	58	司書教諭1年生ー授業・子どもがこんなに変わる（SLA）	2004
	59	教育改革の中の学校図書館（八千代出版）	2004
	60	司書教諭1年目の活動記録（SLA）	2005
	61	みつける つかむ つたえあう-学校図書館を活用した授業の創造（国土社）	2006
	62	思考力の鍛え方（ITSC）	2010
	63	教科学習に活用する学校図書館ー小学校・探究型学習をめざす実践事例（SLA）	2010
	64	協働する学校図書館 小学校編	2010

65	学校図書館発 育てます!調べる力・考える力-中学校の実践から (少年写真新聞社)	2011
66	東出雲発!学校図書館改革の軌跡-身近な図書館から図書館活用教育へ (国土社)	2012
67	学校司書たちの開拓記 (国土社)	2012
68	鳥取・羽合小「アロハ図書館タイム」はじめます。	2013
69	学校図書館の力を活かす (国土社)	2013
70	学校図書館は何ができるのか?その可能性に迫る (国土社)	2014
71	学校司書って、こんな仕事・学びと出会いをひろげる学校図書館 (かもがわ出版)	2014
72	学校図書館に司書がいたら-中学生の豊かな学びを支えるために (少年写真新聞社)	2014
73	学びを拓く授業モデル (国土社)	2014

これら 73 冊の中には、小・中・高等学校など異なる校種を対象にしたもの、司書教諭あるいは学校司書を対象にしたもの、啓蒙書から実践事例まで、さまざまなレベルの文献が混在している上、編著者の立場や考え方もさまざまである。しかし、本調査は、文部（科学）省や全国 SLA による基準が改訂されない状況において、利用指導の内容としてどのような知識や技能が取り上げられているかを網羅的に把握し、3 章以下の研究の枠組みとすることを目的としているため、これらの文献を区別・選抜せず、すべて分析の対象とすることにした。また、利用指導の基準が存在しないことによって、どの内容をどの学年で取り扱うかについて専門家や学校現場の共通認識がなく、本論文の研究対象となる中学校で学ぶべき内容を特定することも難しいことから、本調査では、利用指導と考えられている内容をできるだけ幅広く捉え、抽出した項目の妥当性については、3 章から 5 章における各研究のなかで検討していくこととした。

次に、選択した 73 冊の図書の本文から利用指導の内容が分かる記述を網羅的に抽出し、知識や技能を示すキーワードを付与した上で、生徒の学習活動ごとにまとめた。生成した学習活動は「119 項目」であった。また、これらの学習活動を利用指導の内容ごとにまとめ、上位概念として「25 分野」を作成した。この作業の例を図表 2-7 に示す。

図表 2-7 利用指導関連図書から抽出した記述とキーワード付与の作業例

25 分野	119 項目	抽出した記述の例
14 情報検索の仕方	14-01 検索戦略を立てる	● どのような情報が必要か、どのような方法で情報を収集するか (テキスト 9) ● 調べたいことに対して、適切な方法を自分で選ぶという技能 (テキスト 50)
	14-02 検索式を作る	● 事後結合索引法 + 検索時に、論理演算子など (and/or など) を用いて索引語を組み合わせて条件式を作成し、それに適合したものを選び出す (テキスト 2) ● 単語で区切る、AND/OR/NOT 検索 (ブール演算子) (テキスト 47)
	14-03 検索に適したキーワードを作る	● 言葉の上下概念を正確につかむ (テキスト 61) ● 探す言葉をいいかえてみよう (テキスト 73)
	14-04 検索結果を評価する	● インターネット上の情報の検索やその信頼性の評価 (テキスト 14) ● 既知か否か、どれが信頼に値する情報・データであるか (テキスト 4)

2.2.2 調査の結果と考察

1997 年以降に発行された学校図書館関係の図書で、利用指導の内容として取り扱われているのは、課題を設定する段階で指導する事項として「01 学習計画の立て方」「02 テーマ

設定の仕方」の 2 項目，情報を収集する段階で指導する事項として「03 図書館の使い方」「04 図書館での本の探し方」「05 図書館以外の施設の使い方」「06 情報探索の見通しの立て方」「07 図書を使った調べ方」「08 参考図書を使った調べ方」「09 新聞・雑誌を使った調べ方」「10 視聴覚メディアを使った調べ方」「11 電子メディアを使った調べ方」「12 その他の資料を使った調べ方」「13 その他の調べ方」「14 情報検索の仕方」の 12 項目，整理・分析に関する指導事項として「15 資料（情報）の評価の仕方」「16 記録の仕方」「17 資料（情報）の読み方」「18 情報の整理の仕方」「19 情報の分析の仕方」の 5 項目，まとめや表現，評価に関する指導事項として「20 情報の加工の仕方」「21 情報を使った文章の書き方」「22 まとめ方」「23 発表の仕方」「24 情報モラル」「25 学習成果の評価の仕方」の 6 項目であることが分かった（図表 2-8）。以下に，生徒の学習過程に沿った指導事項ごとに，具体的な内容について述べる。

図表 2-8 文献上の「学校図書館利用指導の内容（25 分野 119 項目）」

25 分野	119 項目
01 学習計画の立て方	01-01 学習計画を立てる
02 テーマ設定の仕方	02-01 テーマを決める
	02-02 課題を明確にする
03 図書館の使い方	03-01 図書館の意義や役割を理解する
	03-02 学校図書館を利用する
	03-03 公共図書館を利用する
	04-01 適切な目録を選択する
	04-02 カード目録を使って資料を探す
	04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す
04 図書館での資料の探し方	04-04 書架を見ながら資料を探す
	04-05 文献リストを使って資料を探す
	04-06 自館にない資料を探す
	04-07 雑誌記事を探す
	04-08 新聞記事を探す
05 図書館以外の施設の使い方	05-01 専門図書館を利用する
	05-02 文化施設を利用する
	05-03 公的機関を利用する
	05-04 その他の施設を利用する
06 情報探索の見通しの立て方	06-01 情報探索の見通しを立てる
	06-02 目的に応じた調べ方を選択する
	06-03 目的に応じたメディアを選択する
07 図書を使った調べ方	07-01 図書を積極的に利用する
	07-02 図書を使って調べる
	08-01 参考図書を使って調べる
	08-02 百科事典を使って調べる
08 参考図書を使った調べ方	08-03 事典を使って調べる
	08-04 図鑑を使って調べる
	08-05 辞典を使って調べる
	08-06 統計を使って調べる
	08-07 年鑑を使って調べる
	08-08 地図を使って調べる
	08-09 白書を使って調べる
	08-10 便覧を使って調べる
09 新聞・雑誌を使った調べ方	09-01 新聞を使って調べる
	09-02 雑誌を使って調べる
10 視聴覚メディアを使った調べ方	10-01 視聴覚メディアを使って調べる
	11-01 電子メディアを使って調べる
	11-02 コンピュータを利用する
11 電子メディアを使った調べ方	11-03 インターネットを使って調べる
	11-04 インターネットを安全に利用する
	11-05 検索エンジンを使う
	11-06 CD-ROM を使って調べる
	11-07 オンライン・データベースを使って調べる
12 その他の資料を使った調べ方	12-01 情報ファイルを使って調べる
	12-02 その他の資料を使って調べる
	13-01 インタビューで情報を収集する
	13-02 アンケートで情報を収集する
13 その他の調べ方	13-03 手紙で問い合わせる
	13-04 FAX で問い合わせる
	13-05 電話で問い合わせる
	13-06 電子メールで問い合わせる
	13-07 フィールドワークで情報を収集する
14 情報検索の仕方	14-01 検索戦略を立てる
	14-02 検索式を作る
	14-03 検索に適したキーワードを作る
	14-04 検索結果を評価する
15 資料（情報）の評価の仕方	15-01 複数の情報を比較する
	15-02 情報の信憑性を判断する
	15-03 情報の妥当性を判断する
	15-04 情報の適合性を判断する

16 記録の仕方	15-05	情報を読み解く
	15-06	情報を批判的に読み解く
	16-01	目的に応じた記録方法を選択する
	16-02	カードやノートに記録する
	16-03	写真で記録する
	16-04	ビデオで記録する
	16-05	録音する
	16-06	コンピュータで記録する
17 資料（情報）の読み方	16-07	出典を記録する
	16-08	文献リストを作成する
	17-01	目的に応じて読み方を変える
	17-02	図書から情報を読み取る
	17-03	精読する
18 情報の整理の仕方	17-04	統計データを読み取る
	17-05	図表やグラフの情報を読み取る
	18-01	情報を取捨選択する
19 情報の分析の仕方	18-02	収集した情報をファイリングする
	18-03	収集した情報を保存する
	19-01	情報を分析する
	19-02	収集した情報を分類する
	19-03	収集した情報の重要な箇所を抜き出す
	19-04	事実と意見を区別する
	19-05	仮説を検証する
20 情報の加工の仕方	19-06	統計処理をする
	20-01	抄録を作成する
	20-02	解題をつくる
	20-03	翻訳する，翻案する
	20-04	映像を編集する
	20-05	音声を編集する
	20-06	画像を編集する
	20-07	グラフを作成する
21 情報を使った文章の書き方	20-08	図表を作成する
	21-01	引用する
	21-02	要約する
	21-03	図表やグラフを利用する
	21-04	事実と意見を区別して書く
	21-05	論理的な文章を書く
	21-06	分かりやすい文章を書く
	21-07	出典を示す
22 まとめ方	21-08	ルールに則って書く
	22-01	適切な表現方法を選択する
	22-02	アウトラインをつくる
	22-03	レポートにまとめる
	22-04	文書を作成する
	22-05	スライドを作成する
	22-06	ホームページにまとめる
	22-07	新聞形式にまとめる
	22-08	ポスターにまとめる
23 発表の仕方	22-09	パンフレットにまとめる
	23-01	シナリオ（原稿）を書く
	23-02	提示用の資料を作成する
	23-03	配布資料（レジュメ）をつくる
	23-04	分かりやすく話す
	23-05	機器を使って発表する
24 情報モラル	23-06	話し合いをする
	24-01	著作権に配慮して情報を利用する
25 学習成果の評価の仕方	24-02	適正に情報を発信する
	25-01	学習の成果を自己評価する
	25-02	学習の成果を相互評価する

＜課題を設定する段階で指導する事項＞

まず、図書館の利用に関する指導としては、学校図書館に関する項目が多く、次いで公共図書館、その他図書館類縁機関の利用に関する項目がある。

学校図書館については、オリエンテーションで扱われるような基本的項目（利用の仕方、ルール、分類と配架の仕組み、目録の利用法）、キーワードの作り方（上位概念／下位概念、同義語、類語）や and/or 検索など、図書館で本を探すための知識や技能、さらに、レファレンスサービスの活用やブラウジングの効用が取り上げられている。また、公共図書館の意義と役割、利用の仕方、美術館・博物館・資料館など図書館類縁機関の種類と特徴、利用の仕方に関する事項もある。

調査した文献の中には、図書館の歴史、図書館と人権、学校図書館と公共図書館の連携など、踏み込んだ内容を取り上げているものもあった。

課題の設定に関する指導では、学習計画の立て方とテーマの決め方の二つが主な内容である。学習計画を立てる段階では、調べ学習の意義、探究のプロセスを理解して取り組み方の見通しを持つこと、目的に応じた情報収集の方法を考えること、が取り扱われている。また、テーマを決める段階では、既存の知識を確認し、テーマを具体化すること、問いを立てたり仮説を作ったりしながら、何を調べるか明確にすることが取り扱われている。

テーマの設定に関する指導の特徴として、近年、具体的な手法が紹介されるようになったことが挙げられる。例えば、「マッピング」「KJ 法」「マンダラート」など発想法と呼ばれるツールを使うこと、予備知識を得るために百科事典や入門書を読むこと、5W1H を使って問いを作る方法などが、多くの文献に取り上げられている。

＜情報を収集する段階で指導する事項＞

情報の収集に関する指導項目は、個別の情報メディアに関する事項と、情報収集の仕方に関する事項に大別される。

まず、情報メディアに関する事項については、メディアの種類と特徴、図書（参考図書）、新聞・雑誌、インターネット等の電子メディア、視聴覚メディア、その他のメディアの取り扱い方や情報の探し方が指導項目として挙げられている。また、インタビューやアンケートなど人から情報を得るときの方法や手順といった項目もある。

情報収集の仕方に関する事項では、目次や索引の使い方、参考文献リストをたどる方法、目録・書誌・索引の使い方、検索の仕方（検索戦略を立てること、キーワードの作り方、論理演算）、複数の資料にあたる重要性、目的に応じた調べ方を選択すること、が取り上げられている。

＜整理・分析に関する指導事項＞

情報の整理、分析に関する指導では、記録の仕方、資料や情報を評価して要不要を判断すること、集めた情報を整理・分析する方法が取り上げられている。

まず、記録の仕方としては、記録の種類と特徴、メモの取り方、情報カードやノートの使い方、記録するための機器の使い方、ファイリングの仕方、資料リストの作成、出典の書き方といった項目がある。資料や情報の評価の仕方では、評価することの意義、資料・情報の信頼性や適合性を判断すること、必要な情報の読み取り方、複数の資料にあたって比較する重要性が取り上げられている。整理・分析の仕方としては、ファイリング等、断

片的な情報を整理・分類する方法と、集めた情報をさまざまな手法で分析し、必要なものを取捨選択する方法、保存の形式と方法が取り扱われている。

＜まとめや表現、評価に関する指導事項＞

まとめや表現、評価に関する指導には、情報を適切に利用するために必要な知識・技能と、学習の過程をふり返るための事項が含まれる。

まず、情報の利用の仕方については、情報モラル、特に個人情報やプライバシーの問題、著作権への配慮が取り上げられている。まとめ方に関する指導では、収集した情報を使って文章を書いたり図表を作成したりすること、レポート等の構成を考え、決められた形式にまとめること、発表に用いられる機器の種類や使い方に関する項目がある。発表については、口頭発表をする際に必要な準備や注意事項が取り上げられている。評価に関する領域には、評価の種類（自己評価と相互評価）と方法（チェックリストの利用、ポートフォリオの作成）、評価の対象が含まれている。

以上、1997年から2014年に発行された利用指導に関する記述のある図書を調査した結果、学校図書館における利用指導の内容を、25分野119項目に整理することができた。各項目には、さまざまな知識や技能が含まれており（図表 2-9）、その特徴と課題について以下のように指摘することができる。

まず、利用指導の内容として捉えられている項目には、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・発表という探究学習の全過程に関連する知識・技能が含まれている。つまり、1980年代の文部（科学）省による手引きや、2000年代の全国学校図書館協議会の体系表が示した内容と、基本的な考え方や方向性は変わっていない。

一方、それぞれの領域で示される項目の具体性には差があり、指導する必要性が述べられていても、何をどのように指導するのか明確でないものも見られた。例えば、文章を書くための指導では、著作権に配慮した書き方として、自分の意見と他人の意見を区別すること、引用箇所を「」を使って示し、出典を記録することなどが指導項目として取り上げられているが、分かりやすく書くために必要な項目は具体的に示されていない。レポート作成の支援として具体性があるのは「著作権に配慮した書き方」であり、「分かりやすい書き方」については、利用指導の枠組みで何を取り上げるのか、今後、検討が必要と言えるだろう。

また、テーマの設定や、情報の整理・分析に関する事項は、2008（平成20）年の学習指導要領改定後に出版された文献に頻出している。これは、指導要領の中で、教科や「総合的な学習の時間」における言語活動の充実が求められており、それと学校図書館活用を結び付けようとした結果であると考えられる。このような項目は、前述した手引きや体系表にも取り上げられているが、本調査で分析した資料では、より具体的かつ詳細な指導内容や方法、教材が示されていた。このことから、学校図書館関係者が、テーマの設定や情報の整理・分析に関する指導の必要性を強く感じており、何をどのように教えればよいか考え、実践しようとしていると受け止めることができる。

本論文では、本項で作成した「利用指導の内容」一覧を分析の枠組みとし、3章（教育課程における「情報の探索と利用の指導」）の分析に用いる。また、6章では、一覧に含まれる知識や技能を、利用指導として扱う妥当性についても検討する。

図表 2-9 文献上の「学校図書館利用指導の内容（25 分野 119 項目）」に含まれる知識・技能

No	25 分野	119 項目	各項目に含まれる知識・技能
01	学習計画の立て方	01-01 学習計画を立てる	探究プロセス、調べ方／まとめ方の種類
02	テーマ設定の仕方	02-01 テーマを決める	基礎知識を獲得する、興味のあることを挙げる、調べたいことを挙げる、疑問に思うことを挙げる、広げる
		02-02 課題を明確にする	キーワードを挙げる、既存の知識を確認する、問いを立てる、小さな問いを立てる、仮説を立てる
03	図書館の使い方	03-01 図書館の意義と役割を理解する	図書館の意義・役割・機能、生涯学習、図書館の種類、図書館と人権との関わり（知る権利、表現の自由、プライバシー）、図書館行事
		03-02 学校図書館を利用する	学校図書館の意義・役割・機能、図書館資料の特徴、貸出、返却、施設、設備、館内図、サイン、配架、本の取扱い方、予約、リクエスト、複写、マナー、利用のきまり、図書館資料の種類、レファレンスサービス
		03-03 公共図書館を利用する	公共図書館の意義・役割・機能、生涯学習、所在地、利用のきまり、図書館資料の特徴、配架、レファレンスサービス、予約、リクエスト、マナー、図書館資料の種類
04	図書館での資料の探し方	04-01 適切な目録を選択する	目録の種類（カード目録、コンピュータ目録、冊子目録）と特徴
		04-02 カード目録を使って資料を探す	カード目録の種類（書名目録、著者名目録、分類目録、件名目録）と特徴、検索の仕方、請求記号
		04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す	コンピュータ目録の特徴、アクセスポイント（著者名、タイトル、キーワード、分類番号、件名）、検索の仕方、請求記号
		04-04 書架を見ながら資料を探す	主題、上位概念／下位概念、別置、日本十進分類法（NDC）、請求記号、配架
		04-05 文献リストを使って資料を探す	書誌(主題書誌、個人書誌)、目録、索引、パスファインダー、参考文献リスト
		04-06 自館にない資料を探す	図書館間ネットワーク、横断検索、相互貸借、予約
		04-07 雑誌記事を探す	所蔵している雑誌の種類と配架場所、検索ツール（雑誌記事索引、オンライン・データベース）、検索の仕方
		04-08 新聞記事を探す	新聞の種類と配架場所、検索ツール（新聞記事索引、縮刷版、マイクロフィルム、新聞記事データベース、インターネット、切り抜きファイル）、検索の仕方
05	図書館以外の施設の使い方	05-01 専門図書館を利用する	利用できる図書館の種類（企業図書館、地域文庫）、所在地、蔵書の種類、利用法、マナー
		05-02 文化施設を利用する	利用できる文化施設の種類（博物館、美術館、科学館、郷土資料館、記念館、文学館、公民館、視聴覚ライブラリ）、機能、所在地、蔵書の種類、利用法、マナー
		05-03 公的機関を利用する	利用できる公的機関の種類（観光課、各国大使館、市役所、町村役場）、機能、所在地、利用法、マナー、蔵書の種類
		05-04 さまざまな施設を利用する	利用できるその他の施設の種類（水族館、植物園、動物園、企業、工場）
06	情報探索の見通しの立て方	06-01 情報探索の見通しを立てる	情報源や調べ方の種類や特徴、キーワードを挙げる、検索手順、観点を挙げる
		06-02 目的に応じた調べ方を選択する	調べ方の種類（文献調査、観察、実験、見学、フィールドワーク、インタビュー、撮影）と特徴
		06-03 目的に応じたメディアを選択する	メディアの種類（印刷メディア、視聴覚メディア、電子メディア、実物、模型、ファイル資料）と特徴、図書館が所蔵するメディアの種類、ジャンルごとのメディアの特徴
07	図書を使った調べ方	07-01 図書を積極的に利用する	図書の歴史、図書の作られ方、図書から得る情報の特徴、インターネット上の情報と図書情報の違い
		07-02 図書を使って調べる	本の取り扱い方（ページのめくり方、書架からの取り出し方）、読書衛生、図書の構成（表紙、目次、前書、後書、凡例、本文、索引、注、参考文献、著者紹介、帯）、判型、奥付、目次と索引を使って調べる
08	参考図書を使った調べ方	08-01 参考図書を利用する	参考図書の種類と特徴（年鑑、白書、便覧、新聞縮刷版）、媒体（冊子体、CD-ROM、Web サイト、データベース）、調べ方（目次、索引） 参考図書の種類と特徴（事典、図鑑、辞典、統計、地図、年表）、目的に応じて使い分ける、参考図書と一般図書を使い分ける
		08-02 百科事典を使って調べる	百科事典の種類と特徴、媒体（冊子体、CD-ROM、オンライン・データベース）、調べ方（リンク）、構成（爪・柱・背）、調べ方（索引、配列）、構成（見出し、参照）、概要を知るのに利用する
		08-03 事典を使って調べる	事典の種類（百科事典と主題別事典、人名事典、地理事典）と特徴、調べ方（目次・索引）、記述（大項目／中項目／小項目）、複数の辞典を比較する
		08-04 図鑑を使って調べる	図鑑の種類と特徴、調べ方（目次、索引）
		08-05 辞典を使って調べる	辞典の種類と特徴、調べ方（配列、索引、同音異義語）、複数の辞典を比較する

		08-06	統計を使って調べる	統計の種類と特徴, 調べ方 (索引), 目的に応じて利用する, 複数の統計を利用する
		08-07	年鑑を使って調べる	年鑑の種類と特徴, 調べ方 (目次, 索引), 構成, 目的に応じて利用する
		08-08	地図を使って調べる	地図の種類と特徴, 調べ方 (索引), 地図記号
		08-09	白書を使って調べる	
		08-10	便覧を使って調べる	調べ方 (目次・索引)
09	新聞・雑誌を使った調べ方	09-01	新聞を使って調べる	記事の種類 (コラム, その他の記事), 版, 文章の型 (5W1H) 新聞の種類と特徴, 新聞記事の構成 (見出し, リード, 本文, 写真, 図表, 逆ピラミッド型), 記事の種類 (社説), 複数の新聞を比較する
		09-02	雑誌を使って調べる	雑誌の種類と特徴, 複数の記事を比較する
10	視聴覚メディアを使った調べ方	10-01	視聴覚メディアを利用する	音声／画像／映像情報の種類と特徴, 機器 (スライド, テレビ, VTR, DVD) の基本操作
		11-01	電子メディアを利用する	電子メディアの種類 (CD-ROM, 各種ソフトウェア, インターネット) と特徴, コンピュータやソフトウェアの基本操作
		11-02	コンピュータを利用する	コンピュータの各部の名称, キーボード操作, マウス操作, 電源, クリック／スクロール, 印刷する, 保存する, 数字や文字を打つ, 図形や絵を描く
11	電子メディアを使った調べ方	11-03	インターネットを使って調べる	ブラウザの種類と特徴, ポータルサイト, インターネット上の情報の特徴 (サイトの種類, 信憑性), URL, リンク集, 使用上のルール
		11-04	インターネットを安全に利用する	ID とパスワードの取り扱い, インターネット上の情報の特性, 有害情報, ウィルス, ルール, マナー
		11-05	検索エンジンを使って調べる	検索エンジンの種類と特徴 (ディレクトリ型／ロボット型), 検索の仕方 (ディレクトリ検索, キーワード検索, カテゴリー検索), 検索キーワード (同義語, 上位語／下位語), ブール演算 (演算子, and 検索, or 検索)
		11-06	CD-ROM を使って調べる	基本操作
		11-07	オンライン・データベースを使って調べる	データベースの種類, 検索の仕方
12	その他の資料を使った調べ方	12-01	情報ファイルを使って調べる	情報ファイルの種類と特徴, 使い方
		12-02	その他の資料を使って調べる	さまざまな資料の種類と特徴, 使い方
		13-01	インタビューで情報を収集する	依頼する, 質問項目を挙げる, 答えを予測する, 記録する, 礼状を書く, 結果を集計する
13	その他の調べ方	13-02	アンケートで情報を収集する	対象者を決める, 質問項目を挙げる, アンケート用紙 (依頼文, フェイスシート, 質問紙) を作成する, 結果を集計する
		13-03	手紙で問い合わせる	手紙の書き方 (あいさつ, 本文)
		13-04	FAX で問い合わせる	FAX の送り方
		13-05	電話で問い合わせる	電話のかけ方, 言葉遣い, マナー
		13-06	電子メールを利用する	マナー, ウィルス, 目的に応じて使い分ける (電話, 手紙, FAX 等)
		13-07	フィールドワークで情報を収集する	訪問先に依頼する, 調査結果を整理する, 調査の目的・内容・方法を明確にする, 記録する
14	情報検索の仕方	14-01	検索戦略を立てる	検索ツール (オンライン・データベース, サーチエンジン, CD-ROM, 目録, 書誌) の種類と特徴, 検索プロセス, 目的に応じた検索ツールを選ぶ
		14-02	検索式を作る	ブール演算子 (AND, OR, NOT)
		14-03	検索に適したキーワードを作る	上位概念／下位概念, 類義語, 同義語, 関連語, 統制語 (件名) ／自由語
		14-04	検索結果を評価する	ヒット数, 適合性
15	資料 (情報) の評価の仕方	15-01	複数の情報を比較する	比較の必要性, 観点 (出所, 異同, 新旧, 必要度, 精粗, 優劣)
		15-02	情報の信憑性を判断する	責任表示の見方 (出所, 新旧), 複数の資料を比較する, 統計や年鑑のデータを利用する
		15-03	情報の妥当性を判断する	第三者が検証可能な資料を選択する, 根拠の有無を確認する
		15-04	情報の適合性を判断する	責任表示の見方 (新旧), 利用価値を判断する (目次・索引・前書き・後書き・解説を読む)
		15-05	情報を読み解く	独創性, 科学性, 包括性, バイアスの有無, 時代性, 機能性, 分かりやすさ, 偏見や独断の排除, 論理の一貫性, 正確さ
		15-06	情報を批判的に読み解く	賛成同意／反対異議を判断する, マスメディアが発信する情報の特徴, 複数の資料を比較する, 意図を読み取る

16	記録の仕方	16-01	目的に応じた記録方法を選択する	記録方法の種類と特徴（ノート、カード、録画、録音、電子化、コピー、クリッピング、ダウンロード）
		16-02	カードやノートに記録する	カードやノートの種類と特徴、出典を記録する（ページ）、一項目を一枚に書く、図化する、見出しを付ける、出典を記録する（書誌事項）、要約する（箇条書き）、引用する、矢印等記号を用いる
		16-03	写真で記録する	印刷、（デジタル）カメラの基本操作、撮影方法、保存、効果的な撮影のしかた（フレーミング、カット、場面、カメラワーク）
		16-04	ビデオで記録する	（デジタル）ビデオカメラの基本操作、マナー、撮影上のルール（肖像権への配慮、事前許諾）
		16-05	録音する	記録媒体（テープレコーダー、MD、ボイスレコーダー）、記録機器の基本操作
		16-06	コンピュータで記録する	記録媒体（HD、FD、CD-R、ソフト）、コンピュータの基本操作
		16-07	出典を記録する	記録する目的と意義、記録すべき事項（URL、参照日、書誌情報）、責任表示、奥付（書名、著者名、出版社名、出版年、ページ、ISBN）
		16-08	文献リストを作成する	図書の書誌事項（書名、著者名、出版社、出版年、掲載頁など）、新聞／雑誌の書誌事項（執筆者、タイトル、誌名、巻・号、発行年月日、頁など）、必要な項目を読み取る、ルールに則って書く
17	資料（情報）の読み方	17-01	目的に応じて読み方を変える	探し読み（スキヤニング）、拾い読み（スキミング）、走り読み、精読、通読、速読、キーワード／キーセンテンスを拾う
		17-02	図書から情報を読み取る	章立てから概要をつかむ、見出しに沿って読む、序章や目次を読んで概要をつかむ、
		17-03	精読する	章と節の構造を見る、接続表現を見る、丁寧に読む、必要な箇所を選んで読む、未知の語句を調べる
		17-04	統計データを読み取る	批判的に読む
		17-05	図表やグラフの情報を読み取る	写真を読む、挿絵を読む、キャプションを読む
18	資料（情報）の整理の仕方	18-01	情報を取捨選択する	目的に応じて取捨選択する
		18-02	収集した情報をファイリングする	ファイルの種類と特徴、目次を作成する、分類する、出典を記録する、ナンバリングする、見出しをつける、スクラップする
		18-03	収集した情報を保存する	目的に応じた保存法を選択する、類別化する、整理・廃棄・保管に関する規則を作る、画像を保存する、文章を保存する、記録媒体に保存する、印刷する、コピーする
19	情報の分析の仕方	19-01	情報を分析する	組み合わせる、関連づける（原因と結果）、比較する（共通点と相違点）、分類する、並べ替える、
		19-02	収集した情報を分類する	インデックスを作成する、色分けする、分類基準（主題、キーワード、年代など）、カテゴリー（グループ）を作る、見出しをつける
		19-03	収集した情報の重要な箇所を抜き出す	線を引く、引用する、付箋を貼る、要約する、箇条書き
		19-04	事実と意見を区別する	客観的事実、意見・主張・見解
		19-05	仮説を検証する	整理した情報で仮説を検証する、問いと答えを組み合わせる、主張の根拠となる事実やデータを選ぶ
		19-06	統計処理をする	統計ソフトウェアの使い方、表計算ソフトの使い方
20	情報の加工の仕方	20-01	抄録を作成する	
		20-02	解題を作成する	
		20-03	翻訳する、翻案する	
		20-04	映像を編集する	映像編集ソフトの種類と特徴、アニメーションを制作する、ビデオを制作する、台本を書く
		20-05	音声を編集する	作曲する、編曲する、BGMを入れる、音声を挿入する、編集機器の基本操作
		20-06	画像を編集する	画像編集ソフトの種類と特徴、画像を取り込む（スキャナ、デジタルカメラ）
		20-07	グラフを作成する	グラフの種類（棒グラフ、円グラフ、折れ線グラフ）と特徴、データの取り扱い、グラフの作り方、出典を示す、目的に応じたグラフを作成する
		20-08	図表を作成する	写真や画像の取り扱い（著作権）、見出しを付ける、出典を示す
21	情報を使った文章の書き方	21-01	引用する	著者の意図を損なわない、直接引用／間接引用、公正利用、主従の関係、明瞭区分性、「」で示す、原文のまま抜書きする、出典を示す
		21-02	要約する	要点をつかむ、要旨をまとめる、出典を示す
		21-03	図表やグラフを利用する	図表を引用する、グラフを引用する、出典を示す
		21-04	事実と意見を区別して書く	

22	まとめ方	21-05	論理的な文章を書く	問いと答えを組み合わせる，主張の根拠となる事実やデータを示す，ひな形を使って論旨を構築する
		21-06	分かりやすい文章を書く	ひな形を利用して書く，未知の用語を調べる，5W1H，見出しの付け方，段落のつくり方（トピックセンテンス），箇条書きする，パラフレーズ（言い換え）
		21-07	出典を示す	必要な書誌事項，ルールに則って書く
		21-08	ルールに則って書く	常体と敬体，句読点の付け方，原稿用紙の使い方
		22-01	適切な表現方法を選択する	表現法の種類（作文，レポート，新聞，ポスター，模造紙，パンフレット，プレゼンテーション，スピーチ，絵本，紙芝居，ペープサート）と特徴，目的に応じた表現方法を選択する
		22-02	アウトラインをつくる	伝えたいことをタイトルに表現する，情報を並べる，章立て(章・節・項)をつくる，話す順番を決める
		22-03	レポートにまとめる	一般的なレポートの書式（表紙（タイトル，所属，氏名），目次，序論・本論・結論，考察，参考文献），実験レポートの構成，表やグラフを入れる，図表のキャプション
		22-04	文書を作成する	文書作成ソフトの種類と特徴，ローマ字入力，画像を挿入する
		22-05	スライドを作成する	プレゼンテーションソフトの種類と特徴，使い方（文字入力，画像処理，アニメーションの設定，音声，背景設定），画像や映像を適正に利用する，アニメーションを効果的に用いる
23	発表の仕方	22-06	ホームページにまとめる	
		22-07	新聞形式にまとめる	5W1H で書く，新聞の構成（題字，見出し，リード，本文，写真，キャプション，発行日），レイアウト（割り付け）
		22-08	ポスターにまとめる	ポスターの構成(タイトル，見出し)，レイアウト(割り付け)，視覚的工夫(文字の大きさ，色，枠)
		22-09	パンフレットにまとめる	パンフレットの構成，レイアウト（割り付け）
		23-01	シナリオ（原稿）を書く	
		23-02	提示用の資料を作成する	さまざまな掲示の方法（板書，OHP，AV 機器，コンピュータ）
		23-03	配布資料（レジュメ）をつくる	
		23-04	分かりやすく話す	原因と結果・理由や根拠を示しながら話す，目的や場に応じた言葉を選ぶ，声量，発声法
		23-05	機器を使って発表する	プレゼンテーションソフトの種類と特徴，目的に応じて機器を選択する，コンピュータの基本操作，AV 機器の基本操作
24	情報モラル	23-06	話し合いをする	さまざまな話し合いの方法（パネルディスカッション，ポスターセッション，ディベート，討論）
		24-01	著作権に配慮して情報を利用する	著作権法，知的財産権，知的所有権，複写，コピー&ペースト，ダウンロード，写真や画像の取り扱い，公正利用，許諾をとる，引用する，出典を示す
		24-02	適正に情報を発信する	チェーンメール，情報発信に関わる責任，著作権への配慮，個人情報の取り扱い，プライバシー，ネチケット
25	学習成果の評価の仕方	25-01	学習の成果を自己評価する	評価の方法（チェックリスト，ポートフォリオ），評価の項目（学習プロセス，成果），評価の手段（段階式評価，記述式評価）
		25-02	学習の成果を相互評価する	評価の方法（ポートフォリオ，チェックリスト），評価の項目（学習プロセス，成果），評価の手段（段階式評価，記述式評価）

2.3 学校図書館利用指導の理論的背景

学校図書館で行われる利用指導の目標は、図書館を利用するために必要な知識や技能の習得から、情報を効果的に利用して主体的に学ぶ能力の獲得へと変化してきた。指導の焦点が「図書館の利用法」から「自立した学び」へと移った結果、指導の内容も「課題の設定、情報の探索や処理、表現、共有」に広がり、問題解決型学習や探究学習など、情報を利用して学ぶプロセスと関連付けて指導する意義が共有されるようになった。日本の利用指導の理念は、欧米の利用教育研究の成果に基づいている。本節では、わが国の利用指導に影響を与えたモデルと理論³³について整理する。

2.3.1 ソース・アプローチからプロセス・アプローチへ

戦後の日本が手本としたアメリカの学校図書館における利用者教育は、1960年代から70年代にかけて実践が活発化し³⁴、その後、図書館情報学や認知心理学、教育学の研究成果を取り入れながら発展してきた。このような変化の過程を、クルトー（Carol C. Kuhlthau）は「ソース・アプローチ」「パスファインダー・アプローチ」「プロセス・アプローチ」の3段階に分けて説明している³⁵。

ソース・アプローチ（The source approach、または、図書館ツール・アプローチ（The library tool approach））とは、図書館が所蔵する情報源（source）の使い方に焦点を合わせた指導法である。学校図書館とその資料の使い方を一通り学ぶことを目標としており、1960～70年代のアメリカ学校図書館で中心的な指導方法であった³⁶。当時の学校図書館員は、独自に設けられた授業のなかで、本やその他の資料の取り扱い方、本の各部の名称、著者や挿絵画家、特定の情報源や参考図書の利用法、配架のルール、目次や索引の引き方、カード目録の使い方、デューイの分類法などを教えていた。

しかし、1980年代になると、ソース・アプローチの効果が疑問視されるようになった³⁷。エリソン（John W. Ellison）は、利用指導がうまくいかない原因として、学校図書館員の関心が教育内容や順序、提示技術に集中し、生徒の学習上のニーズが配慮されていない点を指摘し、学校図書館員中心の指導から生徒中心の指導に変える必要があると述べている³⁸。

生徒の関心や必要性とは無関係に、学校図書館員が作ったプログラムに沿って図書館や資料の使い方を指導しても、その内容が、実際に情報を利用する場面に転用されないという問題が指摘され、学校の課題と利用指導を関連付ける方法として、学校図書館員が作るパスファインダーを用いたアプローチ（The pathfinder approach、あるいは、検索戦略アプローチ（The Search strategy approach））が注目されるようになった。

パスファインダーとは、あるテーマに関する資料探索の手順を提示するためのシートやリーフレットのことで³⁹、まず百科事典のように一般的・基礎的知識を与えてくれる参考資料を使ったあと、より専門的な情報、あるいは新しい情報を入手するために有効な資料を段階的にたどっていけるよう生徒を導く。パスファインダー・アプローチでは、探索の焦点を絞る前に包括的な知識を得られるよう仕向けることから、テーマに関する予備知識を持たない生徒にとって特に有効である。また、資料ごとの性質の違いや、資料間の関係を生徒に理解させることができるという利点もある。

しかし、実際に生徒一人一人が情報を探索し利用する文脈が異なっているため、学校図書館員が様々なパスファインダーを準備したとしても、それらは、一つのテーマに関する

資料案内の域を超えることができなかった。クルトーは、パスファインダー・アプローチでは特定の参考資料の使い方が上達するだけで、自立した探索に必要とされる推論のプロセスが発展しない、と批判している⁴⁰。

1970年代から80年代前半の文献をみると、利用者教育の目標が、図書館や資料の効果的な使い方の指導から、自立した図書館利用者あるいは情報利用者の育成へと変化していることがわかる⁴¹。その結果、生徒が情報を利用するプロセスに研究者の関心が集まり、図書館情報学や認知心理学分野の研究成果である、人間の情報行動⁴²を説明するモデルが利用指導に応用されるようになった。情報探索行動の代表的なモデルが、クルトーの情報探索プロセス（Information Search Process: ISP）モデルである。

クルトーは、高校生が自らテーマを設定し、学校図書館で情報を収集し、それをもとにレポートを執筆するという過程から、情報探索のプロセスを明らかにしモデル化した（図表 2-10）。情報探索プロセスとは、“思考、行動、感情という要素から成り立ち、生徒が数多くの資料に含まれる情報から学習トピックを形成し、そのトピックに対して新しい見解を持つにいたるまでの複雑な学習の過程”⁴³と定義されている。

図表 2-10 Kuhlthau の ISP モデル

[illegible]

【出典】 Kuhlthau, Carol Collier. Seeking meaning: a process approach to library and information services. Ablex Publishing. 1993. p.82 より作成

その後、ISP モデルを理論的根拠として、情報探索プロセスを組み込んだ利用教育モデルが数多く提唱された。利用教育の変遷を理論と実践の両面から論じたピカリング (Thomas Nancy Pickering) らは、特に学校現場に影響力のあったモデルとして、Nine-step Model⁴⁴ (1985 年)、REACTS Model⁴⁵ (1988 年)、Big6 Skills Model⁴⁶ (1990 年)、I-Search Model⁴⁷ (1997 年)、FLIP IT! Model⁴⁸ (1997 年)、The Pathways to Knowledge Model⁴⁹ (2002 年) を挙げている⁵⁰。

Nine-step Model は、イギリスのアーヴィング（Ann Irving）が 1985 年に発表した利用教育モデルで、小学校の生徒が、学校の課題に取り組む場面に当てはめて利用できるよう設計されている。アーヴィングは、情報スキルを、本質的に学校でのあらゆる学習につながっているものと捉え、教科の課題に関連付けてスキルの指導をすることを想定した。そのため、課題の設定から評価に至る学習サイクル全体を、情報スキル教育の対象としている。

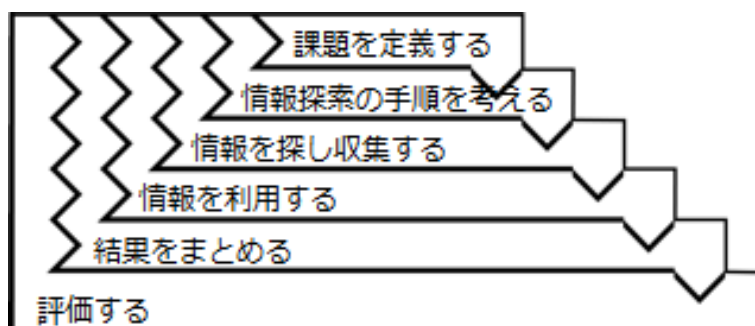
図表 2-11 Irving の Nine-step Model

Step1	課題の定義	情報ニーズを形成し，分析する	私は何が必要か？
Step2	情報源の見込み	情報源の特定と評価	どこに行けばいい？
Step3	情報の発見	個々の情報源を検索し，探す	どのように情報を入手すればいい？
Step4	情報の選択	情報源を評価し，選択／削除する	どちらの情報を使えばいい？
Step5	効果的な利用	情報源を精査し，利用する	どうやって情報を使えばいい？
Step6	情報の記録	情報を記録し，保存する	何を記録すればいい？
Step7	意味づけ	情報を解釈・分析・統合・評価する	必要な情報は入手したか？
Step8	表現	情報をまとめ，発表し，交流する	どのように表現したらいい？
Step9	達成度の評価	課題を評価する	達成できたのか？

【出典】Irving, Ann. Study and Information Skills Across the Curriculum. London, Hinemann, 1985, p.30 より作成

Big6 Skills Model は，アイゼンバーグ（Mike Eisenberg）とベルコウィッツ（Robert E. Berkowitz）が 1990 年に発表した利用教育モデルで，上述したアーヴィングの Nine-step モデルを応用している。Big6 Skills Model は，学校図書館における情報リテラシー教育の理論的枠組みとして汎用性が高く，現在，世界中の 1,000 を超える学校で利用されている⁵¹。アイゼンバーグらは，情報問題解決（information problem solving）という概念を情報探索プロセスに取り入れ（図表 2-12），問題解決の過程で求められる能力を図書館情報利用技能（Big6 Skills）として記述した⁵²。

図表 2-12 The Big Six Skills: A Library & Information Skills Curriculum



【出典】Eisenberg, M. B.; Berkowitz, R. E. Curriculum Initiative: An Agenda and Strategy for Library Media Programs. ABLEX Publishing, 1988. p.108 より作成

- 1 Task Definition（課題を定義する）
 - 1.1 Define the information problem（解決すべき課題を明確にする）
 - 1.2 Identify information needed（課題解決に必要な情報を特定する）
- 2 Information Seeking Strategies（情報探索の手順を考える）
 - 2.1 Determine all possible sources（利用可能な情報源を特定する）
 - 2.2 Select the best sources（最もよい情報を選択する）
- 3 Location and Access（情報を探し収集する）
 - 3.1 Locate sources (intellectually and physically)（情報源の所在を確認する）
 - 3.2 Find information within sources（情報源の中から情報を見つけ出す）

- 4 Use of Information (情報を利用する)
 - 4.1 Engage (e.g., read, hear, view, touch) (情報に触れる, 例えば読む, 聞く, 見る, 触る)
 - 4.2 Extract relevant information (適切な情報を取り出す)
- 5 Synthesis (結果をまとめる)
 - 5.1 Organize from multiple sources (様々な情報源から得た情報をまとめる)
 - 5.2 Present the information (まとめた情報を発表する)
- 6 Evaluation (評価する)
 - 6.1 Judge the product (effectiveness) (作品を評価する)
 - 6.2 Judge the process (efficiency) (プロセスを評価する)

さらに、それぞれの能力に含まれる技能を、ブルーム (B. S. Bloom) による教育目標のタキソノミーに従って階層化することによって利用指導をカリキュラム化した⁵³ (図表 2-13)。Big6 Skills モデルでは、この情報問題解決の過程で用いる図書館情報利用技能のすべてが利用指導の対象となる。

図表 2-13 「情報を探し収集する」段階における図書館情報利用技能

知識	様々な情報源と、情報探索に必要なスキルを挙げる
理解	利用可能な情報源について説明する
応用	情報を収集するために情報源を探し、利用する
分析	情報問題を解決するのに適した情報かどうか試す
統合	情報問題を解決するために情報収集計画を改善する
評価	情報問題を解決する情報収集ができたか判断する

【出典】Eisenberg, M. B.; Berkowitz, R. E. Curriculum Initiative: An Agenda and Strategy for Library Media Programs. ABLEX Publishing. 1988. p.109 より作成

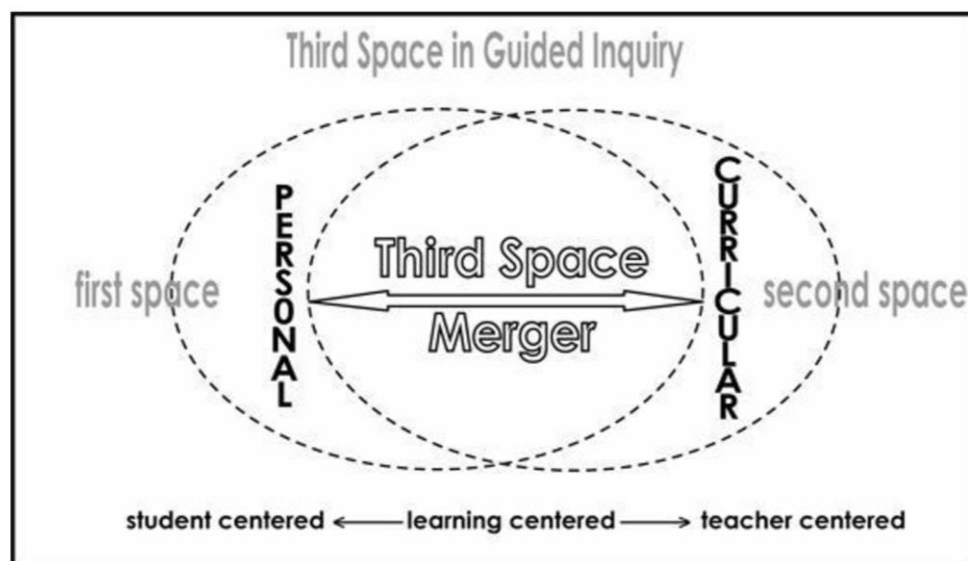
1990～2000 年代のアメリカでは、このような情報探索プロセスを組み込んだ利用者教育のガイドラインが、国や州、学校区ごとに策定された。

2.3.2 情報探索プロセスから探究プロセスへ

2000 年以降、ICT の急速な発達に伴って情報環境が変化し、生徒が身につけるべき能力の捉え方も変化した。クルトーは、2003 年から 2005 年にかけて、トッド (Ross J. Todd) やハインストローム (Jannica Heinström) と ISP モデルを用いた研究論文をレビューし、このモデルがさまざまな文脈で検証されており、新しいメディアが登場する現代社会においても、情報探索行動の理論的枠組みとして有効であると結論付けた上で⁵⁴、情報探索プロセスの各段階で生徒が必要とする支援や指導を、ヴィゴツキー (Lev Semyonovich Vygotskii⁵⁵) の「発達の最近接領域理論」に基づいて明らかにした⁵⁶。

また、生徒は、自分自身の問題意識から問いを発したときに最も主体的に学ぶという考え方を踏まえ、生徒の個人的経験や関心の領域 (First Space) と教師が提供するカリキュラムの領域 (Second Space) が融合する第 3 の領域 (Third Space) を生徒が主体的に学ぶ探究の場と位置づけた (図表 2-14)。

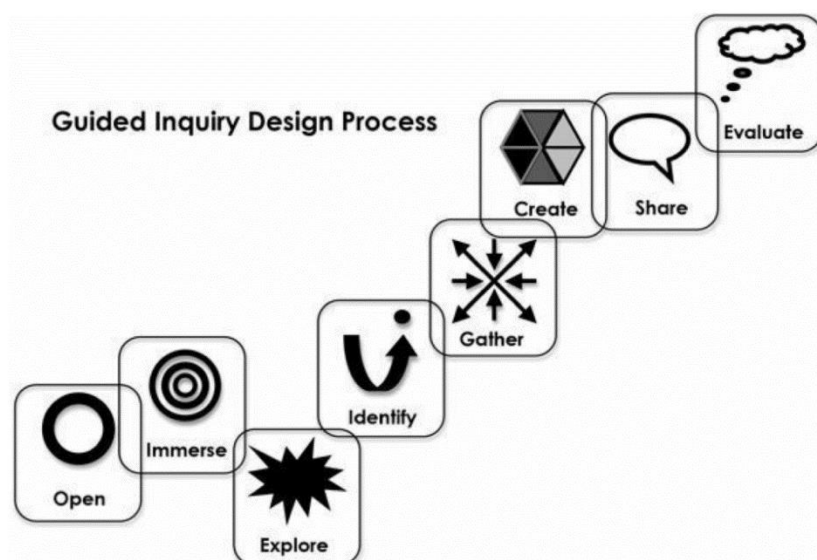
図表 2-14 導かれた探究における「第三の領域」



【出典】 Carol C. Kuhlthau; Leslie K. Maniotes; Ann K. Caspari. Guided inquiry design : a framework for inquiry in your school. Libraries Unlimited, 2012, 188p.より作成

クルトーは、探究学習（Inquiry Learning）を，“教科書に書かれた「消化しやすい」知識から学ぶだけではなく，さまざまな情報源から知識を構築していくという学びのプロセスを生徒に提供するもの”⁵⁷と定義し，「情報探索（ISP）モデル」と「第3の領域」を理論的枠組みとした利用教育モデルとして，「導かれた探究アプローチ（a guided inquiry approach）」を提唱した。

図表 2-15 「導かれた探究の学習プロセス」



【出典】 Carol C. Kuhlthau; Leslie K. Maniotes; Ann K. Caspari. Guided inquiry design : a framework for inquiry in your school. Libraries Unlimited, 2012, 188p.より作成

「導かれた探究」では、生徒は「教科の内容」だけでなく、「リテラシー」「情報リテラシー」「学び方」「社会的スキル」を学習する（図表 2-16）。「導かれた探究アプローチ」は、課題解決のために情報を処理したり分析したりするだけではなく、情報探索プロセスを、さまざまな場面に転移可能なレベルで理解させることを目指した利用教育モデルである。

図表 2-16 Guided Inquiry（導かれた探究）における 5 つの学習要素

Five Kinds of Learning through Guided Inquiry	
Information Literacy 情報リテラシー	情報を探索し、評価し、利用するための概念
Learning How to Learn 学び方の学習	探究プロセスにおける自立した学習と個人的相互作用
Curriculum Content 教科の内容	新しい知識の獲得 事実とアイディアの解釈、統合、適用
Literacy Competence リテラシー能力	読むこと、書くこと、話すこと、聞くこと、見ること、表現すること
Social Skills 社会的スキル	相互作用、協力、連携、思考の習慣、行動に結びつく資質

【出典】Carol C. Kuhlthau; Leslie K. Maniotes; Ann K. Caspari. Guided inquiry design : a framework for inquiry in your school. Libraries Unlimited, 2012, 188p.より作成

2.4 海外の学校図書館における利用者教育の動向

利用者教育に関する理論研究の成果は、各国の学校図書館で取り入れられている。その中でも、学校図書館先進国といわれる国の取組は、日本にもたびたび紹介され、わが国の利用指導のあり方を考える際に参照されてきた。近年では、全国学校図書館協議会が、カナダ（2005 年）、アメリカ（2009 年）、オーストラリア（2010 年）、フランス（2012 年）などに視察団を派遣し、各国の取組を本にまとめ報告している⁵⁸。

本節では、これらの国々で行われている利用者教育の内容について、探究学習との関連に焦点を合わせ、各国の学校図書館協会が発信する利用教育のためのガイドラインに基づいて述べる。

2.4.1 アメリカ合衆国

アメリカの学校図書館活動は、アメリカ図書館協会 (American Library Association: ALA) やアメリカ学校図書館協会 (American Association of School Librarians: AASL) が策定する学校図書館基準によって方向性が示されてきた。図書館利用教育を教科教育と関連づけて行う必要性は、1960 年に発表された「学校図書館プログラム基準 (Standards for School Library Programs)」で明確にうたわれている。1962 年から 1967 年にわたって、ナップ基金 (Knapp Foundation) を活用した調査が行われ、学校図書館の資料を活用した「リソーススペース学習」の効果が確認されると、教科と学校図書館の連携は、利用者教育をすすめる上での重要なキーワードになった。

学校図書館基準は、1969 年「学校図書館メディア・プログラム基準 (Standards for School Library Media Programs)」, 1975 年「学区と学校のメディア・プログラム (Media Programs: District and School)」, 1988 年「インフォメーション・パワー：学校図書館メディア・プログラム指針 (Information Power: Guidelines for School Library Media Programs)」, 1998 年「インフォメーション・パワー：学習のためのパートナーシップの構築 (Information Power: Building Partnership for Learning)」と改訂を重ね、そのたびに、学校図書館員の教育的な役割を強調し、どのような教育を行うべきか具体的に示してきた。例えば、1988 年の Information Power では、学校図書館メディア・スペシャリスト (School Library Media Specialist: SLMS) を、情報の専門家、教育者、教育コンサルタントと定義し、情報源を使いこなすインフォメーションスキル教育の責任者と位置付けている。

最新の学校図書館基準である「21 世紀を生きる学習者のための活動基準 (Standards for the 21st Century Learner in Action)」は、2007 年に発表された。この基準でも、利用者教育を探究学習のなかで行うことが、もっとも効果的な指導法であるとされ、SLMS と教員が一緒に指導する重要性が強調されている。指導内容は、生徒が習得すべき能力（スキル）というかたちで、以下のような 4 つの基準と 29 の指標に沿って示されている。

（基準 1）探究を行い、クリティカルに考えて、知識を獲得する

1.1.1. 探究の過程をたどって教科の調べものをし、それを現実の世界と関連づけて自分の生活に役立てる。

1.1.2. 新しいことを学ぶための文脈として、すでに知っている背景的知識を利用する。

- 1.1.3. さまざまな問いを作り，改良して，それを骨組みとして新しいことを理解するための探索を行う。
- 1.1.4. 問いに答えるために適切な情報源を探しだして，評価し，選択する。
- 1.1.5. 選択した情報源にある情報を，正確さ，妥当性，ニーズへの適合性，重要性，および社会的・文化的背景に基づいて評価する。
- 1.1.6. 推論を立て，意味を見出すために，文章，視覚，メディア，デジタルなどの資料にある情報を読み，観て，聞く。
- 1.1.7. 誤解，アイディアの重要性，論点，視点，偏見などを明確にして，さまざまな情報源から集めた情報を理解する。
- 1.1.8. 情報へのアクセスや探求のために，情報技術を使いこなせることを示す。
- 1.1.9. 理解を広げ，深めるために他者と協働する。

（基準 2）結論を見出し，十分な情報に基づいて意思決定を行い，知識を新しい状況に適用して新しい情報を生み出す。

- 2.1.1. 新しい理解を構築し，結論を導き出し，新しい知識を生成するために，情報や知識にクリティカルな思考のスキル（分析，統合，評価，組織化など）を適用し，探究に基づく研究を続ける。
- 2.1.2. 情報を整理して使いやすくする。
- 2.1.3. 情報から結論を導き出したり，知識を教科や現実世界やさらなる研究に適用したりするための方策を利用する。
- 2.1.4. 情報を分析・組織化するために，テクノロジーや情報ツールを利用する。
- 2.1.5. アイディアを出し合ったり，新しい理解を発展させたり，決定をしたり，問題を解決したりするために他者と協働する。
- 2.1.6. 新しく理解したことを表現する作品を作り出すために，執筆プロセス，メディアリテラシーやビジュアルリテラシー，情報技術を利用する。

（基準 3）知識を分かち合い，倫理的かつ生産的に民主主義社会に参加する

- 3.1.1. 新しく理解したことを分かち合い，学びを振り返って，探究的な研究過程を締めくくる。
- 3.1.2. 学ぶ者同士の社会的・知的ネットワークに参加し，協働する。
- 3.1.3. 新しい理解を伝えるために，書くスキルと話すスキルを利用する。
- 3.1.4. 他者が見たり，利用したり，評価したりできるような方法で，知識や理解したことを組織し，表示するために，テクノロジーや情報ツールを利用する。
- 3.1.5. 学びをコミュニティの論点と結びつける。
- 3.1.6. 情報やテクノロジーを倫理的に責任をもって利用する。

（基準 4）人格と美意識を育む

- 4.1.1. 楽しみと人格の成長のために，読んだり，見たり，聴いたりする。
- 4.1.2. 幅広く，よどみなく読んで，自分自身や世界や今までの読書体験との関係をしっかりと築く。
- 4.1.3. 多様な形式とジャンルの文学やアイディアの創造的表現に対応する感性をもつ。

- 4.1.4. 多様な形式とジャンルから個人の学びのための情報を見つけ出す。
- 4.1.5. アイディアを自分の興味や既有知識や体験に結びつける。
- 4.1.6. 個人の知識をいつでも思い出せるように整理する。
- 4.1.7. 情報を収集し共有するために、社会的なネットワークや情報ツールを利用する。
- 4.1.8. 個人的に学んだことを創造的で芸術的な表現形式を用いて表現する。⁵⁹

例えば、8年生が習得すべきスキルは、指標 3.1.6 の場合「自分の言葉で情報を言い換えて、剽窃を避ける」「正しい書誌記述法によって、文章の引用や参考文献を記録する」「利用規定を順守して、適切な情報にだけアクセスする」「コンピュータのプログラムやウェブサイト、責任を持って道義的に使う」である。指標 4.1.8 の場合は、「文学や他の芸術的な作品に共感して独創的な作品を作る」「芸術的で個性的な表現をするために、さまざまなタイプのマルチメディアアプリケーションを使ってみる」が到達基準とされている。

この「21 世紀を生きる学習者のための活動基準」では、“学校図書館メディアスペシャリスト (SLMS) と教員は、特定のスキルを教え、(中略) 学習経験が成功するように児童生徒を導く”⁶⁰と述べられているが、SLMS の専門領域について具体的な言及はない。SLMS の役割や指導内容を読み取るには、学年ごとの活動例の中に書かれた教員と学校図書館員の役割分担を見るしかない (図表 2-17)。基準のタイトルに「学校図書館」や「メディア・センター」という語がなくなっていることから分かるように、ここでは、生徒が習得すべき能力 (スキル) にフォーカスしているため、以前の基準に比べ学校図書館の守備範囲が明確ではなくなっているという指摘もある⁶¹。

図表 2-17 8 年生の活動例にみる教員と SLMS の役割分担

教科／主題／担当者 総合学習／地球温暖化／数学・科学・国語の教員と SLMS

図書館で行う授業で生徒が学習すること

- 課題に適した情報の見分け方
- 幅広い情報源の有効な活用法
- 知的財産を見極める方法 (→ティーム・ティーチング)
- 知的財産の所有者を倫理的に明示する方法 (→SLMS が指導)

授業と各教科や学校図書館「基準」との関係

「スキル」の達成基準	● 新しい知識を明確に分かりやすく示すような作品 (成果) を計画して仕上げるために、適切なメディアや形式を活用する。
	● 自分自身の言葉で表現し、剽窃をさける。
数学の達成基準	● 引用を記録し、正確な参考文献リストを作成し、情報源を示す。
	● 適切な情報にアクセスするだけで、利用規定の範囲での活用にとどめる。
科学の達成基準	● プログラムやウェブサイトは責任と倫理観をもって活用する。
	● データ分析、確率、統計の能力を活用する
	● 宇宙における地球のシステムやその他の天体の校正や、構造、プロセスや相互作用についての知識を示す

指導案 (シナリオ) から読み取る SLMS の役割

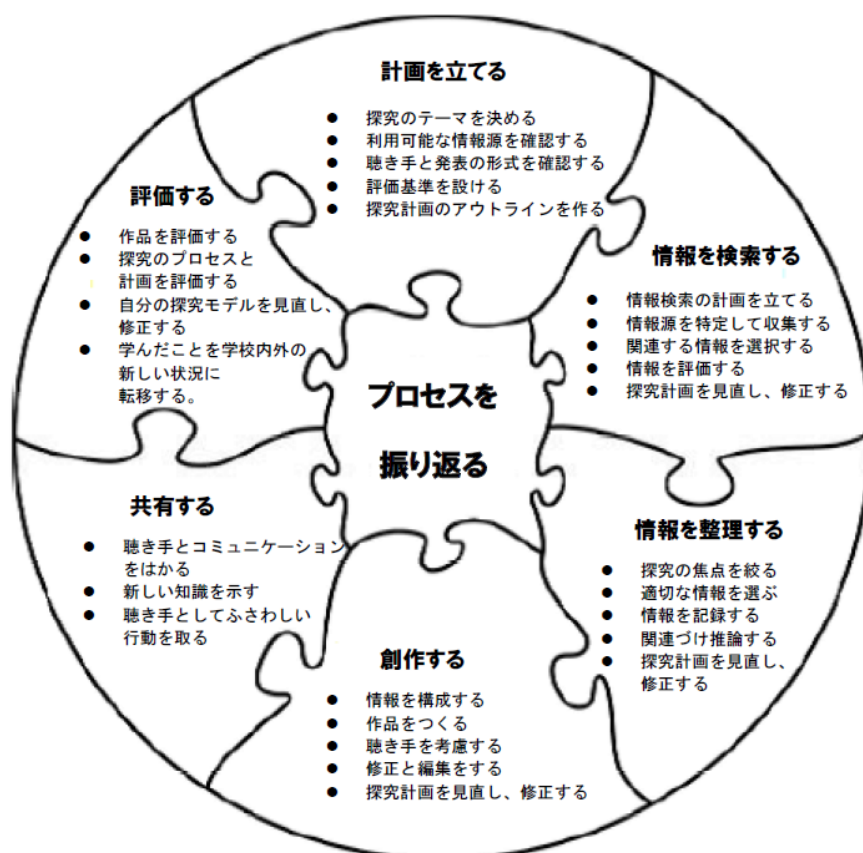
SLMS のみ	● 「引用のしかた」の指導 (オンライン引用ツールの利用)
	● 引用すべき情報の見極め方
教員と	● 知的財産を定義して見極める方法 (国語教員と共に指導)
ティーム・ティーチング	● 発表リハーサル支援 (全教員と共に指導)

【出典】American Association of School Librarians, 全国学校図書館協議会海外資料委員会. 21 世紀を生きる学習者のための活動基準. 全国学校図書館協議会, 2010, p.98-99 より作成

2.4.2 カナダ

カナダ学校図書館協会 (Canadian School Library Association: CSLA) は、2003 年に『情報リテラシーの獲得：カナダ学校図書館プログラム基準 (Achieving Information Literacy)』⁶²を作成した。州によって、この基準をもとに独自のガイドラインを作っており、例えば、アルバータ (Alberta) 州では、2004 年に『Focus on inquiry : a teacher's guide to implementing inquiry-based learning』を作成している。このガイドラインは、学校区の教師と司書教諭 (Teacher Librarian) が共同で作成した探究学習の指導案内で、探究プロセスに沿った知識や技能が具体的に示されている (図表 2-18)。

図表 2-18 Focus on Inquiry



【出典】 Alberta Learning. Focus on inquiry: a teacher's guide to implementing inquiry-based learning. Alberta, 2004, p.10 より作成

2014 年には、カナダ図書館協会 (Canadian Library Association: CLA) が『Leading Learning: Standards of Practice for School Library Learning Commons in Canada』⁶³を作成した。本書は 3 章で構成されており、(1)学校図書館からラーニング・コモンズへの転換、(2)先端学習の枠組み、(3)前進、である。この基準では、さまざまなトピックの達成基準を「模索」「萌芽」「展開」「定着」「未来へ向けて牽引」という 5 つのレベルに分けて示している。例えば、情報リテラシー教育の実践を測る基準は以下の通りである。

- 萌芽→司書教諭とラーニング・コモンズ担当教員は、リサーチや探究学習の導入として、情報スキルの指導を生徒に行う。
- 展開→司書教諭とラーニング・コモンズ担当教員は、生徒の情報スキルを向上させるために、情報リテラシー教育を目的とした単元や授業を提供する。
- 定着→司書教諭は教員と協力して、教科の深い理解を促すような学習活動のなかに、情報リテラシー教育を統合する。
- 未来へ向けて牽引→司書教諭は、自立した学習者を育てるような情報リテラシー教育の計画や実践をすすめるために、教職員をリードする。

2.4.3 オーストラリア

オーストラリア学校図書館協会 (ASLA: Australian School Library Association) は、2011 年に策定された国の統一カリキュラムを踏まえ、2013 年 4 月に『Future learning and school libraries』を公表し、21 世紀型スキルを養成しようとする学校において、学校図書館がどのような役割を果たせるかを示した。その中で、司書教諭の (Teacher Librarian) の役割として、

- 情報探索プロセス・モデルの利用を促進し、情報スキルを向上させるための枠組みとして、あるいは、情報の利用者としての生徒の発達を評価するための基準として、学校全体で用いること
- 生徒の学びに、情報源や情報テクノロジーを効果的に統合するために、教師と協力して計画を立て、一緒に指導し、達成度を評価すること⁶⁴

を挙げている。

筆者が 2010 年に全国 SLA 視察団の一員として同国を訪問した際には、各校の司書教諭が積極的に利用教育を実践していた。例えば、クイーンズランド州ブリスベンの Morton Bay Collage の学校図書館に用意されている『Secondary Library Handbook』には、司書教諭が提供する利用教育プログラムが掲載されている。その内容は、オリエンテーション、図書館利用やリサーチスキル向上のためのテーマ別ワークショップ、オンライン・データベース講習、スキャンやコピーの援助、コンピュータ利用のサポート、文献利用指導などである。司書教諭は、リサーチを授業に取り入れる教科教員に、図書館スキルの指導の仕方を教える。授業における生徒へのスキル指導は、主に教科教員が行うので、司書教諭は、その教員たちの相談にのりアドバイスを行うことが主な役割である⁶⁵。同校には、8 年生を対象とした 12 時間の情報リテラシー教育のための特別授業があり、司書教諭が担当している。取り扱う内容は、以下の 11 項目であった。

- (1) 図書館オリエンテーション、コンピュータへのログイン、マインドマップ
- (2) 図書館探検
- (3) デューイ十進分類法
- (4) (5) Big Six (探究プロセス) について (※Big6 Skills とは少し異なる)
- (6) 書誌データの記録
- (7) オンライン・データベースの使い方

- (8) Web サイトの評価
- (9) 確認テスト
- (10) ビデオやカメラの利用法
- (11) フォルダーへの整理法
- (12) オンライン・データベース（ブリタニカ百科事典など）⁶⁶

また、Jasper Road Public School や、St Peter's Lutheran College では、学校図書館を活用する教科と協働授業の中で情報活用教育や探究学習の教授を行っている。そこでは、司書教諭が教科の教員と一緒にワークシートやプリントを作成し、それに沿った教育活動を提供している。さらに、St Peter's Lutheran College では、「Referencing Guidelines」を発行し、授業に用いている。取り上げられている内容は、引用文の書き方、参考文献や図表の書き方、ノートの取り方、要約の仕方などであった。

2.4.4 イギリス

イギリスの学校図書館における利用教育の動向については、ストリートフィールド（Streatfield David）らの研究⁶⁷から知ることができる。この調査は、イギリスの小中学校で実践されてきた情報リテラシー教育の実態を明らかにすることを目的として、30 年分の文献レビューと、小学校における教員と学校図書館員に対するフォーカスグループ・インタビュー、主任教員への電話インタビューによって構成されている。

ストリートフィールドらは、イギリス学校図書館における利用教育研究の進展を、図書館協会など各種団体の資金を得て大規模な調査が行われた 1970 年代後半～80 年代と、教育改革法（The Education Reform Act, 1988 年）で予算削減や組織改編の影響を受けた 1980 年代半ば以降に分けて説明している。

1979～1987 年は、学校図書館における利用教育に関する研究がすすんだといえる時期である。例えば、英国図書館研究開発部（British Library Research and Development Department）の資金を得て、アーヴィング（Ann Irving）が「Educating Information Users in Schools」⁶⁸としてまとめたり、マーランド（Michael Marland）の研究グループが、大英図書館（British Library）と学校教育協議会（School Council）の支援を受けて「Information Skills in the Secondary Curriculum」⁶⁹を作成したりした。マーランドらは、情報スキル（Information Skill）という語を使って、生徒が情報を利用するために学ぶ必要がある知識や技能を示した。

一方、1980 年代半ば以降は、学校での情報リテラシー教育に応用できる実践的なモデルがいくつも発表された。代表的なものとして、アヴァン（Pat Avann）⁷⁰、アーヴィング（Ann Irving）⁷¹、全英教育技術協議会（the National Council for Educational Technology: NCET）、ヘリング（James E. Herring）⁷²によるモデルがある。例えば、ヘリングが発表した PLUS モデルは、“単純明快で、情報活用能力モデルとしては、生徒が覚えやすく、教員も指導するにあたって扱いやすい”⁷³とされている。具体的には、情報リテラシー教育を学校で行う際の枠組みとして 4 つの段階を示し、それぞれの段階で要求されるスキルを具体的に記述している。

- Purpose 目的－調査や課題の目的をはっきりさせる

- **Location** 所在－目的に関連した適切な情報源を見つける
- **Use** 利用－情報や考えの取捨選択、情報の読解、ノートへの抜き書き、発表
- **Self-Evaluation** 自己評価－課題に情報活用能力を応用した自らの成果を評価する方法と今後学習することを考える⁷⁴

ヘリングは、学校図書館におけるこれまでの利用者教育が、“資料や情報を探すことに労力を注ぎすぎて、情報を認識する能力、すなわち課題の目的を考え、情報を評価し、選び、読解し、記録にとり、熟考し、発表する、こうした一連の情報活用を自己評価する生徒自身の能力への関心が払われなかった”⁷⁵と指摘し、情報を利用するプロセス全体を利用者教育の対象とすることを主張している。

2.4.5 フランス

フランスでは、1989年からドキュメンタリスト教員と呼ばれる学校図書館担当者が、中学校と高等学校の図書館で採用されている。彼らは、教科教員同様、中等教育教員適正証（CAPES : certificate d'aptitude au profesonal de penseignement du second degré）という資格の取得が必要であり⁷⁶、図書館の蔵書管理のような従来の業務よりも、情報リテラシー教育に携わる教員としての役割が強調されている⁷⁷。

1972年に全国ドキュメンタリスト教員協会（FADBEN1）が設立され、情報活用教育のカリキュラムを作成している。例えば、1997年には、学校での情報活用能力の全体像を示す「情報リテラシーの一覧表」を公表した。それによると、ドキュメンタリスト教員は、課題の定義から評価までの学習プロセスに沿って、学齢に応じた情報探索能力を育成するとしている⁷⁸。また2007年には、ドキュメンタリスト教員の指導領域として7項目（情報、資料、索引化、情報源、情報空間、情報探索、情報活用）、64技能を示した体系表を作成した。

2010年には、情報リテラシーと情報教育の研究グループ（GRCDI: Groupe de Recherche sur la Culture et la Didactique de l'information）が立ち上がり、情報リテラシー教育のためのカリキュラム基準を示した⁷⁹。例えば、「情報の評価」に関する学習項目として、図表2-19のような内容が挙げられている。

図表 2-19 「情報の評価」に関する定義と、情報デジタル環境下での学習項目

レベル	定義
初心者	情報の評価とは異なる評価基準で情報に価値を与えることである。
上級者	情報の評価とは個人的な評価基準で情報に価値を与えることである。それは情報源の比較に基づき、十人十色である。

目標	
情報を資料を活用する過程に関連する知識と技能の目的とは	
- 情報検索・資料作成の活動を身につけるために、これらの活動に関連する知識を生徒たちが知るようにする。 - 学校内・課外活動で自律的に批判的な判断ができるようにする。	
概念について	技能
2.1 索引システム	
キーワード	情報検索に役立つキーワードを定義する
インデックス	検索手段（専門書の目次・索引、サーチエンジンのサーチバー）の使い方を知る
2.2 情報検索	
サーチエンジン	ブラウザとサーチエンジンを区別する。
リクエスト（オンライン）ポータル	サーチエンジンとオンラインポータルを定義する。
ブラウジング	情報検索するためにツリー（系統樹）構造ハイパーテキスト構造を使う。
2.3 情報の活用	
情報の評価	情報探索の過程で資料（専門書、参考図書、雑誌、ウェブページ）の選択をする。 - 関連性 - 信頼性 - 有効性
関連性	情報の信頼性のために1つの基準を決める
資料の作成	情報探索の過程で見つけた事項を使って資料（口頭発表、レポート）を作成する

【出典】Groupe de Recherche sur la Culture et la Didactique de l' Informtion (GRCDI). Culture informationnelle et didactique de l' inormation. Synthèse des travaux duGRCDI. 2007-2010. http://archivesic.ccsd.cnrs.fr/sic_00520098/fr,より作成

2.5 本章のまとめ

本章では、研究の枠組みとなる「利用指導の内容と方法」を提示することを目的として、利用指導に関する文献調査を行った。

2 章 1 節では、文部省が作成してきた利用指導の手引と、全国学校図書館協議会が作成してきた利用指導の体系表を用いて、どのような項目が指導の対象とされてきたかを明らかにした。日本の利用指導は、アメリカの学校図書館で行われていた利用指導の内容を参考にする一方で、読書指導の要素も含めるなど、独自の項目を付記して形成された。しかし、次第にその内容は整理され、“自己教育を支える学習技術（スタディ・スキルズ）とか、あらゆる教科等の学習において必要とされる情報の検索・組織化・処理の能力などを育成すること”⁸⁰を目指した教育活動として捉えられるようになった。

2 章 2 節では、学校図書館法改正（1997 年）以降に発行された利用指導関連文献を用いて、どのような知識や技能が利用指導の対象と考えられているかを整理した。その結果、利用指導の内容を 25 分野 119 項目としてまとめることができた。

2 章 3 節では、日本の利用指導の理論的根拠となっている利用教育研究の成果について論じた。2 章 2 節で整理したように、利用指導の内容に、情報の探索と利用に必要なさまざまな知識や技能が含まれ、かつ、生徒が情報を利用するプロセスのなかで指導することを目指している。その背景には、情報学や認知心理学の研究成果として生み出されたクルトーの情報探索プロセス・モデルと、情報探索プロセスを組み込んだ利用教育モデルによるところが大きい。アメリカでは、情報探索プロセスと探究学習を関連づけた新しい利用教育モデルも生まれている。また、知識や技能だけではなく、態度的能力にも注目が集まるなど、利用教育は新たな展開を迎えていると言える。

2 章 4 節では、アメリカをはじめとする海外の学校図書館ですすめられている利用者教育を、各国のガイドラインをもとに概観した。カナダ、オーストラリア、イギリス、フランスにおいても、情報探索プロセスを組み込んだ利用者教育を目指して、モデルの開発やガイドラインの作成に取り組んでいる。

本章における文献調査の結果、利用指導の内容が、情報を探索し利用するプロセスで求められるさまざまな知識や技能を含んでいることが明らかになった。これらは、「図書館、あるいは図書館資料の使い方」の指導を行ってきた学校図書館現場にとって、大きな変化であると言える。しかし野末は、大学図書館や学校図書館における利用者教育について、“これまで、図書館における情報リテラシー教育は、いわば“拡大路線”であった。そのことがかえってどこまでを図書館が担うのかを見えにくくしてきた面があったのではないだろうか。“教えない”ところはどこかを検討していくことで、逆に“教えるべき”ところがどこなのか、つまり図書館でなければできないところはどこなのかを明確にしていくことができるのではないだろうか”⁸¹と述べている。確かに、利用指導の内容一覧の中には、教科教育で取り扱われていると考えられる項目が含まれている。1 章では、学校図書館と教科との連携、学校図書館員と教員とのティーム・ティーチングが不可欠であるという点について論じたが、利用指導の内容と教科の内容の関係について検討する必要がある。

そこで 3 章では、教科の枠組みで取り扱われている「情報の探索と利用の指導」の内容について分析し、利用指導と教科がどのように連携するべきかを論じる。

 注・引用文献

- 1 野末俊比古. “情報リテラシー”. 情報探索と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p.229-278. 引用は p.243.
- 2 日本図書館協会利用教育委員会. 図書館利用教育ガイドライン. 日本図書館協会, 1998, 19p.
- 3 文部省. 学校図書館の手引. 師範学校教科書. 1948, 137p.
- 4 「第 4 章学校図書館の運用」の執筆者は滑川と阪本とされるが, 節の担当は明らかではない。(中村百合子. 占領下日本の学校図書館改革: アメリカの学校図書館の受容. 慶應義塾大学出版会, 2009, 394p.)
- 5 文部省. 学校図書館の手引: 師範学校教科書. 1948, 11p.
- 6 中村百合子. “第 4 章「学校図書館の手引」の構成と記述”. 占領下日本の学校図書館改革: アメリカの学校図書館の受容. 慶應義塾大学出版会, 2009, 158p.
- 7 阪本一郎. 「利用指導」の定着(回顧・日本の学校図書館-4-). 学校図書館, 1968, no. 213, p. 51-54.
- 8 例えば, 東京学芸大学第一師範附属小学校による『小学校の図書館教育』(東京学芸大学第一師範学校附属小学校. 小学校の図書館教育. 學藝図書, 1949, p.229) や, 天理学園学校の『図書館科の研究: 小学校から大学まで』(天理学園学校図書館研究会. 小学校から大学まで図書館科の研究. 養徳社, 1950, no.9, 302p.) などがある。
- 9 中村百合子. 占領下日本の学校図書館改革: アメリカの学校図書館の受容. 慶應義塾大学出版会, 2009, 394p.
- 10 阪本一郎. 「利用指導」の定着(回顧・日本の学校図書館-4-). 学校図書館, 1968, no. 213, p. 51-54. 引用は p.56.
- 11 中村百合子. “第 6 章 学校図書館基準の策定”. 占領下日本の学校図書館改革: アメリカの学校図書館の受容. 慶應義塾大学出版会, 2009, p.158. 引用は p.207.
- 12 しかし, 基準の「(五) 人の構成」に, 「(5) 司書教諭は図書および図書館利用に関する指導をも行う」という記述がある。ここでいう「図書および図書館利用に関する指導」は, 『学校図書館の手引』の「図書および図書館利用法の指導」をひいたものであり, この基準で初めて誕生した「司書教諭」が, 教諭としてどのような教育的活動を行うかを示したものといえる。
- 13 全国学校図書館協議会利用指導委員会. 学校図書館の利用指導の計画と方法. 改訂版, 全国学校図書館協議会, 1979, 191p. 引用は p.18.
- 14 深川恒喜. 文部省刊行の学校図書館手びき書: 「学校図書館の手びき」から「小学校における学校図書館の利用指導」まで(回顧 日本の学校図書館 27). 学校図書館. 1971, no.243, p. 50-54. 引用は p.53.
- 15 文部省. “第 13 章 1 図書館教育の意義と必要”. 学校図書館運営の手びき. 明治図書, 1959, 497p. 引用は p.243.
- 16 文部省. “第 13 章 2-(2) 図書館教育の内容”. 学校図書館運営の手びき. 明治図書, 1959, 497p. 引用は p.245-246.
- 17 文部省. “第 13 章 1 図書館教育の意義と必要”. 学校図書館運営の手びき. 明治図書, 1959, 497p. 引用は p.244.
- 18 深川恒喜. 「学校図書館の利用指導」の「これまで」と「これから」(学校図書館の利用指導(特集)). 学校図書館. 1969, no.223, p.14-18. 引用は p.15.
- 19 文部省初等中等教育局. 小・中学校における学校図書館利用の手びき. 東洋館出版社, 1961, 229p.
- 20 全国学校図書館協議会利用指導委員会. 学校図書館の利用指導の計画と方法. 改訂版, 全国学校図書館協議会, 1979, 191p. 引用は p.14.

- 21 文部省. 小学校における学校図書館の利用指導. 大日本図書, 1970, 208p. 引用は p.9.
- 22 文部省. 小学校における学校図書館の利用指導. 大日本図書, 1970, 208p. 引用は p.12.
- 23 笠原良郎. スキルの指導から学びかたの教育へ: 利用指導の 40 年 (全国 SLA 創立 40 周年記念特集: 学校図書館の 40 年). 学校図書館. 1990, no.482, p.44-51. 引用は p.51.
- 24 全国学校図書館協議会学校図書館学編集委員会. 学校図書館の運営と利用指導 (学校図書館学テキスト版). 全国学校図書館協議会, 1986, 230p. 引用は p.141-142.
- 25 今村秀夫. 学校図書館における利用者教育の動向. 実践女子大学文学部紀要. 1991, vol. 34, p.145-162. 引用は p.146.
- 26 今村秀夫. 学校図書館における利用者教育の動向. 実践女子大学文学部紀要. 1991, vol. 34, p.145-162.
- 27 全国学校図書館協議会利用指導委員会. 学校図書館の利用指導の計画と方法. 全国学校図書館協議会, 1971, 191p. 引用は p.19.
- 28 全国学校図書館協議会利用指導委員会. 学校図書館の利用指導の計画と方法. 全国学校図書館協議会, 1971, 191p. 引用は p.19.
- 29 平久江祐司. 自己教育力を育成するための学校図書館利用指導: 教育改革の観点から. 図書館学会年報. 1996, vol.42, no.2, p.111-127.
- 30 全国学校図書館協議会学校図書館学編集委員会編. 学校図書館の運営と利用指導. 全国学校図書館協議会, 1986, 230p. 引用は p.132.
- 31 全国学校図書館協議会学校図書館学編集委員会編. 学校図書館の運営と利用指導. 全国学校図書館協議会, 1986, 230p. 引用は p.139.
- 32 文部科学省. 学校図書館司書教諭の発令について. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20030121001/t20030121001.html, (参照 2017-03-15).
- 33 三輪は,モデルと理論の関係について,前者を「現象について記述可能な程度の知見が得られると,その現象と他の現象との関係を予測できるようになる。この段階までがモデルである」とし,後者を「モデルに記述された予測を実証研究により検証することで,その現象の解釈が可能になると,理論の段階になる」としている(三輪真紀子. 情報行動: システム志向から利用者志向へ. 勉誠出版, 2012, 205p. 引用は p.22)
- 34 1960 年に発表された「学校図書館プログラム基準」(Standards for School Library Programs) の普及に伴って,利用者教育のカリキュラム化が進んだことが背景にあるが,このことについては次項で述べる。
- 35 Kuhlthau, Carol Collier. An Emerging Theory of Library Instruction. School Library Media Quarterly. 1987, vol.15, no.1, p.23-28.
- 36 Pickering, T. N.; Crow, S. R.; Franklin, L. L.. Information Literacy and Information Skills Instruction: Applying Research to Practice in the 21st Century School Library. 3rd ed. LIBRARIES UNLIMITED. 2011. 261p.
- 37 Aaron, L. Shirley. “A Review of Selected Research Studies about School Library Media Programs, Resources, and Personnel: January 1972- June 1981.” School Library Media Annual. Aaron, L. Shirley ed. Littleton, Colorado, Library Unlimited, inc. 1983, p.303-367.
- 38 Ellison, W. John. Effective library Instruction and the Learning Process. Catholic Library World. 1981, vol.53, no.4, p.182-184.
- 39 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. 図書館情報学用語辞典. 第 4 版. 丸善出版, 2013, 284p. 引用は p.199.
- 40 Kuhlthau, Carol Collier. An Emerging Theory of Library Instruction. School Library Media Quarterly. 1987, vol.15, no.1, p.23-28.
- 41 Shih, Tian-Chu. Library Instruction, a Bibliography, 1975 through 1985. Mcfarland & Co Inc Pub, 1986, 112 p.
- 42 「情報行動」の概念整理を行った三輪は,情報行動を“一般に,情報ニーズ,情報探索,情報利用,情報共有の全体を含むプロセス”と定義している。(三輪真木子. 情報行動: システム志向から利用者志向へ. 勉誠出版, 2012, 205p. 引用は p.23)

- ⁴³ Kuhlthau, Carol Collier. Information Search Process: a Summary of Research and Implication for School Library Media Programs. School Library Media Quarterly. 1989, vol.18, Fall, p.19-25.
- ⁴⁴ Irving, Ann. Study and Information Skills across the Curriculum. Heinemann Educational Books, 1985, 228p.
- ⁴⁵ Stripling, Barbara K.; Pitts, Judy M.. Brainstorms and Blueprints : Teaching Library Research as a Thinking Process. Libraries Unlimited, 1988, 181p.
- ⁴⁶ Eisenberg, Michael B.; Berkowitz, Robert E.. Information Problem-solving: the Big Six Skills Approach to Library & Information Skills Instruction. Ablex Pub, 1990, 156p.
- ⁴⁷ Joyce, Marilyn. Z., Tallman Julie. I. Making The Writing and Research Connection with The I-Search Process. New York: Neal-Schuman. 1997. 150p.
- ⁴⁸ Yucht, Alice. FLIP IT!: An Information Skills Strategy for Student Researchers. Linworth. 1997. 105p.
- ⁴⁹ Pappas, Marjorie L; Tepe Ann E.. Pathways to Knowledge and Inquiry Learning. Libraries Unlimited, 2002, 155p.
- ⁵⁰ Pickering, Thomas Nancy; Crow, Sherry R.; Franklin, Lori L.. Information Literacy and Information Skills Instruction: Applying Research to Practice in the 21st Century School Library. 3rd ed, Libraries Unlimited, 2011, 261p.
- ⁵¹ The Big6 Skills. <http://big6.com/pages/about/big6-skills-overview.php>, (参照 2017-01-10).
- ⁵² Eisenberg, M. B.; Berkowitz, R. E. Curriculum Initiative: An Agenda and Strategy for Library Media Programs. ABLEX Publishing. 1988. 196p.
- ⁵³ 平久江祐司. 学校図書館利用教育における情報活用能力の育成: M. B. Eisenberg の情報問題解決アプローチの視点から. 図書館学会年報. 1997, vol.43, no.4, p.177-186.
- ⁵⁴ Kuhlthau, Carol Collier., Heinström, J., Todd, R. The “Information Search Process Revisited”: is the Model Still Useful? Information Research, 2008, vol.13, no.4. <http://www.informationr.net/ir/13-4/paper355.html>, (参照 2017-01-10).
- ⁵⁵ ヴィゴツキーのロシア語表記は Лев Семенович Выготский であるが、参照元である Kuhlthau の表記にならって英語で記す。
- ⁵⁶ Kuhlthau, Carol Collier. Seeking Meaning: A Process Approach to Library and Information Services. 2nd ed.. Libraries Unlimited, 2004, 264p.
- ⁵⁷ Kuhlthau, Carol Collier. Rethinking Libraries for the Information Age School: Vital Roles in Inquiry Learning. School Libraries in Canada. 2003, vol.22, no.4, 3p. <http://dh43lib4r3.wikispaces.com/file/view/Rethinking+Libraries+for+the+Information+Age+School.pdf>, (参照 2017-01-10).
- ⁵⁸ 視察の報告書として、(1)全国学校図書館協議会カナダ・アメリカ学校図書館視察団. カナダ・アメリカに見る学校図書館を中核とする教育の展開. 全国学校図書館協議会, 2006, 143p., (2)全国学校図書館協議会北米学校図書館研究視察団, 全国学校図書館協議会. シカゴ・ボストン・ニューヨークに見る探究学習を支える学校図書館. 全国学校図書館協議会, 2009, 143p., (3)全国学校図書館協議会オーストラリア学校図書館研究視察団, 全国学校図書館協議会. オーストラリアに見るコミュニケーション力を培う学校図書館. 全国学校図書館協議会, 2011, 143p., (4)全国学校図書館協議会フランス学校図書館研究視察団. フランスに見る学校図書館専門職員:ドキュメンタリスト教員の活動. 全国学校図書館協議会, 2012, 119p.が出版されている。
- ⁵⁹ American Association of School Librarians, 全国学校図書館協議会海外資料委員会. 21世紀を生きる学習者のための活動基準. 全国学校図書館協議会, 2010, 126p.
- ⁶⁰ American Association of School Librarians, 全国学校図書館協議会海外資料委員会. 21世紀を生きる学習者のための活動基準. 全国学校図書館協議会, 2010, 126p. 引用は p.20.

- 61 足立正治. アメリカの学校図書館を通して私たちが考えるべき課題. <http://www.kh.rim.or.jp/~masa-sem/forum/8.12part1.pdf>, (参照 2017-01-10).
- 62 Asselin, Marlene; Branch, Jennifer L.; Oberg, Dianne. Achieving Information Literacy Standards for School Library Programs in Canada. 2006. <http://www.accessola2.com/SLIC-Site/slic/ail110217.pdf>, (参照 2017-01-10).
- 63 Canadian Library Association. Leading Learning: Standards of Practice for School Library Learning Commons in Canada, 2014. <http://www.accessola2.com/SLIC-Site/slic/lisop.pdf>, (参照 2017-01-10).
- 64 Australian School Library Association. "What is a teacher librarian?". ASLA. 2014-02-03. <http://www.asla.org.au/advocacy/what-is-a-teacher-librarian.aspx>, (参照 2017-01-10).
- 65 庭井史絵. "3 学校図書館専門職員の任務". オーストラリアに見るコミュニケーション力を培う学校図書館. 全国学校図書館協議会. 2011, 143p.
- 66 桑田てるみ. "8 学校図書館を活用した学習指導: 学習活動の多様化に対応する学校図書館". オーストラリアに見るコミュニケーション力を培う学校図書館. 全国学校図書館協議会. 2011, 143p.
- 67 Streatfield, David; Shaper, Sue; Markless, Sharon; Rae-Scott, Simon. Information Literacy in United Kingdom Schools: Evolution, Current State and Prospects. *Journal of Information Literacy*. 2011, vol.5, no.2, p.5-25.
- 68 Irving, Ann. Educating Information Users in Schools. London, British Library, Research and Development Department, 1983, 43p.
- 69 Marland, Michael. Information Skills in the Secondary Curriculum. London, Schools Council, 1981, 64p.
- 70 Pat, Avann. Teaching Information Skills in the Primary School. London. E. Arnold, 1985, 114 p.
- 71 Irving, Ann. Study and Information Skills across the Curriculum. Heinemann Educational Books, 1985, 228p.
- 72 Herring, James E.. Teaching Information Skills in Schools. Library Association, 1996, 176p.
- 73 須永和之. イギリスの学校図書館利用教育について: James Herring の PLUS モデルを中心に. 学校図書館学研究. 1999, no.1, p.37-47. 引用は p.45.
- 74 Herring, James E.; 須永和之. 学校における情報活用教育. 日本図書館協会, 2002, 194p.
- 75 須永和之. イギリスの学校図書館利用教育について: James Herring の PLUS モデルを中心に. 学校図書館学研究. 1999, no.1, p.37-47. 引用は p.43.
- 76 Schultz-Jones, Barbara; Oberg, Dianne; 全国学校図書館協議会, 大平睦美, 二村健. IFLA 学校図書館ガイドラインとグローバル化する学校図書館. 学文社, 2016, 188p. 引用は p.122.
- 77 須永和之. フランスの学校図書館. 日仏図書館情報研究. 2013, no.38, p.23-38.
- 78 Schultz-Jones, Barbara; Oberg, Dianne; 全国学校図書館協議会, 大平睦美, 二村健. IFLA 学校図書館ガイドラインとグローバル化する学校図書館. 学文社, 2016, 188p. 引用は p.123.
- 79 Schultz-Jones, Barbara; Oberg, Dianne; 全国学校図書館協議会, 大平睦美, 二村健. IFLA 学校図書館ガイドラインとグローバル化する学校図書館. 学文社, 2016, 188p. 引用は p.125.
- 80 文部省. 小学校における学校図書館の利用指導. 大日本図書, 1970, 208p.
- 81 野末俊比古. 情報リテラシー教育の「これまで」と「これから」: 図書館におけるいくつかの論点(<特集>情報リテラシー). 情報の科学と技術. 2014, vol.64, no.1, p.2-7.

3章 教育課程における「情報の探索と利用の指導」

はじめに

2章では、学校図書館利用指導の中で取り上げられる知識や技能を、1997年以降の学校図書館関係資料を用いて分析し、25分野119項目としてまとめた。また、利用指導は、独立した授業時間の中で行うよりも、教科の課題と関連付けたり統合したりして行うほうが効果的であるとする研究成果についても述べた。つまり、利用指導とは、単に図書館や図書館資料の使い方を教えることではなく、情報を利用して自ら学ぶ生徒を育てることを目標とし、情報の探索と利用のプロセスを含む探究的な学習を通して、さまざまな知識や技能を習得させようとする教育活動と捉えることができる。

しかし、日本の教育現場における学校図書館の役割については、従来より「資料提供」と「読書支援」に注目が集まる傾向があり、「利用指導」すなわち、情報の探索と利用の指導が期待されているとは言えない。全国学校図書館協議会（全国SLA）の理事長である森田盛行も、2008年に公示された学習指導要領に対する論考で、利用指導は情報活用能力の育成に貢献する教育活動であると位置付けつつも、“学校図書館として児童生徒への指導法、教員への支援の方法についてはまだ十分確立しておらず”¹と述べ、教育現場での展開に課題があると指摘している。

その要因として、学校図書館機能の不備、専門職員の不在等が挙げられてきたが、学習指導要領やその解説、教科書や教師用指導書など、教育課程の基盤となる諸資料に、学校図書館員が行う「情報の探索と利用の指導」が位置付けられてこなかったこと、つまり、学校図書館員の役割や利用指導の必要性について、学校教育に携わる者のコンセンサスが形成されてこなかったことも一因と考えられる。

学習指導要領に示された「学び方」に含まれる知識や技能は、利用指導で取り扱う知識や技能と共通点が多い。「学び方」は、総合的な学習の時間で行われる探究学習や、各教科における言語活動を通して身につける知識や技能であることから、利用指導を、教科や総合的な学習の時間のなかで進めていくことは合理的、かつ効果的であると考えられる。しかし、学習指導要領の中で、「学び方」に含まれる知識や技能と教科の内容が関連付けられているのに対して、「学び方」指導と利用指導の関係、教科教育と利用指導の関係については説明されていない。

「学び方」の指導が教科に含まれるのであれば、利用指導も、学校図書館だけが行う教育活動と捉えるのではなく、その一部を教科教員の指導に委ねつつ、学校図書館員が教科教員と一緒に指導する意義を示す必要があると言える。そのためには、各教科に位置づけられた「学び方」の内容を分析し、利用指導で取り扱う知識・技能とどのように重なり合うのか、また、どのような知識や技能が教科の枠組みでは取り上げられないのかを明らかにしなければならないだろう。

そこで、本章では、学習指導要領における学校図書館の位置付けを確認したうえで、各教科の学習指導要領とその解説、教科書、教師用指導書を用いて、教科の枠組みで取り扱われる「情報の探索と利用の指導」の内容を分析し、学校図書館員と教科教員の役割分担を前提とした利用指導のあり方を検討する。

3.1 学習指導要領と学校図書館利用指導

1998 年の学習指導要領改訂で、総合的な学習の時間が創設され、生徒が資料や情報を活用して主体的に学ぶ「調べ学習」や「問題解決学習」が教育課程に取り入れられた。さらに 2008 年に改訂された指導要領では、探究的な学習や言語活動を通して「学び方やものの考え方」を身に付けることが求められている。本節では、情報を探索し利用する能力の育成が、学校教育の目標の一つに掲げられているという状況を踏まえて、学習指導要領のなかで学校図書館の機能と役割がどのように位置付けられているかを分析する。

3.1.1 学習指導要領における学校図書館の位置付け

3.1.1.1 学習指導要領（1998 年公示）

1998 年に改訂された学習指導要領（以下、指導要領、あるいは 98 年版指導要領）は、中央教育審議会による『21 世紀を展望した我が国の教育のあり方について（第一次答申）』（1996 年）²、教育課程審議会による『幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）』（1998 年）³を踏まえて改訂された。基本方針として、①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成、②多くの知識を教え込む教育を転換し、子どもたちが自ら学び自ら考える力の育成、③ゆとりのある教育を展開し、基礎・基本の確実な定着と個性を生かす教育の充実、④各学校が創意工夫を生かした特色ある教育、特色ある学校づくり、の四点が示されている⁴。

中でも、総合的な学習の時間や教科「情報」を創設し、情報化社会に対応した新しい教育への転換、さまざまな情報を活用した主体的な学びの重視が特徴として挙げられる。例えば、総合的な学習の時間は、①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること、をねらいとしている。また、各教科においても「体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、生徒の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること」が配慮すべき事項として書かれている。

この中学校学習指導要領の中に、「学校図書館」の語は 4 か所ある。（下線は筆者による）

第 1 章 総則

第 6 指導計画の作成にあたって配慮すべき事項

(10) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。⁵

第 2 章 各教科

第 1 節 国語

第 3 指導計画の作成と内容の取扱い

(5) 第 2 の各学年の内容の「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の言語活動の指導に当たっては、学校図書館などを計画的に利用し、その機能の活用をはかるようにすること。⁶

第 6 節 美術

第 3 指導計画の作成と内容の取扱い

(4) 学校図書館等における観賞用図書、映像資料などの活用を図るものとする。⁷

第4章 特別活動

第2 内容 A 学級活動

(3) 学ぶことの意義の理解、自主的な学習態度の形成と学校図書館の活用⁸

同じく中学校の指導要領解説を見ると、学校図書館は「資料センター」「学習・情報センター」「読書センター」という3つの機能をもつとされている。しかし、総則並びに特別活動における学校図書館に関する記述は、旧指導要領（1989年公示）と変化がなく、コンピュータ、情報通信ネットワーク、情報機器などの教育用メディアやリソースの活用について多く記述されているのと比較すると、教育課程における位置付けが十分検討されていないと指摘されている⁹。

3.1.1.2 学習指導要領（2008年公示）

2008年に改訂された学習指導要領（以下、指導要領、あるいは2008年版指導要領）の基本方針は、①教育基本法改正等で明確となった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成すること、②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成バランスを重視すること、③道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること、である¹⁰。思考力・判断力・表現力を育成するために必要な学習活動とは、中教審の答申に、①体験から感じ取ったことを表現する、②事実を正確に理解し伝達する、③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする、④情報を分析・評価し、論述する、⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する、⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる、と定義されている¹¹。このような能力を育成するために、「習得」「活用」「探究」という3つのプロセスが示され、各教科と総合的な学習の時間にそれぞれを位置付けることが求められた。

中学校学習指導要領の中に、「学校図書館」の語は5回、「図書館」は1回記述されている。（下線は筆者による）

第1章 総則

第4 指導計画の作成に当たって配慮すべき事項

2 以上のほか、次の事項に配慮するものとする。

(11) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。¹²

第2章 各教科

第1節 国語

第2 各学年の目標及び内容

〔第2学年〕

2 内容

C 読むこと

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ウ 新聞やインターネット、学校図書館等の施設などを活用して得た情報を比較すること。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(2) …その際、学校図書館などを計画的に利用しその機能の活用を図るようにすること。また、生徒が情報機器を活用する機会を設けるなどして、指導の効果を高めるよう工夫すること。¹³

第6節 美術

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

4 生徒が随時鑑賞に親しむことができるよう、校内の適切な場所に鑑賞作品などを展示するとともに、生徒や学校の実態に応じて、学校図書館等における観賞用図書、映像資料などの活用を図るものとする。¹⁴

第4章 総合的な学習の時間

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

2 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

(6) 学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。¹⁵

指導要領解説をみると、総則の項に「第3章:教育課程の編成及び実施―第5節:教育課程実施上の配慮事項」として学校図書館の利活用に関する記述があり、“学校図書館については、教育課程の展開を支える資料センターの機能を発揮しつつ、①生徒が自ら学ぶ学習・情報センターとしての機能と②豊かな感性や情操をはぐくむ読書センターとしての機能を発揮することが求められる”¹⁶とされている。司書教諭は、資料やソフトウェア、コンピュータ等情報手段の導入に配慮し、スペースを確保し、校内での協力体制を構築して、学校図書館を生徒や教師の利用に供することが求められているが、思考力・判断力・表現力を育成するための学習活動にどのように貢献すべきか、というような踏み込んだ記述は見られなかった。

3.1.2 学校図書館から見た学習指導要領

3.1.2.1 指導要領改訂への提言

1998年の学習指導要領改訂に先立ち、全国SLAは二つの審議会答申を分析し、独自の提言をまとめて提出している。まず、「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」(第一次答申)に対する『21世紀の教育を豊かにする緊急提言―学校図書館重視の教育を―』¹⁷では、中教審の答申に初めて学校図書館や司書教諭に対する言及があったことを評価した上で、「心の教育」「学び方の教育」「情報化への対応」という三点に立脚して意見を述べている。特に「学び方の教育」については、「自ら学ぶ能力の育成」(1989年公示学習指導要

領)が現場では定着していないことを指摘し、その改善のために“子ども自身が「自ら学ぶ」学習法を習得すること”¹⁸が必要だとしている。その方法として、『資料・情報を活用する学び方の指導(利用指導)体系表』(1992年)を引用して、資料・情報の活用能力を育成する指導を行うことを提言した(提言③)。つまり、学校図書館が戦後追求してきた利用指導を、子どもたちが必要な資料・情報を収集し、判断し、活用する能力を身につけさせるための教育活動であると位置付け、学習指導要領に示された「学び方を学ぶ」教育活動に他ならないとして、その充実を求めたのである。

さらに2年後、「教育課程の基準の改善の基本方向について」に対して『教育課程審議会の「中間まとめ」への意見書』¹⁹を提出した。ここでは、第一次答申に「学校図書館の運営の中心となることが期待される司書教諭の役割はますます重要になる」と書かれているにも関わらず、「中間まとめ」で司書教諭の役割について一切触れられていないことを指摘し、教育課程の編成、各教科・科目の中に学校図書館をきちんと位置付けるべきだと主張した。特に、学び方の指導について、

「総合的な学習の時間」のねらいは、「自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決する資質や能力の育成を重視し…(略)、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論のしかたなど学び方やものの考え方の習得を重視し」て、主体的な学習を推進するとされている。これは、学校図書館が長年「利用指導」として実践してきた学習活動そのままである」²⁰(下線は筆者)

として、“調べ学習や主体的な学習の場では、図書館の利用が不可欠であり、資料・情報の利用の仕方の指導(学び方の指導)が必要”という見解を示した。

以上のような二度にわたる「提言」「意見書」の提出にも関わらず、1998年に公示された指導要領で、学校図書館関連の記述が旧指導要領と大きく変わることはなかった。

一方、2008年の指導要領改訂にあたっては、2007年11月の中央教育審議会教育課程部会「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」²¹や、2008年1月中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」²²に対する全国SLAの提言は公表されていない。機関誌『学校図書館』にも、1998年の指導要領改訂時のような特集記事は掲載されていない。公示後の2008年7月号と2009年7月号には、それぞれ「[特集]新学習指導要領を読む」「新学習指導要領を活用する」という特集を組み、2009年1月号から2010年2月号まで「新教育課程における学校図書館の活用」という教科別の連載記事を掲載しているが、全国SLA独自の指導要領に対する評価や分析は見つからない。

しかし、『学校図書館』誌の編集部は“「学校図書館」や「読書活動」の直接的な記述がない箇所も、学校図書館担当者以外の教員に対しても学校図書館活用を促す訴求力となる記述が多くある”²³と指摘していることから、具体的にどの部分がどう関わっていくかという点について、次節で「新旧対照表」の項目を分析する。

3.1.2.2 「新旧対照表」に見る全国SLAの考え方

全国SLAは学習指導要領改訂ごとに「学習指導要領における学校図書館関係の記述」新旧対照表をまとめている。1998年版指導要領が公示された後に作成された対照表には、「学

校図書館」という語が直接含まれる4か所以外に、以下の文言が「関連する記述」として掲載されている²⁴。

- 総則―第4 総合的な学習の時間―自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
- 総則―第6 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項―各教科等の指導に当たっては、生徒がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を積極的に活用できるようにするための学習活動の充実に努めるとともに、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。
- 国語―目的や意図に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てるようにすること。その際、広く言語文化についての関心を深めるようにしたり、日常生活における読書活動が活発に行われるようにしたりすること。

一方、2008年版指導要領における「学校図書館関係の記述新旧対照表」²⁵には、より広範囲な文言が学校図書館関連項目として取り上げられている。その内容は、①読書等、読むことに関連する項目、②資料・情報を活用した思考力・判断力・表現力の育成、③教科書以外のさまざまなメディアの利用、④調べ方、学び方など問題解決的・主体的な学習、⑤情報活用能力の育成、の5つに分類することができる。特に、この学習指導要領で「言語力の育成」に重点が置かれ、資料に基づいた考察やレポートでのまとめが各教科や総合的な学習の時間に取り入れられていることを鑑み、教科書以外の資料の利用に関する文言をすべて、学校図書館に関係付けようとしていることが伺える。②④⑤に関する記述を整理すると、図表3-1のようになる。

図表 3-1 全国 SLA が示した新学習指導要領における学校図書館関係の記述（中学校）

分類	学習指導要領における学校図書館関係の記述
② 思考力 判断力 表現力	● 多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を得て、自分の考えをまとめる…(国語) ● 資料を読み取らせて解釈させたり、議論などを行って考えを深めさせたり…(社会) ● 自分の解釈を加えて論述したり、意見交換をしたりするなどの学習活動…(社会) ● 様々な資料を活用して…考察し公正に判断する…(社会) ● 様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し…(社会) ● 数学的活動の過程を振り返り、レポートにまとめ発表する…(数学) ● 資料活用の学習…数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し、伝え合う…(数学) ● 生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明したりするなどの学習活動…(技術・家庭) ● 体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動…(総合的な学習の時間)
④ 問題解決的な学び 主体的な学び 学び方	● 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに主体的に学習に取り組む態度を養い…(総則) ● 体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視する…(総則) ● 課題を設けて追究したり…(社会) ● 生徒の主体的な学習を促し、課題を解決する能力を一層培う…(社会) ● 自ら課題を見だし、解決するための構想を立て…(数学) ● 物質やエネルギーに関する事物・現象を調べる活動を行い…(理科) ● 自然環境を直接調べたり、記録や資料を基に調べたり…(理科) ● 日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり…(美術) ● 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する…(総合的な学習の時間) ● 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるように…(総合的な学習の時間) ● 問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協働して問題を解決しようとする学習活動…(総合的な学習の時間) ● 諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度…(特別活動) ● 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用…(特別活動)
⑤ 情報活用能力	● 情報モラルを身に付け…(総則)(社会)(技術・家庭) ● コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用…(総則)(国語)(社会)(理科)(保健体育)(外国語) ● 広い範囲から情報を集め効果的に活用する能力…(国語) ● 新聞やインターネット、学校図書館等の施設などを活用して得た情報を比較する…(国語) ● 生徒が情報機器を活用する機会を設ける…(国語) ● 資料を選択し活用する学習活動を重視…(社会) ● 目的に応じて資料を収集し、コンピュータを用いたりするなど…(数学) ● コンピュータの構成と基本的な情報処理の仕組みを知る…(技術・家庭) ● 情報通信ネットワークにおける基本的な情報利用の仕組みを知る…(技術・家庭) ● メディアの特徴と利用法を知り…(技術・家庭)

【出典】全国学校図書館協議会. 新学習指導要領における「学校図書館」関連の記述. 学校図書館. 2008, no.582, p.43-49.より作成

このように、全国 SLA は、教科書以外の資料を活用した学びを「学校図書館関係の記述」としているが、それは、単に図書館の資料提供機能に着目してのことではなく、1998 年版指導要領の改訂時に繰り返し主張してきたように、学校図書館が利用指導を通じて“必要な資料・情報を収集し、判断し、活用する能力を身につけさせるための教育活動”²⁶を行ってきたという認識に基づいているからだと考えられる。

3.1.2.3 「調べ学習」と「学校図書館利用指導」の共通点

1998 年当時、全国 SLA の事務局長であった笠原は、“自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる…情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方など…この辺のことは学校図書館が一貫して追求してきたこと”²⁷と述べ、学習指導要領に見られる資料を活用した学びのねらいと、学校図書館利用指導の目標に親和性があること示唆している。日本における学校図書館利用指導は、戦後の学校図書館改革でアメリカより導入され、数度の改訂を経て、現在では（図表 3-2）のような内容を含むとされている。この体系表は、2004 年“生徒自らが学習課題を設定し、情報を収集し、調べ、課題を解決し、結果をまとめ、発表に至るまでの指導内容”²⁸を系統的に示すという目的で作成され、1992 年版の旧体系表と比較すると、主にⅠ-A、Ⅱ-B、Ⅲ-C、Ⅳ-A-C という 5 つの分野が追加されている（図表 3-2 ではグレーに反転された箇所）。

文部科学省は、調べ学習について“様々な資料から必要な資料を探し出すための技術やスキルを学ぶためだけではなく、その情報の中から主体的に目的にあった情報を選び取り、それを分析・評価して情報を再構成、検証し発表していくことが重要”²⁹と定義している。これは、1998 年版指導要領における「調べ方」や「学び方」、2008 年版指導要領における「資料を活用した思考力・判断力・表現力」を調べ学習によって育成することを意味しており、図表 3-2 で示した利用指導の内容と重なる。

しかし、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度」を育てるとした 1998 年版の指導要領下においても、利用指導の理論や実践に広がりや深まりが見られず、課題が残ることについては、本項の最初に示した森田の指摘からも明らかである。

そこで、3 章 2 節では、全国 SLA が利用指導との親和性が高いと指摘している「学び方の指導」と「情報活用能力の育成」の内容について検討する。また、3 章 3 節では、利用指導と、教科における「調べ学習」の指導にどのような相違点があるのか、中学校社会科（地理的分野）をとり上げて分析する。

図表 3-2 「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」の項目（中学校）

I. 学習と情報メディア	II. 学習に役立つメディアの使い方	III. 情報の活用の仕方	IV. 学習結果のまとめ方
A. 学習の方法を考える (いろいろな学習方法／ 学習計画の立て方)	A. 図書館を利用する (分類の仕組み／配架の 仕組み／目録の種類／レ ファレンス・サービス)	A. 情報を収集する (各種メディアの活用／人 的情報源の活用)	A. 学習の結果をまとめる (評価した情報の整理／ 伝えたいことの整理／自 分の考えのまとめ方／レ ポートのまとめ方／紙面 によるまとめ方／コンピュ ータを使ったまとめ方／資料 リストの作成)
B. 情報・メディアの種類 や特性を知る (印刷メディア／視聴覚メ ディア／電子メディア／人 的情報源)	B. 各種施設を利用する (博物館／資料館／美術 館／行政機関／その他 の施設)	B. 効果的な記録の取り 方を知る (ノートの作成法／カード の作成法／切り抜き・ファ イルの作成法／AV 機器 等を使った記録の取り方 ／コンピュータを使った記録 の取り方)	B. まとめたことを発表す る (レポートによる発表／口 頭による発表／展示・掲 示による発表／実演によ る発表／写真・AV 機器を 使った発表／コンピュータを 使った発表)
C. 図書館の役割を知る (学校図書館／公共図書 館／その他の施設／ネッ トワーク)	C. 目的に応じてメディア を利用する (参考図書／新聞・雑誌 ファイル資料／視聴覚メ ディア／電子メディア)	C. 情報を分析し、評価す る (目的に応じた評価／複 数の情報の比較・評価)	C. 学習の過程と結果を 評価する (調査・研究の方法／調 査・研究の過程／成果の 評価／相互評価)
		D. 情報の取扱い方を 知る (インターネット／著作権 ／情報モラル／個人情 報)	

【出典】全国学校図書館協議会編. 情報を学習につなぐー情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説. 全国学校図書館協議会, 2008, 47p より作成

3.2 学校図書館利用指導の近接領域

前節で見てきたように、1998（平成 10）年と 2008（平成 20）年に改訂された学習指導要領では、情報や資料を活用した主体的な学習が重視されているにもかかわらず、学校図書館利用指導の意義や必要性が取り上げられていない。指導要領では、情報の探索と利用に必要な知識や技能は、「学び方」や「情報活用能力」という用語で説明され、各教科や総合的な学習の時間で習得するとされている。そこで本節では、利用指導の近接領域と言える「学び方の指導」と「情報活用能力の育成」を取りあげてその内容を整理し、利用指導との共通点と相違点を明らかにする。

3.2.1 学び方の指導

3.2.1.1 「学び方」とは

学び方の学習とは“記憶中心の知識詰め込み型学習を批判し、知識獲得の仕方そのものを学ばせようとする学習のあり方”³⁰と定義され、学習指導要領では 1998 年版からその指導の必要性が明記されている。遡ると、20 世紀初頭の自学主義教育、第一次世界大戦後の大正新教育運動、第二次大戦後の戦後新教育運動などでも、主に経験主義教育の文脈において「学び方」の指導が論じられ、一部の学校で実践されてきた。

このような考え方の背景には、「構成主義」に基づく教育理論がある。構成主義とは、客観的な知識の構造よりも、学習者の理解の仕方、すなわち認知の領域に焦点を当てる教育理論で、“学習とは学習者自身が知識を構築していく過程である”、“知識は状況に埋め込まれている”、“学習は共同体の中での相互作用を通じておこなわれる”という視点を有する³¹。構成主義的学習観において学習者は、構造化された知識を覚えるのではなく、主体的に問題を見つけ、周囲と相互に関わり合いながら、自ら答えを探ることができる力や、学習過程を俯瞰するメタ認知能力を獲得することが期待されている。

本稿 2 章 3 節で取り上げたように、1980 年代のアメリカで図書館利用教育のアプローチが大きく変化した時、その理論的基盤となったのは、この構成主義的学習観であった³²。それまで図書館では、文献利用指導（bibliographic instruction）と呼ばれる知識伝達型の利用教育が行われてきた。しかし、その成果が疑問視されると、図書館情報学の研究者や実践者たちは、問題解決のプロセスや情報探索における認知の領域に注目するようになった。

社会的構成主義を唱えたデューイが、『学校と社会』（1899 年）で校舎の中央に図書館や博物館を配置して見せたように³³、アメリカの学校では、生徒が主体的な学習を行う「場」として学校図書館の必要性が認知されてきた。学校図書館も、1980 年代以降の情報行動研究の成果を踏まえ、生徒の情報探索プロセスに焦点を合わせた利用指導のあり方を模索する中で、構成主義に基づく教育理論である「問題解決学習」と利用指導を統合させる動きを加速させたのである。

例えば、情報探索を認知的な意味づけのプロセスと捉えていたクルトー（Carol C. Kuhlthau）は、生徒の情報探索を再定義するための理論的枠組みとして構成主義に着目し、図書館利用教育を再構築している³⁴。クルトーは、自身の情報探索プロセスモデル（ISP モデル）を学習という文脈に埋め込むために、「導かれた探究学習（Guided Inquiry）」という概念を提唱しているが、このような問題解決型の学習で生徒が学ぶのは、「情報リテラシー（information literacy）」、「学び方の学習（learn how to learn）」、「教科の内容（curriculum

content)」、「リテラシー能力 (literacy competence)」、「社会的スキル (social skill)」であるとした³⁵。また、学校図書館における情報リテラシー教育について論じた河西由美子は、

米国などでは、構成主義的な学習観が視聴覚教育や、メディア教育、学校図書館などと結び付いて展開したため、各種の教育プログラムや、問題解決学習や探究(マ)学習などの学習スタイルが試行され、そこにメディアの技術者や学校図書館専門職が関与して、学習の過程において、まさに手続的に学習や情報の問題を解決するモデルが構築されてきた。³⁶

と述べ、アメリカの学校において、主体的な学習の過程で求められる問題解決の仕方や手続的技能の習得に図書館が深く関わってきたことを指摘している。

一方、「学び方を学ぶ」という考え方が日本で広く知られるようになったのは、ブルーナーによる『教育の過程』(1963年)が紹介された1960年代で、1966年には日本学び方研究会が発足している。ブルーナーの学習論は、「教科の構造」をつくりあげている根源的な原理を学習することによって、大量の一般的転移が得られるとするもので、現代化された教科の枠組みに沿って行う系統学習の重要性を指摘したところに特徴がある。その方法として、教師によってあらかじめ設定された探究や発見(再発見)の過程で行う問題解決学習を重視したという点で、経験主義教育における子どもの興味関心を中心とする問題解決学習とは一線を画している³⁷。

日本における「学び方」学習の捉え方は、学び方研究会が提唱した「さしすせそ学習(探す→調べる→筋道立てて考える→整理してまとめ、確かめる→そうかどうか試す)」に見られるように、問題の把握に始まる学習段階の設定と、それに対する子どもへの意識化と定着など、問題解決に必要な思考・技能の指導であったり、やる気や自主的な学習意欲の形成など生活指導との結び付きが強い³⁸。例えば、神戸大学附属住吉中学校で作成・配布されている『How to Study 豊かな学びを育む』(2005年)という学び方のテキストブックには、各教科における学習の心構えやノートの取り方、予習復習の仕方、各教科に共通する学び方として文房具の揃え方や時間管理、テストの受け方や図書館の利用法、ものの考え方や課題解決の方法、自由研究の取り組み方など、学習態度や方法を網羅したさまざまな項目が掲載されている³⁹。

学力としての「学び方」は、柴田が論理的側面と技術的側面に分けて整理している。論理的側面とは、基本的な思考様式を指し、推論的思考様式、実験的思考様式、歴史的思考様式、それらを結び付ける批判的思考様式で構成される。一方、技術的側面とは、学び方の実践的知識を指し、辞書の使い方、略号の使い方、発表の仕方、そのレトリック、カードの作り方、索引の作り方、分類カードシステムやデータベースの使い方、原稿の書き方、資料収集の仕方、情報機器の使用法、数表やグラフの読み方などが含まれるとされる⁴⁰。

このように、「学び方」の構成概念については諸説があり、また含まれる要素も様々である。本章は、教育課程で取り扱われている情報の探索と利用に関する知識や技能とその指導について検討することを目的としているため、総合的な学習の時間のねらいであり、これからの子どもたちが身に付けるべき学力として定義されている「学び方やものの考え方」に含まれる要素を「学び方」の構成概念として捉える。

3.2.1.2 学習指導要領における「学び方」の位置付け

1996 年「21 世紀を展望した我が国の教育のあり方について（第一次答申）」で、「ゆとり」の中で自ら学び自ら考える力など「生きる力」を育成することが今後の教育方針として提言された（中央教育審議会）⁴¹。さらに、1998 年「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）」では、「学び方」を身につけさせる重要性が以下のように述べられている。

これからの学校教育においては、これまでの知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと、その基調の転換を図り、子どもたちの個性を生かしながら、学び方や問題解決などの能力の育成を重視するとともに、実生活との関連を図った体験的な学習や問題解決的な学習にじっくりとゆとりをもって取り組むことが重要である。⁴²

これを受けて、文部科学省は 1998 年に学習指導要領を改訂し、教科横断的かつ問題解決的な学習活動を通して「生きる力」を育む授業として「総合的な学習の時間」を新設した。この「総合的な学習の時間」のねらいは

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

であり、「学び方」は、「情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方」と定義されている⁴³。

このような「学び方」や「ものの考え方」は、各教科や道徳、特別活動の中でも、それぞれの特質に応じて指導すべきものであり、「総合的な学習の時間」はあくまでも、教科等の学習を通じて身に付けた知識や技能を統合する機会として捉えなければならない。そのため、各教科でも観察・実験、調査、見学、課題学習などの活動を一層重視するとし、例えば“国語科では説明や討論などを充実し、自分の考えをもち論理的に表現する能力の育成、社会科では学び方を学ぶ学習の充実、数学科では数学的活動や課題学習などの充実、理科では目的意識をもった観察・実験や探究的な活動などの充実、技術・家庭科では情報に関する内容の必修化”⁴⁴といった方向性が示されている。ここでいう「教科の特質に応じて」とはどういうことか、中学校各教科の 1998 年版指導要領解説をみることにする。

まず、国語科では、“文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読みとる能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する”⁴⁵という基本方針が示されている。また、実践的な指導の充実を目指して、説明や話し合い、記録や報告をまとめる学習が言語活動例として示されている。具体的な指導内容として挙げられているのは、「目的や意図に応じて文章を読み、広い範囲から情報を集め、効果的に活用する」「自分にとって必要な情報を取捨選択する」「事実と意見の関係に注意してその論理的な構成や展開をとらえ、理解する」「根拠を明らかにし、論理の展開を工夫して書く」などであり、これらは「学び方」の中の「まとめ方や報告、発表、討論の仕方」に関わる

項目である。また「書くこと」の中には、課題や根拠を見付けるために、コンピュータや学校図書館等を活用して資料・情報を収集すること、カードやメモに記録した情報を分類・整理すること、「読むこと」の中には、目的や必要に応じて要約すること、表題や目次を読んで必要な情報の有無を判断すること、引用等著作権に配慮することなども含まれており、これらは「情報の集め方」や「まとめ方」に関する項目と捉える事ができる。

次に、「学び方を学ぶ」重点教科とされた社会科では、(1)内容の厳選、(2)学び方を学ぶ学習の充実、(3)社会の変化への対応、(4)三分野を関連付けて扱う項目の設定、の4点が、教科の基本方針として示されている⁴⁶。社会科という教科の特質を踏まえた「学び方」とは、地理的分野を例に挙げると、「地域的特色をとらえるための視点や方法」を指し、“(地域的特色を)どのように見出し、どのように調べ、追究し、表現していくか、地図の活用、地図化の工夫を柱にして、地域的特色を捉える視点や方法を習得すること”⁴⁷とされている。特に「地域の規模に応じた調査」という大項目が、調べ方、学び方を指導するために設定されているが、この中で、地理的な特質を踏まえた「学び方」が、一般的な調査の段階と比較しながら説明されている(図表 3-3)。

図表 3-3 一般的な調査と地理的調査の違い

問題解決の過程	一般的な調査	地理
① 資料の収集、整理	各種資料の収集、観察、聞き取りによる情報の収集、資料の選択、比較・分類、そして課題の発見など	地理情報が対象、地域的特色を明らかにする目的で資料を選択・分類し課題発見
② 課題の設定と考察	予想・仮説、分析、総合など	地理の見方や考え方に基づく
③ 調べた結果の整理・伝達	記述・説明、図化、報告・発表など	地図の活用

【出典】文部科学省、中学校学習指導要領(平成10年12月)解説社会編(一部補訂版)、大阪書籍、2004、205p.

数学では、自ら学び自ら考える力の育成を謳い、“自ら課題を見つけ、主体的に問題を解決する活動を通して、数学的な見方や考え方をさらに深めていくことができるよう、課題学習を一層活発に行う”⁴⁸として、論理的な思考力や、事象を数理的にとらえ処理する手立てや考え方の指導を重視するという趣旨が述べられている。課題学習とは、“作業、観察、実験、調査などの活動を重視し、生徒が自ら課題を見つけ、主体的に解決していく問題解決の能力を高め、数学的な見方や考え方を一層深めていく”⁴⁹ことであり、演繹的・帰納的な考え方や類推、根拠を基に論理的に考察すること、正しく推論して分かりやすく表現することなど、思考や表現に関わる事項、つまり「まとめ方」に関する項目が含まれている。

理科では、“生徒の主体的な自然に関する働きかけ、それによる課題発見を促し、生徒自身が自然からの情報収集や観察、実験の仕方などを工夫して自然の調べ方を身に付けるとともに、問題解決をすることができる能力や態度を育成すること”⁵⁰とし、特に科学的に調べる態度や観察・実験の技能を高めることに主眼が置かれている。また、数値データを処理・グラフ化し、総合的に判断して考察する力や、科学レポートの作成や発表など表現する力についても言及されている。科学的な探究においては、①問題の発見、②仮説の設定、③実験の計画と実施、④機器などの適切な操作、④適切な記録の取り方、⑤データの処理と解釈、⑥モデルの形成、⑦規則性の発見、などの技法が必要であり、コンピュータ等情

報機器を適切に活用しながら、プロセスを繰り返すことによって自然科学の「学び方」が身に付くとされている⁵¹。

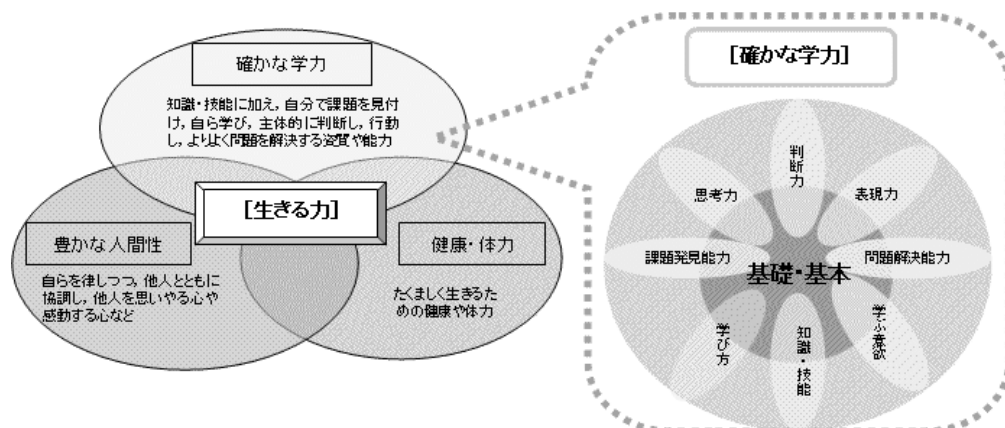
技術家庭科では、コンピュータに関する項目が新設され、“情報手段の特性を生かした適切なコンピュータの利用を通して、コンピュータ活用の基礎的な知識と技術を身に付けさせ、情報と生活とのかかわりや情報モラルについて理解させるとともに、情報手段を主体的に活用する能力と態度を育成すること”⁵²をねらいとしている。特に、コンピュータを使って行う情報の受信・処理・発信を中心に、著作権や個人情報の保護、ソフトウェアを活用した文書処理、表計算処理、図形処理、画像や動画等の制作・加工、データの記憶や保存、検索を始めとするデータベース処理、インターネット等情報通信ネットワークの利用、マルチメディアを活用した表現や発信などが扱われている。

このように、1998年公示の学習指導要領において「学び方」は、「情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方」と定義され、総合的な学習の時間における教科横断的・問題解決的な学習プロセスを経て身に付けるものであるが、その基礎・基本は各教科がそれぞれの特質に応じた観点から指導すると位置付けられている。

3.2.1.3 「学び方」指導の課題

2003年、国際的な学力試験の結果が低迷したことなどに端を発した学力低下論争を受けて、学習指導要領の一部改訂が行われた。まず、学力とは何かという議論に応える形で、「生きる力」の知的側面が、「確かな学力」として再定義されている。これから子どもたちが身に付けるべき「確かな学力」とは、“知識・技能に加え、自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力”⁵³であり、その構成要素として「知識・技能」「学び方」「学ぶ意欲」「問題解決能力」「課題発見能力」「思考力」「判断力」「表現力」が挙げられている（図表 3-4）。

図表 3-4 生きる力と確かな学力



【出典】中央教育審議会．“初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）”．文部科学省．2003-10-07，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/f_03100701.htm

さらに、このような「確かな学力」を育成するにあたっては、教科と「総合的な学習の時間」の連携が不可欠であることを明確に示すために、「総合的な学習の時間」のねらいに

- (1) 各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。⁵⁴

という一文が加えられた。

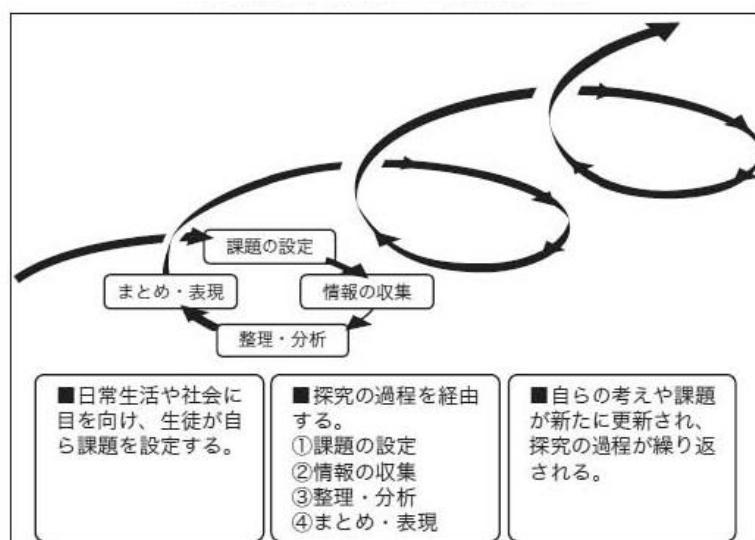
「学び方」を含む「確かな学力」を身に付けさせるための指導を、教科と「総合的な学習の時間」が連携して行うという趣旨は、2008年の学習指導要領改訂時にさらに強調された。以下に、2008年公示の学習指導要領の解説から、その方向性を読み解く。

まず、「総合的な学習の時間」が、各教科や道徳と同じように独立した扱いとなった(1998年版指導要領では、総則の中の一節)。“自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力の育成”“学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働的に取り組む態度を育てる”⁵⁵というねらいは1998年版指導要領と同じだが、各教科で基礎・基本の習得と、身に付けた知識や技能を活用する学習活動を行い、それらを教科横断的に統合するために「総合的な学習の時間」で探究的な学習に取り組む、という段階的なつながりが示された。

探究的な学習とは、以下のような知的営みであり、図表 3-5 のようなプロセスをたどると定義されている。

自分にとって意味や価値のある課題を設定する。その課題について、体験活動をしたり、調べたりしながら、必要な情報を取り出したり集めたりしていく。さらには、得られた幅広い情報を整理・分析したり判断したりしながら、既習の知識や経験と結び付けていく。こうして生み出された自分の考えや意見、発見したことなどをまとめ、表現する。それを他者と交換し合い、自らの考えや意見を更新したり、協同して実践に移したりしていく⁵⁶

図表 3-5 探究的な学習における生徒の学習の姿



【出典】文部科学省．“中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”．2008-07，124p．<http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/tyuusougou.pdf>，引用は p.15-16.

探究的な学習に必要な「学び方」の定義も改められ、「課題の見付け方やつくり方、目的や意図に応じた情報の集め方や調べ方、整理・分析の仕方、まとめ方や表現の仕方、報告や発表・討論の仕方」「見通しや計画の立て方、記録のとり方や活用の仕方、コミュニケーションの取り方、振り返りや意思決定、自己評価の仕方」とされた（下線部は、1998年版指導要領と比較して新たに加わった要素）。

探究的な学習の質を高めるためには、各教科で観察・実験やレポートの作成、論述といった教科の知識や技能を活用する学習活動を充実させる必要があり、その際には、情報を分析するような言語活動、例えば“集めた情報を共通点と相違点に分けて分類したり、時間軸に沿って並べたり、原因と結果に分けたり、変化や結果を予測したり、現実社会の事象に当てはめたり、多面的・多角的に分析したりする”⁵⁷作業を取り入れることが大切である、というのが2008年版指導要領の趣旨である。

以上のような、1998年版指導要領の一部ならびに全面改訂のポイントから、文部科学省が考える「学び方」指導の課題が見えてくる。それは、①探究学習に必要な知識や技能の指導が各教科で不足していたこと、②教科と「総合的な学習の時間」の関連付けが不十分であったこと、である。特に①については、“体験から感じ取ったことを表現する、事実を正確に理解し伝達する、概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする、情報を分析・評価し、論述する、課題について、構想を立て実践し、評価・改善する、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる”⁵⁸というような学習活動を教科で行わなければ、総合的な学習の時間における探究活動が充実しないと指摘している。

2008年版指導要領が、探究学習を充実させるための「学び方」指導で注目したのは、情報の分析・処理・加工・表現に関する項目である。しかし、問題解決や探究のプロセスで必要な分析・処理・加工・表現の知識や技能は、1998年版指導要領でも各教科の指導項目として取り上げられており、教科で身に付けた力を総合的な学習の時間に生かすことも繰り返し求められている。それでも連携不足・指導不足というのであれば、それは教科と総合的な学習の時間の問題だけではなく、教科の枠組みでは指導しきれない「学び方」の知識や技能があるのではないかと推察される。しかし2008年の改訂では、探究学習に求められている「学び方」あるいはその指導方法を、教科以外—例えば、利用指導を通じて「学び方」の指導に寄与しようとする学校図書館—の観点から検討し、課題を見つけようとする姿勢は見られない。

3.2.1.4 「学び方」指導と学校図書館利用指導

2012年4月から完全実施される学習指導要領下で、「学び方」指導の課題をどのように解決していけばよいかを考えるにあたって、同じように「学び方」指導に取り組んでいる学校図書館利用指導との連携について検討し、その可能性について述べる。

日本の学校図書館と「学び方」の関係については、1998年版指導要領に、以下のように説明されている。

学校図書館などを活用して学習することを通して、資料の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表の仕方などの学び方や考え方を身に付けるとともに、自らの力で論理的に考え判断する力、自分の考えや思いを的確に表現する力、自分の考えや思いを的

確に表現する力、今まで気付かなかったことや分からなかったことについて新たに
関係があることなど発見し解決する能力などを身に付けることができる。⁵⁹

しかし、学校図書館が果たすべき役割については、“総合的な学習の時間における問題の
解決や探究活動の過程では、様々な事象について調べたり探したりする学習活動が行われ
るため、豊富な資料や情報が必要になる”⁶⁰として、そのための環境整備に関する記述しか
見られない。学校図書館は本来、“図書館資料の利用その他学校図書館の利用に関し、児童
又は生徒に対し指導を行う”（下線は筆者）ことによって“教育課程の展開に寄与する”（学
校図書館法第2条、及び第4条）とされているが、総合的な学習の時間と利用指導の関係
については述べられていない。

自己教育力がキーワードとなった1989年公示の学習指導要領を分析し、利用指導と教科
教育の連携によって問題解決能力・自己学習能力・情報活用能力の育成が可能であること
を示した平久江祐司は、全国学校図書館協議会が作成した利用指導体系表の活用が有効で
あると述べている⁶¹。全国SLAによる体系表は、2004年に改訂され、「情報・メディアを
活用する学び方の指導体系表」として、①学習と情報メディア、②学習に役立つメディア
の使い方、③情報の活用の仕方、④学習結果のまとめ方という4つのプロセスと13の指導
領域がある。この体系表には、「学び方」の各プロセスと項目が含まれているだけではなく、
1998年版教科書に不足していた「情報の探し方」に関する指導法が解説されている⁶²。

また、1998年文部省の「学校図書館情報化・活性化推進モデル地域事業」に採択された
千葉県袖ケ浦市では、小学校・中学校用に配布している「学び方ガイド」⁶³を、学校図書館
員と教員がそれぞれの知見を生かし協力して作成している。そして、このガイドラインに
沿って、各教科が「集める」「整理する」「まとめる」「発表する」学習を行ったり、総合的
な学習の時間に司書教諭が中心となって調べるプロセスを指導したりすることによって、
問題解決的な学習に大きな成果を挙げている⁶⁴。

このことから、学校図書館利用指導を、教科における「学び方」指導と連携させること
は、探究型学習の充実に効果があると考えられる。しかし、2008年版指導要領での位置付
けが十分ではないため、1998年版教科書と同様、新しい教科書にも利用指導との連携につ
いて触れられない可能性が高い。教科書における「学び方」指導の取り扱いについては、
本章第4節で検討する。

3.2.2 情報活用能力の育成

3.2.2.1 情報活用能力とは

次に、学校図書館利用指導の内容と共通点が多い「情報活用能力の育成」について検討
する。本稿第1章2節2項で、アメリカなど欧米の図書館では、利用者教育と情報リテラ
シー教育を関連づけて議論することが多いと指摘したが、日本の学校教育で、情報リテラ
シーとほぼ同義で用いられているのは、「情報活用能力」という語である。

日本の教育関連公的文書において、「情報リテラシー」の語が初出したのは、1986年の「臨
時教育審議会経過概要」の第7章「情報科への対応」とされている⁶⁵。しかし、同年発表さ
れた臨時教育審議会第2次答申では、「情報リテラシー」ではなく「情報活用能力」が用い
られ、“情報および情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質”⁶⁶と

定義された。その具体的な内容は、1990年に文部省が作成した『情報教育に関する手引』に、次のように示されている。

- (1) 情報の判断，選択，整理，処理能力及び新たな情報の創造，伝達能力
- (2) 情報化社会の特質，情報化の社会や人間に対する影響の理解
- (3) 情報の重要性の認識，情報に対する責任感
- (4) 情報科学の基礎及び情報手段（特にコンピュータ）の特徴の理解，基本的な操作能力⁶⁷

学校教育の文脈ではこの定義が長く引用され，議論の土台となった。1996年には中央教育審議会第一次答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』で，高度情報通信社会における「体系的な情報教育」の必要性が示され，1997年の「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報化の推進等に関する調査研究協力者会議」の第一次報告『体系的な情報教育の実施に向けて』では，情報教育の目標が以下の3つの観点に整理された。

- (1) 情報活用の実践力
課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収収・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力
- (2) 情報の科学的な理解
情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解
- (3) 情報社会に参画する態度
社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度⁶⁸

『情報教育に関する手引』（1990年）も，学習指導要領改訂に合わせてそれぞれ改訂された。『新・情報教育に関する手引』（2002年）では，各学校段階あるいは各教科における指導内容が示され，次の『教育の情報化に関する手引』⁶⁹（2010年）では，さらに踏み込んで，「情報活用能力」がどのような能力であり，そのような力を身に付けさせるために，どのような学習活動を行えばよいかが解説されている。

『教育の情報化に関する手引』（2010年）を見ると，各学校や教育委員会の指導計画作成や実践を支援するために，「情報教育のあり方」「教科指導におけるICT活用」「校務の情報化」の3要素について，具体的な取り組みの例が挙げられている。学習指導要領において，情報教育は，特定の教科が指導するだけではなく，各教科でも適宜取り扱うことが求められているため，同手引では，教科ごとに学習指導要領の関連記述を抽出し（第2章 学習指導要領における教育の情報化），それぞれ対応する学習活動の例が示されている（第4章 情報教育の体系的な推進）。

この手引が審議される過程で提出された配付資料のなかに，上述した情報活用能力の3観点に沿って，卒業するまでに身に付けておくべき能力を示した「情報活用能力の規準リス

ト」がある（図表 3-6）。これを見ると、文部科学省が情報活用能力をどのように捉えているかを理解することができる。

図表 3-6 情報活用能力の規準リスト（中学校）

A 情報活用の実践力	課題や目的に応じた情報手段の適切な活用	- 学習活動や日常の活動において、目的に応じてコンピュータやアプリケーションソフトを選択し、利用できる 10分間に300文字程度の文章が正確に入力・編集できる - データの保存形式を変更し、フォルダ構成を考えて様々な保存先に保存できる - 情報機器で収集した情報を選択・評価・編集し、報告や発表に利用できる - 利用の目的に応じて周辺機器をコンピュータに接続し、使用できるように設定できる
	必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造	- インターネットやデータベース、各種ファイル内から必要な情報を効果的に検索することができる - 観察、実験等、あるいは通信ネットワークから集めたデータをグラフに表し、比較したり傾向や規則性を調べたり予想したりできる - 観察や実験、あるいは通信ネットワークから集めたデータを集計し、基本的な統計処理を行うことで比較したり傾向や規則性を調べたり予想したりできる - 文字、写真、表、グラフ等を組み合わせてレポートやポスターを作成し、分かったことや自分の主張を表現できる - 音声や動画など多様なメディアを複合し、効果的な電子ファイルに編集できる
	受け手の状況などを踏まえた発信・伝達	- メーリングリストやアドレス帳、ファイル添付など電子メールの機能を効果的に活用する方法を知り、経験する - 電子メールや掲示板、動画通信などを用いて、自分の考えや気持ちを正確に伝えたり、相手の気持ちを読み取ったりしてコミュニケーションができる - 文字の大きさや色遣い、画像の配置などレイアウトを工夫してわかりやすいWebページ、プレゼンテーション資料、アニメーションなどを作成し、自分の考えを発信できる - 課題や目的に応じて、中学校で学んだ情報手段を適切に活用して発信（発表）内容の評価や改善ができる
B 情報の科学的理解	情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解	- コンピュータの構成と基本的な情報処理の仕組みを理解できる - 情報通信ネットワークにおける基本的な情報利用の仕組みを理解できる - デジタル化の方法について知り、その特性や利点を理解できる - コンピュータを利用した計測・制御の基本的な仕組みを知ることができる
	情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解	- メディアの特徴と利用方法を知り、制作品の設計に活かすことができる - 信憑性を確かめる方法を知り、いくつかの方法で自分の扱う情報の信憑性を確かめることができる - 情報処理の手順を考え、簡単なプログラムが作成できる - 情報を伝えるメディアの特性や、発信者から受信者までの情報伝達の過程を理解し、それを元に情報の真偽や質を吟味できる
C 情報社会に参画する態度	社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解	- 報道される事件や事故から情報や情報手段、情報技術が社会に及ぼしている影響について理解できる - 情報に関する技術が多く産業を支えるとともに、社会生活や家庭生活を変化させてきたことを理解できる - 日常的な生活において情報や情報機器がどのような役割を果たしているか、事例をもとに理解できる - 不正アクセスや迷惑行為の実態を知り、ウイルス対策や暗号化など基本的なセキュリティ対策の必要性を理解できる
	情報モラルの必要性や情報に対する責任	- 受け手の気持ちや考えを尊重してコミュニケーションができる - 情報発信に責任を持ち、適正な情報が発信できる - 情報通信ネットワーク利用上の基本的なルールや法律を遵守し、著作権や知的財産権を尊重できる - 安全性の面から情報社会の特性を理解し、危険を回避するとともに、万一問題に遭遇した場合にも、主体的に解決を図る方法を知る - 自他の個人情報の重要性を知り、個人情報を守るために正しく対処できる - 情報機器の使用による健康とのかかわりについて考え、情報機器の利用時間や頻度を自己管理できる
	望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度	- 情報を活用することの意義を理解し、積極的に情報共有をはかることができる - メディアから収集した情報には発信者の意図や背景があることを知り、批判的にとらえることができる - 情報に関する技術を適切に評価し、活用能力と態度を身に付けることができる

【出典】文部省初等中等教育局．「第1節児童生徒に身に付けさせたい情報活用能力」．「教育の情報化に関する手引」
 検討案. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/056/shiryo/attach/1249670.htm.

学習指導要領解説総則編によると、このような「情報活用能力」を育成するため、中学校では「技術・家庭科」が「B 情報の科学的な理解」の内容を中心に扱い、その他の教科は、技術・家庭科や教科「情報」と相互に関連を図りつつ、「A 情報活用の実践力」や「C 情報社会に参画する態度」に関することを取り扱うとされている。

『教育の情報化に関する手引』の「第4章 情報教育の体系的な推進」には、教科別に取り組むべき学習活動が例示されている。例えば、学校図書館利用指導の内容と親和性が高い「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造」は以下のように取り扱われる。

国語科

- 学習の際に、説明する資料を作成する活動を通して、コンピュータを活用し、グラフや表、写真や図などを取り入れたわかりやすい資料づくりにより、多様な表現の工夫ができる能力を身に付けさせる
- インターネットで情報を収集したり、集めた情報の真偽や適否を見極めながら目的に応じて整理・分類したりするとともに、新聞や雑誌、図書などから得た情報と比較し、それぞれの特徴を理解する能力を身に付けさせる

社会科

- コンピュータで地理情報システム（GIS）を用いて地図化したりグラフ化したりすることを通して、情報の処理の仕方を工夫する能力を身に付けさせる
- 主題を多面的・多角的に調査、考察、探究する際にインターネット上の情報などを読み取り、有効に活用するとともに、調査結果を分析・整理してまとめ、プレゼンテーションをするといった活動を通して、様々な情報源から収集した情報を比較し、必要とする情報や信頼できる情報を選んだり、ICT を用いて情報の処理の仕方を工夫したりすることができる能力を身に付けさせる

数学科

- インターネットを使って必要な資料を集め、表計算ソフトで整理し、ヒストグラムを作成したり代表値を求めたりして資料の傾向を読み取ることを通して、課題を解決するために必要な情報を収集して選んだり、ICT を用いて情報の処理の仕方を工夫したりする能力を身に付けさせる

美術科

- 写真・ビデオ・コンピュータなどの映像メディアの積極的な活用を図ることを通して、効果的なメディアを選び、それらを様々な表現や発想・構想に生かす能力を身に付けさせる

技術・家庭科

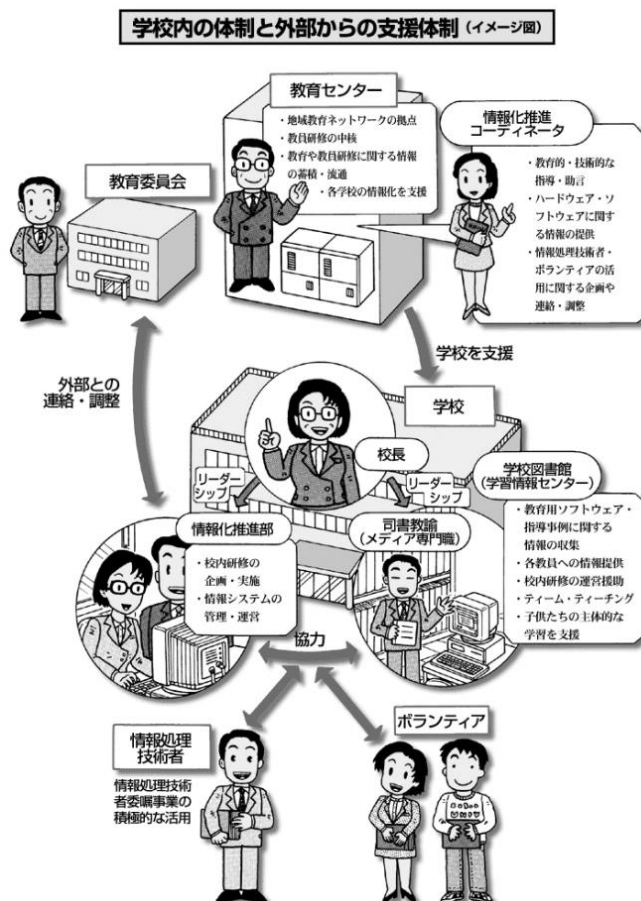
- インターネットを活用し、多くの情報の中から適切な情報を収集・整理し、物資・サービスの適切な選択ができる能力を身に付けさせる⁷⁰

すなわち、情報活用能力に含まれるさまざまな知識や技能は、前述した「学び方」と同様、各教科の内容に含まれており、教科教員による指導を通じて習得するという見取り図が描かれているのである。

3.2.2.2 情報活用能力の育成と学校図書館利用指導

情報活用能力を構成する要素を、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3つに整理して示した『情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議（最終報告）』（1998年）には、司書教諭を「メディア専門職」、学校図書館を「学習情報センター」とする環境整備と支援体制のイメージ図が掲載されている（図表 3-7）。情報教育のあり方を議論する過程で、学校図書館や司書教諭の役割が検討されていたことを示しているが、学校図書館機能や司書教諭制度の不備もあって、学校図書館と情報教育の連携がこの図のような形で実現しているとは言えない。情報教育と学校図書館の関係について論じた河西は、両者の連携に対する期待が高まったこの時期に、学校図書館界から明確な反応がなかったことによって、1960年代のアメリカで視聴覚教育と学校図書館が結びついて「学校図書館メディアセンター」が生まれたような状況を再現することができなかったと述べている⁷¹。

図表 3-7 学校内の体制と外部からの支援体制



【出典】情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進などに関する調査研究協力者会議．“学校内の体制と外部からの支援体制（図）”．情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて（情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 最終報告）．1998-08．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801c.htm．

実際に、その後に発行された情報教育に関する手引等において、学校図書館の存在感はほとんど失われている⁷²。例えば、『教育の情報化に関する手引』（2010年）で、情報活用

能力育成と教科教育の関係が明示されているのとは対照的に、利用指導への言及はまったくない。「第6章 校務の情報化の推進」「第2節 校務の情報化が生み出す学校の変容」の中で、司書教諭と学校司書が取り上げられているが、メディア専門職として教育的な活動を行う主体としてではなく、校務の情報化によって学校図書館運営の効率化を進め、情報提供の機能を充実させる役割が期待されているにとどまる。また、司書教諭等の業務を“学校図書館での図書・資料の収集・管理，児童生徒への読書指導，児童生徒及び教職員への紹介”⁷³としていることから、利用指導を通じて情報活用能力の育成に資するという役割が期待されていないことが分かる。

1章2節で述べたように、アメリカでは、情報リテラシー概念をめぐる議論や、情報リテラシー教育の理論的根拠となる研究において、図書館界が大きな役割を果たしてきたことから、学校図書館を初めとする各図書館が、利用者教育を通して情報リテラシー教育に積極的に関わるようになっていく。情報行動研究の理論や概念モデルを整理した三輪眞木子は、情報リテラシー教育と図書館の関係について以下のように述べている。

（情報リテラシーに関するさまざまな：筆者注）定義を統合すると、情報リテラシーの中核概念は、問題解決に伴う情報探索・利用と、生涯教育、および批判的思考ということになる。批判的思考スキルの主要な構成要素には、コンピュータ・リテラシー、図書館リテラシー、メディア・リテラシー、ネットワーク・リテラシーが含まれているので、情報リテラシーは他のリテラシーを包含した広い概念と捉えることができる。⁷⁴

しかし、情報リテラシーとはほぼ同義で用いられている「情報活用能力」育成においては、情報の探索と利用に関する知識や技能の指導を各教科が担うとされているのに対し、学校図書館員が行う利用指導とは関連付けられていない。先に検討した「学び方の指導」においても、同様の傾向が認められる。

資料や情報を活用した主体的な学習の導入と、教育の情報化の推進によって、情報の探索と利用に関する知識や技能の習得が求められている中、手引等に見られる情報教育の観点だけでは、これまで学校図書館が担ってきた、印刷メディアを中心とする多様な情報源を利用するための指導が軽視される可能性が指摘されている⁷⁵。そこで、次節以降では、教科における「情報の探索と利用の指導」の内容を、学習指導要領とその解説、教科書や教師用指導書を用いて分析し、「学び方」や「情報活用能力」を構成する要素が教科の枠組みでどのように取り扱われているかを明らかにする。

3.3 教科における「情報の探索と利用の指導」－中学校社会科を例に

3.3.1 学習指導要領と解説における取り扱い

文部科学省は、「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」で1998年に改訂された学習指導要領を分析し、特に社会科（地理的分野）について“学習指導要領の趣旨を踏まえ、社会的事象に関する基本的な知識や概念を確実に身に付けるとともに、諸資料を活用し、学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など児童生徒の主体的な学習を一層重視することが必要（下線は筆者）”⁷⁶と述べ、この教科における「調べ学習」の重要性を指摘している。

吉田剛⁷⁷によると、中学校社会科（地理的分野）においては、1998年版指導要領では、地域規模に応じたいくつかの事例を取り上げ、その特徴の捉え方（視点）を「学び方」として学習して他の事例にも応用していく「事例主義＋方法主義」が採用されているが、2008年版指導要領では、地誌学習が復活し、地理的事象を捉えた上で課題を見つけて探究していく方向性が明示され、「内容主義＋方法主義」へと変化した。しかし、どちらの指導要領においても、教科書以外の資料を活用して課題を解決していく「調べ学習」が重視されていることから、本節では、二つの指導要領と学習指導要領解説から調べ学習に関する項目を抽出し、指導の内容や方針を検討する。

まず、調べ学習の位置付けを（図表3-8）のように整理した。

図表 3-8 中学校社会科（地理的分野）新旧学習指導要領における「調べ学習」

1998年版学習指導要領	新学習指導要領
第2節 社 会 第1 目 標 第2 各分野の目標及び内容 〔地理的分野〕 1 目 標 (4) 地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。 2 内 容 (1) 世界と日本の地域構成 (新設) (2) 地域の規模に応じた調査 ア 身近な地域 身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる。 イ 都道府県 47都道府県の中から幾つかの都道府県を取り上げ、地理的事象を見いだして追究し、地域的特色をとらえさせる	第2節 社 会 第1 目 標 第2 各分野の目標及び内容 〔地理的分野〕 1 目 標 (4) 地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。 2 内 容 (1) 世界の様々な地域 エ 世界の様々な地域の調査 世界の諸地域に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる地理的事象を取り上げ、様々な地域又は国の地域的特色をとらえる適切な主題を設けて追究し、世界の地理的認識を深めさせるとともに、世界の様々な地域又は国の調査を行う際の視点や方法を身に付けさせる。 (新学習指導要領(2)エに対応) (削除)

とともに、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせる。 ウ 世界の国々 世界の国々の中から幾つかの国を取り上げ、<u>地理的事象を見いだして追究し、地域的特色をとらえさせるとともに、国家規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせる。</u> 3 内容の取扱い (2) 内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。 ア また、<u>地域に関する情報の収集、処理に当たっては、コンピュータや情報通信ネットワークなどを積極的に活用するなどの工夫をすること。</u> (新設) (4) 内容の(2)については、次のとおり取り扱うものとする。 ア ア～ウについては、各項目を比較し関連付けて取り扱い、地域の規模に応じて地域的特色をとらえる視点や方法が異なってくること、それに伴って<u>地理的なまとめ方や発表の方法も工夫が必要であることなどに留意し、地域の規模に応じた調べ方、学び方を身に付けさせる</u>ようにすること。 イ アについては、学校所在地の事情を踏まえて<u>観察や調査を指導計画に位置付け実施すること。その際、縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用</u>の技能を高めるようにすること。 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。 (3) また、<u>生徒の主体的な学習を促し、課題を解決する能力を一層培うため、各分野において、第2の内容の範囲や程度に十分配慮しつつ事項を再構成するなどの工夫をして、適切な課題を設けて行う学習の充実を図る</u>ようにすること。 2 指導の全般にわたって、<u>資料を選択し活用する学習活動を重視するとともに作業的、体験的な学習の充実を図る</u>ようにする。その際、<u>地図や年表を読みかつ作成すること、新聞、読み物、統計その他の資料に平素から親しみ適切に活用すること、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ、発表することなどの活動を取り入れる</u>ようにする。また、<u>資料の収集、処理や発表などに当たっては、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器の活用を促す</u>ようにする。	(新学習指導要領(1)エに対応) 3 内容の取扱い (2) 内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。 ア また、<u>地域に関する情報の収集、処理に当たっては、コンピュータや情報通信ネットワークなどを積極的に活用するなどの工夫をすること。</u> エ エについては、<u>様々な資料を的確に読み取ったり、地図を有効に活用して事象を説明したりするなどの作業的な学習活動を取り入れること。また、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること。</u> (4) 内容の(2)については、次のとおり取り扱うものとする。 (削除) エ エについては、学校所在地の事情を踏まえて<u>観察や調査を指導計画に位置付け実施すること。その際、縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用</u>の技能を高めるようにすること。また、<u>観察や調査の結果をまとめる際には、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること。</u>なお、学習の効果を高めることができる場合には、内容の(2)のウの中の学校所在地を含む地域の学習と結び付けて扱ってもよいこと。 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。 (3) また、<u>生徒の主体的な学習を促し、課題を解決する能力を一層培うため、各分野において、第2の内容の範囲や程度に十分配慮しつつ事項を再構成するなどの工夫をして、適切な課題を設けて行う学習の充実を図る</u>ようにすること。 2 指導の全般にわたって、<u>資料を選択し活用する学習活動を重視するとともに作業的、体験的な学習の充実を図る</u>ようにする。その際、<u>地図や年表を読みかつ作成すること、新聞、読み物、統計その他の資料に平素から親しみ適切に活用すること、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ、発表することなどの活動を取り入れる</u>ようにする。また、<u>資料の収集、処理や発表などに当たっては、コンピュータや情報通信ネットワークなどを積極的に活用し、指導に生かすことで、生徒が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、生徒が主体的に情報手段を活用できるよう配慮するものとする。その際、情報モラルの指導にも配慮するものとする。</u>
---	---

※下線は筆者による

図表 3-8 から、1998 年版中学校学習指導要領においては、調べ学習が設定される領域として「地域の規模に応じた調査」があることが分かった。特に「世界の国々」については、直接経験地域ではないことから、フィールドでの観察や調査ではなく資料の収集と分析による「調べ学習」が求められており、学校図書館との親和性が特に高い。そこで「世界の国々」(1998 年版)と、それに相当する「世界のさまざまな地域の調査」(2008 年版)に焦点を合わせて『学習指導要領解説』の内容を検討する。

まず、1998 年版学習指導要領解説⁷⁸によると、目標の(4)「様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し構成に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる」については

- 資料の収集、選択、処理、活用に関する能力の育成を一層重視することが求められ…
- 地理的事象を考察し、判断、理解するに当たっては…(略) ①資料を適切に収集、選択、処理、活用し、資料に基づいて考察する態度を身に付けさせること、②一面的ではなく、多面的・多角的に考察する態度を身に付けさせることが特に大切…

と解説されている。また、内容の(2)「地域の規模に応じた調査」については、一般的な「調べ方」「学び方」と地理学習における調査を図表 3-9 のように比較している。

図表 3-9 地理学習における調査の特徴

一般的な調査	地理学習における調査
①資料の収集、整理 (各種資料の収集、観察、聞き取りによる情報の収集、資料の選択、比較・分類、そして課題の発見など)	①資料の収集、整理 ● 地域に関する情報(地理情報)を収集。地図に表現できるかどうかが地理情報を見分ける指標の一つになる。 ● 地域的特色を明らかにすることを主たる目的としているので…地域の環境条件、他地域との結び付き、そこに居住する人々の営みと関連付けるかたちで資料を選択し、分類する。 ● なぜこの地域にはこのような地理的現象がみられるのか、なぜこの地位はこのような特色をもっているのかといった問いかけを基にして課題を発見する。
②課題の設定と考察 (予測・仮説、分析、総合など)	②課題の設定と考察 ● 地理的な見方や考え方を生かす…すなわち、空間的配置に規則性があるか、地域の環境諸条件とどのようなかかわりがあるか、他地域との結び付きがどのように影響しているか、他の地域にも共通性が見られるか、時間的な変容にはどのような意味があるかなどについて考察する。
③調べた結果の整理・伝達 (記述・説明、図化、報告・発表など)	③調べた結果の整理・伝達 ● 地図の活用

【出典】文部科学省、中学校学習指導要領(平成 10 年 12 月)解説社会編、大阪書籍、2004、205p.

また、内容のウ「世界の国々の中から幾つかの国を取り上げ、地理的事象を見いだして追究し、地域的特色をとらえさせるとともに、国家規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせる」については、資料を活用した学び方について以下のように詳細に解説されている。

- 国家規模の地域的特色をとらえる「方法」については、直接経験地域ではないことから、地図や統計、読み物などの資料をもとに調査すること…取り上げる事象により、

また取り上げ方や探究の方法により、適切な資料が異なってくることに留意する…

- 情報や資料は国や事象により量的にも質的にも差が大きい。生徒による資料の収集が容易でない場合は、教師の側であらかじめ用意した資料によって指導がなされることもあろうが、その際には、導入に資料に基づく作業的な学習を取り入れたり、展開において資料の処理や分析に力を入れるなど、取り扱うの工夫が求められる。
- 選んだ国に関する様々な資料を収集し、それらを地域の環境条件、他地域との結び付き、より豊かな生活を実現するために努力している人々の営み及びそれらの相互関係に留意して取捨選択したり関連付けたりする…

このような「調べ学習」においては「地理情報（表4の①）の活用に関する技能」を身に付けさせることが重要として、それを以下のように定義している。

- 地域に関する情報である地理情報にはどのようなものがあるか、諸情報の中から地理情報を選別し、また、地理情報の性格、種類などをとらえること。
- そうした地理情報はどこで、どのようにすれば入手できるのか、地理情報の所在、収集に関する知識や方法を身に付けること。
- テレビや新聞など、特に地理情報として提供されたものではない情報を、どのように加工、処理すれば地理情報として活用が可能となるか、情報の地理情報化の視点や方法を身に付けること。
- 地理情報を使って地域的特色をどう説明、紹介するか、地理情報の処理や表現に関する技能を身に付けること。

次に、2008年版中学校学習指導要領解説⁷⁹を同様に整理する。まず、1998年版指導要領と同じ文言が残された目標の(4)「様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し構成に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる」については、

- 「様々な資料を適切に選択、活用」することについては、様々な資料を活用する技能や表現力の育成を重視する観点から示したものである。「様々な資料を適切に選択、活用する」ことは、情報技術革新や情報化の進展により地理情報（地域に関する情報）が増大し多様化する現代及び近未来において、特に大切である。
- 資料を適切に収集、選択、処理、活用し、資料に基づいて考察する態度を身につけさせることが特に大切である。
- 言語力育成の観点から、観察や調査等の結果を論述したり、意見交換したりするなどの言語活動を充実させること…

とされている。その上で、エ「世界の様々な地域の調査」では、

- 世界の地理的認識を深めさせるとともに、世界の様々な地域又は国の調査を行う際の視点や調べ方、まとめ方などの方法を身に付けさせる。
- 「方法」とは、調査の対象が直接経験地域ではないことから、各種の地図や統計、百科事典、インターネットからの情報、DVDや写真、読み物や紀行文、旅行経験者の体

験記など、調べる主題にふさわしい適切な資料を選択し、読み解き、関係付けながら進めることを意味している。

- 情報や資料は地域や国、調べる主題によって量的にも質的にも差が大きいため、生徒による資料の収集が容易でない場合は、教師があらかじめ用意した資料を提供することも必要
- 生徒の取り組む主題を予想し、学校図書館の書籍を準備したり、公共図書館との連携にも留意したりしながら日ごろから資料収集を心がけることが大切である。

さらに、このような調査を進める方法を図表 3-10 のように具体的に記述している。

図表 3-10 地理学習における調査の留意点

調査の段階	地理学習における留意点
①主題の設定 調べる内容について焦点化し、主題として設定する。	● 「世界の様々な地域」の学習のまとめとしての調べ学習 ● 日頃の関心ごとや自分たちの生活との接点があり具体的なもの ● 調査資料の得やすいもの ● 調査事項の記述やまとめが地図に表現できるものかどうか
②調査方法の吟味 何を明らかにしたいのかの調査のねらいを定め、どのような調査方法をおこなうかについて、調査の見通しを立てる。	● 「なぜこの地域には、このような地理的事象がみられるのか」「なぜこの地域には、このような特色ある生活・文化が根付いているのか」といった問いかけを基にして課題を見出し ● 課題解決のための適切な資料を選択、収集する見通しを立てる
③資料の収集と選択 調査を始めるに当たって、主題を明らかにするために、必要な各種資料とその収集方法を吟味し、資料の収集、選択を行う。	● 課題の解決に役立つ資料は何かがあるかを考える ● 必要な資料を収集する
④調査活動 調査のねらいにより、収集した資料を活用してその内容を読み取ったり、地図化したりする。	● 「なぜこの地域にはこのような地理的現象がみられるのか」「なぜこのような地域的特色をもっているのか」という問いかけを基にして、課題を解き明かしていくこと ● 様々な資料を的確に読み取ったり、地図を有効に活用して事象を説明したりするなどの作業的な学習活動を取り入れる ● 資料の処理や分析に力を入れる
⑤レポートの作成 調査した結果を整理し、ふさわしい記述や説明の方法を考え、レポートにまとめる。	● 調べた結果を文章で表現したり ● グラフや表にして分かりやすく示したり ● 地図を活用して表現したりする
⑥発表会などの開催 調査内容にふさわしい方法を用いて発表する（学級内発表、レポートや作品の掲示発表など）。	(説明なし)

【出典】文部科学省．“中学校学習指導要領解説．平成 20 年 7 月（平成 26 年 1 月一部改訂）”．2014-01. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1234912_003.pdf.

⑤のレポートの作成については、構成について詳細な解説に加え、「事実と自分自身が考えたり解釈したりしたことをはっきり分けて書くこと」「判断した根拠を示してまとめること」「図や表を使ったり地図上に表現したりすること」「要点を自分の言葉で簡潔にまとめること」などに留意することも求められている。また、1998 年版指導要領で記述された「地理情報の活用に関する技能」については、新学習指導要領にも同様の記述がある。

以上のように、中学校社会科（地理的分野）の新旧学習指導要領には、「調べ学習」に関する項目が多く見られ、それは文部科学省が“情報の中から主体的に目的にあった情報を選び取り、それを分析・評価して情報を再構成、検証し発表していくこと”⁸⁰と定義している内容とも一致する。次項では、このような指導要領を踏まえて作成された教科書と教師用指導書について検討する。

3.3.2 教科書・教師用指導書における取り扱い

次に、中学校社会科（地理的分野）の教科書と教師用指導書から「世界の国々」に関する領域を整理する。尚、本稿執筆時は 2008 年版指導要領に準じた中学校社会科の教科書は出版されていなかったため、1998 年版指導要領の下で使用されてきた中学校社会科（地理的分野）の教科書（帝国書院版）のみを取り上げる。

「世界の国々」は、直接経験地域ではないために、資料を収集して「調べ方」「まとめ方」の学習をおこなう。教科書では、1998 年版指導要領の内容を踏まえ、3 つの国（中国、アメリカ、ドイツ）を取り上げた事例学習の中に、さまざまな「調べる視点」と「調べる方法」を学ぶための学習活動が指示されている（図表 3-11）。例えば、ドイツの章には“（国どうしの結びつきを調べるために）各国のホームページなどで、その国が属している国際組織を調べてみたり、統計資料で貿易額や人の移動に関する数値を見てみたりしましょう”⁸¹という指示がある。これらは主に、教科書のページの左右に配された囲み記事である場合が多い。つまり、教科書の口絵やグラフ、地図などを見て地理的特徴を捉えながらすすむ本筋の授業と比べると、補助的な学習活動として扱われていることが明らかである。

次に、教師用指導書⁸²の解説を見ると、当該教科書は、調べ方を身につけるためにさまざまな工夫を加えて作成したとされている。例えば、教科書の 2 部 3 章（世界の国々を調べよう）の冒頭に、「世界の国々の調べ方を身につけよう」という調べ方のガイダンスページが設けられていることについて、都道府県を調べる時とは異なる「国調べ」の視点を複数示し、生徒が何を調べればよいのか考える手がかりとするため、と説明されている。また、中国では統計資料を使って、アメリカでは身近な情報源を自由に探すことによって、ドイツでは地図を見ることによって調べるテーマを探すようあらかじめナビゲートし、「関連をみる」「変化をみる」「比較する」という作業によって課題を追究する方法を生徒が具体的に分かるよう工夫したとしている。

また、この教科書は“「調べ方」「学び方」が身につく教科書”⁸³であるとし、その根拠として、世界の国調べでは、性格の異なる国を 3 つ事例とし異なる調べ方で追究することで、他のさまざまな国を調べる際にも応用がきくように工夫したこと、各事例に「調べ方」「調べ先」というコーナーを設け、例示した課題に応じた調査の手段や方法、資料の入手先などを丁寧に紹介していることを挙げている。これを教科書の記述と突き合わせてみると、「〇〇（例えば新聞記事）を使って、△△（例えば環境問題）を調べましょう」という指示が載っていることを指していると思われる。

「環境問題についての本や新聞記事、国や企業のホームページを見たり、自治体の広報課に問い合わせたりして、各機関の取り組みについて調べてみましょう」と「調べる国の言語や宗教、衣食住、音楽や絵画、文学などについて、事典や写真集、映像資料などを使って調べましょう」といったドイツに関する指導案を見ると、環境問題と文化にそれぞれ 1 時間ずつが充てられ、パークアイランドやリサイクル、キリスト教やイースターといった

キーワードが例示されているものの、環境問題の本はどうやって探すか、新聞記事はどのように検索するか、どのような事典を見ればよいのか、ドイツの写真集にはどんなものがあるか、映像資料はどこに行けば探せるかといった指示はない。また、配当が1時間であることを考えると、この時間に学校図書館等で調べ方を含む指導時間をとることは難しい。

以上の点から、1998年版学習指導要領における社会科（地理的分野）で扱われる「調べ方」「学び方」の指導は、調べるテーマや視点と、調べるために使う資料を教師側（あるいは教科書）が具体的に示し、そこから得られる情報をもとに「考え方」や「まとめ方」の訓練をすることによって、他のテーマへと応用させる形になっていると言える。

図表 3-11 教科書『中学生の地理』（帝国書院）の世界地理における調べ学習

地域	学習活動	想定される資料
中国	写真を見て、中国のイメージをあげてみましょう。	写真
中国	国の基本データを調べようー地図帳の統計資料を見て下に書き入れよう。	地図帳(統計資料集)
中国	統計資料から国の特色を考えよう。	地図帳(統計資料集)
中国	民族の分布やそれぞれの生活・文化の特色を、百科事典や地図帳で調べてみましょう。	百科事典
中国	調査する国の人口問題を、インターネットや新聞記事で調べてみましょう。	インターネット 新聞
中国	米の栽培と気候とのかかわりを、百科事典やインターネットで調べてみましょう。	百科事典 インターネット
中国	食生活と宗教とのかかわりを、ガイドブックや百科事典、国ごとの生活・文化に関する本などで調べてみましょう。	ガイドブック 百科事典 国に関する図書
中国	工業の変化や問題点について、その国に進出している企業のホームページや新聞記事で調べてみましょう。	インターネット 新聞
中国	国(中国)を調べて分かったことを、地図でまとめよう。	
中国	調べたことをテーマごとに地図で表し、それらを一つの地図に合わせる…。	
中国	文章は地域の特色がよくわかるように短くまとめてみましょう。	
アメリカ	写真のなかで、見たことがある風景はありますか？ほかにも知っている風景や都市はないでしょうか。	写真
アメリカ	国の基本データを調べようー地図帳の統計資料を見て下に書き入れよう。	地図帳(統計資料集)
アメリカ	地図帳の統計資料で、その国のおもな宗教や言語を調べてみたり、宗教・言語・民族などについての分布をあらわした資料図を見たりしましょう。	地図帳(統計資料集)
アメリカ	地図帳の統計資料で、おもな輸出品目のなかに農産物がないか調べてみたり、地図で土地利用や農業の記号を見たりしましょう。	地図帳(統計資料集)
アメリカ	さまざまな民族の生活・文化のようすについて、調査する国のホームページや地理事典などで調べてみましょう。	インターネット 地理事典
アメリカ	アメリカ合衆国のほかの農産物の栽培地域を地図帳で調べてみましょう。	地図帳(統計資料集)
アメリカ	おもな農産物の輸出先について、農林水産省の統計で調べてみましょう。	統計資料
アメリカ	コンピュータなどの研究開発をしている世界的な企業を、インターネットで調べてみましょう。	インターネット
アメリカ	国(アメリカ)を調べて分かったことを、パソコンでまとめよう。	
アメリカ	はじめに目次をつくり、どのような内容があるかわかるようにしましょう。	
アメリカ	パソコンを使うと、写真や図版をかんたんに取り込むことができますが、本などから取る場合には許可が必要になりますので注意しましょう。	
ドイツ	ドイツは、いくつの国と国境を接しているかをかぞえてみましょう。	地図帳(統計資料集)
ドイツ	国の基本データを調べようー地図帳の統計資料を見て下に書き入れよう。	地図帳(統計資料集)
ドイツ	地図に注目して、調べる課題を見つけよう。	地図帳(統計資料集)
ドイツ	ドイツからほかの国への航空路線について、地図帳で調べてみましょう。	地図帳(統計資料集)
ドイツ	各国のホームページなどで、その国が属している国際組織を調べてみたり、統計資料で貿易額や人の移動に関する数値を見つけてみましょう。	インターネット
ドイツ	ドイツのおもな輸出品について、統計資料で調べてみましょう。	地図帳(統計資料集)
ドイツ	国境をこえる環境問題のようすや、改善の取り組みについて、各国の大使館や環境団体のホームページで調べてみましょう。	インターネット
ドイツ	環境問題についての本や新聞記事、国や企業のホームページを見たり、自治体の広報課に問い合わせたりして、各機関の取り組みについて調べてみましょう。	主題別図書 新聞 インターネット 公的機関
ドイツ	人々の環境に対する考え方や、環境を守る取り組みについて、図書館の環境問題の本などで調べてみましょう。	主題別図書
ドイツ	調べる国の言語や宗教、衣食住、音楽や絵画、文学などについて、事典や写真集、映像資料などを使って調べましょう。	主題別事典 写真集 視聴覚資料
ドイツ	調査する国の町並みについて、観光ガイドブックなどで調べてみましょう。	ガイドブック
ドイツ	国(ドイツ)を調べて分かったことを、新聞にまとめよう。	
ドイツ	いちばん伝えたい記事を前のほうにおき、見出しを決めよう。	
ドイツ	文字や図の配置も見やすいように工夫しよう。	
ケニア	興味をもったことをきっかけに調べる(テレビの野生番組を見て興味をもち、さらに調べる)	
ケニア	ケニアってどこにあるの？(地図帳で調べる)	地図帳(統計資料集)
ケニア	ケニアの人びとの生活の様子は？(地理事典や紀行文で調べる)	主題別事典 紀行文
ケニア	日本とケニアの関係は？(インターネットで調べる)	インターネット

以上のように、学習指導要領と解説、教科書と教師用指導書の記述から、中学校社会科（地理的分野）における「調べ学習」と、学校図書館利用指導の内容には多くの項目で重複している部分が認められる。しかしそれだけで、全国学校図書館協議会が作成した『情報・メディアを活用する学び方の指導体系表』を社会科（地理的分野）の調べ学習に当てはめ、司書教諭による利用指導を取り入れることの妥当性を主張できるとは言えない。両者の「調べ学習」には以下の点で相違が見られるからである。

第一に、同じ文言であっても、その指導の重点に違いが見られるものがある。例えば、「環境問題について新聞記事で調べる」という課題の場合、社会科（地理的分野）では、見つけるべきキーワードを教師が例示した上で、教科書以外の資料から情報を探す練習として新聞が扱われ、そこからどのような「地理的特徴」を見いだせるか考えることに主眼が置かれる。一方、図書館利用指導では、新聞というメディアの特性、縮刷版やデータベースを用いた検索法、複数の記事を比較する重要性についての指導が中心となる。第二に、一方が重視しているものをもう一方が取り上げていない場合がある。例えば、必要な資料の収集については、利用指導では検索ツールの使い方やメディアの特性も踏まえた指導を重視するが、社会科では「図書館で探す」「インターネットで探す」といった表現にとどまっている。反対に、社会科が「情報の地理情報化」といった視点での情報の取捨選択を求めるのに対し、図書館がそのような科目の特性まで配慮した指導をすることは難しい。第三に、著作権や情報モラルの指導など、社会科も学校図書館も同じねらいで指導を行えそうなものもある。

1998年の学習指導要領改訂時に、『学校図書館』誌では、“教科の中で欠落しているもの、教科指導では取り上げられないもの”を学校図書館が担うべきという論考が見られた。例えば、“生徒たちが集めた情報を加工して自らのものとして発信するときに、発信する情報の加工のしかた、発信のしかたを教育する”⁸⁴のが司書教諭であるべきだという主張である。しかし、2008年版指導要領で、そのような項目が学校図書館ではなく、各教科の中で取り扱われるようになったことを考えると、学校図書館と教科がどのように協働するかという視点で利用指導を検討し直す必要がある。

1998年版指導要領で「調べ方」や「学び方」の学習に注目が集まりながらも、この10年間学校図書館利用指導の理論や実践が活発化しなかったことを考えると、まもなく導入される2008年版指導要領における「①体験から感じ取ったことを表現する、②事実を正確に理解し伝達する、③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする、④情報を分析・評価し、論述する、⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する、⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」（文部科学省中央教育審議会）ような学習活動と図書館利用指導を結び付け、司書教諭と教科教員がチーム・ティーチングで指導することは難しい。

例えば、司書教諭として長く学校図書館に勤めた家城は、2008年京都府教育委員会が実施した中学校教育課程京都府説明会に参加し、配布された資料を分析して以下のように述べている。

ティーム・ティーチングは課題に関連する教科担当者間の連携によるものとされている。このティーム・ティーチングは課題に関係する教科の教員どうしのものであり、教科教員と図書館の教員、つまり司書教諭とのものではない。これらの

情報探索の過程における指導をどのようにおこなうのかについて、学校図書館や図書館の教員が支援するような記述は少ない。授業で教員と司書教諭がチーム・ティーチングを行う記述など皆無である。⁸⁵

これを改善するためには、資料・情報を活用した学習において、どの部分を学校図書館が担い、どの部分を教科教員と協働で担うのかを明確する必要がある。本節で検討した社会科（地理分野）だけではなく、他教科における「調べ学習」や「探究学習」でも検証し、学校図書館が専門性を発揮して主導する部分と、教科教員と一緒に指導すべき部分について、各教科の考え方とすり合わせて協働の道筋を作っていくことが今後の課題である。

3.4 教科書にみる「情報の探索と利用の指導」

小中学校で用いる検定教科書には、図書館利用指導と同様の項目が多数取り上げられている。これは、学習指導要領が示した「学び方」の中に、学校図書館が利用指導として扱ってきた内容が含まれていることによる。「学び方」の指導は、教育課程上、教科の領域に位置付けられており、学校図書館や利用指導との関係は明らかではない。本節の目的は、小中学校の検定教科書の記述を分析し、「学び方」に関連する指導項目の特徴を明らかにすると同時に、教科教育の中で利用指導を行う可能性と意義について検討することである。教科書の記述と利用指導の内容を比較した結果、両者には共通する点が多い一方で、取り上げる内容や方法に相違点があることも明らかになった。つまり、図書館利用指導は「学び方」指導の一環として教育課程に位置付けることができ、学校図書館と教科がそれぞれの専門領域に基づく指導を行うことによって教育効果を高める可能性がある。

3.4.1 研究の目的と方法

3.4.1.1 研究の背景と問題意識

2008年に改訂された学習指導要領に基づく教科書には、利用指導と同内容の学習項目が多くみられる。そのため、教育課程のなかで利用指導を行う方略として、教科書教材の一部を学校図書館担当者が指導する実践事例が報告されている⁸⁶。

しかし、教科教育の一環として利用指導を行う場合、教科と学校図書館の専門領域を明らかにし、両者の役割分担のあり方を示す必要がある⁸⁷。そこで本節では、小・中学校教科書に掲載されている「利用指導と同内容の項目」を取り上げ、利用指導の内容や方法と比較しながら、その特徴を明らかにする。また、そこで得られた知見を踏まえて、教科教育の中で利用指導を行う可能性と意義について検討する。

2008年版指導要領において、学校図書館利用指導は、教科ではなく、特別活動の中の学級活動の一つとして扱われている⁸⁸。そのような位置付けにも関わらず、利用指導の諸項目が教科書に取り上げられている背景には、教科で行う「学び方」指導と学校図書館が関連付けられていることがある⁸⁹。

「学び方」とは、義務教育段階で身に付けることが期待されている学力の一つで⁹⁰，“課題の見付け方やつくり方、目的や意図に応じた情報の集め方や調べ方、整理・分析の仕方、まとめ方や表現の仕方、報告や発表・討論の仕方”⁹¹と定義されている。学習指導要領には、「学び方」を構成する要素が具体的に示されており、その中に、図書館での本の探し方や、参考図書の利用法、引用の仕方など、これまで学校図書館が利用指導として扱ってきた項目が含まれている。「学び方」の指導は、主に、各教科で行う言語活動等を通じてすすめるとされているため⁹²、教科教育で用いる教科書に利用指導に関連する項目が頻出しているのである。

これまでも、このような教科書教材を活用した利用指導のあり方や、「学び方」指導と利用指導の共通点に着目した研究・実践・提言は見られるが⁹³、教科と学校図書館の専門領域については整理されていない。

尚、利用指導は学習指導要領等の基準がなく、同じ内容が、教科書によって中学校版に取り上げられていたり、小学校版に取り上げられていたりすることを踏まえ、本調査では中学校の教科書だけではなく、小学校高学年（5・6年生）の教科書も分析の対象とする。

3.4.1.2 学校図書館利用指導で扱う項目の整理

まず、学校図書館における利用指導で扱う項目や内容を整理し、教科書の記述を分析するための枠組みを設定した。学校図書館利用指導の内容を示した比較的新しい資料として、本調査では、全国 SLA が作成した体系表に加え、2008 年の学習指導要領改訂を踏まえて発行された司書教諭講習のテキストブック類、また、全国 SLA から出版された学校図書館利用指導用のワークブックを取り上げ、そこに示されている指導項目とその内容を整理して用いることとした。調査対象とした資料は以下のとおりである。

- ① 全国学校図書館協議会編. 情報を学習につなぐ 情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説. 全国学校図書館協議会, 2008, 47p. より小学校編
- ② 同, 中学校編
- ③ 渡辺重夫. 学習指導と学校図書館 (第三版). 学文社, 2013, 179p.
- ④ 全国学校図書館協議会「新学校図書館学」編集委員会編. 学習指導と学校図書館. 全国学校図書館協議会, 2010, 134p.
- ⑤ 堀川照代. 学習指導と学校図書館. 放送大学教育振興会, 2010, p.282.
- ⑥ 桑田てるみ編. 中学生・高校生のための探究学習スキルワーク:6 プロセスで学ぶ. 全国学校図書館協議会, 2012, 119p.

これらの資料に挙げられていた利用指導の項目は、①56 項目、②54 項目、③39 項目、④38 項目、⑤32 項目、⑥28 項目の合計 247 項目であった。これを類似項目ごとにまとめてグループ化し、内容を表す見出しを付与して 33 分野としてまとめた (図表 3-12)。

図表 3-12 学校図書館関係資料における図書館利用指導の内容

No.	分野名	主な指導項目
1	学習計画の立て方	● 学習全体の見通しを立てる (学習プロセスを確認する) ● 学習の意義や目的, ねらいを確認する
2	テーマ設定の仕方	● 学習テーマの立て方・焦点の絞り方 ● 発想法 (ブレインストーミング, KJ 法, ウェビング, マンダラートなど)
3	調べ方の見通しの立て方	● 利用可能な情報源の種類と特徴について ● 課題に応じた調べ方・情報源の選択
4	図書館の利用の仕方	● 学校図書館や公共図書館の利用の仕方 ● 検索のしかた, NDC, 請求記号, 排架
5	図書館以外の施設の利用の仕方	● 公民館・資料館・博物館・科学館・美術館・企業内図書館などでの資料の入手の仕方 ● 行政機関 (役所, 観光課, 大使館), 企業・工場・水族館・動物園での資料の入手の仕方
6	本から情報を探す方法	● 書誌・目録・資料リストを使った情報収集 ● 目次と索引の使い方
7	検索キーワードの作り方	● 論理演算 (AND・OR・NOT 検索) について ● 同義語・上位語・下位語・関連語を使う
8	各種メディアの特徴について	● 多様なメディアの利用や組み合わせについて ● 印刷メディア・視聴覚メディア・電子メディアの特徴
9	参考図書の特徴と使い方	● 参考図書の種類と特徴 (百科事典・辞書・年鑑・統計・地図・Web 上の参考資料など) ● 参考図書の使い方 (凡例・目次と索引・背・つめ・柱などの見方)
10	新聞・雑誌の特徴と使い方	● 新聞・雑誌記事の特性 (信憑性や情報の新旧, 編集方針など, 比較して読むこと) ● 印刷物・縮刷版・Web・データベースを使った記事の探し方
11	その他の図書館メディアの特徴と使い方	● 掲示物や展示資料, ファイル資料について ● その他の図書館資料について

12	視聴覚メディアの特徴と使い方	● 視聴覚メディア (DVD や CD, テレビやラジオ) の種類と特徴 ● 視聴覚機器の種類と使い方 (デジタルカメラ・ビデオカメラなど)
13	電子メディアの特徴と使い方	● 電子メディアの種類と特徴 (CD-ROM, DVD, Web, 掲示板, 有料データベースなど) ● 利用上の注意 (信憑性, 発信者の確認, 閲覧ソフトの使い方, 検索エンジン)
14	人的情報源の特徴と使い方	● 人的情報源の種類と聞き取りにあたっての注意 ● インタビューやアンケートの仕方
15	文章から情報を読み取る方法	● 本の読み方 (拾い読みと探し読み, 前書き・目次・図表などを拾い読みする) ● 事実と意見を区別して読む
16	情報の記録の仕方	● ノートや情報カードを使った記録の取り方 ● 記録の書き方 (引用・要約, 出典の記録)
17	機器を使った情報の記録の仕方	● AV 機器を使った記録の取り方 ● コンピュータを使った記録の取り方
18	図表の読み取り方	● グラフからデータを読み取る
19	情報の整理・加工の仕方	● 情報を整理する (グループ化, 比較, 原因と結果, 並べ替え, 関連付け, キーワード付与) ● 情報を加工する (表や図にする, 要約する, 抜粋 (引用) する)
20	情報の評価の仕方	● 情報の客観的評価 (出所を確認する, 複数の情報を比較する, 根拠の有無を確認する) ● 目的に応じた評価 (形式や分量に応じた取捨選択, テーマとの適合性)
21	情報を活用した書き方	● 自分の考えをまとめる (根拠を示す) ● 自分の意見と他人の意見, 事実を分ける
22	文章や図表の作り方	● 文章 (意見文, 論証文) の書き方, 図表 (グラフ) のつくり方 ● 写真や絵, 音声, 映像の使い方
23	表現手段の選択について	● さまざまな表現・発表手段の種類と特徴 ● ふさわしい表現手段やメディアを選ぶ
24	論文・レポートのまとめ方	● レポートの構成を考える (序論・本論・結論) ● レポートの書式を整える (タイトル, 目次, 章や節, 参考文献)
25	コンピュータなど機器を用いた発表の仕方	● コンピュータを使った発表の仕方 (Web ページ作成, パワーポイント) ● 視聴覚機器を使った発表の仕方 (ビデオ編集, OHP, 実物投影機など)
26	口頭発表の仕方	● 構成を考える ● 発表の工夫 (伝わりやすい話し方, パフォーマンス, 提示物や配布物を作成, 原稿)
27	掲示による発表の仕方	● 紙面によるまとめ方 (ポスターセッション, 新聞, 模造紙) ● まとめ方の工夫 (レイアウト, 文字, 効果的な図表の使い方)
28	その他の発表方法について	● 紙芝居やペープサートによる発表をする ● 劇や実演による発表をする
29	情報モラルについて	● インターネットを使うときの留意点 (利便性と危険性, 情報発信の責任, 誹謗中傷) ● 個人情報, 著作権, 許諾を得ること
30	引用の仕方	● 引用のしかた (「 」の使い方, 主従の関係について) ● 出典の明示
31	参考文献リストの作り方	● 図書, 新聞・雑誌, Web サイトの書誌情報の読み取り方 (奥付) ● 資料リストの書き方
32	評価の仕方	● 相互評価 (評価基準を用いた評価, 感想, 質問) ● ポートフォリオ, チェックリストを活用した評価
33	学びの過程の振り返りについて	● 学習のプロセスを振り返る ● プロセスを評価する (情報の収集, メディアの使い方, まとめ方, 発表の仕方)

尚, 何を利用指導の項目とするかは, 調査した資料ごとに異なる (図表 3-13)。例えば, 「4. 図書館の利用の仕方」「9. 参考図書の特徴と使い方」「16. 情報の記録の仕方」「19. 情報の整理・加工の仕方」「22. 文章や図表の作り方」「31. 参考文献の作り方」「32. 評価の仕方」「33. 学びの過程の評価について」は, すべての資料が取り上げている。一方, 「18. 図表の読み取り方」は, 1つの資料しか取り上げていない。このことから, 本調査で用いる利用指導の一覧が妥当であるかどうかは, 別の機会に検証する必要がある。

図表 3-13 各テキストブックが取り上げた利用指導の項目

番号	カテゴリー名	①	②	③	④	⑤	⑥	合計
1	学習計画の立て方		○				○	2
2	テーマ設定の仕方	○			○	○	○	4
3	調べ方の見通しの立て方	○			○	○	○	4
4	図書館の利用の仕方	○	○	○	○	○	○	6
5	図書館以外の施設の利用の仕方	○	○	○	○			4
6	本から情報を探す方法	○		○	○	○		4
7	検索キーワードの作り方			○	○	○	○	4
8	各種メディアの特徴について				○	○	○	3
9	参考図書の特徴と使い方	○	○	○	○	○	○	6
10	新聞・雑誌の特徴と使い方	○	○	○	○			4
11	その他の図書館メディアの特徴と使い方	○	○	○	○			4
12	視聴覚メディアの特徴と使い方	○	○		○			3
13	電子メディアの特徴と使い方	○	○	○	○			4
14	人的情報源の特徴と使い方	○	○			○		3
15	文章の読み解き方			○	○		○	3
16	情報の記録の仕方	○	○	○	○	○	○	6
17	機器を使った情報の記録の仕方	○	○	○				3
18	図表の読み取り方						○	1
19	情報の整理・加工の仕方	○	○	○	○	○	○	6
20	情報の評価の仕方	○	○	○	○		○	5
21	情報の生成	○	○	○			○	4
22	文章や図表の作り方	○	○	○	○	○	○	6
23	表現手段の選択について	○		○		○		3
24	論文・レポートのまとめ方		○	○	○	○	○	5
25	コンピュータなど機器を用いた発表の仕方	○	○	○	○		○	5
26	口頭発表の仕方		○	○		○	○	4
27	掲示による発表の仕方	○	○			○	○	4
28	その他の発表方法について	○	○					2
29	情報モラルについて	○	○	○	○	○		5
30	引用の仕方	○		○	○	○		4
31	参考文献リストの作り方	○	○	○	○	○	○	6
32	評価の仕方	○	○	○	○	○	○	6
33	学びの過程の振り返りについて	○	○	○	○	○	○	6

3.4.1.3 利用指導の内容に対応した教科書の記述の抽出

本調査では、2008年版指導要領に準じた検定済み教科書のうち、小学校5・6年生の国語・社会・理科、中学校1・3年生の国語・社会（地理・歴史・公民）・理科・数学・技術家庭科の各教科から、国語は全出版社のものを、その他の教科は、公立学校における採択率が10%以上あるものを分析の対象とした（図表3-14、図表3-15）。

図表 3-14 分析した小学校教科書とその採択率⁹⁴

	発行者	教科書名	採択率(%)
国語	1 光村図書出版	国語 銀河／創造	61.6
	2 東京書籍	新しい国語	20.7
	3 教育出版	ひろがる言葉	14.4
	4 学校図書	みんなと学ぶ	2.4
	5 三省堂	小学生の国語	0.9
社会	1 東京書籍	新しい社会	52.0
	2 教育出版	小学社会	25.6
	3 日本文教出版 A	小学社会	15.2
理科	1 大日本図書	たのしい理科	31.3
	2 啓林館	わくわく理科	26.0
	3 東京書籍	楽しい理科	25.0

図表 3-15 分析した中学校教科書とその採択率⁹⁵

	発行者	教科書名	採択率(%)
国語	1 光村図書	国語	63.8
	2 東京書籍	新しい国語	13.8
	3 教育出版	伝え合う言葉	12.7
	4 三省堂	中学生の国語	6.5
	5 学校図書	中学校国語	3.1
地理	1 東京書籍	新しい社会 地理	47.9
	2 帝国書院	中学生の地理	31.7
	3 教育出版	中学社会 地理	14.1
歴史	1 東京書籍	新しい社会 歴史	52.8
	2 教育出版	中学社会 歴史	14.6
	3 帝国書院	中学生の歴史	14.1
	4 日本文教出版	中学社会 歴史的分野	12.6
公民	1 東京書籍	新しい社会 公民	57.0
	2 日本文教出版	中学社会 公民的分野	14.1
	3 教育出版	中学社会 公民	13.2
理科	1 啓林館	未来へひろがるサイエンス	32.5
	2 東京書籍	新しい科学	31.4
	3 大日本図書	理科の世界	27.7
数学	1 啓林館	未来へ広がる数学	41.6
	2 東京書籍	新しい数学	31.0
技術	1 開隆堂	技術・家庭（技術分野）	55.3
	2 東京書籍	新しい技術・家庭	42.5
家庭	1 開隆堂	技術・家庭	52.5
	2 東京書籍	新しい技術・家庭	43.4

これらの教科書の表紙・標題紙・目次・前文・附録・奥付を除く本文から、図表 3-12 で示した 33 分野に含まれる項目に対応する記述を抽出した。

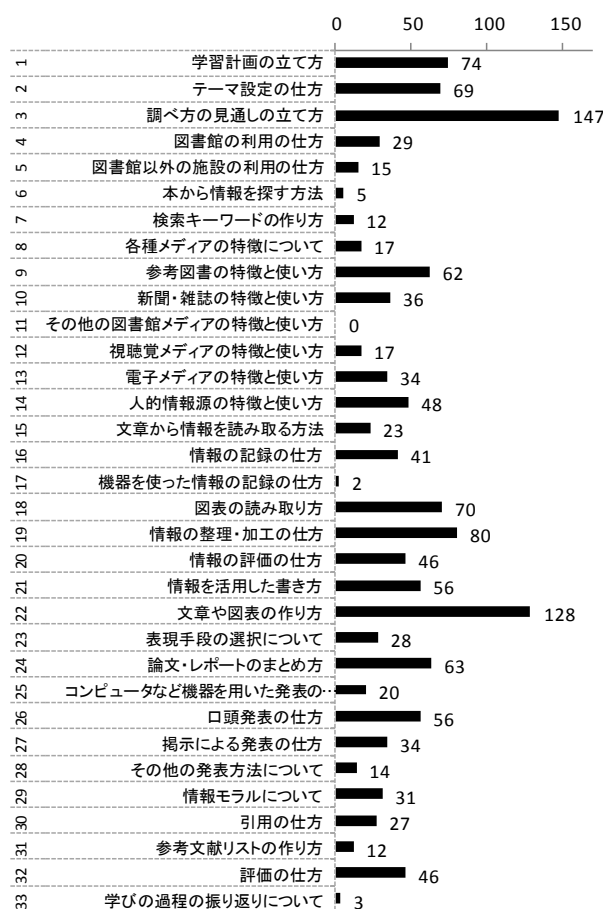
ただし、教科書には、ひとつの教材全体が利用指導の項目に相当するもの（例えば、新聞ごとの違いを踏まえながら情報を読み取ることを目的とする説明文）、教材のなかに利用指導の項目が含まれるもの（例えば、評論文の中で解説されている引用のルール）、欄外に利用指導の項目を含む指示や注があるもの（例えば、現代社会の単元の中にある「新聞縮刷版を使って過去の記事を集めよう」という指示）など、取り上げ方に違いがあるが、特に重みづけをせず、利用指導の項目が含まれていれば 1 ヶ所と数えた。また、ひとつの教材に複数の項目が含まれている場合は、それぞれを別に数えた。

尚、筆者とは別に、小学校の司書 3 名と中学校の司書 4 名が同定作業を行い、筆者の結果と重ね合わせて、客観性と網羅性を保つようにした。

3.4.2 結果と考察

66 冊の教科書を対象に、33 分野に沿って同定作業を行った結果、1,345 ヶ所から、利用指導に関連する記述を抽出することができた（図表 3-16）。

図表 3-16 分野ごとの掲載数



掲載数の多い（複数の教科書やページに掲載されている）分野は、「3.調べ方の見通しの立て方」や「22.文章や図表の作り方」であった。また、どの教科書にも記述がなかった分野は「11.その他の図書館メディアの特徴と使い方」であった。「その他の図書館メディア」とは、図書館が所蔵・提供する資料のうち、図書・逐次刊行物・視聴覚メディア・電子メディアに含まれないもので、ファイル資料や掲示物、展示資料などを指す。

以下に、教科別・教科書会社別に見た分野ごとの掲載状況と、各分野に対応する記述の特徴について述べる。

3.4.2.1 教科別・教科書会社別の傾向

まず、33の分野に対応する記述が、どの教科・学年（分野）の教科書にあるか、また、教科書会社によって違いがあるかを整理した（図表 3-17）。

教科別の掲載状況を見ると、各分野に対応する記述は、国語と社会の教科書に多く、内容によっては理科や技術家庭科（中学校）に見られた。一方、数学（中学校）の教科書にはほとんど見られなかった。

小・中学校の国語・社会・理科の三教科に共通して掲載されていた分野として、「1.学習計画の立て方」「2.テーマ設定の仕方」「3.調べ方の見通しの立て方」があった。また、「22.文章や図表の作り方」や「24.論文・レポートのまとめ方」も、それぞれの教科の専門領域に沿った内容で掲載されていた。

図表 3-17 教科別・教科書会社別に見た利用指導関連項目の記述の有無 (表内の数字は学年を示す)

グループ	No.	カテゴリー名	小学校												中学校												※1						
			国語				社会				理科				国語				社会				理科					数学				技家	
			光村	東書	教育	学校	三省	東書	教育	日文	日本	啓林	東書	光村	東書	三省	教育	学校	東書	教育	帝国	日本	啓林	東書	日本	啓林		東書	開隆	東書			
A	1	学習計画の立て方	6	56	56	56	5	56	5	6	56	56	56		23	2	2		地歴公	地公	地歴	公	123	123	1	1		家	技家	24			
	2	テーマ設定の仕方	6	56	5	56	5		56	56	56		56	123	123	123	123	1	地歴公	地歴公	歴公	公	1		3					20			
	3	調べ方の見通しの立て方	56	6	56	56	6	56	56	56	56	56	56	123	123	123	2	2	地歴公	地歴公	歴	歴公	123	123	123	1			技		25		
B	4	図書館の利用の仕方	5	6	6	6	56	6	5	5				1	1	1	2		歴公	公	地歴		1								16		
	5	図書館以外の施設の利用の仕方				5	6		56	56	6		6					歴	歴	歴	歴		1								11		
	6	本から情報を探す方法												1	1	1															3		
	7	検索キーワードの作り方	5		56	5	5							1	2	1	2					公			1			技			11		
	8	各種メディアの特徴について	6	56			5	6	6			56		2		1	1	地	公			公						技			13		
	9	参考図書の特徴と使い方	56	6	56		56	56	56	56				1	1		123		地歴	地歴	地歴		1		2						15		
	10	新聞・雑誌の特徴と使い方	5	5	5	56		56	5	5				13	3	3	3		歴公	地公		公									14		
	11	その他の図書館メディアの特徴と使い方																													0		
	12	視聴覚メディアの特徴と使い方		5	6		6	5	5	5				2	1		1			公	地										11		
	13	電子メディアの特徴と使い方	5		56		5	5	5	5	5		6	13	2		2		地歴公		地歴	公	1					技	技		17		
	14	人的情報源の特徴と使い方	56	6	56	6	5	56	5	5				12	12	2	2	1	地歴公	地	地歴		1				3		家		19		
C	15	文章から情報を読み取る方法	6	56		56								2	12	1	1	2			地歴										9		
	16	情報の記録の仕方		56	5	5		56	56	5		6		12	1	13	13		歴		地歴				1						14		
	17	機器を使った情報の記録の仕方					5																1								2		
	18	図表の読み取り方	56	56		5	5	56	56	56				1	13		1	12	地歴公	地歴公	地歴	歴公			2	1			家		18		
	19	情報の整理・加工の仕方	56	56	56	56	5	56	56	6				13	123	23	12	1	地歴公	地	地歴	歴公	13		2						19		
D	20	情報の評価の仕方	56	56	6	5			6	5				12	123	3	1	2	地歴公	公	地	歴公		3							16		
	21	情報を活用した書き方	56	56	56	56	6	6						12	12	123	123	2	地歴公	公			1	1							15		
	22	文章や図表の作り方	56	56	6	56	6	56	56	56	5	5	56	123	123	12	123		地歴	地歴	地歴	公歴	1	12	123	123	1		技		25		
	23	表現手段の選択について		56	5	56					56			2	1	2	3		地歴	地公	歴	歴				13		技	技家		15		
	24	論文・レポートのまとめ方	5		6	56	6	56	56			56	56	1	123	13	123		地歴公	地	地歴	公	13	13	13	1	123				21		
	25	コンピュータなど機器を用いた発表の仕方						5						2	2				地歴									技	技		6		
	26	口頭発表の仕方	6	56	5	56	56				6	56		12	12	2	123	123	地歴公	地	地歴	公		1		123					18		
	27	掲示による発表の仕方		6	5	5	5	56	56	6			56	12	12	1	2	1	歴	公歴	歴	公歴		3							18		
	28	その他の発表方法について	6	56	6		6	5	5					3	3	12															9		
E	29	情報モラルについて	56	5	6	56		56	5	5					1	2		公	公		公	1	3					技	技		16		
	30	引用の仕方	56	5		56	5							123	13	3	3			公									技		10		
	31	参考文献リストの作り方	5	5		6	56	5						1	2				地公												8		
F	32	評価の仕方	56	56	5	5	56		56					123	23	13	1	1	地歴	公	地歴	公						技	技家		17		
	33	学びの過程の振り返りについて														12		2													2		
※2			23	24	23	23	22	21	21	17	7	7	8	26	28	23	25	13	24	22	20	18	12	11	11	6	3	8	11				

※1 分野別に見た、掲載教科書数

※2 教科書別に見た、掲載分野数

「18.図表の読み取り方」「19.情報の整理・加工の仕方」「20.情報の評価の仕方」「4.図書館の利用の仕方」「9.参考図書の特徴と使い方」「14.人的情報源の特徴と使い方」「27.掲示による発表の仕方」は、国語と社会の全教科書に記述があった。

主に国語に集中している分野は「7.検索キーワードの作り方」「15.文章から情報を読み取る方法」「21.情報を活用した書き方」「30.引用の仕方」、社会に集中している分野は「5.図書館以外の施設の利用の仕方」であった。技術家庭科（中学校）の教科書には、「13.電子メディアの特徴と使い方」「25.コンピュータなど機器を用いた発表の仕方」「29.情報モラルについて」に関する記述が見られた。

どの教科の教科書にも記述がない、または、数点の教科書にしか記述がない分野は、「11.その他の図書館メディアの特徴と使い方」の他に、「6.本から情報を探す方法」「17.機器を使った情報の記録の仕方」「33.学びの過程の振り返りについて」であった。

以上をまとめると、課題設定の仕方や、レポート執筆などまとめ方に関する内容は、小・中両校の国語・社会・理科の教科書で取り上げられている。調べたり発表したりする学習活動が多い国語や社会では、図書館の活用や、参考図書や人的情報源を使って情報を収集する方法、図表の読み取り、情報の加工の仕方に関する記述が、複数の教科書会社に共通して見られた。さらに、教科の専門領域に関連して、文章や言葉の読み書きに関する内容は国語、博物館等社会教育施設の利用については社会、コンピュータの利用については技術の教科書に記述が集中していた。

分野によっては、どの教科で扱われているか傾向が読み取れるものがある一方で、同一教科内でも教科書会社によって載っていたりいなかったりする分野が存在した。このことから、利用指導に関する項目をどの教科が担うのか、はっきりとした指針や位置付けがないことが確認できた。

教科書会社ごとの特徴としては、「東京書籍」が発行する教科書は、他の教科書会社のものと比較すると、小学校の国語・社会、中学校の国語・社会で、利用指導に関する記述がもっとも多かった。一方、小・中学校社会科の「大日本図書」や、中学校国語の「学校図書」が発行している教科書は、他社の教科書と比較して掲載数が少なかった。

3.4.2.2 利用指導に対応する記述の特徴

次に、各分野に対応する教科書の記述内容を、図書館利用指導と比較しながら分析し、教科による指導の特徴を検討した。「4.図書館の利用の仕方」を例に挙げると、対応する記述は全部で 29 カ所あり、主に日本十進分類法（NDC）や請求記号の仕組みなど、図書館利用の基本的な内容が取り上げられていた（図表 3-18）。教科書会社によっては、OPAC など目録の使い方やレファレンスサービス、図書館間ネットワーク、司書の仕事内容など、より詳細な説明がある。ただし、本を中心とした印刷メディアの利用に重点が置かれ、本以外のさまざまなメディアも利用できるという案内はなかった。

図表 3-18 「4.図書館の利用の仕方」に対応する教科書の記述

校種	教科	出版社	年 巻	単元名	指導項目	教科書の記述
小	国	三省堂	5	図書館へ行こう	学校図書館の利用	学校司書, コンピュータ検索, 目録, 作者名・題名で調べる, OPAC
小	国	三省堂	6	図書館へ行こう	学校図書館の利用	学校司書, 目録, コンピュータ検索
小	社	日本文教出版	5 上		学校図書館の利用	書架から探す, OPAC, 司書に聞く
小	国	学校図書	6 上	資料編	公共図書館の利用	地域の図書館で新聞や地域資料入手
小	国	教育出版	6 上	学んだことを生かして調べよう	公共図書館の利用	書架から探す, OPAC, 司書に聞く
小	社	教育出版	5 下		公共図書館の利用	図書館間ネットワークについて
小	社	東京書籍	6 上	武士の世の中へ	公共図書館の利用	(図書館で伝記を探そう)
小	社	東京書籍	6 上	長く続いた戦争と人々のくらし	公共図書館の利用	(戦争の本を探そう, など)
中	国	教育出版	2	夢を跳ぶ	公共図書館の利用	図書館の役割, 分類, レファレンスコーナー, OPAC
中	国	光村	1	言葉に出会うために	公共図書館の利用	図書館の資料の種類, 日本十進分類法
中	社	帝国書院	歴	地域調査・まとめ発表	公共図書館の利用	OPAC, 司書に相談する, コピー
中	社	帝国書院	地	世界のさまざまな地域の調査	公共図書館の利用	(図書館で本を探そう)
中	社	東京書籍	公	地方の政治と自治	公共図書館の利用	(図書館で調べてみました)
中	理	啓林館	1	きみも科学者	公共図書館の利用	(図書館で必要な情報を集めよう)
小	国	光村	5	千年の釘にいどむ	NDC のしくみ	日本十進分類法 (1 桁のみ紹介)
小	国	東京書籍	6 上	図書館へ行こう	NDC のしくみ	日本十進分類法 (3 桁)
中	社	東京書籍	歴	歴史の調べ学習をするには…?	NDC のしくみ	日本十進分類法 (4 桁)
小	国	東京書籍	6 上	図書館へ行こう	背ラベルの読み方	請求記号
小	国	三省堂	5	本の分類を知ろう	分類と配架のしくみ	本の分類 (3 桁) と背ラベル
中	国	三省堂	1	図書館とインターネット	分類と配架のしくみ	本の分類 (489 を例示) と排架
中	国	東京書籍	1	資料・情報の調べ方・使い方	分類と配架のしくみ	本の分類 (2 桁) と背ラベル
中	国	教育出版	2	データベースコラム・学び方	分類と配架のしくみ	本の分類 (2 桁) と背ラベル
中	社	教育出版	公	福祉の課題を追求しよう	分類と配架のしくみ	本の分類と排架
中	国	東京書籍	1	資料・情報の調べ方・使い方	レファレンスサービス	レファレンスコーナーの紹介
中	社	教育出版	公	福祉の課題を追求しよう	レファレンスサービス	相談の事例 (取寄せ, 複写, 購入希望)
中	社	教育出版	公	未来へのわたしたちの約束	レファレンスサービス	(図書館の司書に聞いてみよう)
中	国	三省堂	1	図書館とインターネット	OPAC	(検索画面の例のみ)
中	理	啓林館	1	サイエンス資料	OPAC	Web 上の OPAC
中	国	東京書籍	1	資料・情報の調べ方・使い方	目録を使った検索	書名目録, 著者目録, 件名目録, OPAC

同様の分析を, すべての分野に対して行った。各分野に対応する記述の内容は(図表 3-19)の通りである。この結果と図書館利用指導の内容(図表 3-12)を比較して明らかになった特徴を以下に述べる。

図表 3-19 図書館利用指導の内容に対応する教科書の記述

No	分野	教科書に掲載されている主な内容	※()内の数字は出現回数
1	学習計画の立て方	問題解決型（あるいは探究型）の学習プロセスの確認 (66) / 目的に応じた調べ方やまとめ方の計画を立てる (5) / レポート執筆の意義を考える (2) / 情報とは何か (1)	
2	テーマ設定の仕方	例を元にテーマを決める (38) / マッピングやマインドラートなど発想法を用いてテーマを決める (23) / テーマを絞る (4) / 問いの形で調べることを決める (4)	
3	調べ方の見通しの立て方	図書館やインターネット、インタビューなどさまざまな調べ方 (123) / 調査方法について話し合う (13) / 複数の資料を意識する (9) / 仮説を立てて調べ方を考える (2)	
4	図書館の利用の仕方	学校図書館や公共図書館の紹介 (14) / 日本十進分類法の仕組み・背ラベル（請求記号）の見方や排架ルール (9) / レファレンスサービスの紹介 (3) / 目録を使った検索 (3)	
5	図書館以外の施設の利用の仕方	博物館や郷土資料館の見学の仕方や情報の集め方 (15)	
6	本から情報を探す方法	目次や索引を使った情報の探し方 (4) / 巻末の参考文献一覧を調べる手掛かりにする (1)	
7	検索キーワードの作り方	インターネットの検索エンジンに検索キーワードを入力するときの工夫、特にキーワードの組み合わせ (AND 検索) (12)	
8	各種メディアの特徴について	複数のメディア（特に紙メディアと電子メディア、または視聴覚メディア）の特性 (14) や、本というメディアの特徴 (3)	
9	参考図書の特徴と使い方	辞書 (14)、百科事典 (2)、事典や図鑑 (2)、地図や地球儀 (28)、統計 (4)、年表 (2) の特徴や使い方、参考図書の紹介 (5)、利用の指示のみ (5)	
10	新聞・雑誌の特徴と使い方	新聞記事を探して利用する (6)、複数の新聞記事を比較する (13)、新聞の紙面レイアウトについての解説 (11)、新聞というメディアの特徴 (6)	
11	その他の図書館メディアの特徴と使い方	なし	
12	視聴覚メディアの特徴と使い方	テレビ等マスメディアが発信する情報の特徴と注意点 (17)	
13	電子メディアの特徴と使い方	Web 上の情報の特徴や利用上の注意（発信者を確認、複数のサイトを比較、信憑性を確認など）(22)、インターネットそのものの説明 (5)、検索エンジンの仕組みや URL (7)	
14	人的情報源の特徴と使い方	インタビューやアンケートの取り方 (31)、手紙やメールを使った問い合わせの仕方 (8ヶ所)、身近な人たちへの聞き取り (6)、礼状の書き方 (3)	
15	文章から情報を読み取る方法	事実と意見の区別 (18)、前書きや目次を使って概要をつかんだり拾い読みしたりする方法 (5)	
16	情報の記録の仕方	情報カードやノートを使った記録の取り方 (15)、箇条書きや矢印などメモを取る時の工夫 (9)、写真や録音も含めたさまざまな記録の仕方の紹介 (13)、出典の記録 (4)	
17	機器を使った情報の記録の仕方	デジタルカメラやレコーダーを使った記録の仕方 (2)	
18	図表の読み取り方	グラフの見方 (33)、写真や絵からの情報の読み取り (21)、主題図や地図の見方 (6)、年表の見方 (1)、図表の役割や特徴についての説明 (9)	
19	情報の整理・加工の仕方	箇条書きにする (3)、共通点と相違点に分ける (7)、グループに分けて整理する (15)、原因と結果に分ける (9)、複数の情報を関連付ける (9)、並べ替える (4)、比較する (12)、要約する (11)、類推する (1)、さまざまな整理法の紹介 (9)	
20	情報の評価の仕方	主張や意見の根拠を確認する (15)、出所を確認する (2)、複数の情報を比較して確認する (8)、情報を批判的に読む (5)、さまざまな評価の仕方の紹介 (4)、必要に応じて情報を取捨選択する (12)	
21	情報を活用した書き方	根拠を示しながら書く (43)、事実と意見を区別しながら書く (12)、予想と結果を比較して書く (1)	
22	文章や図表の作り方	意見文の書き方 (7)、グラフの種別や作り方 (21)、図表の作り方 (39)、地図の書き方 (5)、年表のまとめ方 (7)、統計処理の仕方 (2)、効果的な図表の使い方 (16)、分かりやすい文章の書き方 (17)、文章の組み立て方 (11)、編集の仕方 (3)	
23	表現手段の選択について	さまざまな発表形式（ポスターセッション、壁新聞、地図などの掲示物、パンフレット、レポートなど、プレゼンテーションソフトを使った口頭発表、劇や紙芝居の制作など）の紹介 (28)	
24	論文・レポートのまとめ方	作品例を図示しながらレポート形式にまとめるよう指示 (33)、原稿用紙の使い方 (4)、段落の作り方 (2)、目的・方法・結果・考察などレポートの構成について (24)	
25	コンピュータなど機器を用いた発表の仕方	動画編集ソフトや地図ソフト、画像編集ソフトなどを使った加工・処理 (11)、絵コンテを書く (1)、Web ページの制作 (4)、プレゼンテーションソフトの使い方 (4)	
26	口頭発表の仕方	口頭発表の準備や工夫 (21)、原稿の準備 (10)、伝わりやすい話し方について (18)、レジュメや資料の効果的な利用 (7)	

27	掲示による発表の仕方	新聞形式にまとめる (20), ポスター形式にまとめる (14)
28	その他の発表方法について	冊子 (3), パンフレット (4), 本 (4), リーフレット (3)
29	情報モラルについて	インターネット利用上の注意を全般的に取り扱ったもの (17), 個人情報 (2), 著作権 (12)
30	引用の仕方	鉤括弧を使って引用箇所を抜書きすることや出典を示すこと (27)
31	参考文献リストの作り方	奥付の見方 (2) や書誌事項の書き方 (7), 参考文献リストの例を図示 (3)
32	評価の仕方	観点を決めて探究の成果を自己評価する (12), レポートや掲示物を相互に評価し合う (34)
33	学びの過程の振り返りについて	探究のプロセス全体を振り返る (3)

まず、テーマや課題の設定に関する No.1 から No.3 では、問題解決型の学習プロセスを段階的に確認したり、マッピングなどの発想法を使ってテーマを絞ったり、目的に応じた調べ方を考えたりする内容の記述が多い。教科書に見られる問題解決型の学習プロセスは、利用指導で使われるモデル⁹⁶と共通している。また、利用指導で扱う情報源や調べ方もほぼ取り上げられている。しかし、「～を使って調べましょう」「調べ方を決めましょう」という紹介や指示が多く、各メディアの特徴に踏み込んだ指導が行われるかどうかは教員の裁量に任されていると思われる。

次に、情報の収集に関する No.4 から No.14 では、主に、教科の専門領域に応じた各種情報源の使い方が取り上げられていた。しかし、児童・生徒が使っている辞書や地図帳、あるいは教師が教材として示しやすい新聞記事や Web サイトが中心で、他のページでは多種多様な情報源の利用が促されているにも関わらず、それらの使い方や特徴が紹介されていない場合があった。新聞記事の利用や読み解き、地図の見方、インタビューの準備や方法については、独立した教材が準備されていることと比べると、情報収集の手段によって、取り上げられ方に差が大きいことが分かった。

情報の整理・分析に関する No.15 から No.20 では、事実と意見を区別して読んだり、意見の根拠を探したり、図表から情報を読み取ったりする記述が中心であった。また、情報の比較・分類・並べ替えなど、集めた情報を整理・分析する具体的な方法も示されていた。情報評価の重要性について触れている教科書も多かったが、複数の資料にあたる以外の具体的な方法を示せていなかった。

まとめ・発表に関する No.21 から No.31 では、事実と意見を区別して書くなど文章の書き方、図表の描き方、レポートの構成、口頭発表の準備や手順が、教科の専門領域に応じて詳しく取り上げられていた。しかし、ポスターなど掲示によるまとめ方やプレゼンテーションソフトの使い方は、作品例の提示にとどまっていた。また引用の仕方や出典を示す重要性について取り上げられていたものの、奥付の見方など書誌事項の記録の仕方について説明したものはなかった。

評価や振り返りに関する No.32 から No.33 については、お互いに感想や意見を述べる相互評価が主に取り上げられていた。しかし、No.1 のような、学習プロセスを確認するページが教材の最初に設けられている場合でも、それぞれのプロセスに沿って自己評価するような記述はなかった。

3.4.3 結論

小中学校で使う検定教科書には、図書館利用指導で取り上げる項目が幅広く掲載されていた。その理由の一つに、教科による「学び方」指導の重要性が学習指導要領の中で指摘されたことが挙げられる⁹⁷。学校図書館担当者が取り組んできた指導項目の多くが、この「学び方」の項目（図表 3-20）と重複している。

図表 3-20 『学習指導要領 総合的な学習の時間編』で説明された「学び方」の内容

① 課題の見付け方やつくり方		
● 日常的に感じている問題を見つめ直す	● 知りたいことや疑問に思うことを絞り込む	
● 現実と理想を対比して課題を見付ける	● 事象の比較や関連づけによって矛盾や隔たりを認識する	
② 目的や意図に応じた情報の集め方や調べ方		
● 目的に応じた情報を収集する	● 目的に応じて情報収集の手段を選択する	● 多様な情報を収集する
● 必要な情報を取り出す	● 事象を精緻に観察する（自然観察など）	● 事象を見学する（施設など）
● 体験を通じた感覚的な情報収集	● 実験を行う	● インタビューする（質問しながら聞き取る）
● 図書で調べる	● 事実を確かめるために調査する（地域調査）	● マスメディアを活用して情報を得る
● インターネットで調べる	● 図書館の文献で調べる	● 質問紙で調査する（アンケート）
● 手紙、電話、FAX、電子メールで問い合わせる		
③ 整理・分析の仕方		
● カードにして整理する	● 収集した情報と既存の知識を関連付ける	● 収集した情報どうしを関連付ける
● 多面的・多角的な視点で分析する	● 地図化するなど空間軸で整理する	● 収集した情報を比較する
● 共通点と相違点に分けて分類する	● グループ化する	● 類推する
● 時間軸に沿って並べる	● 因果関係を推測する	● 原因と結果に分けて考える
● 情報の中にある特徴を見付ける	● 情報の重要性や信頼性を吟味する	● グラフの種類を使い分ける
● 数値データを統計的な手法で処理・グラフ化		
④ まとめ方や表現の仕方		
● 分かりやすくまとめる	● 自分の意見や考え、発見したことをまとめる	● 写真や図を利用する
● 作文にまとめる	● 絵画や音楽を使ってまとめる	● レポートを作成する
● 視聴覚機器を利用する	● 新聞形式にまとめる	● プレゼンテーションソフトを利用する
● 図や表を活用する	● 論理的な文章を書く	● ポスターにまとめる
● 出典を明記する	● グラフを使って表現する	● 引用する
⑤ 報告や発表・討論の仕方		
● 多様な形式から目的に応じて選択する	● 劇や音楽として発表する	● スピーチを行う（口頭発表をする）
● プレゼンテーションソフトを利用して発表する		● インターネットを使って発信する
● ポスターセッションをする	● 発表を聞いてよい質問をする	● 討論（ディベート）を行う
⑥ 見通しや計画の立て方		
● 見通しを持って学習計画を立てる	● 仮説を立て、検証方法を考え、計画を立てる	
⑦ 記録の取り方や活用の仕方		
● 数値化した情報の蓄積	● 言語化した情報の蓄積	
● ポートフォリオやファイルボックス、コンピュータのフォルダに保存する		
⑧ コミュニケーションの取り方		
● 失礼のない電話連絡の方法	● 正式に依頼状を出す方法	● 他者とのコミュニケーションの取り方
● 情報モラル		
⑨ 振り返りや意思決定		
● 学習活動を振り返る	● グループによって異なる学習内容を共有する	● 目的を明確にする
● 内容を明らかにする	● 方法を決める	
⑩ 自己評価		
● 互いの発見の共通点と相違点に気付く	● 互いの発見の関連性を見付ける	● 評価カードや学習記録を使って評価する
● 自己評価を行う		

教科が行う「学び方」指導の内容を、教科書の記述を手掛かりに分析すると、利用指導との共通点だけではなく相違点も明らかになった。

まず、利用指導に含まれる項目の中には、教科書でもていねいに取り上げられ、教科の専門性に基づいて指導することが可能なものがある。例えば、地図や辞書など、教科の特性に応じた参考図書の使い方、インタビューやアンケートなど人的情報源の活用の仕方、図表の読み取り方、文章や図表の作り方などである。

一方、教科書では取り上げられていなかったり、取り上げられることが少ない、あるいは取り上げ方が十分でない項目があり、これらは学校図書館の指導領域となりうる。例えば、書誌・目録・資料リストを使った情報収集、目次・索引の使い方、図書館で利用できるメディアの種類や特徴、さまざまなメディアの特徴や使い分け、参考文献リストの作り方（書誌事項の読み取り方）などがこれにあたる。

さらに、教科と学校図書館が、それぞれに指導できる項目がある。この中には、両者の指導の内容や方法が一致しているものと、異なっているものがある。前者の例として、学習計画の立て方やテーマ設定の仕方、論文やレポートのまとめ方、引用の仕方などがあり、後者の例として、参考図書の使い方や、検索の仕方（キーワードの作り方）などが挙げられる。

以上のように、「学び方」指導と図書館利用指導の共通点と相違点を踏まえると、2つの結論を導き出すことができる。

第一に、学校図書館利用指導は、「学び方」指導の一環として教科教育の中に位置づけることができる。その際、指導する内容に応じて、教科の指導に委ねるもの、学校図書館と教科が協力して指導するもの、学校図書館が独自に扱うもの、に分類・整理する必要がある。このように、学校図書館担当者と教科教員による指導が可能であるならば、第二の結論として、両者の連携による指導上の効果を指摘することができる。つまり、同じ内容を異なる方法や視点で指導したり、お互いに欠けている部分を補い合ったりすることが可能となり、「学び方」指導の効果をより高められると推察される。

ただし、実践の場においては、学習指導要領や教科書通りの指導が行われていないという調査結果もあることから⁹⁸、利用指導の内容を教科と学校図書館で分類するにはさらなる調査が必要である。教科書ごとに内容や扱われ方の差が大きいことも、どの項目を学校図書館または教科が指導すべきか特定することを難しくしている。

本節では、教科書を対象とした分析を行ったが、教科書では具体的な指導内容が分からない項目も多かったため、次節では、教師用指導書を用いた分析を行い、各教科における指導の内容をより詳細に把握する。

3.5 教師用指導書にみる「情報の探索と利用の指導」

本節は、司書教諭や学校司書が行おうとする学校図書館利用指導の内容が、既存の教科の中でどのように取り扱われているかを検討し、「情報の探索と利用の指導」における利用指導の独自性や意義について論じることを目的とする。教師用指導書から、情報の探索と利用に関する指導内容を示す記述を抽出し、利用指導の内容と比較した結果、利用指導で取り扱う知識・技能は、「教科でも同じように取り上げられているもの」、「一部が教科でも指導されているもの」、「教科では取り扱われていないもの」の3つに分類できることが分かった。利用指導は、生徒が自ら情報を探し出すこと、多様な情報源の特徴を生かして利用すること、適切な形で記録を取ることに焦点を合わせており、教科とは異なる指導領域を有している。このような知識・技能は探究的な学習において求められていることから、学校図書館と教科が連携して情報活用能力の育成に当たることは、教育的に大きな意義があると確認できた。

3.5.1 研究の目的と方法

本節は、学校図書館利用指導の内容が、教科の枠組みでどのように取り上げられているかを分析し、両者が取り扱う知識・技能の共通点と相違点を明らかにすることによって、利用指導の独自性や意義について論じることを目的とする。

この分析に先立ち、学習指導要領と解説、さらに、小・中学校で用いられる教科書を対象とした分析を行い、教科における利用指導的要素の取り扱い方について整理した（以下、指導要領調査⁹⁹と教科書調査¹⁰⁰と記す）。その結果、各教科で情報の探索と利用に関する指導が行われていることが分かった。しかし、指導要領や解説には図書館の利用を促すにとどまる記述が多く¹⁰¹、また、教科書には情報の利活用を想定した学習活動のみ示されているため、各過程で取り上げられる知識や技能については明らかにできなかった。そこで本節では、教科教員による指導の内容や方法をより具体的に捉えるため、教科書会社が発行する教師用指導書（以下、指導書）の記述を対象とした分析を行う。

分析の枠組みとなる利用指導の内容については、現在の教育課程や情報環境に合わせた検討が行われておらず、参照できる基準が存在しない¹⁰²。3章4節（教科書調査）では、6種類の学校図書館関係資料に取り上げられている項目を基準にした分析を行ったが、本節では、より網羅的に収集したデータを整理分析することによって作成した項目一覧（2章1節2項で示した25分野119項目）を、利用指導で取り扱う知識・技能とした¹⁰³。

利用指導の内容と、教科の中で行われる情報活用能力育成に関する指導の内容を比較する作業は、以下の手順で行った。まず、指導書の中から、利用指導の対象となる119の学習活動に相当する箇所を特定し、教科教員による指導の内容や方法が分かる記述を抽出した。次に、それぞれを解釈して、指導しようとする知識・技能を表すキーワードを付与し、それらを利用指導の内容に沿って分類した。尚、保健体育科の指導書からは、利用指導と同じ内容を示す記述を見出せなかったため、以下の分析は、国語科、社会科、理科、技術・家庭科に限定して行っている（図表3-21）。

図表 3-21 分析した中学校教科書用の教師用指導書

科目	出版社	発行部数	占有率
国語	光村図書出版	2,337,778 冊	63.8%
社会（地理分野）	東京書籍	1,174,695 冊	47.9%
（歴史分野）	東京書籍	679,038 冊	52.8%
（公民分野）	東京書籍	686,738 冊	57.0%
理科	啓林館	2,385,154 冊	32.5%
保健体育	学習研究社	552,935 冊	44.3%
技術・家庭	東京書籍	527,903 冊	42.5%

※発行部数と占有率は 2012 年度のデータ

例えば、社会科の指導書から“当時の新聞の活用，資料館の見学やウェブサイトの活用，聞き取り調査など，調べ方や学び方の方法についておさえる”という記述を抽出した場合，これは「調べ方の種類」を説明した内容であり，「過去の新聞」「見学」「インターネット」「聞き取り調査」という調べ方が生徒に提示されていると解釈する。これらを，社会科で扱われる知識・技能として，利用指導の「06-02 目的に応じた調べ方を選択する」という分野に分類する（図表 3-22）。すべての指導書でこの作業を繰り返し，利用指導の各分野に，教科で扱う知識・技能を集約した。

図表 3-22 教師用指導書の分析例

教科	教科における指導の内容 (教師用指導書の記述を抽出)	知識・技能 (キーワード付与)	相当する利用指導の分野
国語	“学校図書館や地域の図書館，公共施設，あるいは新聞やインターネットなど，これらの施設や情報手段などそれぞれの特徴を理解し，その特徴を生かした情報の収集のしかたを指導する必要がある”	調べ方の種類 施設の特徴 情報手段の特徴	06-02（目的に応じた調べ方を選択する）
社会	“当時の新聞の活用，資料館の見学やウェブサイトの活用，聞き取り調査など，調べ方や学び方の方法についておさえる”	調べ方の種類	06-02（目的に応じた調べ方を選択する）
社会	“住民の意識調査や広報誌，ホームページなどを活用させて，あるいは家族や近所の人にインタビューを行わせることで”	調べ方の種類	06-02（目的に応じた調べ方を選択する）
理科	“図書館や科学館などの地域施設や新聞などいろいろな情報収集の手段があることを知らせる”	調べ方の種類	06-02（目的に応じた調べ方を選択する）

最後に，119 の学習活動ごとに，各教科で取り扱われている知識・技能と，利用指導で取り扱う知識・技能とを比較し，利用指導だけに見られるもの，教科でも指導されているものに分けた（図表 3-23）。

図表 3-23 学校図書館利用指導の内容と教科での取り扱い

(◎利用指導と同一内容、○利用指導と一部重複、?指導項目不明、×利用指導と重複なし)

No.	利用指導の内容	生徒の学習活動	グループ	利用指導で取り扱う知識・技能 (教師用指導書には記載がない項目)	国語	社会	理科	技術
01	学習計画の立て方	01-01 学習計画を立てる	A	探究プロセス、調べ方／まとめ方の種類	◎	○	○	○
02	テーマ設定の仕方	02-01 テーマを決める	A	基礎知識を獲得する、興味のあることを挙げる、調べたいことを挙げる、疑問に思うことを挙げる、広げる	◎	○	○	○
		02-02 課題を明確にする	B	既存の知識を確認する、問いを立てる、小さな問いを立てる、仮説を立てる	○	○	×	×
03	図書館の使い方	03-01 図書館の意義と役割を理解する	C-2	図書館の意義・役割・機能、生涯学習、図書館の種類、図書館と人権との関わり（知る権利、表現の自由、プライバシー）、図書館行事	×	×	×	×
		03-02 学校図書館を利用する	B	学校図書館の意義・役割・機能、図書館資料の特徴、貸出、返却、施設、設備、館内図、サイン、配架、本の取扱い方、予約、リクエスト、複写、マナー	○	?	○	×
		03-03 公共図書館を利用する	B	公共図書館の意義・役割・機能、生涯学習、所在地、利用のきまり、図書館資料の特徴、配架、レファレンスサービス、予約、リクエスト、マナー	?	○	×	×
04	図書館での資料の探し方	04-01 適切な目録を選択する	C-2	目録の種類（カード目録、コンピュータ目録、冊子目録）と特徴	×	×	×	×
		04-02 カード目録を使って資料を探す	B	カード目録の種類（書名目録、著者名目録、分類目録、件名目録）と特徴、検索の仕方	○	?	×	×
		04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す	B	コンピュータ目録の特徴、アクセスポイント（著者名、タイトル、キーワード、分類番号、件名）、検索の仕方	○	?	?	×
		04-04 書架を見ながら資料を探す	B	主題、上位概念／下位概念、別置	○	○	×	×
		04-05 文献リストを使って資料を探す	C-2	書誌(主題書誌、個人書誌)、目録、索引、パスファインダー、参考文献リスト	×	×	×	×
		04-06 自館にない資料を探す	C-2	図書館間ネットワーク、横断検索、相互貸借、予約	×	×	×	×
		04-07 雑誌記事を探す	C-2	所蔵している雑誌の種類と配架場所、検索ツール（雑誌記事索引、オンライン・データベース）、検索の仕方	×	×	×	×
		04-08 新聞記事を探す	C-2	新聞の種類と配架場所、検索ツール（新聞記事索引、縮刷版、マイクロフィルム、新聞記事データベース、インターネット、切り抜きファイル）、検索の仕方	×	×	×	×
05	図書館以外の施設の使い方	05-01 専門図書館を利用する	C-2	利用できる図書館の種類（企業図書館、地域文庫）、所在地、蔵書の種類、利用法、マナー	×	×	×	×
		05-02 文化施設を利用する	B	利用できる文化施設の種類（美術館、科学館、記念館、文学館、公民館、視聴覚ライブラリ）、機能、所在地、蔵書の種類	×	○	○	○
		05-03 公的機関を利用する	B	利用できる公的機関の種類（観光課、各国大使館）、機能、所在地、利用法、マナー	×	○	○	×
		05-04 さまざまな施設を利用する	B	利用できるその他の施設の種類（水族館、植物園、動物園）	×	○	○	×
06	情報探索の見通しの立て方	06-01 情報探索の見通しを立てる	B	情報源や調べ方の特徴、キーワードを挙げる	○	○	○	○
		06-02 目的に応じた調べ方を選択する	A	調べ方の種類（文献調査、観察、実験、見学、フィールドワーク、インタビュー、撮影）と特徴	○	○	○	×
		06-03 目的に応じたメディアを選択する	B	メディアの種類（実物、模型、ファイル資料）と特徴、図書館が所蔵するメディアの種類、ジャンルごとのメディアの特徴	○	○	?	×
07	図書を使った調べ方	07-01 図書を積極的に利用する	B	図書の歴史、図書の作られ方	?	○	?	×
		07-02 図書を使って調べる	B	本の取り扱い方（ページのめくり方、書架からの取り出し方）、読書衛生	○	?	×	×
08	参考図書を使った調べ方	08-01 参考図書を利用する	B	参考図書の種類と特徴（年鑑、白書、便覧、新聞縮刷版）、媒体（冊子体、CD-ROM、Web サイト、データベース）、調べ方（目次、索引）	○	○	×	×
		08-02 百科事典を使って調べる	B	百科事典の種類と特徴、媒体（冊子体、CD-ROM、オンライン・データベース）、調べ方（リンク）、構成（爪・	○	?	×	×

				柱・背)						
	08-03	事典を使って調べる	B	事典の種類（百科事典と主題別事典）と特徴，調べ方（目次・索引），記述（大項目／中項目／小項目），複数の辞典を比較する	事典の種類（人名事典，地理事典）		○	○	×	×
	08-04	図鑑を使って調べる	C-1	図鑑の種類と特徴，調べ方（目次，索引）			×	×	？	？
	08-05	辞典を使って調べる	A		辞典の種類と特徴，調べ方（配列，索引，同音異義語），複数の辞典を比較する		◎	×	×	×
	08-06	統計を使って調べる	B	統計の種類と特徴，調べ方（索引），目的に応じて利用する	複数の統計を利用する		×	○	×	×
	08-07	年鑑を使って調べる	C-2	年鑑の種類と特徴，調べ方（目次，索引），構成，目的に応じて利用する			×	×	×	×
	08-08	地図を使って調べる	A		地図の種類と特徴，調べ方（索引），地図記号		×	◎	×	×
	08-09	白書を使って調べる	D				×	×	×	×
	08-10	便覧を使って調べる	C-2	調べ方（目次・索引）			×	×	×	×
09	新聞・雑誌を使った調べ方									
	09-01	新聞を使って調べる	B	記事の種類（コラム，その他の記事），版，文章の型（5W1H）	新聞の種類と特徴，新聞記事の構成（見出し，リード，本文，写真，図表，逆ピラミッド型），記事の種類（社説），複数の新聞を比較する		○	○	×	×
	09-02	雑誌を使って調べる	C-2	雑誌の種類と特徴，複数の記事を比較する			×	×	×	×
10	視聴覚メディアを使った調べ方	10-01	視聴覚メディアを利用する	A		音声／画像／映像情報の種類と特徴，機器（スライド，テレビ，VTR，DVD）の基本操作	○	？	×	◎
11	電子メディアを使った調べ方	11-01	電子メディアを利用する	B	電子メディアの種類（CD-ROM，各種ソフトウェア，インターネット）と特徴	コンピュータやソフトウェアの基本操作	×	×	×	○
	11-02	コンピュータを利用する	A		コンピュータの各部の名称，キーボード操作，マウス操作，電源，クリック／スクロール，印刷する，保存する，数字や文字を打つ，図形や絵を描く		×	×	×	◎
	11-03	インターネットを使って調べる	B	ブラウザの種類と特徴，ポータルサイト	インターネット上の情報の特徴（サイトの種類，信憑性），URL，リンク集，使用上のルール		○	○	○	○
	11-04	インターネットを安全に利用する	B	ID とパスワードの取り扱い	インターネット上の情報の特性，有害情報，ウィルス，ルール，マナー		○	×	○	○
	11-05	検索エンジンを使って調べる	C-1	検索エンジンの種類と特徴（ディレクトリ型／ロボット型），検索の仕方（ディレクトリ検索，キーワード検索，カテゴリー検索），検索キーワード（同義語，上位語／下位語），ブール演算（演算子，and 検索，or 検索）			？	？	？	？
	11-06	CD-ROM を使って調べる	C-2	基本操作			×	×	×	×
	11-07	オンライン・データベースを使って調べる	C-2	データベースの種類，検索の仕方			×	×	×	×
12	その他の資料を使った調べ方	12-01	情報ファイルを使って調べる	C-2	情報ファイルの種類と特徴，使い方		×	×	×	×
	12-02	その他の資料を使って調べる	C-2	さまざまな資料の種類と特徴，使い方			×	×	×	×
13	その他の調べ方	13-01	インタビューで情報を収集する	B	結果を集計する	依頼する，質問項目を挙げる，答えを予測する，記録する，礼状を書く	○	○	×	×
	13-02	アンケートで情報を収集する	A		対象者を決める，質問項目を挙げる，アンケート用紙（依頼文，フェイスシート，質問紙）を作成する，結果を集計する		◎	×	×	×
	13-03	手紙で問い合わせる	A		手紙の書き方（あいさつ，本文）		◎	×	×	×
	13-04	FAX で問い合わせる	C-2	FAX の送り方			×	×	×	×
	13-05	電話で問い合わせる	C	電話のかけ方，言葉遣い，マナー			？	×	×	×
	13-06	電子メールを利用する	A		マナー，ウィルス，目的に応じて使い分ける（電話，手紙，FAX 等）		○	×	○	○
	13-07	フィールドワークで情報を収集する	B	訪問先に依頼する，調査結果を整理する	調査の目的・内容・方法を明確にする，記録する		×	○	×	×
14	情報検索の仕方	14-01	検索戦略を立てる	C-1	検索ツール（オンライン・データベース，サーチエンジン，CD-ROM，目録，書誌）の種類と特徴，検索プロセス，目的に応じた検索ツールを選ぶ		？	×	×	×
	14-02	検索式を作る	C-2	ブール演算子（AND，OR，NOT）			×	×	×	×
	14-03	検索に適したキーワードを作る	C-1	上位概念／下位概念，類義語，同義語，関連語，統制語（件名）／自由語			？	×	×	×
	14-04	検索結果を評価する	C-2	ヒット数，適合性			×	×	×	×

15	資料（情報）の評価の仕方	15-01	複数の情報を比較する	B	比較の観点（精粗，優劣）	比較の必要性，観点（出所，異同，新旧，必要度）	○	○	○	×
		15-02	情報の信憑性を判断する	A		責任表示の見方（出所，新旧），複数の資料を比較する，統計や年鑑のデータを利用する	◎	○	○	○
		15-03	情報の妥当性を判断する	B	第三者が検証可能な資料を選択する	根拠の有無を確認する	○	？	？	？
		15-04	情報の適合性を判断する	B	責任表示の見方（新旧），利用価値を判断する（目次・索引・前書き・後書き・解説を読む）		×	○	×	×
		15-05	情報を読み解く	B	独創性，科学性，包括性，バイアスの有無，時代性，機能性，分かりやすさ	偏見や独断の排除，論理の一貫性，正確さ	○	○	○	×
		15-06	情報を批判的に読み解く	B	賛成同意／反対異議を判断する	マスメディアが発信する情報の特徴，複数の資料を比較する，意図を読み取る	○	？	×	×
16	記録の仕方	16-01	目的に応じた記録方法を選択する	A		記録方法の種類と特徴（ノート，カード，録画，録音，電子化，コピー，クリッピング，ダウンロード）	◎	×	×	×
		16-02	カードやノートに記録する	B	カードやノートの種類と特徴，出典を記録する（ページ，一項目を一枚に書く，図化する）	見出しを付ける，出典を記録する（書誌事項），要約する（箇条書き），引用する，矢印等記号を用いる	○	○	×	×
		16-03	写真で記録する	B	印刷	（デジタル）カメラの基本操作，撮影方法，保存，効果的な撮影のしかた（フレーミング，カット，場面，カメラワーク）	？	○	×	○
		16-04	ビデオで記録する	B	（デジタル）ビデオカメラの基本操作，マナー	撮影上のルール（肖像権への配慮，事前許諾）	×	○	×	×
		16-05	録音する	C-2	記録媒体（テープレコーダー，MD，ボイスレコーダー），記録機器の基本操作		×	×	×	×
		16-06	コンピュータで記録する	C-2	記録媒体（HD，FD，CD-R，ソフト），コンピュータの基本操作		×	×	×	×
		16-07	出典を記録する	B	記録する目的と意義	記録すべき事項（URL，参照日，書誌情報），責任表示，奥付（書名，著者名，出版社名，出版年，ページ，ISBN）	○	○	×	×
		16-08	文献リストを作成する	B	新聞／雑誌の書誌事項（執筆者，タイトル，誌名，巻・号，発行年月日，頁など），必要な項目を読み取る，ルールに則って書く	図書の書誌事項（書名，著者名，出版社，出版年，掲載頁など）	○	○	？	×
17	資料（情報）の読み方	17-01	目的に応じて読み方を変える	B	探し読み（スキミング），速読，キーワード／キーセンテンスを拾う	拾い読み（スキミング），走り読み，精読，通読，	○	○	×	×
		17-02	図書から情報を読み取る	B	章立てから概要をつかむ，見出しに沿って読む	序章や目次を読んで概要をつかむ，	○	×	×	×
		17-03	精読する	A		章と節の構造を見る，接続表現を見る，丁寧に読む，必要な箇所を選んで読む，未知の語句を調べる	○	○	×	×
		17-04	統計データを読み取る	C-1	批判的に読む		？	？	×	×
		17-05	図表やグラフの情報を読み取る	A		写真を読む，挿絵を読む，キャプションを読む	○	○	×	×
18	資料（情報）の整理の仕方	18-01	情報を取捨選択する	A		目的に応じて取捨選択する	○	◎	×	×
		18-02	収集した情報をファイリングする	B	ファイルの種類と特徴，目次を作成する，分類する，出典を記録する	ナンバリングする，見出しをつける，スクラップする	○	○	×	×
		18-03	収集した情報を保存する	B	目的に応じた保存法を選択する，類別化する，整理・廃棄・保管に関する規則を作る	画像を保存する，文章を保存する，記録媒体に保存する，印刷する，コピーする	×	○	×	○
19	情報の分析の仕方	19-01	情報を分析する	B	組み合わせる	関連づける（原因と結果），比較する（共通点と相違点），分類する，並べ替える，	○	○	×	×
		19-02	収集した情報を分類する	B	インデックスを作成する，色分けする	分類基準（主題，キーワード，年代など），カテゴリー（グループ）を作る，見出しをつける	○	○	×	×
		19-03	収集した情報の重要な箇所を抜き出す	B	線を引く，引用する	付箋を貼る，要約する，箇条書き	○	？	×	×
		19-04	事実と意見を区別する	A		客観的事実，意見・主張・見解	◎	×	×	×
		19-05	仮説を検証する	A		整理した情報で仮説を検証する，問いと答えを組み合わせる，主張の根拠となる事実やデータを選ぶ	○	○	×	×
		19-06	統計処理をする	C-2	統計ソフトウェアの使い方，表計算ソフトの使い方		×	×	×	×
20	情報の加工の仕方	20-01	抄録を作成する	D-2			×	×	×	×
		20-02	解題を作成する	D-2			×	×	×	×
		20-03	翻訳する，翻案する	D-2			×	×	×	×
		20-04	映像を編集する	A		映像編集ソフトの種類と特徴，アニメーションを制作する，ビデオを制作する，台本を書く	×	×	×	◎
		20-05	音声を編集する	B	作曲する，編曲する，BGMを入れる	音声を挿入する，編集機器の基本操作	×	×	×	○
		20-06	画像を編集する	A		画像編集ソフトの種類と特徴，画像を取り込む（スキ	×	×	×	◎

21	情報を使った 文章の書き方	20-07	グラフを作成する	A	ヤナ, デジタルカメラ) グラフの種類 (棒グラフ, 円グラフ, 折れ線グラフ) と特徴, データの取り扱い, グラフの作り方, 出典を 示す, 目的に応じたグラフを作成する	○	◎	○	×	
		20-08	図表を作成する	B	写真や画像の取り扱い (著作権)	見出しを付ける, 出典を示す	○	○	×	×
		21-01	引用する	B	著者の意図を損なわない	直接引用／間接引用, 公正利用, 主従の関係, 明瞭区 分性, 「」で示す, 原文のまま抜書きする, 出典を示す	○	○	○	○
		21-02	要約する	A		要点をつかむ, 要旨をまとめる, 出典を示す	◎	○	×	×
		21-03	図表やグラフを利用する	A		図表を引用する, グラフを引用する, 出典を示す	◎	○	×	×
		21-04	事実と意見を区別して書く	D-1			?	?	?	×
		21-05	論理的な文章を書く	A		問いと答えを組み合わせる, 主張の根拠となる事実や データを示す, ひな形を使って論旨を構築する	◎	○	○	×
		21-06	分かりやすい文章を書く	B	ひな形を利用して書く, 未知の用語を調べる	5W1H, 見出しの付け方, 段落のつくり方 (トピックセ ンテンス), 簡条書きする, パラフレーズ (言い換え)	○	○	○	×
22	まとめ方	21-07	出典を示す	C-2	必要な書誌事項, ルールに則って書く		×	×	×	×
		21-08	ルールに則って書く	A		常体と敬体, 句読点の付け方, 原稿用紙の使い方	◎	×	×	×
		22-01	適切な表現方法を選択する	B	表現法の種類 (絵本, 紙芝居, ペープサート)	表現法の種類 (作文, レポート, 新聞, ポスター, 模 造紙, パンフレット, プレゼンテーション, スピーチ) と特徴, 目的に応じた表現方法を選択する	○	○	×	○
		22-02	アウトラインをつくる	B	伝えたいことをタイトルに表現する	情報を並べる, 章立て(章・節・項)をつくる, 話す順番 を決める	○	○	×	×
		22-03	レポートにまとめる	B	図表のキャプション	一般的なレポートの書式 (表紙 (タイトル, 所属, 氏 名), 目次, 序論・本論・結論, 考察, 参考文献), 実 験レポートの構成, 表やグラフを入れる	○	○	○	×
		22-04	文書を作成する	B	文書作成ソフトの種類と特徴	ローマ字入力, 画像を挿入する	○	○	×	○
		22-05	スライドを作成する	A		プレゼンテーション・ソフトの種類と特徴, 使い方 (文 字入力, 画像処理, アニメーションの設定, 音声, 背 景設定), 画像や映像を適正に利用する, アニメーシ ョンを効果的に用いる	○	○	×	○
		22-06	ホームページにまとめる	D-1			×	?	×	?
23	発表の仕方	22-07	新聞形式にまとめる	B	5W1H で書く	新聞の構成 (題字, 見出し, リード, 本文, 写真, キ ャプション, 発行日), レイアウト (割り付け)	○	○	?	×
		22-08	ポスターにまとめる	A		ポスターの構成(タイトル, 見出し), レイアウト(割り 付け), 視覚的工夫(文字の大きさ, 色, 枠)	◎	○	×	○
		22-09	パンフレットにまとめる	A		パンフレットの構成, レイアウト (割り付け)	◎	×	×	×
		23-01	シナリオ (原稿) を書く	D-1			?	?	×	×
		23-02	提示用の資料を作成する	B	さまざまな掲示の方法 (板書)	さまざまな掲示の方法 (OHP, AV 機器, コンピュータ)	?	○	○	○
		23-03	配布資料 (レジュメ) をつくる	D-1			?	?	×	×
		23-04	分かりやすく話す	B	原因と結果・理由や根拠を示しながら話す	声量, 発声法, 目的や場に応じた言葉を選ぶ	○	○	○	?
		23-05	機器を使って発表する	B	プレゼンテーションソフトの種類と特徴, 目的に応じ て機器を選択する	コンピュータの基本操作, AV 機器の基本操作	×	?	?	○
23-06	話し合いをする	B	さまざまな話し合いの方法 (パネルディスカッション, ポスターセッション)	さまざまな話し合いの方法 (ディベート, 討論)	○	×	×	×		
24	情報モラル	24-01	著作権に配慮して情報を利用する	A	著作権法, 知的財産権, 知的所有権, 複写, コピー& ペースト, ダウンロード, 写真や画像の取り扱い, 公 正利用, 許諾をとる, 引用する, 出典を示す	○	○	○	○	
		24-02	適正に情報を発信する	B	チェーンメール, 情報発信に関わる責任	著作権への配慮, 個人情報の取り扱い, プライバシー, ネチケット	?	○	○	○
25	学習成果の評価の仕方	25-01	学習の成果を自己評価する	B	評価の方法 (チェックリスト, ポートフォリオ)	評価の項目 (学習プロセス, 成果), 評価の手段 (段階 式評価, 記述式評価)	○	×	×	×
		25-02	学習の成果を相互評価する	B	評価の方法 (ポートフォリオ)	評価の方法 (チェックリスト), 評価の項目 (学習プロ セス, 成果), 評価の手段 (段階式評価, 記述式評価)	○	○	×	○

3.5.2 結果と考察

図表 3-23 の右欄に、各教科が「利用指導と同じ知識・技能を取り扱っている」場合は◎、「利用指導で扱う知識・技能の一部を取り扱っている」場合は○、「どのような指導を行うのか分からない」場合は？、「この学習活動を行わない、あるいは利用指導とは異なる知識・技能を取り扱っている」場合は×と記した。また、利用指導で取り扱う知識・技能を、教科での取り扱いがあるものとなないものに分けた。

このように、教科に分散している利用指導的要素を集約し、利用指導の内容と比較してみると、利用指導と教科の関係について 5 つのパターンを見出すことができた。それぞれについて、以下の節で述べる。

3.5.2.1 利用指導の内容が教科でカバーされている項目

まず、利用指導の要素が、教科でも同じように指導されている項目を挙げる（図表 3-23 にグループ A として示す）。これらは、利用指導の内容と、教科の内容が重複しているもので、119 の学習活動のうち、28 項目（23.5%）が当てはまった。

例えば、「01-01 学習計画を立てる」という学習活動において、利用指導では「探究プロセスとはどのようなものか」「調べ方やまとめ方にはどのような方法があるか」といった内容を扱うが、これらは、国語科で同じ内容が、社会科や理科、技術・家庭科では一部が取り扱われていた。また、「02-01 テーマを決める」という学習活動では、「基礎知識を獲得する」「興味のあることを挙げる」「調べたいことを挙げる」「疑問に思うことを挙げる」「テーマを広げる」という内容が、複数の教科でカバーされていた。

このように、利用指導の内容と、教科による指導内容が一致すると判断できる項目は以下のとおりである。まず、主に国語科で指導されているのは、「辞典を使って調べる」「アンケートで情報を収集する」「手紙で問い合わせる」「目的に応じた記録方法を選択する」「要約する」「図表やグラフを利用する」「論理的な文章を書く」「ルールに則って書く」「ポスターにまとめる」「パンフレットにまとめる」である。また、社会科で指導されているのは「地図を使って調べる」「グラフを作成する」、技術・家庭科で指導されているのは「視聴覚メディアを利用する」「コンピュータを利用する」「映像を編集する」「画像を編集する」である。複数の教科で指導されているのは、「目的に応じた調べ方を選択する」「電子メールで問い合わせる」「情報の信憑性を判断する」「精読する」「図表やグラフを読み取る」「情報を取捨選択する」「事実と意見を区別する」「仮説を検証する」「スライドを作成する」「著作権に配慮して情報を利用する」の各項目である。

ここに挙げた 28 の学習活動に含まれる知識・技能は、それぞれ教科の内容と親和性が高く、学習指導要領でも、教科の内容に位置付けられている。指導書にも具体的な指導法が示されており、教科教員が自らの専門性に基づいて教えることができる内容だと言える。例えば、辞書の引き方や地図の見方は、図書館資料の使い方として学ぶよりも、国語科や社会科の授業のなかで身につけることが多い。このように、利用指導のねらいと教科のねらいが一致する項目では、両者が同じ知識・技能を取り扱うことになる。

3.5.2.2 利用指導と教科の内容が一部重複する項目

次に、利用指導の内容と考えられている知識・技能の一部が、教科のなかで取り上げられている項目を挙げる（グループ B）。例えば、「02-02 課題を明確にする」という学習活動

において、「既存の知識を確認する」「問いを立てる」「小さな問いを立てる」「仮説を立てる」という内容は、国語科や社会科、理科でも取り上げられているが、「キーワードを挙げる」という指導については、どの教科の指導書にも記述がなかった。利用指導においては、テーマに関するキーワードを挙げることは、課題を明確にするためにも、必要な情報を探すためにも必要な指導と考えられている²⁵。

同様の傾向を示した学習活動は56項目（47.1%）あり、探索過程に沿って整理すると以下になる。

まず、情報収集の段階では、「学校図書館を利用する」「公共図書館を利用する」「カード目録を使って資料を探す」「コンピュータ目録を使って資料を探す」「書架を見ながら資料を探す」「文化施設を利用する」「公的機関を利用する」「さまざまな施設を利用する」「情報探索の見通しを立てる」「インタビューで情報を収集する」「フィールドワークで情報を収集する」が該当した。

情報源の利用に関する項目は、「目的に応じたメディアを選択する」「図書を積極的に利用する」「図書を使って調べる」「参考図書を利用する」「百科事典を使って調べる」「事典を使って調べる」「統計を使って調べる」「新聞を使って調べる」「電子メディアを利用する」「インターネットを使って調べる」「インターネットを安全に利用する」であった。

情報の評価や選択に関する項目としては、「目的に応じて読み方を変える」「図書から情報を読み取る」「複数の情報を比較する」「情報の妥当性を判断する」「情報の適合性を判断する」「情報を読み解く」「情報を批判的に読み解く」があった。

また、情報の記録や保存に関するものとしては、「カードやノートに記録する」「写真で記録する」「ビデオで記録する」「出典を記録する」「文献リストを作成する」「収集した情報をファイリングする」「収集した情報を保存する」という項目が挙げられた。

情報の分析や加工に関する項目としては、「情報を分析する」「収集した情報を分類する」「収集した情報の必要な箇所を抜き出す」「音声を編集する」「図表を作成する」「引用する」「分かりやすい文章を書く」「適切な表現方法を選択する」「アウトラインをつくる」「レポートにまとめる」「文書を作成する」「新聞形式にまとめる」「提示用の資料を作成する」があった。

さらに、発表や評価に関する項目としては、「分かりやすく話す」「機器を使って発表する」「話し合いをする」「適正に情報を発信する」「学習の成果を自己評価する」「学習の成果を相互評価する」があった。

以上の学習活動について、利用指導と教科の内容を比較すると、主に、情報を見つけ出し記録するために用いる知識・技能が、教科ではあまり取り扱われていないことが分かった。具体的には、図書館で情報を探すためのさまざまな手順や方法、情報を収集するために利用できる多様な施設、情報源の多様性とそれぞれの特徴、図書等印刷資料から必要な情報を探し出す技能、図書以外の多様なメディアの利用に関する知識、情報を評価するために参照すべき事項、情報を記録する方法やルールなどである。

このような知識・技能が、各学習活動において不可欠な要素なのか、あるいは、発展的な要素なのかは個別に検討が必要であるが、仮に前者であれば、情報収集の過程において、既存の教科の内容だけでは指導が不十分であると言える。

3.5.2.3 教科で指導する知識・技能が明確でない項目

指導書を見る限り、情報を活用した学習活動が想定されているにも関わらず、必要な知識・技能の指導について言及されていない項目があった（グループ C-1）。例えば、「11-05 検索エンジンを使って調べる」という学習活動は、どの教科でも行われている。しかし、利用指導で取り上げる「検索エンジンの種類と特徴」「検索の仕方」「検索キーワード」「ブル演算」に相当する記述が指導書にはなく、検索の際にどのような指導が行われるのか把握することができなかった。

このグループに属するのは、この他に「図鑑を使って調べる」「電話で問い合わせる」「検索戦略を立てる」「検索に適したキーワードを作る」「統計データを読み取る」の 6 項目（5.0%）であった。

この中で、「検索エンジンを使って調べる」「検索戦略を立てる」「検索に適したキーワードを作る」という学習活動に焦点を合わせると、利用指導では、「検索ツールの種類」「目的に応じた検索ツールの選び方」「検索のプロセス」「上位概念／下位概念」「類義語・同義語」「統制語・件名」「検索結果の適合性」といった内容を取り扱う。一方、教科の枠組みにおいては、インターネットの検索エンジンの利用や、図書館の蔵書検索が求められる場面があっても、効果的な検索の仕方について指導が行われない。

3.5.2.2 と 3.5.2.3 の結果を合わせると、利用指導が、教科の枠組みを超えて扱っている主な内容は、多様なメディアを利用することや、必要な情報を見つけることなど、情報収集の過程で求められる知識や技能が中心であることが分かる。学習指導要領に示された教科の「内容」を見ると、教科ではこのような指導が求められていないことが明らかである。例えば、国語科は、「話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと」を指導の対象としており、与えられた情報を解釈したり、それらを用いて書いたり話したりする能力を育むことに焦点を当てている。このように、教科の枠組みでは、多様な情報源から必要な情報を探したり、それらを必要な形に加工したり、記録したりするために必要な知識や技能が取り上げられにくい。

3.5.2.4 教科では取り上げられていない項目

利用指導の対象となる学習活動のなかには、教科では取り扱われていないものがあった（グループ C-2）。

具体的には、「図書館の意義と役割を理解する」「適切な目録を選択する」「文献リストを使って資料を探す」「自館にはない資料を探す」「雑誌記事を探す」「新聞記事を探す」「専門図書館を利用する」「年鑑を使って調べる」「便覧を使って調べる」「雑誌を使って調べる」「CD-ROM を使って調べる」「オンライン・データベースを使って調べる」「情報ファイルを使って調べる」「その他の資料を使って調べる」「FAX で問い合わせる」「検索式を作る」「検索結果を評価する」「録音する」「コンピュータで記録する」「統計処理をする」「出典を示す」がこれに該当し、119 の学習活動のうち 21 項目（17.6%）が当てはまった。

このような学習活動で求められる知識・技能は、主に、特定の検索ツールや情報源の利用の仕方、情報検索や処理に関するより高度な技能、レポートの書式に関する知識である。これらは、中学生にとっては発展的な内容であり、学校で必要な機器やツールを用意することが難しいがために、教科で取り上げられていないと考えられる。

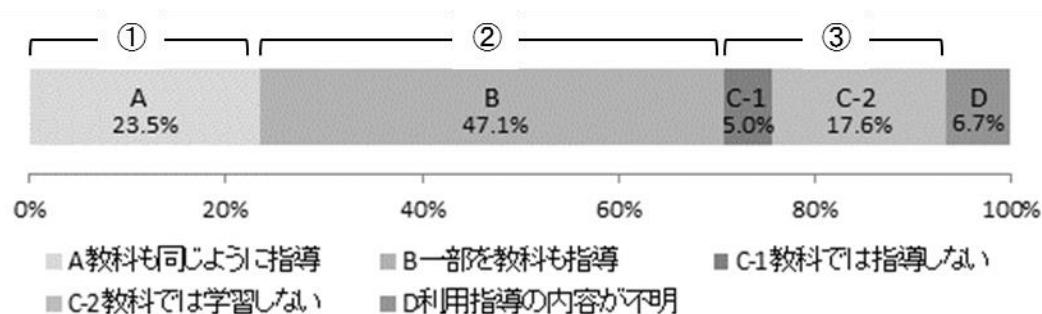
3.5.2.5 利用指導の内容が明確でない項目

この他に、利用指導の内容が不明、すなわち学校図書館でどのような指導をするのか、利用指導に関する文献にも示されていない項目が8項目（6.7%）あった。そのなかで、教科書には該当する学習活動が見られたもの（D-1）は、「事実と意見を区別して書く」「ホームページにまとめる」「シナリオ（原稿）を書く」「配布資料（レジュメ）をつくる」の4項目、教科書にも取り上げられていなかったもの（D-2）は「白書を使って調べる」「抄録を作成する」「解題を作成する」「翻訳する、翻案する」の4項目である。これらは、教科の内容と比較できないため、本調査では分析の対象から外した。

3.5.3 結論

学校図書館が行う利用指導の内容を25項目挙げ、それらが教科でどのように取り扱われているか比較した結果、指導の対象となる119の学習活動で取り扱う知識・技能には、①利用指導で取り上げる知識・技能が、教科でも同じように取り上げられている、②利用指導の内容の一部が、教科でも指導されている、③利用指導で取り上げる知識・技能が、教科では扱われていない、の3つがあることが分かった（図表3-24）。

図表 3-24 教科における利用指導(119項目)の取り扱い



①に相当するものは、3.5.2.1で示したグループAの28項目である。これらは、利用指導の内容とされている項目の中に、教科の指導領域として捉えられるもの、あるいは、教科による指導が妥当と考えられるものがあることを示している。このことから、既存の利用指導体系表や基準を見直し、これらの項目を利用指導として取り扱う妥当性を再検討する必要があると言える。

②に相当する項目は、3.5.2.2で示したグループBの56項目である。これらは、教科の内容だけでは、情報の探索と利用に際して生徒が必要とする知識・技能を、十分カバーしていないことを示している。例えば、図書館に調べものに来た生徒は「コンピュータ目録を使って資料を探す」という活動を行う。彼らが、国語科の中で請求記号の見方に関する指導を受けているとすると、検索結果の画面から資料の配架場所を読み取ることができるだろう。しかし、「アクセスポイント」や「キーワード作成」に関する指導が行われない場合、蔵書検索でも、インターネットの検索エンジンと同じようなキーワードを用いてしまい、適切な検索結果が得られない可能性がある。利用指導は、このような学習活動のなかで、独自の指導領域を有しており、教科と役割分担することによって、情報の探索と利用に関する指導に貢献することができる。

③に相当する項目は、二つに分類できる。まず、教科のなかで、学習に必要な知識・技能の指導が行われていないものである。3.5.2.3 で示したグループ C-1 の 6 項目がこれに該当する。例えば、単元のなかで新聞記事を探して利用する学習が想定されていても、新聞記事データベースや縮刷版の利用法が指導されない場合、生徒が必要な新聞記事を自ら見つけ出すことは難しい。もう一つは、利用指導が対象とする学習活動そのものが、教科には見られないもので、3.5.2.4 で示したグループ C-2 の 21 項目がこれに含まれる。これらは、中学校の教科の課題では必要とされていない内容であるとも言えるが、総合的な学習の時間で行う探究的な学習では、このような知識・技能が求められることがある。

学校図書館担当者は、このような項目が教科では取り扱われないことを意識し、生徒が必要な知識や技能を習得する機会を創出すると同時に、利用指導の一環として自ら教えていくことができると考える。

学校図書館利用指導は、プロセスモデルを理論的背景とし、情報の探索と利用の各段階で求められるさまざまな知識・技能を取り上げ、指導の対象としてきた。しかし、このような指導は学校図書館だけの専門領域ではなく、各教科がそれぞれの枠組みで取り上げていることから、利用指導の内容も、教科との連携を念頭において見直す必要がある。

一方、利用指導で取り扱おうとする知識・技能のなかには、教科の枠組みでは指導されないものがある。学校図書館独自の指導領域といえるこれらの項目は、各教科や探究的な学習で求められる知識や技能の一部であることから、学校図書館担当者と教科教員が協力して指導にあたることは意義があると言える。

今後、学校図書館担当者の配置状況や、学齢ごとの既習事項にも配慮した新しい利用指導の手引を作成し、その中で、教科との役割分担や連携のあり方を示すことが、効果的な利用指導の実現に重要である。

3.6 「学校図書館利用指導における役割分担の構造」の導出

探究学習の過程で活用しながら身に付けることが求められている「学び方」は、「課題の見付け方やつくり方、目的や意図に応じた情報の集め方や調べ方、整理・分析の仕方、まとめ方や表現の仕方、報告や発表・討論の仕方」や「見通しや計画の立て方、記録のとり方や活用の仕方、コミュニケーションの取り方、振り返りや意思決定、自己評価の仕方」を指し、学校図書館利用指導に含まれる知識や技能と共通点が多い。

利用指導は、単に学校図書館や図書館資料の使い方を教えることではなく、情報を利用して自ら学ぶ生徒の育成を目標とし、情報の探索と利用のプロセスを含む探究学習を通して、さまざまな知識や技能を習得させようとする教育活動である。しかし、学習指導要領の解説は、「学び方」の指導を、教科と「総合的な学習の時間」の連携という観点から説明し、利用指導の必要性や意義については論じていない。「学び方」のような、情報の探索と利用に関する指導が教科の内容に含まれるのであれば、利用指導を学校図書館だけが行う教育活動と捉えるのではなく、その一部を教科教員の指導に委ね、学校図書館員と教科教員が共に指導するという新しいアプローチを検討する必要があるだろう。

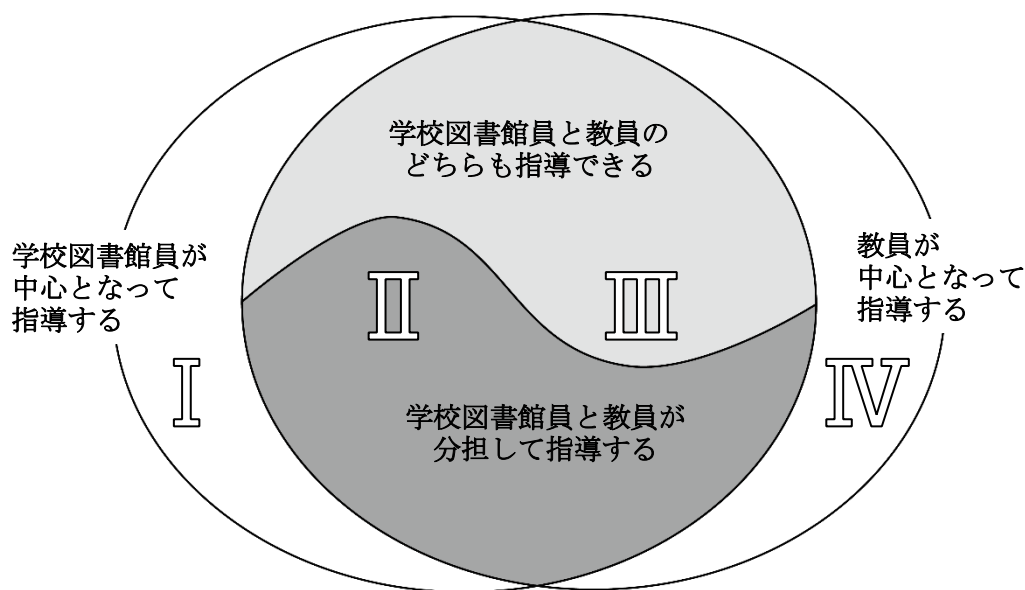
「学び方」の指導と利用指導を関連づけ、教員と学校図書館員が協力して「情報の探索と利用の指導」をするには課題がある。まず、教科教育だけでは「情報の探索と利用の指導」が完成せず、利用指導がそれを補完することができることを示す必要がある。さらに、利用指導の内容を見直し、教科が指導する項目と、学校図書館が優先的に指導する項目を整理して、教科教員と学校図書館員の役割分担がどうあるべきか説明しなければならない。

本章では、利用指導の内容（25 分野 119 項目）が、学習指導要領、教科書、教師用指導書のなかでどのように取り上げられているか検討した。その結果、利用指導に含まれる知識や技能を 4 つに分類することができた。一つ目は、教科の枠組みでも利用指導と同じように指導されている項目（図表 3-23 のグループ A）である。二つ目は、教科での取り上げ方が不十分で、利用指導がそれを補完できると考えられる項目（図表 3-23 のグループ B）である。三つ目は、教科では取り上げられていないために、学校図書館が中心となって指導すべき項目（図表 3-23 のグループ C）である。グループ C の項目には、生徒に求められているのに指導の内容や方法が具体的でないもの（C-1）と、中学校段階の生徒には求められていないもの（C-2）がある。四つ目は、学校図書館関係のテキストブック等にも、具体的な指導法が示されておらず、学校図書館における利用指導の内容として妥当かどうか見直す必要がある項目（図表 3-23 のグループ D）である。

以上のように、利用指導と、教科による「情報の探索と利用の指導」を比較し、両者の共通点と相違点を確認した結果、学校図書館員と教科教員の役割分担を前提とした利用指導のあり方をモデル化し（図表 3-25）、以下のように説明することができた。

まず、学校図書館員と教科教員は、それぞれの専門性に基づいて指導できる領域を有する。モデルでは、学校図書館の専門領域をⅠ、教科の専門領域をⅣと表し、前者では教科が扱わない図書館独自の「情報の探索と利用の指導」、後者は図書館が指導しない教科独自の指導を行う。一方、学校図書館と教科が、同じような項目を取り上げる領域がある。モデルでⅡと表した「分担」の領域では、学校図書館と教科がそれぞれ異なる知識や技能を指導することによって補完し合い、Ⅲと表した「臨機応変」の領域では、両者が同じように指導できるため、状況に応じて、どちらが指導してもよいと捉えることができる。

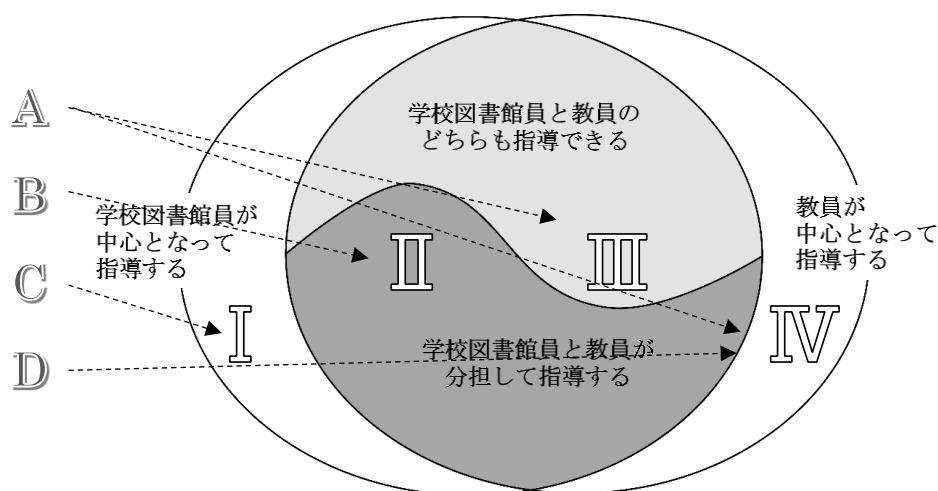
図表 3-25 学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）



全国 SLA の体系表やアメリカ学校図書館協会（AASL）の基準など、既存の利用指導モデルでは、生徒が習得すべき知識や技能を、探究学習のプロセスに沿って示しているが、このモデルは、学校図書館員と教科教員の役割分担という観点から、両者が指導する知識や技能を示し、ティーム・ティーチングの意義を説明している。

前述した利用指導の内容（25 分野 119 項目）を例に挙げると、図書館と教科が同じように指導している「グループ A」の項目はⅢに、教科と学校図書館が異なるアプローチで指導している「グループ B」の項目はⅡに、教科が指導していない「グループ C」の項目はⅠに分類できる。また、今後 119 項目を見直し、グループ A や D の項目の中に、学校図書館よりも教科での指導が妥当であると考えられる知識や技能があれば、それらはⅣの領域に分類することができるだろう（図表 3-26）。

図表 3-26 「利用指導の内容（25 分野 119 項目）」の分類案



このような分類は、「情報の探索と利用の指導」における学校図書館員の役割を示し、利用指導を、教科や「総合的な学習の時間」の中で、「情報の探索と利用の指導」の一環として行う必要性を示す資料となりうるが、どの領域にどの項目が当てはまるかについては、さらなる分析が必要である。

まず、利用指導の対象となる知識や技能(25分野 119項目)を見直さなければならない。先行研究のレビューで明らかにしたように、日本の利用指導は、海外の利用教育研究を理論的根拠としているため、日本の学校教育という文脈で求められる利用指導のあり方を十分検討してきたとは言えない。情報環境や教育目標の変化を踏まえると同時に、実際に探究学習に取り組む生徒を対象とした分析を行い、必要とされる知識や技能を明らかにする必要がある。これについては4章で取り上げる。

もう一つは、現場での実践可能な役割分担のあり方である。グループA～Dの分類は、文献上の取り扱いを根拠とした仮のもので、教科教員や学校図書館員が実際に何を指導しているのか、あるいは指導できるのか検証しなければならない。これについては5章で取り上げて検討する。

注・引用文献

- 1 森田盛行. これからの学校図書館: 新学習指導要領と教育の情報化をめぐって. カレントアウェアネス. 2009, vol.30, p.3-5.
- 2 文部省中央教育審議会. “21世紀を展望した我が国の教育のあり方について (第一次答申)”. 文部科学省. 1996-07-19. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309579.htm, (参照 2017-3-15).
- 3 文部省教育課程審議会. “幼稚園,小学校,中学校,高等学校,盲学校,聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について (答申)”. 文部科学省. 1998-07-29. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kyouiku/toushin/980703.htm, (参照 2017-3-15).
- 4 文部省. 中学校学習指導要領. 文部省, 1998, 104p.
- 5 文部省. “中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 第 1 章総則”. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320062.htm, (参照 2017-3-15).
- 6 文部省. “中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 第 2 章各教科第 1 節国語”. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320066.htm, (参照 2017-3-15).
- 7 文部省. “中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 第 2 章各教科第 6 節美術”. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320078.htm, (参照 2017-3-15).
- 8 文部省. “中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 第 4 章特別活動”. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320096.htm, (参照 2017-3-15).
- 9 須永和之. 読書活動と情報活用教育: 新学習指導要領における学校図書館の機能. 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 1999, vol.3, no.1, p.1-18.
- 10 文部科学省. “中学校学習指導要領解説: 総則編”. 2008-07. 106p. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_001.pdf, (参照 2017-3-15). 引用は p.3-5.
- 11 文部科学省中央教育審議会. “幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)”. 2008-01-17. 151p. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf, (参照 2017-3-15).
- 12 文部科学省. “中学校学習指導要領 第1章 総則” http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sou.htm, (参照 2017-3-15).
- 13 文部科学省. “中学校学習指導要領 第2章 各教科 第1節 国語” http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/koku.htm, (参照 2017-3-15).
- 14 文部科学省. “中学校学習指導要領 第2章 各教科 第6節 美術” http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/bi.htm, (参照 2017-3-15).
- 15 文部科学省. “中学校学習指導要領 第4章 総合的な学習の時間” http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sougou.htm, (参照 2017-3-15).
- 16 文部科学省. “中学校学習指導要領解説: 総則編”. 2008-07. 106p, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_001.pdf, (参照 2017-3-15). 引用は p.82-83.
- 17 全国学校図書館協議会. 21世紀の教育を豊かにする緊急提言: 学校図書館重視の教育を. 学校図書館. 1996, no.550, p.41-44.
- 18 全国学校図書館協議会. 21世紀の教育を豊かにする緊急提言: 学校図書館重視の教育を. 学校図書館. 1996, no.550, p.41-44.
- 19 全国学校図書館協議会. 教育課程審議会の「中間まとめ」への意見書. 学校図書館. 1998, no.571, p.69-71.
- 20 全国学校図書館協議会. 教育課程審議会の「中間まとめ」への意見書. 学校図書館. 1998, no.571, p.69-71.

- 21 文部科学省中央教育審議会. “教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ”. 2007-11-07. 150p. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/04/23/1265449_001.pdf, (参照 2017-01-10).
- 22 文部科学省中央教育審議会. “幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)”. 文部科学省. 2008-01-17. 151p. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf, (参照 2017-01-10).
- 23 特集 新学習指導要領を活用する. 学校図書館. 2009, no.705, p.16-69.
- 24 特集 新学習指導要領と学校図書館資料: 新学習指導要領における「学校図書館」関連の記述(新旧対照). 学校図書館. 1999, no.582, p.43-49.
- 25 全国学校図書館協議会. “新学習指導要領における「学校図書館」関連の記述”. <http://www.j-sla.or.jp/pdfs/material/post-46-1.pdf>, (参照 2017-03-15).
- 26 全国学校図書館協議会. 新学習指導要領における「学校図書館」関連の記述. 学校図書館. 2008, no.582, p.43-49.
- 27 田村哲夫, 天道佐津子, 大場滋. 特集 教育課程審議会答申を読む: 教育課程審議会の「審議のまとめ」をどう読むか. 学校図書館. 1998, no.574, p.15-37.
- 28 全国学校図書館協議会. 情報を学習につなぐ: 情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説. 全国学校図書館協議会, 2008, 47p.
- 29 みずほ総合研究所株式会社. “教科書の改善・充実に関する調査研究報告書 (国語): 平成 18,19 年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」”. 文部科学省. 2008-03. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002.htm, (参照 2017-01-10).
- 30 日本教育方法学会編. 現代教育方法事典. 図書文化社, 2004, p.609.
- 31 久保田健一. 構成主義パラダイムと学習環境デザイン. 関西大学出版部. 2000 年, 192p. 引用は p.28-29.
- 32 Pickering, T. N.; Crow, S. R.; Franklin, L. L.. Information Literacy and Information Skills Instruction: Applying Research to Practice in the 21st Century School Library. 3rd ed. LIBRARIES UNLIMITED. 2011. 261p.
- 33 Dewey, John. the School and Society. University of Chicago Press. 1963, 159p.
- 34 Pickering, T. N.; Crow, S. R.; Franklin, L. L.. Information Literacy and Information Skills Instruction: Applying Research to Practice in the 21st Century School Library. 3rd ed. LIBRARIES UNLIMITED. 2011. 261p.
- 35 Kuhlthau, Carol C.; Maniotes, Leslie K.; Caspari, Ann K.. Guided Inquiry Design : a Framework for Inquiry in Your School. Libraries Unlimited, 2012, 188p.
- 36 河西由美子. 初等中等教育における情報リテラシーの育成に関する研究. 東京大学, 2008, 博士論文. 引用は p.252.
- 37 佐藤三郎. 学び方学習新論: ブルーナー理論の再考察. 明治図書出版, 1976, 250p. 引用は p.119.
- 38 柴田義松. 学び方学習論. 学文社, 2010, 229p. 引用は p.82.
- 39 神戸大学発達科学部附属住吉中学校. How to Study: 豊かな学びを育む. 2005, 217p.
- 40 柴田義松. 学び方学習論. 学文社, 2010, 229p. 引用は p.113.
- 41 文部省中央教育審議会. “21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申)” 文部科学省. 1996-07-19. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309579.htm, (参照 2017-01-10).
- 42 文部省教育課程審議会. “幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校, 盲学校, 聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について (答申)”. 文部科学省. 1998-07-29. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_katei1998_index/toushin/1310294.htm, (参照 2017-01-10).

- 43 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説 総則編 (一部補訂版). 東京書籍. 2004, 174p.
- 44 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説総則編 (一部補訂版). 東京書籍. 2004, 174p. 引用は p.98.
- 45 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説国語編 (一部補訂版). 東京書籍. 2006, 159p. 引用は p.2-3.
- 46 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説社会編 (一部補訂版). 大阪書籍. 2004, 205p.
- 47 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説社会編 (一部補訂版). 大阪書籍. 2004, 205p.
- 48 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説数学編 (一部補訂版). 大阪書籍. 2004, 177p. 引用は p.4.
- 49 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説数学編 (一部補訂版). 大阪書籍. 2004, 177p. 引用は p.9.
- 50 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説理科編 (一部補訂版). 大日本図書. 2004, 164p. 引用は p.7.
- 51 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説理科編 (一部補訂版). 大日本図書. 2004, 164p. 引用は p.102.
- 52 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説技術・家庭編 (一部補訂版). 東京書籍. 2006, 110p. 引用は p.14.
- 53 中央教育審議会. “初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について (答申)”. 文部科学省. 2003-10-07, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/f_03100701.htm (参照 2017-01-10).
- 54 文部科学省. “第 4 章総合的な学習の時間”. 現行学習指導要領 生きる力. 2009-03, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sougou.htm, (参照 2017-01-10).
- 55 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07, 124p. <http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/tyuusougou.pdf>, (参照 2017-01-10). 引用は p.13.
- 56 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07, 124p. <http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/tyuusougou.pdf>, (参照 2017-01-10). 引用は p.16.
- 57 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07, 124p. <http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/tyuusougou.pdf>, (参照 2017-01-10). 引用は p.41.
- 58 文部科学省中央教育審議会. “幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)”. 2008-01-17. 151p. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.25.
- 59 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説 総則編 (一部補訂版). 東京書籍. 2004, 174p. 引用は p.107.
- 60 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編.” 2008-07, 124p. <http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/tyuusougou.pdf>, (参照 2017-01-10).
- 61 平久江祐司. 自己教育力を育成するための学校図書館利用指導: 教育改革の観点から. 図書館学会年報, 1996, vol.42, no.2, p.111-127.
- 62 全国学校図書館協議会. 情報を学習につなぐ: 情報・メディアを活用する学び方の指導体系表解説. 全国学校図書館協議会. 2008, 47p.
- 63 袖ヶ浦市教育委員会. 袖ヶ浦市中学校学び方ガイド: 学びの羅針盤. 第二版. 袖ヶ浦市立総合教育センター. 2008, 51p.

- 64 根本彰. 探究学習と図書館: 調べる学習コンクールがもたらす効果. 学文社. 2012, 157p.
- 65 国立国会図書館. “子どもの情報行動に関する調査研究”. 国立国会図書館関西館図書館協力課. 2008-06-30, 図書館調査研究レポート No.10 (NDL Research Report No.10), 169p. http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.133.
- 66 文部省臨時教育審議会. 教育改革に関する第二次答申. 文部省, 1986, 206p.
- 67 文部省. 情報教育に関する手引. ぎょうせい, 1990, 230p.
- 68 情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議. “第一次報告 体系的な情報教育の実施に向けて”. 文部科学省. 1997-10-03, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/971001.htm, (参照 2017-01-10).
- 69 文部科学省. “「教育の情報化に関する手引」について”. 2010-10-29. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm, (参照 2017-01-10).
- 70 文部科学省. “「教育の情報化に関する手引」について 第4章 情報教育の体系的な推進”. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/13/1259416_9.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.90-91.
- 71 河西由美子. 研究文献レビュー 学校図書館に関する日本国内の研究動向: 学びの場としての学校図書館を考える. カレントアウェアネス. 2010, vol.304, p.24-30.
- 72 米谷優子, 北克一. 『教育の情報化に関する手引』2010年版及び『教育の情報化ビジョン』の学校図書館とのかかわりからの分析: 「教育の情報化」の方向性に関する考察. 図書館界. 2012, vol. 64, no.1, p.20-35.
- 73 文部科学省. “「教育の情報化に関する手引」について 第6章 校務の情報化の推進” http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/13/1259416_11.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.149.
- 74 三輪真木子. 情報行動: システム志向から利用者志向へ. 勉誠出版, 2012, 205p. 引用は p.182.
- 75 米谷優子. 情報化と学校図書館: デジタルメディアとの関わりから. 園田学園女子大学論文集. 2013, vol.47, p.17-37.
- 76 文部科学省. 平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査結果の概要(言語力関係部分抜粋). 言語力育成協力者会議(第3回)配付資料. 2006-07-26. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/06073102/004.htm, (参照 2017-01-10).
- 77 吉田剛. 中学校学習指導要領社会における地理的見方・考え方の潮流. 宮城教育大学紀要. 2008, vol.43, p.43-59.
- 78 文部科学省. 中学校学習指導要領(平成10年12月)解説社会編. 大阪書籍. 2004, 205p.
- 79 文部科学省. “中学校学習指導要領解説. 平成20年7月(平成26年1月一部改訂)”. 2014-01. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1234912_003.pdf, (参照 2017-01-10).
- 80 文部科学省. “教科書の改善・充実に関する調査研究報告書(国語): 平成18,19年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」”. 2008-03. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002.htm, (参照 2017-01-10). 引用は第1章4.2.
- 81 社会科中学生の地理世界のなかの日本「初訂版」「指導書」. 帝国書院, 2006, 469p.
- 82 社会科中学生の地理世界のなかの日本「初訂版」「指導書」. 帝国書院, 2006, 469p.
- 83 社会科中学生の地理世界のなかの日本「初訂版」「指導書」. 帝国書院, 2006, 469p.
- 84 <座談会>中教審「第一次答申」を読む. 学校図書館. 1996, no.550, p.16-25.
- 85 家城清美. 学校図書館は新学習指導要領で何を望まれているか: 中学校新教育課程説明会の資料から. 同志社大学図書館学年報.別冊. 同志社図書館情報学. 2009, vol.20, p.1-20.

- 86 例えば, 桑田てるみ, 法土明子, 学習单元「情報と表現」における国語科教諭と司書教諭との協働授業の効果:「POP」作成授業の分析, 学習情報研究, 2009, vol.22, vn.2, p.34-49.
- 87 堀川照代. 文部省刊行「学校図書館の手びき」等における学校図書館に関する教育, 島根女子短期大学紀要, 1991, vol.29, p.93-102.
- 88 文部科学省, “中学校学習指導要領 第5章特別活動”. 2010-11. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/toku.htm, (参照 2017-01-10).
- 89 例えば, 「中学校学習指導要領解説国語編」には, “生徒は, 学校図書館などを活用して学習することを通して, 資料の集め方, 調べ方, まとめ方, 報告や発表の仕方などの学び方や考え方を身に付ける”(文部科学省, 2008) と書かれている。
- 90 文部科学省中央教育審議会. “初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方法について (答申)”. 2003-10-07. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/f_03100701.htm, (参照 2017-01-10).
- 91 文部科学省. “学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_013.pdf, (参照 2017-01-10).
- 92 文部科学省. “学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_013.pdf, (参照 2017-01-10).
- 93 古くは, 深川恒喜による一連の研究などがある(深川恒喜. 小学校教科書教材を活用した図書館利用指導の研究(その1). 図書館学会年報, vol.21, no.3, p.138-145. 以下その2, その3も)。また, 全国SLAは, 前学習指導要領改訂時(1998年)に意見書を提出し, 学び方に関する学習を”学校図書館が長年「利用指導」として実践してきた学習活動そのままである”と指摘している(教育課程審議会の「中間まとめ」への意見書, 学校図書館, no.571, p.69-71)。『学校図書館』誌でも, 教科と学校図書館の実践事例を繰り返し掲載している。
- 94 渡辺敦司, 2011年度小学校教科書採択状況-文科省まとめ, 内外教育, 2010, no.6045, p.10-12.
- 95 渡辺敦司, 2012年度中学校教科書採択状況-文科省まとめ, 内外教育, 2011, no.6125, p.6-8.
- 96 野末俊比古, 小田光宏, 「情報科」における「問題解決学習」の位置付けに関する基礎的検討: 検定教科書の調査結果と分析, 青山学院大学文学部紀要, 2002, vol.44, p.11-23.
- 97 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_013.pdf, (参照 2017-01-10).
- 98 桑田てるみ編. 思考力の鍛え方: 学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業. 静岡学術出版, 2011, 241p.
- 99 庭井史絵. “新学習指導要領にみる学校図書館利用指導の可能性: 中学校における教育実践モデルの検討”. 日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱. 東京, 2011-05-14, 日本図書館情報学会. 2011, p.35-38.
- 100 庭井史絵. 教科教育のなかで行われる「図書館利用指導」の状況: 教科書の記述を手がかりとした分析, 教育情報研究, 2014, vol.29, no.3-4, p.3-14.
- 101 例えば, 中学校学習指導要領解説国語編には「様々な資料を有する学校図書館などの施設を計画的に利用するよう指導する」とあるが, その内容や方法については明らかでない。
- 102 文部省の基準「小学校, 中学校における学校図書館の利用と指導」(1983年)や, 全国学校図書館協議会の「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」(2008年)があるが, 最近は更新されていない。
- 103 庭井史絵. 「学校図書館利用指導」で取り扱われる知識と技能. 現代の図書館. 2015, vol.53, no.4, p.175-183.

4章 「情報の探索と利用」に関する知識・技能と 生徒の習得状況

はじめに

2章と3章の文献調査をもとに、司書教諭や学校司書（以下、学校図書館員）と教科教員（以下、教員）が協力して「情報の探索と利用の指導」を行う必要性を指摘し、連携のあり方を示した「学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）」を生成した。

学校図書館利用指導（以下、図書館利用指導、又は利用指導）として考えられている内容の一部は、教育課程において教科の領域に含まれていることから、教員による指導が期待される。また、別の一部は、教員と学校図書館員のどちらも同じように指導できる内容で、教科の取組に応じた対応が可能である。学校図書館員が、専門性を発揮して指導すべき項目は、「学校図書館が中心となって指導する領域」と、「教科と異なるアプローチで指導する領域」である。

2章3節で学校図書館関係の文献から導き出した「学校図書館利用指導の内容一覧」（25分野 119項目）に含まれる項目は、学習指導要領や各教科の教科書・教師用指導書の内容と比較することによって、理論上、「役割分担の構造」のⅠからⅣの何れかに分類することができる。しかし、これらを学校図書館員の実践に結びつけるためには、日本の学校教育という文脈で生徒が必要とする知識や技能は何か、それらは教科の枠組みでどこまで習得可能なのかを実証的に検討し、利用指導で取り扱うべき項目を検討する必要がある。

そこで、本章では、探究学習における情報の探索と利用の過程で、生徒が必要とする知識や技能は何か、それはどのような機会を経て習得されるのかという問題意識を基に、生徒に対する質問紙調査と聞き取り調査を行う。ただし、情報の探索と利用の指導を十分行った上で探究学習に取り組んでいる学校に限られているため、条件が整っている中学校と高校を精査し、調査対象を決定する。

4.1 学校図書館スキル評価シートの開発と試験的实施

4.1.1 研究の背景と目的

図書館利用指導を、教科や「総合的な学習の時間」など教育課程の中で行う場合、評価を通じて生徒の習得度を把握することが必要になる。例えば、「学び方」に関する指導項目を含む授業を実施した後は、生徒の習得度を評価してフィードバックすることが求められる。また、情報の収集・分析・処理・加工・表現を含む授業（活用型、あるいは探究型の学習）を計画する場合、必要なスキルを生徒が身につけているかどうか事前に確認しておくことが不可欠である。さらに、中学生を対象とした利用指導カリキュラムを作成する際には、小学校の授業内容を踏まえつつ、中学校入学時に生徒が身につけている力を把握する必要がある。

筆者は先の研究で、学校現場で図書館利用指導を実施することが難しい理由の一つとして、教科教員が「学び方」指導の必要性を感じていない点を指摘した¹。生徒が、情報の利活用を伴う課題の遂行に必要な知識・技能を習得していないことを示すためにも、図書館利用指導の内容に即した評価が必要である。しかし、全国 SLA が作成した利用指導体系表をはじめ既存の基準や教材には、指導項目に対応する評価について言及されていない。

教育の情報化を推進してきた永野和男は、情報教育の目標と評価方法の課題として、

「教育の情報化」の目的は、情報教育の実践と、教科における ICT 活用と明記されており、当然その導入の効果は、情報教育の実践の成果、つまり、子どもたちの情報活用能力が上がったかどうかで把握しなければならないはずである。しかし、その導入の成果は、どちらかというと、基礎学力がどう伸びたか、子どもが楽しく学習できたか、など、既存の教科の知識面や情意面の評価と連動して述べられる傾向にある²。

と述べている（下線は筆者による）。

学校図書館においても、これまでは、図書館の活用が、読書や探究型学習に変化を生み出したか、あるいは既存の教科の成績や PISA 型読解力など学力の向上に結びついたかという観点で議論されており³、図書館利用指導の直接の成果、言い換えれば「情報を活用した学び方が身についたかどうか」を評価して、その効果を測る方法についてはほとんど議論されてこなかった。

図書館利用指導で扱う内容の習得度を測った調査としては、塩谷京子と堀田龍也による一連の研究、全国 SLA による学校図書館関連テスト、文部科学省と国立教育政策研究所が作成・実施している全国学力・学習状況調査（全国学力調査）がある。

塩谷らは、小学校 3・5 年生を対象に、学校図書館を利用した学習で身につけられる「情報活用スキル」を 10 項目ずつ示した一覧表と、指導の参考となる実践事例を載せたガイドブックを作成し⁴、3 つの観点から、項目ごとの習得度を調べた⁵。

まず、各教科のカリキュラムに「情報活用スキル」の指導が含まれていることを踏まえ、教科の枠組みで指導効果が上がるものと上がらないものを調べるために、5 年生と中学 1 年生を対象にチェックリスト（自己評価）形式のアンケート調査を行った。その結果、「調べることの計画をたてる」「著作権があることを理解する」「キーボードを使う」「Web で情報を集める」という項目の習得度が高く、「調べたいことを選ぶ」「総索引を使う」「データ集

を使う」「題名を記録する」「参考にした文献を記録する」「複数の情報源を利用する」「集めた情報を整理する」「新聞にまとめる」「レポートにまとめる」「わかりやすい構成を考えて伝える」という項目は習得度が低いことが分かった。

また、小学校で習得させたい「情報活用スキル」を、中・高校生がどの程度習得しているかを把握するための調査では、「百科事典を使う」「データ集を使う」「参考にした文献を記録する」など、主に図書で調べる「情報活用スキル」は、学年が上がっても身につけていないことを示した。

塩谷らの研究では、学習指導要領によって小学校の学習内容に位置付けられ、教科書に掲載されている項目であっても、生徒それぞれ、あるいは項目によって習得度のばらつきがあることが示されたが、すべての調査がチェックリスト形式（「できますか」という問いに対して生徒自身が「はい」「いいえ」で答える自己評価形式）をとっているため、学習経験や記憶の有無を把握するにとどまっている。

公益社団法人全国学校図書館協議会（全国 SLA）は、文部科学省より委託を受けた 2006（平成 18）年度新教育システム開発プログラムの中で、学校図書標準を達成し、学校図書館を活用した学習活動・読書活動を推進することが、児童生徒の学力の向上に寄与するかどうかを検証するテストを行っている⁶。

報告書によると、学力を測定するために、標準的な国語テストと、独自に作成した学校図書館関連テストを用いている。学校図書館関連テストは、(1)学校図書館における情報活用能力、(2)コミュニケーション能力、(3)批判的思考力・読解力を測る内容で構成されているが、次年度以降の継続的な使用が想定されているため、テストの内容は公開されていない。図書館の活用と学力の相関関係についても、調査対象校でのプログラム実施期間が短く、図書館を活用した授業が十分行われていないという状況から、結論を出すには時期尚早とされている⁷。

文部科学省が実施している全国学力・学習状況調査（全国学力調査）では、国語のテストに、図書館利用指導の内容を含む問題がある。例えば、2011（平成 23）年度の中学校 3 年生を対象にした国語 A（主として「知識」に関する問題）の 6 に、索引に関する問題が出題されている。出題の趣旨は、“索引を読んで、次のことができるかどうかをみる。索引の特徴や役割を理解すること。索引を使って、必要な情報が本のどこにあるかを判断すること”⁸で、索引の特徴を目次や奥付と区別して選択したり、索引の例から必要な情報が掲載されているページを答えたりする内容になっている。ただし、このテストは東日本大震災の影響で実施が見送られた。

同様の問題が、2008（平成 21）年度にも目次をテーマに出題され、目次の特徴を選択する問題の正答率は 85.8%、目次を使って情報を探す問題の正答率は 81.7%であった⁹。また、2012（平成 24）年度の小学校 6 年生を対象にした国語 B（主として「活用」に関する問題）の 3 に、雑誌を効果的に読む問題が出題されている。各小問の正答率は、雑誌の特徴を選択する問題 87.5%、小見出しからキーワードを抜き書きする問題 45.3%、編集者の意図を選択する問題 51.2%、相互に関連する二つの記事の見出しを選択する問題 58.0%、雑誌記事を根拠として示しながら自分の意見を述べる記述問題 38.1%となっている¹⁰。

文部科学省の学力調査に図書館利用指導に関する内容が含まれていることは、これらが身につけるべき学力のひとつであり、その習得度を客観的に把握する必要があることを示している。「知識」と「活用」に分けて問題を作成する手法や、正答率など調査結果は、先行

研究としてもっとも参考になるが、図書館に関する項目は、国語のテストの一部として取り上げられているに過ぎず、網羅性という点で課題がある。

一方、学校図書館について直接言及されていないものの、情報の収集・分析・処理・加工・表現に関する指導を行う近接領域で実施される評価として、情報教育分野における各種の調査・研究がある。

情報教育の目標は、「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」という 3 つを統合した情報活用能力の育成であり¹¹、具体的には以下の 8 要素で構成されると定義されている¹²。

「情報活用の実践力」

- ① 課題や目的に応じた情報手段の適切な活用
- ② 必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造
- ③ 受け手の状況などを踏まえた発信・伝達能力

「情報の科学的な理解」

- ④ 情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解
- ⑤ 情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解

「情報社会に参画する態度」

- ⑥ 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解
- ⑦ 情報モラルの必要性や情報に対する責任
- ⑧ 望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

情報活用能力が身についたかどうかは、この 3 観点 8 領域の枠組みに沿って検証する必要があるため、各領域に含まれる内容や指導項目がリスト化され、評価の尺度として用いられている。

例えば、高比良美詠子他は、「情報活用の実践力」に焦点を合わせて 54 の項目を作成し評価尺度のとしての信頼性と妥当性を検討した¹³。また、高橋純他は、文部科学省が作成した「初等中等教育における情報教育に係る学習活動一覧」¹⁴をもとに 47 の項目を抽出し、小学生を対象とした情報活用能力のチェックリストを作成している¹⁵。さらに、永野和男他、情報教育の専門家集団“火曜の会”は、1998（平成 10）年に改訂された学習指導要領に合わせた「情報教育目標リスト 2000」や、2008（平成 20）年に改訂された学習指導要領に合わせた「情報活用能力育成モデルカリキュラム Ver.1.0」を作成・公表し、各要素に含まれる目標と内容を示して、指導計画の策定や評価を可能にしようとしている¹⁶。

情報教育分野における情報活用能力育成の目標や評価指標のなかには、図書館利用指導に関する内容も一部含まれており（例えば、「情報活用能力育成モデルカリキュラム Ver.1.0」には、「図書館の蔵書検索を利用して、目的の情報を探す」「検索した情報の真偽性を意識しながら、適切な方法で情報を集める」といった目標や指導項目がある）、これを指標として用いたテストやチェックリストを使って習得度を確認することが可能と考えられる。しかし、これらは全体として、ICT を活用した情報の利活用に集中しており、図書館利用指導の目標達成度を、複数の項目で測ったものはなかった。

前述したように、学校図書館と教科が「学び方」の指導という目標を共有し、指導計画を立て、指導の効果を確認するためには、生徒の習得度を把握する評価手段が必要である。そこで本節では、図書館利用指導用の評価シートを試作して予備調査を行い、その制作過程や調査結果から、問題作成に係る課題を検討する。

4.1.2 研究の方法

4.1.2.1 評価シート作成の目的

学校図書館利用指導の目標と内容に焦点を合わせた評価シートを試作するにあたって、調査の目的と検討する課題を挙げる。

第一の目的は、問題形式の検討である。先行研究では、客観テスト形式とチェックリスト（自己評価）形式のいずれかによる、筆記式の評価方法が採用されていた。学校現場で用いられる教育評価には、この他にも、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価、観察や対話による評価などがあるが、「学び方」指導の成果として知識・技能の習得度を確認したり、活用型あるいは探究型学習の前に基礎的な知識・技能の有無を把握したりするという目的においては、先行研究が採用している「筆記による評価」は妥当であると言える²⁵。

情報活用能力のチェックリストを開発した高橋は、“普通教室において紙で実施でき、子ども自身が回答できるチェックリストの形体が現場教員にとって使い勝手が良いと考えられる”¹⁷と述べ、紙媒体でのチェックリスト（自己評価）形式の利点を挙げている。学校図書館においても、できるだけ簡便な評価方法として、限られた時間と機会を実施可能なチェックリストに対するニーズが高いと思われる。

一方、授業を設計するにあたって「前提テスト」「事前テスト」「事後テスト」を作成する必要性を指摘する稲垣忠と鈴木克明は、学習成果の5分類に基づいて、それぞれに適した評価方法をまとめている¹⁸（図表 4-1）。

図表 4-1 学習成果ごとの評価方法

学習成果	テスト形式	典型的な問い
言語情報	穴埋め	
	選択形式（再生）	空欄に記入しなさい
	（再認）	空欄に入る語句を選択しなさい
運動技能	チェックリスト形式	できることに印をつけなさい
	並べ替え形式	正しい順序に並べ替えなさい
知的技能	練習問題	（授業で習ったのとは異なる問題）
	分類形式	ルールに従って仲間分けしなさい
認知的方略	未知の問題	（解決方法をその場で考える問題）
	論述形式	どのように考えたのか説明しなさい
態度	論述形式	行動や態度の理由を説明しなさい

【出典】稲垣忠、鈴木克明．“第8章 学習指導と評価(2) 目標に応じた評価方法の実際”．授業設計マニュアル：教師のためのインストラクショナルデザイン．北大路書房，2011，p.94 より作成

学習成果の5分類とは、学習の結果、生徒が身に付ける能力を「言語情報」「運動技能」「知的技能」「認知的方略」「態度」の5つに分類して捉える方法で、ガニエ（Robert Mills Gagné）によって提唱された¹⁹。同様の分類法に、ブルーム（Benjamin Samuel Bloom）

のタキソノミー（目標分類学）や、学習指導要領（2008 年公示）の 3 要素（基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習の取り組む態度）などがある。いずれも、学力をさまざまな力が組み合わさったものと捉え、それらを分けて考えることによって、コース・単元・授業単位での指導計画や評価方法を具体化するのに役立つとされている。

言語情報とは、ものの名称や単語など指定されたものを覚えるという学習成果で、図書館利用指導においては、参考図書の種類、図書の各部の名称（目次、索引、奥付、つめ、柱）など、図書館を使う上で知っておくべき知識の獲得がこれに相当する。運動技能とは、手順通りに行う動作や行動に関する学習成果で、AV 機器を操作したり、キーボードで文字を入力するなど、手助けなしでも必要なステップをたどれるようになることを指す。知的技能とは、学習したルールや原理、概念を他の場面にも適用できることで、十進分類法に則って目的の図書を探すことや、参考文献リストの作成（書名、著者名などを奥付から読み取って、決められた形式で書くこと）が当てはまる。認知的方略とは、学び方や取り組み方を工夫・改善することで、課題に応じた参考図書を選択したり、テーマを表すキーワードを使って検索したりすることを指す。態度とは、自らの意思に基づいて行動や選択を方向付けることで、著作権に配慮して情報を利用したり、複数の資料にあたって確認したりすることなどがある。

図書館利用指導の目標をガニエの学習成果に即して分類した場合、言語情報や知的技能、認知的方略に相当するものが多い。したがって、運動技能の評価に適しているとされるチェックリスト（自己評価）形式だけで生徒の力を測ることは難しいと言える。

全国学力調査の図書館関連問題が「選択形式」や「練習問題」であったことも鑑み、本調査では、チェックリスト形式（自己評価）とテスト形式（語句選択や練習問題）の両方で問題を作成し、その結果を比較して、有効性を検証する。尚、試作版の評価シート（添付資料 1）では、問題 B がチェックリスト形式、問題 C がテスト形式である。

第二の目的は、問題の文言や内容の検討である。先行研究の分析から、図書館利用指導を対象とした評価がこれまでほとんど実施されていないことが明らかになった。特に、テスト形式の問題については、全国学力調査における目次と索引の問題や、雑誌の特徴に関する問題のみである。そこで、予備調査で得られた回答から生徒の現状を読み取るだけではなく、問題の文言や内容の妥当性を検証して、評価シート作成に必要な示唆を得ることを二つ目の目的とする。

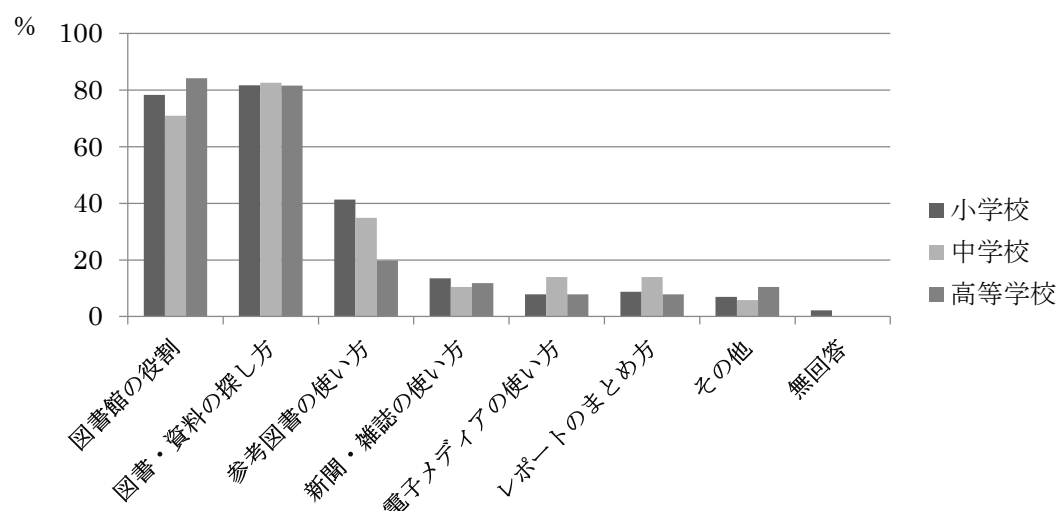
4.1.2.2 調査項目の決定

利用指導の内容は、2 章で言及した全国 SLA の体系表や既存の教材などを見ても、情報の収集から分析、発信、テーマの設定から学習過程の振り返りまで幅広い。最終的には、これらすべての項目を網羅した評価シートを開発することを視野にいれつつ、本調査では、中学校入学時の図書館オリエンテーションや、図書館を使った授業の導入として行う利用指導の項目に限定して、評価シートの試案を作成することとした。

全国 SLA が 2009 年に行った全国調査によると、中学校で実施されている主な図書館利用指導は、「図書館の役割」「図書・資料の探し方」「参考図書の使い方」「新聞・雑誌の使い方」「電子メディアの使い方」「レポートのまとめ方」の 6 項目である²⁰（図表 4-2）。

そこで、この6項目、特に「(図書館における) 図書・資料の探し方」を重点項目として、小学校での既習事項や習得済みの知識・技能を中学入学時に確認するという場面を想定し、評価シートを試作した。

図表 4-2 2008 年度に実施された図書館利用指導の項目



【出典】全国 SLA 研究調査部. 特集 '09 子どもの読書と学校図書館の現状 2009 年度学校図書館調査報告. 学校図書館. 2009, no.709, p.47

評価シートの質問事項を作成するにあたっては、調査対象とする6項目（(A)図書館の役割、(B)図書・資料の探し方、(C)参考図書の使い方、(D)新聞・雑誌の使い方、(E)電子メディアの使い方、(F)レポートのまとめ方）が、どのような知識・技能・態度によって構成されているのか、具体的な構成要素を明らかにする必要がある。

そこで、まず、前述した全国 SLA の体系表と、学習指導要領が改訂された2008年以降に出版された司書教諭講習のためのテキストブック(学習指導と学校図書館)3冊²¹から、(A)～(F)の6項目に関連する「指導すべき内容」を抽出し、これらを具体的な目標（学習成果）として以下のように設定した。

A) 図書館の役割

- (ア) 情報の入手先として図書館を選択する。
- (イ) 図書館で入手できる情報の種類について説明できる。
- (ウ) 図書館で受けられるサービスについて説明できる。

B) 図書・資料の探し方

- (ア) 図書館で必要な本や資料を選ぶことができる。

C) 参考図書の使い方

- (ア) 適切な参考図書を選ぶことができる。
- (イ) 目次や索引を使って情報を見つけることができる。

D) 新聞・雑誌の使い方

- (ア) 新聞・雑誌記事の特徴を、図書と区別して説明できる。

- (イ) 新聞・雑誌記事を検索し、入手することができる。
- (ウ) 新聞・雑誌のレイアウトと機能を説明できる。
- E) 電子メディアの使い方
 - (ア) 検索エンジンを使って、インターネット上の情報を見つけることができる。
 - (イ) インターネット上の情報の特徴を、印刷メディアと区別して説明できる。
 - (ウ) 情報の信頼性を確認できる。
- F) レポートのまとめ方
 - (ア) 引用や要約を使って書くことができる。
 - (イ) 参考文献リストを作成できる。
 - (ウ) レポートの構成を作ることができる。

次に、本調査の共同研究者である小学校の司書 3 名、中学校の司書 1 名、司書教諭 3 名、中・高等学校の司書 1 名（図表 4-3）で作業チームを作り、それぞれの学習目標を達成するまでに必要な知識・技能を抽出した。さらに、その結果を課題分析図に表して検討した。

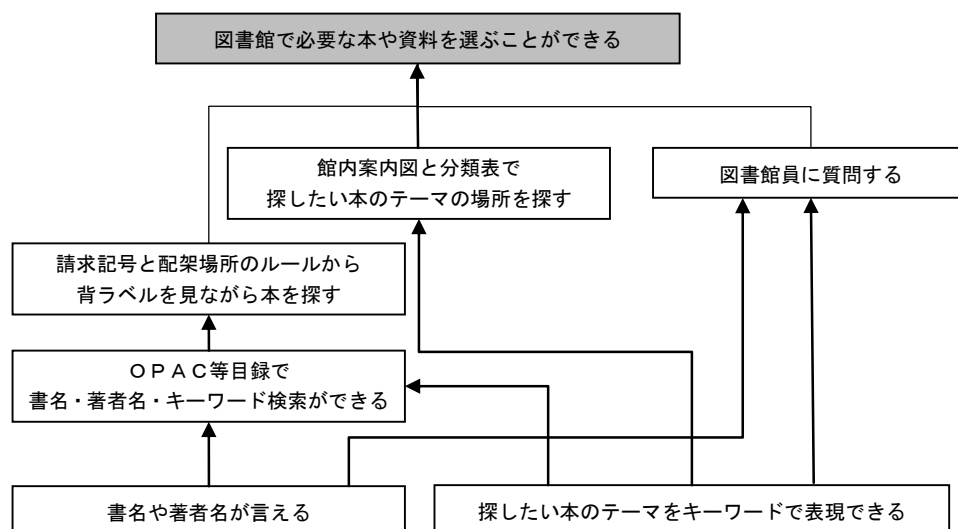
図表 4-3 分析図を作成した調査メンバー

ID	職名	校種	公私	経年	免許・資格	勤務形態
1	学校司書	小	公	9	司書	非常勤・専任
2	学校司書	小	公	4	司書	非常勤・専任
3	学校司書	小	公	7	司書教諭, 司書, 教員免許	非常勤・専任
4	司書教諭	中	私	12	司書教諭, 司書, 教員免許	常勤・専任
5	司書教諭	中	私	12	司書教諭, 司書, 教員免許	常勤・専任
6	司書教諭	中	私	26	司書教諭, 司書, 教員免許	常勤・専任
7	司書	中	私	7	司書	非常勤・専任
8	学校司書	中高	私	14	司書	常勤・専任

課題分析図とは、学習目標と、それを構成する要素、要素間のつながりを表した図で、カリキュラムや授業設計の手法であるインストラクショナルデザインのプロセスで作成される²⁶。本来、チェックリストやテストの質問事項は、当該授業の内容に沿って作成されるものであるが、本調査では、実際の授業を計画・実施せず、調査用の評価シートのみ作成する。そのため、授業で取り上げる内容を見渡ししながら、適切な質問事項を考えることが難しいという問題があった。そこで、授業の構造と学ぶ手順を表した課題分析図を作成し、「何を」「どんな手順で」教えるのかを可視化した。その結果、目標達成に必要な知識・技能を評価の対象としているかどうかを繰り返し検討し、テストの質問事項と内容の整合性を確認することができた。

例えば、B (ア)「図書館で必要な本や資料を選ぶことができる」ようになるまでに、児童・生徒が身につけなければならない下位の知識・技能は図表 4-4 のような課題分析図に表すことができる。

図表 4-4 B(ア)「図書館で必要な本や資料を選ぶ」



この図を参照すれば、生徒を図書館に連れて行き、テーマを与えて本を探させるというパフォーマンス評価をする代わりに、OPACに入力するキーワードを答えさせたり、背ラベルに書かれた数字の意味を聞いたり、本の配架場所を館内案内図に示させたりすることによって、間接的に「図書館で必要な本を選ぶことができるかどうか」を測ることができると分かる。

以上のような作業を繰り返し、目標と、目標達成に必要な知識・技能を可視化し、質問項目の候補を作成した。

4.1.2.3 小学校教科書の分析

本調査は、図書館オリエンテーションなどで、中学校入学時の知識・技能を確認するという場面を想定している。そこで、小学校で使われている教科書の内容を確認し、既習としてよい項目と未習と想定される項目を区別できるようにした。

内容を確認する教科書の選定にあたっては、学習指導要領の改訂から1年しか経過していないことを踏まえて5・6年生に絞り、教科は国語、社会、理科とした。また、東京都の各自治体の採択率や、予備調査の対象とした2つの中学校の所在地である神奈川県と兵庫県の採択率を調べたところ、図表4-5のような結果になった。

図表 4-5 3つの都道府県の小学校で採択されている教科書

国語	東京(54)	神奈川(27)	兵庫(17)
光村図書	31	25	10
教育出版	10		1
東京書籍	6	2	6
三省堂	4		
学校図書	3		

社会	東京(54)	神奈川(27)	兵庫(17)
教育出版	25	19	3
東京書籍	25	4	6
光村図書	2	4	
日本文教	2		8

理科	東京(54)	神奈川(27)	兵庫(17)
大日本図書	21	11	1
啓林館	6	10	15
学校図書	8	4	
東京書籍	13	1	
教育出版	6	1	1

※()の数字は行政区分の数

以上の結果から、分析する教科書を国語 4 社（光村図書、教育出版、東京書籍、三省堂）、社会科 2 社（教育出版、東京書籍）、理科 2 社（大日本図書、啓林館）とし、これらの教科書から該当する記述を抜き出して、学習成果ごとに整理した（図表 4-6 に例を示す）。

図表 4-6 「図書館で必要な本や資料を探す」に関する記述

小学校（国語）
-0-9 類の概要。分類表を参考に本を探す（背ラベルの説明はなし）。 -NDC の仕組み（4 類を 3 桁まで）。 -背ラベルの見方（表記例あり）。館内図の見方（例あり）。 -請求記号と背ラベル（分類番号、図書記号、巻冊記号） -題名、作者・筆名、十進分類法、ジャンル、目次・索引、で探す。 -本を探すための方法（司書に相談・コンピュータ・目録）の紹介。詳細なし。

抽出した教科書の記述を、課題分析図と付き合わせて確認したところ、例えば「図書館で必要な本や資料を選ぶ」までに求められる知識・技能として図示した項目のうち、「探したい本のテーマをキーワードで表現する」に関する内容を取り上げている教科書はなく、これらは小学校時代に習っていないことが予測できる。

このように、既習項目と未習項目を整理した後、Yes/No で答えられる問題（チェックリスト形式）と、選択式または記述式で答える問題（テスト形式）の両方を作成した。例えば、「図書館で必要な本や資料を選ぶ」ことができるかを測る問題として、以下のような問題を作成した。

- ① 図書館のコンピュータを使って本を探すことができる（Yes/No）
- ② 検索結果が多すぎるとき、どうすれば必要な情報が絞り込めるか知っている（Yes/No）
- ③ （検索語の例を挙げて）この検索結果が 0 件だったとき、どんな語を使って検索し直せばいいですか（記述式）
- ④ 図書館の本に貼ってある背ラベルを見れば、本の場所を予測することができる（Yes/No）

- ⑤ (背ラベルと館内図を示して) この本のある場所を図の中に示してください(記述式)
 ⑥ 次の質問のうち、図書館の人(司書)に聞いてもいいことはどれですか(選択式)

最終的に、全問題を 15 分程度で答えられるよう質問事項を取捨選択し、A~C の 3 つのパートに分けて評価シート(試案)を作成した。問題 A は、出身小学校の種別、小学校時代に使用した教科書、図書館を使った授業の有無、読書の頻度やコンピュータ利用経験など、生徒の属性に関する質問、問題 B は、生徒自身が「できる・分かる」または「できない・分からない」を選択するチェックリスト(自己評価)形式の質問、問題 C は、語群選択や記述などのテスト形式の質問とした。

4.1.3 結果

試作した評価シートを使って、私立中学校の 1 年生(神奈川県 A 校・男子校 239 名、兵庫県 B 校・男女共学校 238 名)を対象に、「学校図書館スキル」習得度の試験的な調査を行った(2012 年 4 月)。

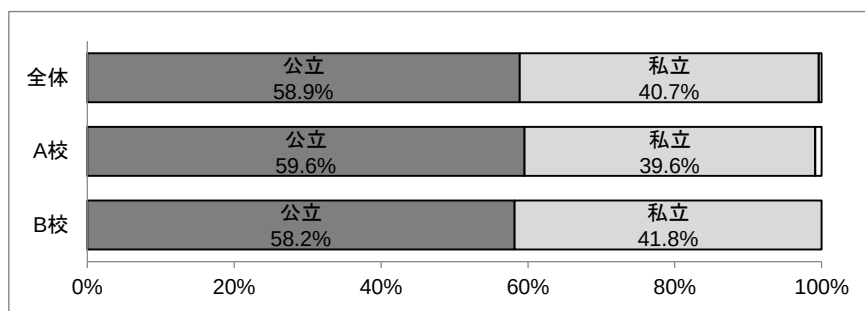
調査対象校は、評価シート改訂のために本調査を複数年にわたって行う可能性と、学校図書館利用指導の効果を測る別の調査を実施する可能性を念頭におき、学校図書館スキルの習得をねらいとする授業を継続的に実施している中学校とし、2007~2011 年度に発行された学校図書館専門誌の実践報告から候補を挙げ決定した。A 校は、私立の男子中学校で、専任司書教諭が、1 年生を対象とした通年の授業(週 1 時間)において、図書館利用指導と読書指導を行っている。B 校は、私立の男女共学校で、司書教諭を中心として、1 年生から 3 年生まで週 2 時間の授業(図書館利用指導、読書指導、論文作成指導など)を行っている。両校とも小学校から大学までの一貫教育校における中等教育学校であるが、入試を経て入学してくる生徒の割合が高く、それぞれの出身校は複数の小学校(地域)にまたがる。また、両校の生徒数、学校図書館の整備状況や教職員の配置状況、入学試験における偏差値等からみる生徒の学力なども共通している。

欠席者や所属情報の記入漏れシートを集計・分析の対象から除外した結果、有効回答は A 校 230 名(96.2%)、B 校 232 名(97.5%)であった。

4.1.3.1 調査対象者の属性

評価シートの問題 A から分かった被験者である生徒の属性について述べる。出身小学校は公立 58.9% (A 校 59.6%, B 校 58.2%), 私立 40.7% (A 校 39.6%, B 校 41.8%), 海外日本人学校等その他の小学校 0.4% (A 校 0.9%, B 校 0.0%) であった。また、一貫教育(付属)の小学校から進学してきた生徒は A 校 33.9%, B 校 35.8%, 受験を経て入学してきた生徒は A 校 66.1%, B 校 64.2%であった(図表 4-7)。

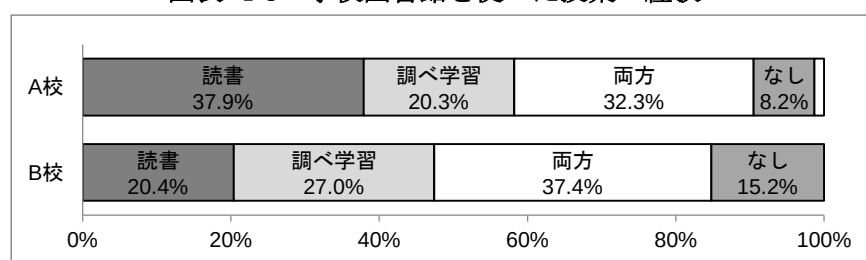
図表 4-7 出身小学校の種別



本調査で習得度を測ろうとしている知識・技能は、直接の指導だけではなく、図書館の利用経験、読書に対する態度、インターネットの使用頻度などに影響を受けることが考えられる。そこで、知識・技能の習得度との相関関係を確認したい属性として、公共図書館や学校図書館の利用経験、インターネットの利用頻度と読書に関する質問を加えた。

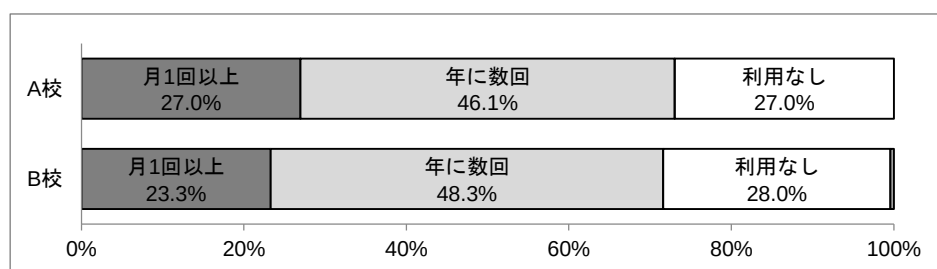
まず、6年生での図書館を使った授業経験や内容について聞いたところ、「読書の時間」がA校 37.9%、B校 20.4%、「調べ学習の時間」がA校 20.3%、B校 27.0%、「読書と調べ学習の両方」がA校 32.3%、B校 37.4%、「どちらもなかった」がA校 8.2%、B校 15.2%、無回答がA校 1.3%、B校 0.0%であった（図表 4-8）。

図表 4-8 学校図書館を使った授業の経験



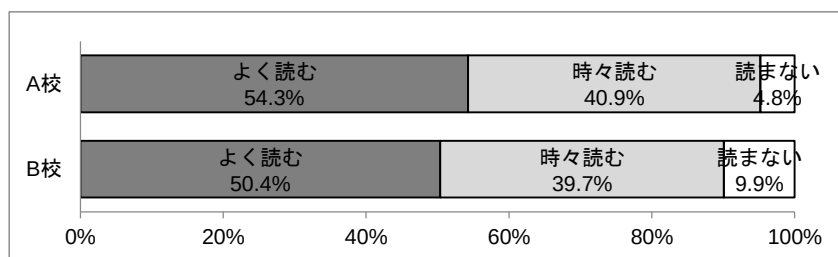
次に、公共図書館の利用経験について聞いたところ、「月に1回以上利用する」がA校 27.0%、B校 23.3%、「年に数回ぐらい行く」がA校 46.1%、B校 48.3%、「利用しない」がA校 27.0%、B校 28.0%、無回答がA校 0.0%、B校 0.4%であった（図表 4-9）。

図表 4-9 公共図書館の利用経験



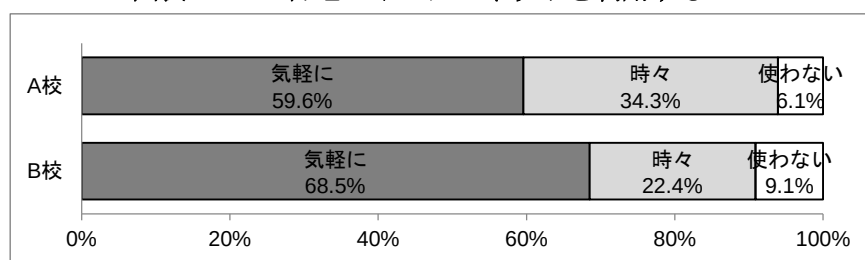
読書について聞いたところ、「よく読む」と答えた生徒はA校 54.3%, B校 50.4%, 「時々読む（それほど多くない）」はA校 40.9%, B校 39.7%, 「ほとんど読まない」はA校 4.8%, B校 9.9%であった（図表 4-10）。

図表 4-10 どれくらい読書をするか



家庭でのインターネット使用頻度について聞いたところ、「気軽に利用する」がA校 59.6%, B校 68.5%, 「時々利用する」がA校 34.3%, B校 22.4%, 「ほとんど（まったく）利用しない」がA校 6.1%, B校 9.1%であった（図表 4-11）。

図表 4-11 自宅でインターネットを利用するか



以上の結果から、調査対象とした2つの中学校は、所在地や男女比に違いがあるものの、生徒の属性には大きな差がないことが分かった。

尚、小学校で使用していた教科書や、学校図書館にどんな職員がいたか（司書教諭・司書・係教諭など）についても尋ねたが、記憶があいまいだったり、違いが分からなかったりして、各校の状況を正しく反映した回答を得られなかった。そこで、本調査では分析の対象外とし、必要に応じて各自治体の状況を調査することとした。

4.1.3.2 チェックリストとテストの結果

次に、図書館スキルの習得度を測るために作成したチェックリスト（自己評価）形式の問題Bと、テスト形式の問題Cから得られた結果について述べる。

チェックリスト形式の問題Bで「できる」「分かる」など肯定的な回答が多かったものは、B(2)「図書館のコンピュータを使って本を探すことができる」、B(9)「本に書かれていることは正しいことなので、1冊の本で答えを見つければ安心する」(逆転項目。「そう思わない」という否定的な答えをしたほうを「肯定的評価」とカウント)、B(11)「本の書名や著者名、出版年などは、どこを見ればまとめて載っているか知っている」であった（図表 4-12）。

肯定的な回答が少なかった（「できない」「分からない」など否定的な回答が多かった）ものは、B(4)「図書館の本に貼ってある背ラベルを見れば、本の場所を予測することができる」、

B(10)「インターネットで見つけた情報が正しいかどうか、どうやって確認すればいいか知っている」、B(12)「引用と要約はどう違うのか説明できる」であった（図表 4-13）。

図表 4-12 問題 B で肯定的な回答が多かった質問

問い	A 校	B 校	計
2（OPAC で検索）	73.0%	62.5%	67.8%
9（複数資料にあたる）	80.4%	55.2%	67.8%
11（書誌情報の場所）	68.7%	90.1%	79.4%

図表 4-13 問題 B で肯定的な回答が少なかった質問

問い	A 校	B 校	計
4（背ラベルと配架）	30.4%	42.2%	36.3%
10（Web の信憑性）	31.3%	41.4%	36.4%
12（引用要約の区別）	49.1%	61.6%	55.4%

一方、テスト形式の問題 C で正答率が高かったものは、C(6)「索引の特徴として適切なものをひとつ選んでください」、C(8b)「犬と猫が好きな人ではどちらが多いか調べる方法を選択しなさい」、C(8d)「東日本大震災で被災した犬の保護活動について調べる方法を選択しなさい」という問題であった（図表 4-14）。

正答率が低かったものは、C(2)「図書館の人（司書）に聞いてもよいことはどれですか」（選択問題）、C(3)「検索窓にどんな言葉を入力してやり直したらいいですか」（空欄を埋める問題）、C(4)「背ラベルを見て、この本がある場所を館内図上に記して下さい」（図示）であった（図表 4-15）。

図表 4-14 問題 C で正答率が高った問題

問い	A 校	B 校	計
6（索引の特徴を選択）	54.8%	58.2%	56.5%
8b（アンケート）	71.7%	84.9%	78.3%
8d（新聞で調べる）	62.5%	62.5%	62.5%

図表 4-15 問題 C で正答率が低かった問題

問い	A 校	B 校	計
2（司書の役割）	19.1%	19.0%	19.1%
3（検索語）	8.3%	10.8%	9.6%
4（背ラベルと配架）	27.4%	26.3%	26.9%

以上のように、自己評価で「できる」または「できない」と判断された項目や、テストで正解者が多かったり少なかったりした項目の集計結果を見る限り、A 校と B 校の傾向に大きな違いはない。B(11)は 20 ポイント以上の差があるので（図表 4-13）、両校の司書教

論に確認したところ、B校で調査を実施したのは、レポートを書く授業で参考文献の書き方を説明した後だったことが分かった。B校の正答率が上がったのはそのためであると推測される。そこで、以下の分析や考察においては、それぞれの学校を分けて記述せず、ひとつのデータとして扱うこととした。

4.1.3.3 チェックリストとテストのクロス集計

次に、チェックリスト形式の問題 B と、テスト形式の問題 C の結果を比較する。同じ内容について尋ねている問題 B と C を見てみると、生徒の回答に大きな差が生じていた。例えば、図書館のコンピュータを使った本の検索（OPAC の利用）について、チェックリストで「できる」と自己評価した生徒は A 校で 73.0%、B 校で 62.5%であるが、課題を与えて適切な検索語を答えさせるテストで正解したのは A 校 8.3%、B 校 10.8%と著しく低い結果となっている（図表 4-16）。

図表 4-16 OPAC の利用に関する問題 B と問題 C の比較

問い	A 校	B 校
B(2)「OPAC で検索できる」 に Yes と答えた生徒	73.0%	62.5%
C(3)「適切な検索語を答えな さい」に正解した生徒	8.3%	10.8%

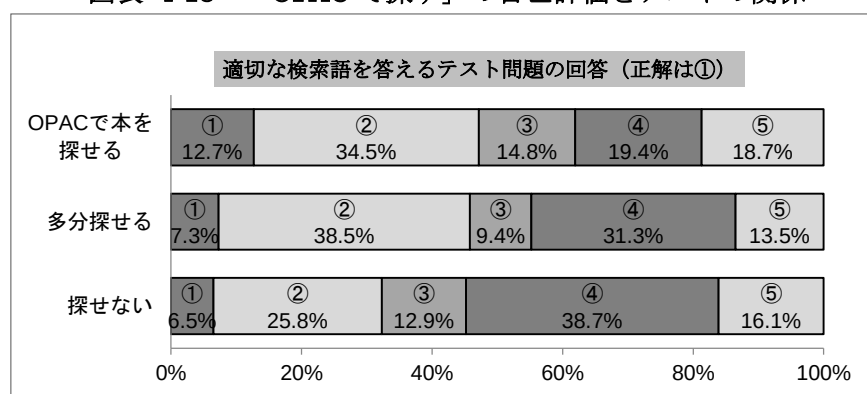
このことから、生徒が「できる」と考えている項目でも実際はできないものがあること、つまり、生徒の自己評価は習得度を正しく反映していない可能性があることが考えられる。そこで、問題 B と問題 C で同じ内容について聞いた項目（図表 4-17）を対象に、クロス集計を行って両者の関係をさらに検討することにした。

図表 4-17 問題 B と問題 C の対応表

内容	問題 B Yes or No	問題 C 選択または記述
図書館の本の並び方を 知っているか	(1) 図書館の本がどのように並べられているか、知っている。	(1) 図書館では、本はどのように並んでいますか。一つ選んで下さい。
OPAC で検索できるか	(2) 図書館のコンピュータを使って本を探すことができる。 (3) 検索結果が多すぎるとき、どうすれば必要な情報を絞り込めるか知っている。	(3) ゴールデン・レトリーパーの飼い方の本を探すのに「ゴールデン・レトリーパー」と検索したら 0 件。検索窓にどんな言葉を入力してやり直したらいいですか。
図書館で本を探せるか	(4) 図書館の本に貼ってある背ラベルを見れば、本の場所を予測することができる。	(4) コンピュータに表示されたラベルを見て、この本がある場所をマップに示して下さい。
索引を使えるか	(5) 本の中から、特定の用語を探す方法を知っている。	(5) 本で、ゴールデン・レトリーパーについて載っている全てのページをすばやく探すには、どうすればいいですか。一つ選んで下さい。 (6) 索引の特徴として適切なものをひとつ選んで下さい。
参考図書を使い分けられるか	(6) いろいろな辞書や事典、図鑑を使い分けて調べることができる。	(8) 次のことについて知りたいときに、最も適切な調べ方を①～⑥の選択肢から一つずつ選んで下さい。

まず、OPAC の利用に関する問題 B(2)「図書館のコンピュータを使って本を探せるか」と問題 C(3)「適切な検索語を答えなさい」の回答パターンを比較する(図表 4-18)。「探せると思う」と回答した生徒のうち、テスト問題で適切な検索語を答えた生徒は 12.7%。「多分探せると思う」と回答した生徒では 7.3%。「探せないと思う」と回答した生徒では 6.5%であった。正答率という点では、この 3 者に有意と言えるほどの差はなく、自己評価の回答に関係なく正解者はいずれも少なかった。「探せない」と答えた生徒の中にも正しい答えを書いた生徒がいるので、自己評価が実態を反映していないことが分かる。ただし、「探せないと思う」と回答した生徒は、「最初に入力した語(ゴールデン・レトリバー)に、さらに別の語を追加する」という誤答が多い、という傾向がみられた。

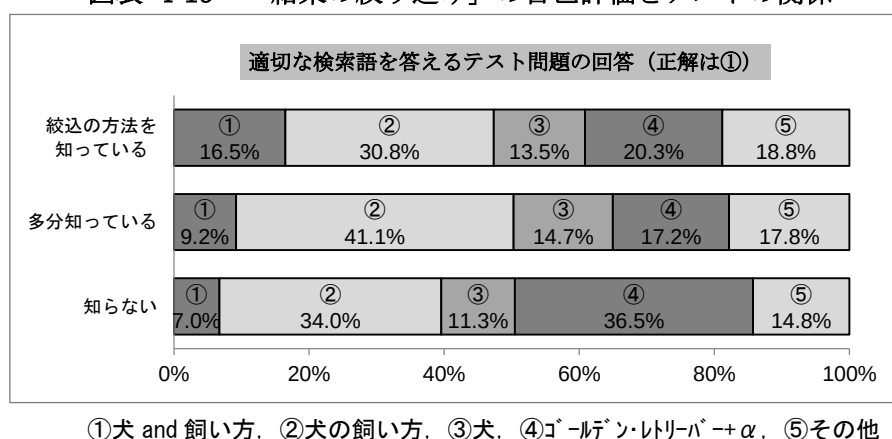
図表 4-18 「OPAC で探す」の自己評価とテストの関係



①犬 and 飼い方, ②犬の飼い方, ③犬, ④ゴールデン・レトリバー + α, ⑤その他

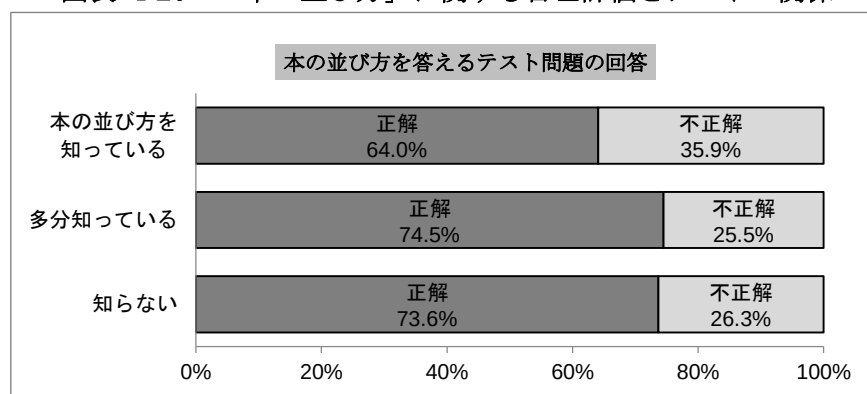
同様に、問題 B(3)「検索結果が多すぎる時、どうすれば必要な情報を絞り込めるか知っているか」と、問題 C(3)「適切な検索語を答えなさい」の回答パターンを比較する(図表 4-19)。「知っている」と回答した生徒のうち、テスト問題で適切な検索語を答えた生徒は 16.5%、「多分知っている」と回答した生徒では 9.2%、「知らない」と回答した生徒では 7.0%であった。「知っている」と答えた生徒の正答率のほうが、「知らない」と答えた生徒の正答率より 2 倍以上良い結果になっている。一方、「知らない」と答えた生徒が、最初に入力した語に別の語を追加する誤答が多いのは、前述の B(2)との比較と同じであった。

図表 4-19 「結果の絞り込み」の自己評価とテストの関係



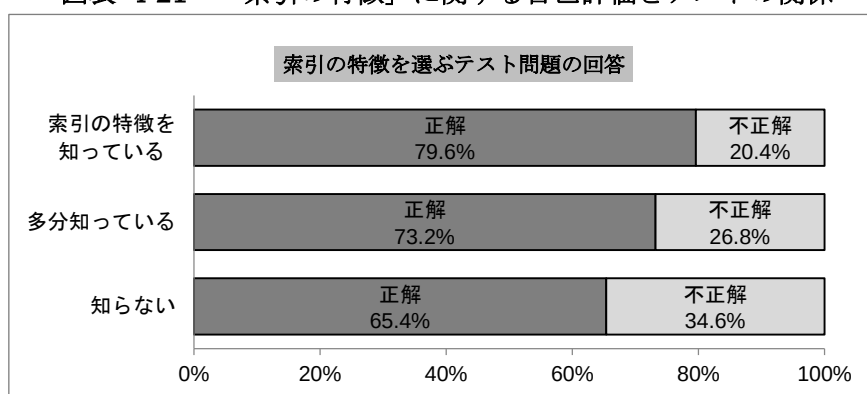
次に、図書館での本の並び方に関する問題 B と C の結果を比較する（図表 4-20）。B(1)「図書館での本の並び方を知っていますか」という問いに対して「知っている」と答えた生徒のうち、C(1)「図書館での本の並び方」を「高さ順、内容別、新着順、書名順」から選択する問題で正解したのは 64.0%、間違ったのは 35.9%であった。一方、「並び方を知らない」と答えたにも関わらず、C(1)の問題を正解した生徒は 73.6%、間違ったのは 26.3%だった。数字をみると、両者の比率はほぼ同じ、厳密に言えば「知らない」と答えた生徒の正答率のほうが高いという結果になっている。

図表 4-20 「本の並び方」に関する自己評価とテストの関係



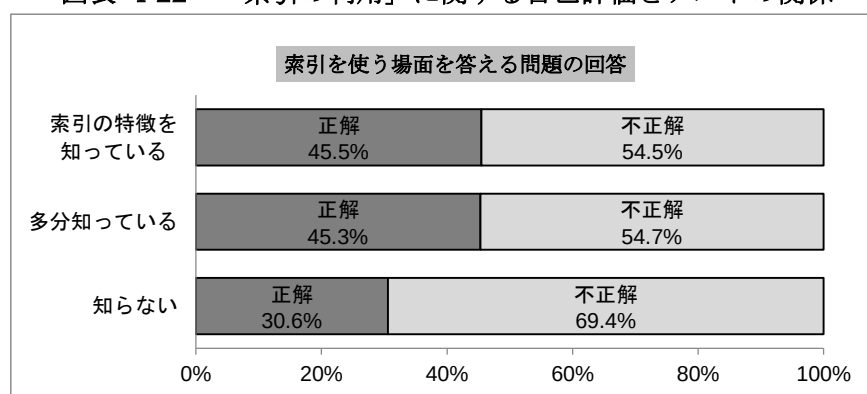
さらに、索引の特徴に関する問題 B と C の結果を比較する。B(5)「本の中から、特定の用語を探す方法を知っていますか」という問いに対して「知っている」と答えた生徒の 79.6%が、索引の特徴を選択するテスト問題 C(6)に正解している。一方、「知らない」と答えた生徒の 65.4%も、C(6)の問題に正解している。つまり、「本の中から特定の用語を探す方法」をぱっと頭に浮かべることができない生徒も、索引を目次と区別して理解し、索引の特徴について知識があることを示している。

図表 4-21 「索引の特徴」に関する自己評価とテストの関係



索引に関する問題 B と C の結果を、別の質問事項との組み合わせで検討する(図表 4-22)。
 B(5)「本の中から、特定の用語を探す方法を知っていますか」という質問と、C(5)「1冊の本の中から、ゴールデン・レトリバーについて載っている箇所をすべて探す方法」を選択肢から選ぶ問題の回答を比較すると、「索引の特徴を知っている」と答えた生徒の 45.5% が正解しているのに対し、「知らない」と答えた生徒の正解率は 30.6% であった。

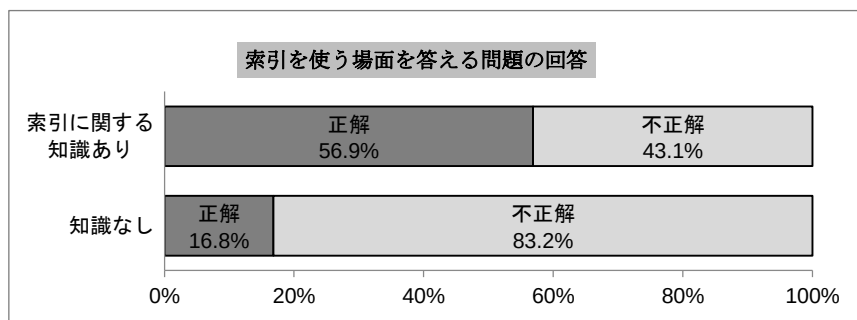
図表 4-22 「索引の利用」に関する自己評価とテストの関係



索引の特徴に関する知識の有無と、情報探索の場面で「索引を使って求める情報を探す」行為は、学習指導要領に示された「知識・技能の習得」と「活用」の関係に相当する。そこで、両者のつながりをみるために、知識を問う問題 C(6)「索引の特徴を選択しなさい」と、活用を想定した問題 C(5)「本から情報をすばやく探す方法を選択しなさい」の回答をクロス集計した。

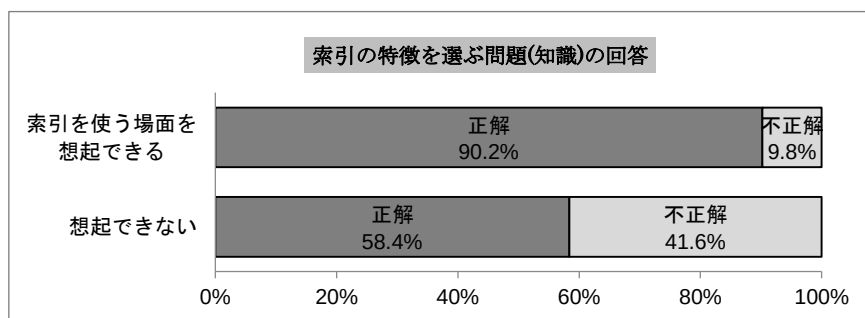
まず、索引に関する知識の有無が、索引を利用する行為にどう関係するかをみる。索引の特徴を選択肢の中から選ぶ C(6) で正解した生徒の 56.9% が、C(5)「1冊の本の中から、ゴールデン・レトリバーについて載っている箇所をすべて探す方法」を選択肢から答える問題で正解し、43.1% が不正解であった。一方、C(6) が不正解だった生徒の場合、C(5) で正解した生徒は 16.8%、不正解だった生徒は 83.2% だった(図表 4-23)。

図表 4-23 「索引」に関する知識と活用の関係①



次に、索引の利用を想起できることと、索引の知識の有無との関係を見る。C(5)「1冊の本の中から、ゴールデン・レトリバーについて載っている箇所をすべて探す方法」で正解した生徒の90.2%が、C(6)「索引の特徴を選択する」問題で正解し、9.8%が不正解であった。また、C(5)で不正解だった生徒の58.4%がC(6)で正解し、41.6%が不正解であった（図表 4-24）。

図表 4-24 「索引」に関する知識と活用の関係②



この他に、問題 A で調査した生徒の属性と、問題 C の結果についてもクロス集計を行って傾向を分析したが、本調査でのサンプル数では、属性と回答について明確な関連性を見出すことはできなかった。例えば、公立校と私立校による差や、本を読むのが好きな生徒とそうでない生徒の正答率の違いなどは明らかにできなかった。

4.1.4 考察

図書館利用指導で用いる評価シートの試作と予備調査で得られた結果を、以下の三点にまとめることができる。

第一に、チェックリスト（自己評価）とテストでは、得られる結果が著しく異なるという点である。図表 4-17 で示したように、本調査で試作した評価シートは、ひとつの学習成果に対して、チェックリスト形式とテスト形式の両方で問題を作成している。それぞれの結果を比較すると、「できる」と自己評価する生徒が多かった項目と、テストで正答率が高かった項目が一致しなかった。同様に、「できない」と自己評価する生徒が多い項目が、必ずしもテストの正答率が低いわけではなかった。例えば、「OPAC で本を探せる」と答えた生徒の12.7%しか正しい検索語を答えられない一方で、図書館での本の並び方を「知らない」

と答えた生徒の 73.6%が、テストで「テーマ別に並んでいる」と正しく答えるなど、自己評価とテストの結果に相関関係がほとんど見られなかった。また、索引に関する問題で、「1冊の本の中から、ゴールデン・レトリバーについて載っているすべての箇所をすばやく探す方法」として「索引」ではなく「目次」を選択する生徒が多かったことから、チェックリストで「索引を使える」と答えた生徒も、実は「索引」ではなく「目次」を思い浮かべていたと推測される。

このように、生徒がチェックリスト形式で「できる」「知っている」と答えたことが、必ずしも出題者が想定する知識や技能の習得を意味しているわけではなく、自己評価に頼って、生徒の能力を判断することは難しいことが分かった。

第二に、チェックリスト形式とテスト形式で生徒の回答が異なる要因として、前述した生徒の自己評価能力の是非だけではなく、問題作成上の課題と考えることもできるという点である。例えば、チェックリストの「本の中から特定の用語を探せるか」の問いに No と答えた生徒が、索引の特徴を答えるテストで正解したとしても、それは、選択肢を見ることによって適切なものを選ぶことができた結果にすぎないとも言える。つまり、テスト問題の選択肢が、生徒の回答に影響を与えているのであって、場合によっては、チェックリストの回答のほうが情報利用の場面における生徒の実態を反映しているとも考えられるのである。

第三に、問題 C の回答から、知識の習得とその活用が、必ずしも結びついていないという仮説を立てることができたという点である。図表 4-23 で示したように、索引の特徴について知識がない（目次や奥付と区別できない）生徒の 83.2%が、どのような時に索引を使うか選択できなかった。一方、知識がある生徒の半数（43.1%）が索引の使い方を答えられなかった。このことから、知識がないと使い方を想像できない一方で、知識があるからといって、実際に情報を探索する場面でその知識を活用することができるとは限らないことが分かった。

同時に、図表 4-24 で示したように、索引を使う場面を答えられる生徒のほとんど（90.2%）が、索引の特徴に関する知識を有していることから、知識を習得することは、活用できるようになるための前提条件であるということもできる。

4.1.5 結論

本調査では、現場で簡便に使える、図書館利用指導のための評価シートを開発することを目的として、その試案を作成し、二つの学校における予備調査から得られた結果を分析した。今後、図書館利用指導の内容を網羅した評価シートを作成・使用するにあたって配慮すべきことと課題は以下のとおりである。

まず、評価シートを使う目的に応じて、知識の有無を測る問題と、知識の活用を問う問題とを、テスト作成者や評価者が意識して使い分ける必要がある。

また、短時間で実施可能なチェックリスト形式の評価シートのみを使用する場合、出題者は、生徒の自己評価が知識・技能の習得度を正確に表していないことを想定し、一定の傾向を知るという範囲に利用を留める必要がある。

テスト形式で得られた結果については、実際の情報探索や情報利用の後に、ポートフォリオ評価やインタビュー調査を行った結果と比較・検討して、妥当性を検証することが必要

である。さらに、生徒の力をより正確に把握できるような質問項目や問いの作り方を検討しなければならない。これについては今後の研究課題としたい。

4.2 探究学習の過程で活用される知識・技能とその指導

4.2.1 研究の背景と目的

2008年に改訂された学習指導要領の解説では、総合的な学習の時間に行う探究学習で身に付ける能力のひとつに“学習方法に関すること（例えば、情報を収集し、分析する力、分かりやすくまとめ表現する力など）”²²が挙げられ、学習プロセスとして、“課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現”²³の4段階が示されている。また、生徒が実際に行う学習活動として、“市役所の担当者に聞いたり、町の人にインタビューをしたり”（情報の収集），“商店街の歩道の危険箇所を地図上に示し空間軸で整理したり”（整理・分析）することなどが例示されている²⁴。

このような学習活動においては、各教科で身に付けた知識・技能が活用されると説明されている。2010年に文部科学省が発行した「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」には、具体的にどのような学習活動が、どの教科と関連しているかが示されている²⁵。例えば、インタビューによって情報を収集する場合は、訪問前の準備、インタビューリストの作成、インタビューの手順の確認を行う必要があり、これらは“国語科における、社会生活の中から材料を集め整理することなどとの関連”²⁶があるとされている。あるいは、情報を整理・分析する際には、ベン図を用いて共通点と相違点を明らかにする方法があるが、これらは“各教科等においても、多様な情報を整理する場合には、ベン図による方法を活用することが考えられる”²⁷のように、複数の教科でベン図を用いた分析の仕方を指導することが想定されている。

ここで挙げられている知識・技能は、利用指導の内容にも含まれている。さらに、利用指導には、教科では取り扱われていない「情報の探索と利用」に関する知識や技能も含まれている²⁸。しかし、学習指導要領では、探究学習に必要な知識・技能と、利用指導を通して育てようとする能力との関係は示されていない。そこで本節は、探究学習で生徒が必要とする知識や技能と、利用指導の目標や内容を関連づけることを目的とし、探究学習の過程で生徒が用いている知識・技能は何か、そのような知識や技能を習得するのに、教科による「学び方」の指導が十分な内容になっているかを検討することによって、利用指導の必要性について考察する。

探究学習にどのような知識・技能が必要か、また、教科学習によって習得した知識・技能と探究学習の成果はどのように結びついているのか、という実証的な研究は、総合的な学習の時間が導入されて以降もそれほど多くない。

速水敏彦他は、中学生を対象とした研究で、総合学習の成績と国語、美術、家庭科、音楽、英語などの成績の間に有意な相関関係があることを示した²⁹。国語との相関関係がもっとも高かった理由に、学習活動におけるレポート執筆等文章作成の機会の多さを挙げているが、あくまでも教科の成績との関係であり、具体的にどのような知識・技能が、総合学習に活かされたのかは分析されていない。

高橋亜希子と村山航は、“主体性の重視、個別学習の多さ、主題中心の展開”³⁰など、総合学習に特徴的な学習様式に着目し、総合学習を達成するために必要な要因を検討している。高校生106人に対する質問紙調査と、4名に対する半構造化インタビューの結果、科目の成績が総合学習の成果とある程度関係しているものの、それだけでは説明できない、総合学習特有の「能力」が求められていることや、総合学習の達成を促進する要因として「生

徒の自我関与の深い領域とテーマの結びつき」「研究の枠組み・計画の明確性」「情報収集や支援・資源へ向かう能動性」「教師からの適切な支援の有無」があることを明らかにした。しかし、高橋ら自身が課題として指摘しているように、総合学習の遂行に関わる要因である「能力」を構成する学習スキルの影響に踏み込んだ分析は行われていない。

根本彰は、特定非営利活動法人「図書館の学校」（現、財団法人図書館振興財団）主催の「図書館を使った調べる学習コンクール」の受賞者を対象とした質問紙調査を実施し、受賞者の傾向として、図書館（公共・学校含む）やインターネットを利用して情報収集していること、家族や教員の支援を受けていること、文献調査以外に、観察・実験・制作、インタビュー、見学・経験、アンケートといった手法を用いていることを指摘している。また、「調べる学習」に取り組んだ結果、生徒が習得する能力について、

- 小学生
 - ①身の回りの現象に対して「疑問」をもち、それを問いとして発信する能力
 - ②文献だけではなく、実験・体験やインタビュー調査を含めたさまざまな方法を組み合わせてアプローチする能力
 - ③調べるための基本手段として、図書とインターネットを活用する能力
- 中学生
 - ①メディアや過去の経験から、解決すべき問題を見つけて定式化する能力
 - ②文献調査やインタビュー調査、体験活動で調べたことを根拠として、課題に対する解決策を提示する能力
 - ③必要に応じて、図書と電子資料以外の多様な資料を選択して調べる能力
- 高校生
 - ①テーマを十分に絞り込む能力
 - ②絞り込んだテーマに応じて、より妥当な研究手法を選択する能力
 - ③信頼性に応じてメディアを取捨選択して活用する能力³¹

を挙げている。これらは、探究の過程で必要な力と言い換えることができるが、それぞれの能力が具体的にどのような知識や技能で構成されているかは明らかではない。

この他、いくつかの実践研究では、探究学習にカリキュラムに含まれる内容や評価の観点から、指導が必要と考えられている知識や技能を把握することができる。例えば、中橋雄は、中学校における総合的な学習の時間で「基礎技能講座」を開講し、「インタビューの仕方」「ワープロによるアンケートづくり」「インターネット検索と情報倫理」「スピーチとプレゼンテーション」「画像編集ソフトの使い方」「ホームページの作り方」「ディスカッション、ディベート」「電話や文書による依頼の仕方」「統計とグラフ処理」「写真の撮り方」「レイアウト・色・形・配色校正」「フィールドワークの進め方」の各項目を事前に指導することによって、探究学習を効果的にすすめることができたと報告している³²。

また、大作光子と嶺坂尚は、探究学習に取り組む高校生の達成度を評価するためのポートフォリオを作成しているが、そのなかで、探究の過程と各段階で必要な学習活動を一覧化し、情報活用スキルを明示している（図表 4-25）³³。

図表 4-25 大作・嶺坂による情報探索のプロセスと評価項目

情報活用プロセス	自己評価の項目
情報の設定（問いについて）	学習の重要性や全体の理解
	テーマ設定の理由
研究計画の立案	目標規定文の作成（仮説とアウトラインの作成）
	情報探索方法の選択
	予定表の確認と実施
情報の収集と選択	検索キーワードの設定
	（情報検索）目録やリスト
	（情報検索）インターネット
	さまざまな情報源の利用
情報の記録・整理	ノート・カードの作成
	情報整理の方法
情報の分析	事実と意見の区別
	数値データの取り扱い
	複数の情報の区別
	テーマとの関連性を考えた分析
情報のまとめ	まとめの構成を考える
	情報のまとめ
	文体・書式
確かな情報源の利用	引用の方法
	補足カードの利用
	出典の明記
	情報の信頼性の検討
学習活動の評価	肖像権やプライバシーへの配慮
	問いの解決と課題
	学習過程の評価

【出典】大作光子，嶺坂尚．ループリックによる自己評価の分析を通じた探究学習の支援のあり方．日本図書館情報学会誌．2015，vol.61，no.4，p.236-237 より作成

以上の研究から，探究学習の遂行に必要な能力，あるいは，そのような能力を構成している知識や技能の一端を読み取ることができるが，生徒がどの程度，必要な知識や技能を習得しているのか，あるいは，どのような知識や技能が不足していることによって学習に支障が生じるのか，という観点で検証されたものはなかった。

教科が指導する知識や技能が，探究学習に取り組むうえで必要な能力を育成しているのかという観点から行われた研究として，桑田他による言語スキルの分析がある。桑田らは，探究学習が，海外の探究モデルに基づいて設計される場合，欧米の学校に取り入れられている読書技術の指導が日本では十分実施されないことを指摘し，探究学習に必要と考えられる言語スキルの指導状況について国語科教員と学校図書館担当者にアンケートを行った。アンケート項目として，言語技術教育の関連書籍から抽出した 56 項目の言語スキルを挙げ（図表 4-26），日本の教育課程では指導されていないスキルが多いことを明らかにした³⁴。

図表 4-26 学校図書館と国語科による「言語スキル」の指導可能性

言語スキル	図書館	国語
1 文章の主題やキーセンテンスを見つける方法	65.0%	98.6%
2 文章の構成（アウトライン）のつかみ方	65.0%	95.7%
3 事実と意見とを区別する方法	68.2%	94.7%
4 要約のしかた	52.4%	94.1%
5 論証のしかた	50.0%	68.1%
6 批評のしかた	45.5%	63.2%
7 ある文章を自分の言葉で言い換える方法	40.9%	82.6%
8 書籍の一部ではなく、1冊の書籍全体から主題を見つける方法	81.8%	42.6%
9 書籍全体の構成のつかみ方	69.6%	38.6%
10 同義語・反意語などの語の関係性	38.1%	89.9%
11 上位語（上位概念）・下位語（下位概念）の関係性	61.9%	54.5%
12 単語が持つ意味を、文章の道筋の中で捉える方法	22.7%	89.7%
13 ある概念を言葉で表す場合の、概念と言葉との関係性	27.8%	74.2%
14 参考図書で調べられる語とそうではない語の見分け方	87.0%	23.7%
15 帰納法と演繹法との考え方の違い	36.4%	55.2%
16 複数の事象（たとえば単語や文章）間の類似性を見つけ、それを根拠に他を推論する方法	47.6%	72.7%
17 マッピングで発想したり整理したりする方法	72.7%	40.4%
18 ベン図を書いて考える方法	47.4%	21.4%
19 社会的な事柄を含む広い範囲から自らの課題を設定する方法	75.0%	48.1%
20 日常的に読書に親しむために、学校図書館を計画的に利用する方法	95.8%	65.4%
21 図書や資料の検索のために図書館や情報機器を利用する方法	95.8%	65.7%
22 必要に応じて本や文章などを選ぶ方法	91.3%	66.7%
23 （生徒の）発達の段階に応じた読書のしかた	95.7%	61.8%
24 文章中の単語の意味を確認しながら読むこと	45.5%	98.6%
25 段落を意識した読み方	42.9%	95.7%
26 拾い読み・下読み（スキミング・スキニング）の技術	57.9%	42.9%
27 主題と主題を支える部分の読み分け方	40.0%	89.1%
28 文章を読む時の、効果的な線の引き方や印の付け方	30.4%	85.1%
29 一段落内の文章構成の読み解き方	23.8%	91.2%
30 「時間順」で構成された文章の読み方	28.6%	74.6%
31 「カテゴリー別」に整理された文章の読み方	38.1%	72.7%
32 「原因と結果」で構成された文章の読み方	28.6%	85.1%
33 「比較と対照」で構成された文章の読み方	28.6%	79.1%
34 資料の特性を生かした読み分け方	83.3%	61.2%
35 書籍の序文や目次の使い方・読み方	95.8%	43.9%
36 書籍の索引の使い方・読み方	95.8%	46.3%
37 辞書の使い方・読み方	95.8%	80.9%
38 百科事典の使い方・読み方	95.8%	22.7%
39 新聞記事の読み解き方	82.6%	52.0%
40 同一主題に関する2冊以上の本を読み比べる方法	87.5%	35.8%
41 文章から必要な情報を取捨選択するための読み方	87.0%	62.7%
42 グラフなどの図表の読み解き方	62.5%	46.2%
43 引用と要約とを分けてメモする方法	65.2%	47.1%
44 事実と意見を区別して書く方法	50.0%	79.1%
45 自分の意見と他人の意見を分けて書く方法	50.0%	73.1%
46 根拠を明らかにして自分の考えを書く方法	50.0%	88.9%
47 主題が明確になる書き方	21.7%	82.6%
48 主題と主題を支える部分を分けて書く方法	26.1%	76.1%
49 書くためのプロセス（構想・下書き・推敲・校正の順序）	54.2%	85.5%
50 論文を3部構成（序論、本論、結論）で書く方法	54.2%	82.1%
51 本論の論理的な展開方法	22.7%	77.4%
52 文章を帰納法と演繹法で構成して書く方法	23.8%	38.5%
53 文章の種類（たとえば意見文、物語）の違いに応じた書き分け方	20.0%	47.7%
54 グラフなどの図表の書き方	25.0%	20.3%
55 文章全体ではなく、1つの段落の中の構成を意識した書き方	15.0%	47.7%
56 批評文の書き方	10.0%	43.8%
57 文章を時間順に構成して書く方法	16.7%	41.8%
58 文章を分類別に整理して書く方法	22.2%	37.9%
59 文章を「原因と結果」で構成して書く方法	16.7%	50.7%
60 文章を「比較と対照」で構成して書く方法	16.7%	43.3%

【出典】桑田てるみ、眞田章子、庭井史絵、野村愛子、大木理恵子、山田英雄、法土明子、五十嵐卓司、黒瀬卓秀、木之下瞬、五十嵐佐知子。「言語能力の育成に学校図書館が果たす教育的役割の研究と教材開発」．2010-09. <http://www.hakuhofoundation.or.jp/Portals/0/resources/foundation/subsidy/pdf/4th02.pdf>, p.40 より作成

4.2.2 研究の方法

4.2.2.1 データ収集と予備研究

本調査では、探究の過程で生徒が必要とする知識や技能は何か、そのような知識や技能を、生徒はどのような機会に獲得しているかを明らかにすることを目的としている。

探究学習を行った生徒からデータを収集する方法としては、観察法や回顧法が考えられるが、主体的な探究学習は学校の内外で行われることから、参与観察などの観察法を採用することができない。また、4 章 1 節で行った質問紙調査では、生徒の自己評価とテストの結果が乖離しており、中高校生が知識や技能の活用を客観的に判断することは難しいという結果が得られた。さらに、探究学習では、生徒によってテーマや学習のすすめ方が異なるため、質問紙の問いや回答の選択肢を限定しにくい。以上の点から、量的調査である質問紙調査も本調査の手法として適切ではない。

そこで、生徒が記録した学習履歴や、質問項目を限定しない「半構造化インタビュー」によってデータを収集し、質的アプローチを用いて分析する方法を採用する。質的研究法は、生徒の学習プロセスを文脈ごとと把握することができるため、生徒が用いた学習方略、活用した知識や技能、それらを習得したと思われる過去の学習経験、課題を遂行するにあたって不足した知識や技能を明らかにするのに適したアプローチである³⁵。

また、本調査では、情報の探索と利用に関する知識や技能の習得を目的とした特別なカリキュラムがない学校の生徒が調査対象となる³⁶。そのため、生徒が自主的に探究学習に取り組む過程で、本調査の理論的枠組みである「探究プロセス」をたどり、「学校図書館利用指導の内容一覧」³⁷（25 分野 119 項目）に含まれる知識や技能を活用しているのか確認する必要がある。そこで、インタビューの実施に先立ち、主体的に探究学習に取り組んだ生徒の学習履歴を確認することを目的とした予備研究（pilot study）を行った。

まず、夏休みに自由研究を行うことを推奨している C 中学校で、テーマを設定した探究学習に取り組み、論文を執筆し優秀と認められた生徒の中から、(1)図書館や各種資料（図書や新聞、Web など）を利用していること、(2)フィールドワークを行っていること、(3)作業日誌を詳細に付けていること、という条件を満たす生徒に協力を依頼し、5 名を予備調査の対象とした。5 名の内訳は、1 年生 4 名と 3 年生 1 名で、それぞれの研究テーマは図表 4-27 のとおりである。

図表 4-27 試験調査の対象とした生徒の属性とテーマ

記号	学年	論文のタイトル
A	1 年	隅田川に架かる橋～千住大橋から勝鬨橋まで～
B	1 年	貨幣の全盛期 江戸の「金」
C	3 年	宝暦の治水 ～駆けつけた薩摩藩士千人の思い～
D	1 年	My 防災のススメ
E	1 年	江戸の盆栽

次に、彼らが記録した作業日誌を入手し、完成に至るまでの学習活動と、そこで活用した知識・技能を表す記述を抽出し、コード名を付与した上で「学校図書館利用指導の内容一覧」に沿って分類した（図表 4-28）。その結果、すべての生徒が、テーマの設定から情報収集、分析、レポートの執筆に至る「探究プロセス」をたどっており、その過程で、利用指導に含まれるさまざまな知識や技能を活用していることが確認できた。さらに、知識

や技能の不足による困難に直面したり、学校図書館員や教員の支援を受けて問題を解決したりしていることも明らかになった。

予備研究の結果から、探究学習に取り組んだ生徒に対するインタビューによって、学習のプロセスと、そこで活用した知識や技能についてより詳細なデータが得られるだけでなく、そのような知識や技能を習得した背景について聞き取ることが可能であると判断し、高校生に対する半構造化インタビューによる質的分析を、本調査の方法として採用することとした。

図表 4-28 探究学習で生徒が行った学習活動一覧

25 分野	119 項目	生徒の学習活動（日誌から抽出した具体例）
01 学習計画の立て方	01-01 学習計画を立てる	これからの予定を立てたところギリギリだったので、模型を作るのをやめ、絵を描くことにした。(E)
	02-01 テーマを決める	地元のことを調べたいという思いが、銀座線を調べたいという思いに勝り、「隅田川のことについて調べよう」と思った。(A)
02 テーマ設定の仕方	02-02 課題を明確にする	人口や産業などのいろいろな観点から（日吉の）研究をしてみようと思ったが、知りたい情報が広過ぎるので、より情報をせまく、深くして研究しようと思った。(D)
	03-01 図書館を積極的に利用する	その（自分が挙げた）中でも図書館を有効に活用したい。(A)
03 図書館の使い方	03-02 学校図書館を利用する	学校の図書室に行き、司書教諭の先生と相談し、港北区、特に日吉の歴史に関する本を何冊か貸して頂いた。(D)
	03-03 公共図書館を利用する	近所の図書館には郷土資料室があり、そこに行けば何でも分かると父からアドバイスしてもらったからだ。(A)
04 図書館での資料の探し方	04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す	木曽川治水工事に関する参考文献を集めるため、大学図書館と国会図書館の OPAC で、「宝暦治水」「平田鞆負」をキーワードに検索してみた。(C)
	04-06 自館にない資料を探す	今日、図書室の先生にお願いし、大学図書館から次の 4 冊を借りることにした。(D)
05 図書館以外の施設の使い方	05-02 文化施設を利用する	大阪造幣局の造幣博物館に行った。(B)
	05-03 公的機関を利用する	司書教諭の先生に紹介していただいた港北図書館と港北区役所に行った。港北区役所で資料を見せて頂き、コピーした後、港北図書館で 6 冊の資料を借りた。(D)
06 情報探索の見通しの立て方	06-01 情報探索の見通しを立てる	先生が、大宮盆栽町の誕生による植木屋の移動などを、昔の地図に表したり、盆栽町をつくることを提唱した人などについて調べるとよいということを教えて下さった。(E)
	06-02 目的に応じた調べ方を選択する	（どのように調べるか）自分が特に有効だと思うものを挙げてみた。(A)
07 図書を使った調べ方	07-01 図書を積極的に利用する	理科実験のレポート同様、インターネットは使用しないように努力する。(B)
08 参考図書を使った調べ方	08-02 百科事典を使って調べる	コトバンクのデジタル大辞泉、日本大百科全書の解説を見た。(E)
	08-08 地図を使って調べる	地図などをパソコンからプリントアウトする。(A)
10 視聴覚メディアを使った調べ方	10-01 視聴覚メディアを使って調べる	落語家、柳家小三治の、江戸時代が舞台である「鼠穴」の CD を家で聞いた。(B)
11 電子メディアを使った調べ方	11-01 電子メディアを使って調べる	九霞園という盆栽園のホームページを見ていたところ、九霞園は、慶應の経済学部を二年で病気のため中退した村田久造が開設したということが分かった。(E)
	11-05 検索エンジンを使う	グーグルで「宝暦治水」を検索し、ウィキペディアを見てみると、関連図書に杉本苑子著『孤愁の岸』（講談社、1982）が挙げられていた。(A)
12 その他の資料を使った調べ方	12-02 その他の資料を使って調べる	（佐渡金山の）売店では、金、銀箔の一分銀と、小判のレプリカを買った。(B)
13 その他の調べ方	13-01 インタビューで情報を	熱心に見ていると、学芸員から元館長に話を聞くことを

		収集する	すすめられ、造幣博物館の元館長、塩川幸男さんに話を聞いた。(B)
		13-05 電話で問い合わせる	また(インターネットで調べた)日吉台地下壕の保存の会に問い合わせしてみた結果、地下壕には個人で入れないということが分かった。(D)
		13-07 フィールドワークで情報を収集する	スーパーに行き、物の値段を調べ、江戸時代の値段と比較した。物価の違いが分かったので、第8章「江戸の物価」を書いた。(C)
14	情報検索の仕方	14-03 検索に適したキーワードを作る	「宝暦治水」と「平田鞆負」をキーワードにアマゾンで検索してみた。「宝暦治水」は18件、「平田鞆負」は2件の検索結果が出た。(C)
		14-04 検索結果を評価する	ところが、残念なことに、インターネットには地下壕について語っている資料が少なく…(D)
15	資料(情報)の評価の仕方	15-01 複数の情報を比較する	考文献も、宝暦の治水の最も信頼すべき研究所と言われる伊藤信著『宝暦治水と薩摩藩士』をバイブルのように使わせて頂いたことについて、これで良かったのか不安は残る。(C)
		15-02 情報の信憑性を判断する	アマゾンのブックレビューを見てみると、直木賞受賞作の本で、評判もいいので、木曾川治水工事の大きな流れを知るために読んでみることにした。(C)
16	記録の仕方	16-02 カードやノートに記録する	お金に関するはなしが出たら、ノートにメモした。(B)
		16-03 写真で記録する	今日は(大学)キャンパス内を歩き回り、写真を撮っていった。(D)
		16-06 コンピュータで記録する	内容をCDに落とすとき、なんと写真が多く、また文章の量が多いため、CDに落とすことができなかった。(D)
17	資料(情報)の読み方	17-01 目的に応じて読み方を変える	「隅田川の橋」文献下調べをする。主に図書館で借りてきた本を中心にパラパラと中身を確認し、気になったページはじっくりと読んだ。(A)
		17-02 図書から情報を読み取る	“金”とは何か。その魅力はなんなのかを理解するために本を読んだ。(B)
		17-03 精読する	前回は簡単に確認しただけで、全てのページを読んでいないため、今回は全ページを読むことに努力した。(A)
18	情報の整理の仕方	18-01 情報を取捨選択する	(下書き)と同時に、制作日誌と両国橋〜蔵前橋の写真を選んだ。(A)
19	情報の分析の仕方	19-01 情報を分析する	資料を再度読み返すうちに、なぜ慶應義塾が日吉に建ったのかという疑問点がとけた。(D)
		19-03 収集した情報の重要な箇所を抜き出す	借りた本を読み始め、お金のことが書かれている文章にポストイットを貼った。(B)
		19-05 仮説を検証する	疑問の答えを調べ始めた。(B)
20	情報の加工の仕方	20-06 画像を編集する	スキャナで写真をパソコンに取り込んだ。取り込んだ写真は『わが町の昔と今』の第1巻と第8巻。…取り込んだ写真を貼り付けるのは、まだ後になりそうである。(D)
		20-08 図表を作成する	盆栽園の移動を示すため、地理院地図をコピーしたが、古い地図に書き込みが多かったので、先生に電話で伺い「今昔マップ」というサイトを教えて頂いた。(E)
21	情報を使った文章の書き方	21-03 図表やグラフを利用する	夜はまたパソコン。今度は「目で見る日吉の変化」という項目に写真を挿入していった。(D)
		21-05 論理的な文章を書く	書いているとどんどん話が膨らんできて、書かなくていいようなことまで書いているような気がしてくる。(C)
		21-08 ルールに則って書く	本日は本題(本文?)の最終確認をした。最終確認とは、誤字・脱字の修正やページの確認である。(A)
22	まとめ方	22-01 適切な表現方法を選択する	より盆栽の変化を分かりやすくする為に、紙粘土などで模型を作ることにした。作る模型のかたちを記す。(E)
		22-02 アウトラインをつくる	今日、構成を考え、目次の項目を決めた。(C)
		22-03 レポートにまとめる	盆栽園の移転についてのレポートを第6章とし、1枚分のレポートを追加した。そして、参考文献リストを作り、目次を作り、ページ番号をふったあと、製本し、題名を貼れば完成だ。(E)

		22-04 文書を作成する	表紙の製作はパソコンから、自分で撮影した写真と、キーボード入力を組み合わせた。初めは表紙の作り方が分からなかったため、父に教えてもらっていたが、最後は自分で作ることができた。(A)
25	学習成果の評価の仕方	25-01 学習の成果を自己評価する	ただ、テーマは良いのだが、文章にインパクトがなく、読み手が驚く本を作っていきたかったため、なにかもの足りなかった。(D)

4.2.2.2 探究型学習に取り組んだ高校生へのインタビュー調査

「学校の課題として探究学習に取り組み、一定の成果を上げた高校生」を対象とした面接調査を実施した。調査の対象校は、①探究学習における作業のすすめ方が比較的生徒の主体性に任され、教員は必要に応じて支援やアドバイスする「自由研究」に近いカリキュラムを持っていること、②学校図書館やコンピュータなどの情報環境が整い、生徒が必要と感じた時には、それらを自由に使えること、を条件に検討し、私立の A 高等学校に依頼し、2013 年度に優秀作品に選ばれた 2 年生の生徒 15 名のうち、学習の振り返りを詳細に記録していた 6 名を選び、当該学校の司書教諭を通じて許可を得た。生徒の属性と論文のテーマは図表 4-29 のとおりである。

図表 4-29 試験調査の対象とした生徒の属性とテーマ

No	論文のタイトル
A1	ミュージカルにおける芝居と音楽の関係～レ・ミゼラブルの楽曲によるゆらぎ解析からの論証
A2	日本人は前髪がある人が多く、欧米人は前髪がない人が多いのはなぜか
A3	生ごみ液肥化によって地域コミュニティを作れるか～生ごみの地産地消～
A4	なぜ江戸での放火に対する刑罰は火罪だったのか？
A5	日本のチョコレートスナックをアメリカで売るための英語のキャッチコピー
A6	今の日本にとっての理想の選挙制度とは？

インタビューに先立ち、各生徒が執筆した論文のコピーと、学習履歴を振り返った記録用紙を入手し、生徒ごとに、学習のプロセスと記録から読み取れる学習活動を抽出した。論文提出直後（2014 年 2～3 月）に、それぞれ 1 時間程度の半構造化インタビューを行い、会話は録音して逐語録を作成した。主な質問項目は、(1)テーマ設定から論文執筆までのプロセスと具体的な作業内容、(2)やりたかったけれどもできなかったこと、難しかったこと、(3)どのような支援やアドバイスを受けたか、(4)個々の作業ができた（できなかった）理由は何か、である（図表 4-30）。

図表 4-30 事前に用意した質問項目（インタビューガイド）

No	質問項目
1	テーマを決めるまでのプロセスを教えてください。
2	他に考えたテーマはありますか。
3	テーマはいつから意識していましたか。
4	テーマを決めていくうえで、実際に行ったこと（作業）はなんですか。
5	テーマを決める参考になったものはなんですか。
6	テーマを決める時に困ったことはなんですか。
7	テーマが決まったあと、何から始めましたか。
8	これまで習ったことの中で、テーマを決める時に役立った知識やスキルはありますか。
9	情報収集のプロセスを教えてください。
10	検索するときに、どんな言葉を使いましたか。
11	どんな情報源を使いましたか。
12	調べ方のアドバイスは必要でしたか。
13	資料を探すとき困ったことはありますか。（それはどうやって解決しましたか）
14	資料が「使えるか使えないか」どうやって判断しましたか。
15	これまで習ったことの中で、情報を集める時に役立った知識やスキルはありますか。
16	資料の読み方を教えてください。
17	どんな資料から読み始めましたか。
18	読みながら記録したりメモしたりしましたか。
19	読んだ後、どうしましたか。
20	資料を読んでいて困ったことはありますか。
21	書いたりまとめたりするプロセスを教えてください。
22	文章はどうやって書き始めましたか。
23	文章を書く上で困ったことはありますか。
24	文章を書くときにアドバイスをもらいましたか。
25	図表を作る上で困ったことはありますか。
26	これまで習ったことの中で、書いたりまとめたりする時に役立った知識やスキルはありますか。
27	また論文を書くとしたら、どんなことをやってみたいですか。
28	やっておけば良かったと思うことはありますか。

4.2.2.3 データの分析

インタビュー記録から、生徒の行為を表している発言に着目して抽出し、知識や技能を表すコード名を付与した。これらを、学習指導要領に示された4つのプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）に沿って分類し、必要に応じてサブカテゴリーを作成した。尚、以下の文章では、知識や技能は____で、サブカテゴリーとしてまとめた学習活動は< >、カテゴリーとして用いた学習プロセスは《 》で表す。

例えば、「課題の設定」の段階に見られる行為として

（テーマは）何がいいかなって図書館を歩いていたら、たまたまモーツァルト療法っていう本が、ぶらぶらとしてたら目に入って... (A1-024)

テーマが仮決定するまでは、(図書館で) なんかいちいち見てみようかなと思って。チョコレートとか、味とか、マーケティングとか、商業とか、いろいろ考えながら本を見ていました。(A5-024)

という発言に着目した場合、活用した知識・技能としてブラウジングというコード名を付与した。同様に、

江戸時代に関係があることをいろいろ書いてみて。すごく汚いんですけど。適当に書いてみて。とりあえず思いついたり、本を読んで見つけたこととか。(A4-050)

という発言にはキーワード書き出しというコード名を付与したり、

被験者がいて、器具があって、実際にやって結果を出すっていうのが必要かなって。でも自分にその実力があるかどうか分からないし、時間とか、そういうこともできないかなって思ってた。(A1-042)

内装に関するテーマの本はあるんですけど、それを使って、その内装の本の中のどういうところを使って論証していくのかっていうのが、あんまりイメージがつかなかったんで。(A3-010)

という発言には、探究方法を検討するというコード名を付与した。

以上のような作業を6人分のインタビューデータを対象に繰り返した結果、《課題の設定》段階では、ブラウジング、キーワード書き出し、関連図書を探して読む、探究方法を検討する、与えられた条件を検討する、資料の有無を確認する、焦点を絞る、問いをつくる、探究方法を検討する、関連図書を探して読む、という知識や技能を活用していることが分かった。これらを、作業を行う目的に応じて分類し、＜テーマの候補を挙げる＞、＜テーマの実現可能性を検討する＞、＜テーマを具体化する＞というサブカテゴリー名を付与した。

4.2.3 結果

探究学習にうまく取り組むことができた生徒に対するインタビュー調査の結果、《課題の設定》、《情報の収集》、《整理・分析》、《まとめ・発表》の各段階において、25の学習活動を行っていることが分かった。それぞれの学習活動を遂行するためには、さまざまな知識や技能が必要とされるが、本調査で、生徒が活用していることを確認できたのは、《課題の設定》段階で10項目、《情報の収集》段階で61項目、《整理・分析》段階で11項目、《まとめ・発表》段階で19項目であった(図表 4-31)。

まず、《課題の設定》段階で、生徒は、図書館の書架をブラウジングしたり、キーワードを書き出したりしながら＜テーマの候補を挙げる＞。取り組む課題が見つかったあと、資料の有無を確認して＜テーマの実現性を検討する＞。さらに、焦点を絞ったり、問いをつくったりしながら＜テーマを具体化する＞。最終的にテーマが決まるまで、長い時間がかかり、多角的に検討した結果、最初に決めたテーマとは違うテーマに落ち着く場合もある。

《情報の収集》にはいくつかの段階がある。まず生徒は、＜何を調べるか言語化する＞＜調べ方を検討する＞という準備をしてから情報収集を始める。＜何を調べるか言語化する＞とは、自分が調べたいこと言葉で表現することである。具体的には、問いをつくった

り、疑問点を書き出したり、調べる項目を挙げたりすることを指す。また、＜調べ方を検討する＞とは、どのような手段で調べるか考えることである。生徒は情報源の特徴を踏まえながら、調べる方法を具体的に挙げる。

情報収集の目的が異なると、情報収集の仕方も異なってくる。探究学習の過程では、＜幅広く情報を収集する＞場合、＜焦点を合わせて情報を収集する＞場合、＜予備知識を得る＞場合がある。＜幅広く情報を収集する＞とは、探究学習の初期段階で、関連する資料を広く集めることを指す。本を探す場合、図書館や書店でブラウジングしたり、OPACで検索したり、書店サイトやWeb OPACを使ったり、参考文献リストをたどったりする。インターネットを使う場合は、広い概念を表すキーワードで検索したり、ネットサーフィンをしたりする。一方、＜焦点を合わせて情報を収集する＞とは、探究がすすんでいくにつれて欲しい情報がはっきりとし、その入手を目指して資料を探すことを意味する。この段階では、知りたいことをキーワードで適切に表現したり、目次や索引を使って情報を探したり、データベースを使って新聞記事や論文など特定の資料を見つける力が求められる。＜予備知識を得る＞とは、関心のある分野で、テーマの足掛かりとなる資料を探して読み、知識を増やしたり、キーワードを頭に入れたりすることである。百科事典やウィキペディア、新書など入門書的な資料を選んで読むことが多い。このような情報収集は、課題設定の途中にも行われ、テーマ決めの成否を左右する場合もある。

また、情報収集の過程では、目的に応じて資料との付き合い方が変化する。例えば＜資料を読む＞方法も、予備知識を得るために情報収集しているときは、必要な箇所だけパラパラ読む拾い読みをし、知りたいことを調べている場合はメモをとったり、付箋を付けたりしながらじっくり読む。情報を＜取捨選択する＞ためには、複数の資料にあたったり、書誌情報を確認したり、レビューを参考にして評価したり、目次や序章だけ見て必要な情報が載っているかどうか判断したりする。また、＜情報を抜き出す＞ために、ノートやカード、コンピュータを使ってメモをするが、箇条書きなど要約の技能も必要になる。

生徒が使うメディアや情報入手先はさまざまである。＜本やインターネットを使う＞場合、それぞれの情報源としての特徴を踏まえた上で、検索キーワードを考え、適切な検索ツール（例えば目次・索引、検索エンジンなど）を使って情報を探す。＜図書館を使う＞生徒は、公共図書館だけではなく学校図書館や専門図書館など、さまざまな種類の図書館を使い、分類のルールを踏まえて書架を探したり、OPACで検索したり、司書に質問したりことによって資料を探している。資料だけではなく＜インタビューをする＞場合や、＜アンケートをする＞場合もあり、事前に質問項目を作るだけではなく、質問しながら聞く力や、データを集計したり、分析したりする力も求められている。

《整理・分析する》段階で、生徒が行っている学習活動は＜情報を整理する＞、＜情報を分析する＞、＜考察する＞ことである。生徒は、見つけた資料をコピーしたり、プリントアウトしたりするだけではなく、要点を絞って箇条書きにしたり、項目を立てて分類し、見出しを付けたりして、集めた情報を整理している。また、そのように整理された情報は、比較したり、根拠を探したりしながら、自分なりの分析を加え、疑問を解決するために用いられる。分析の結果、レポート全体の結論を導き出すことができるが、著者の意見と自分の意見を区別して表すよう気を付けている。

《まとめ・発表》の段階では、インタビューした生徒に求められていたまとめ方が論文形式であったため、抽出された学習活動は、文章を書くことと、論文の形にすることに限

定されている。成果をまとめるにあたって、生徒はまず、＜構成を考える＞ことから始めている。具体的には、章立てを考え、決定した構成に従って書くことを指す。書くときには、＜資料を使って書く＞方法に従い、また＜図表を作成する＞ことや、＜文献リストを作成する＞ことも必要であるため、正しく引用したり、グラフを作成したり、書誌情報を記録して、ルールにのっとって書くといった知識や技能が用いられている。また、論文としての＜体裁を整える＞ことが求められているため、表紙や目次を作ったり、ページ数を打ったりしている。最後に、誤字脱字を修正するだけでなく、内容の論理構成を確認するなど、＜書いたものを見直す＞作業を経て、論文の完成に至る。

図表 4-31 生徒が行った学習活動と活用している知識・技能

	学習活動	活用している知識や技能
課題の設定	1 テーマの候補を挙げる	キーワードを書き出す／ブラウジング／関連図書を探して読む
	2 テーマの実現可能性を検討する	探究方法を検討する／与えられた条件を検討する／資料の有無を確認する
	3 テーマを具体化する	焦点を絞る／問いをつくる／探究方法を検討する／関連図書を探して読む
情報の収集	4 何を調べるか言語化する	疑問点を書き出す／問いをつくる／調べる項目を書き出す
	5 調べ方を検討する	調べる方法を挙げる／情報源の特徴を踏まえる
	6 幅広く資料を収集する	検索エンジンを使う／書店サイトで検索する／参考文献リストを使う／Web OPAC で検索する／図書館で本を検索する／ブラウジング／論文検索をする／研究所のサイトを使う／横断検索サイトを使う／図書館の分類・排架に従って探す／同じ著者の本を探す
	7 焦点を合わせて情報を収集する	リサーチクエスチョンを挙げる／目次・索引を使う／知りたいことを言語化する／メール・電話で問い合わせる／インターネットで検索する／新聞記事を探す／参考文献をたどる／論文検索する
	8 予備知識を得る	入門書を選んで読む
	9 資料を読む	パラパラ読む(拾い読み)／じっくり読む／メモしながら読む／付箋を付けながら読む／目次で見当をつけて読む
	10 取捨選択する	複数の資料にあたる／レビューを見る／書誌情報をみる／目次や序章だけ読む／最初の段落だけ読む／情報源の特徴を踏まえる
	11 情報を抜き出す	ノート・カード・コンピュータにメモを取る／付箋をつける／コピーをとる／線をひく／箇条書きにする
	12 本を使う	情報源としての特徴を踏まえる／書誌データを見る／目次・索引・序章を使う
	13 インターネットを使う	情報源としての特徴を踏まえる／検索エンジンを使う／目的に応じた検索サイトを使う／サイトの特徴に応じて使い分ける／キーワードを工夫して検索する
	14 図書館を使う	図書館の種類／図書館の使い方／資料を探す(OPAC／Web OPAC／ブラウジング)／質問・相談する／相互貸借を依頼する
	15 インタビューをする	依頼する／問いをつくる／質問しながら聞く
	16 アンケートをする	依頼する／項目をつくる／集計する／分析する
整理・分析	17 情報を整理する	メモをつくる／箇条書きにする／見出しをつける／分類する
	18 情報を分析する	データを解析する／比較する／疑問を解決する／根拠を探す／複数の意見を検討する
	19 考察する	著者の意見と自分の意見を区別する／結論を導き出す
まとめ・発表	20 構成を考える	章立てを考える／構成に従って書く
	21 資料を使って書く	引用する／要約する／事実と意見を書き分ける／自分の意見を述べる／根拠を示す
	22 図表を作成する	誤字脱字を修正する／論理構成を確認する
	23 書いたものを見直す	グラフを作成する／表を作成する／図を作成する／コンピュータを使う
	24 文献リストを作成する	奥付を見る／書誌情報を記録する／ルールにのっとって書く
	25 体裁を整える	表紙や目次をつくる／ページ数をうつ／印刷・製本する

4.2.4 考察

探究学習にうまく取り組んだ生徒へのインタビューから、学習のプロセスと、そこで活用されている知識や技能が明らかになった。本項では、それらの知識や技能を身に付ける機会について言及した箇所や、知識や技能の不足を示唆する発言について検討する。

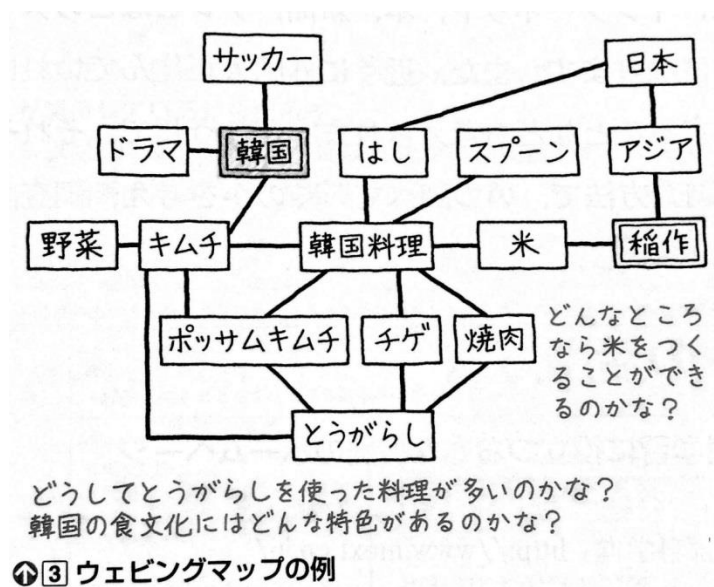
まず、以下の引用からも分かるように、教科学習で得た知識は探究の過程で生かされており、学習指導要領に示された総合的な学習の時間と教科の関連づけ、すなわち、「習得・活用・探究」の教育モデルは妥当であることと言える。

英語の授業で読んでいる長文で、黒人差別についてだったら、...それに関連したことについてプレゼンしなさいみたいなのがあって...。その時に、図を使うにしても、ちゃんと出典を明記してとか、そういうのをちょいちょい言われたりしたんで... (A2:080)

習ったかな。でもなんか、地理の授業とかで、マッピングはやりました。授業で。(A3-018)

後者の例について中学校社会科（地理分野）の教科書で確認すると、図表 4-32 のような指導例があり、テーマに関連する言葉をつないでマッピングし、問いを立てる方法が示されている。このような知識を探究学習で生かすことが、教科と総合的な学習の時間の連携の形であると考えられる。

図表 4-32 中学校社会科地理的分野の教科書におけるマッピングの指導例



【出典】五味文彦，戸波江二，矢ヶ崎典隆著. 新しい社会地理. 東京書籍，2011. p. 100.

また、先行研究で、教科の成績と総合的な学習の成績の関連があることが示唆されていた³⁸が、本調査の結果から、教科で扱う特定の知識や技能の習得状況が、探究学習の成否を左右していると推察される。

一方、生徒が探究学習の過程で活用していた知識や技能のなかには、独自の学習機会（クラブ活動や海外経験）において身に付けたものがあることから、教科教育の枠組みでは指導しにくい知識や技能があると考えられる。

(本の選び方や探し方は) 先生には教えてもらわないですけど。自分の経験とか、(クラブの)先輩が言ってることとか。講演とか、有名な方が(学校に)来てお話を聞いたときに、私は本を読むときにこういうところを見るとか言ってるのを聞いて。先生からこうして言われたわけではないですね。(A1-257)

ウィキペディアは、アメリカで、すごい厳しく言われていて。ウィキペディアをソースに使うと、それだけで点数がすごい落ちるんですよ。(A1-182)

(国語の授業で)文章を書くのは、中学校のときは、ディベートとかスピーチとかそういうときで、高校の時に書いたのは、自分の感想文というか体験を書くとか。だから論証というカタチではあまり、授業では(習って)ないかな。(A1-53)

教科ではあんまり(要約の指導は)なかったです。個人的には、部活で模擬国連というのをやっていて、その課題でいろいろ他の文を読んでそれを要約するっていうのがあって、それが(役立ちました)。(A5-242)

中1でプリントとかもらうんですけど、引用の仕方とか、「」でくくるとかあったんですけど。あまり細かいことは習わないです。そしたら、友だちが、論文の書き方っていう本があって、それを見ると分かりやすかったって言ってたんで。私もそれを探して借りて、読みました。(A2-236)

このような発言から、本の探し方、情報源の評価、要約の仕方、引用のルール、論理的な文章の書き方は、教科の枠組みで習得しにくいと推測される。この他にも、図書館での本の探し方、新聞記事の探し方、論文の探し方、目的に応じて読み方を変えること、などが授業では習っていない(または覚えていない)、あるいは海外経験やクラブ活動、家族の援助によって習得したという発言があった項目である。

上のA1-257は、本を選ぶときに奥付を確認したり、目次や序章を使って概要をつかんだりできる理由について、ディベートを行うクラブ活動での経験や、外部講師の講演からヒントを得たと述べているが、このような知識や技能を習得する機会があるかどうかを学習指導要領で確認すると、中学校の国語「各学年の目標及び内容」の「読むこと」に以下のような記述がある。

本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。³⁹⁾

具体的な指導内容については、同「中学校学習指導要領解説国語編」に、以下のように説明されている。

必要な情報があるかどうかを、本の表題や目次、索引等から判断したり、新聞の紙面構成等に基づいて、必要な部分を探して読んだりするなど、それぞれの資料の特性を生かした読み方をするのである。必要な部分に効率よく着目するためには、様々な資料の形式について理解することや、読む目的や対象によって読み方が変わるということを理解することが大切である。⁴⁰⁾

また、A5-242 が言及した引用の仕方についても、同じく、中学校の国語の領域に位置付けられている⁴¹。このことから、教科の内容とされている知識や技能であっても、十分指導されていないなかったり、取り扱われていなかったりすることによって、生徒が習得できていないものが存在すると考えられる。この結果は、教員へのアンケートを実施した桑田や、生徒への質問紙調査を行った塩谷の研究成果と重なっており、実際に探究学習に取り組んだ生徒への質的研究によって、両者の結果を裏付けることができたと言える。

このような知識・技能のなかには、利用指導の項目に含まれるものがあり⁴²、これらを中心とした利用指導のカリキュラムを考案して、利用指導を教育課程に位置付け、教科教員と司書教諭や学校司書との連携をすすめることが重要であると考えられる。学校図書館の専門領域として指導するほうが効果的な項目もあれば⁴³、教科の枠組みで指導しやすい項目、また両者が重なっている項目もある。

4.2.5 結論

本調査の結果、学校図書館利用指導が探究学習の遂行に必要であることが確認できた。

生徒は、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という一連の過程の中で、既存の知識・技能を活用しながら、さまざまな学習活動を行っている。このような知識・技能のうち、学習指導要領で具体的に示されているもの（例えば、「目次・索引の使い方」や「情報を比較して分析すること」など）については、教育課程の枠組みで身に付けることが想定されているが、実際には、教科教員による指導が難しい項目があるという結果が得られた。また、学習指導要領で取り上げられていなかったり、具体的な学習活動として示されていないもの（例えば、「本の読み方を必要に応じて変えること」など）も、学習機会の有無によって、習得の度合いに生徒間格差が生まれやすい。結果的に、このような知識や技能が身につかず、探究学習の遂行が困難な生徒を生み出している可能性があると言えるだろう。

一方、体系表や文献に示されている利用指導の内容は、情報の収集・整理・分析・まとめ・評価など広範囲にわたり、今回調査した生徒が活用している知識・技能で、学習指導要領に示されていないものも含まれている。利用指導を教育課程に位置づけることで、探究学習の遂行に必要な知識・技能の習得がすすむと考えられる。

今後、異なる条件のもとで情報収集やまとめ・発表を行っている他校の事例も分析し、探究に必要な知識・技能を精査した上で、教科と学校図書館の専門領域に根ざした役割分担を検討していく必要がある。

4.3 本章のまとめ

本章では、学校図書館利用指導で取り扱うべき内容を検討することを目的とし、中学生に対する質問紙調査と、探究学習に取り組んだ高校生に対する聞き取り調査を行った。

3 章 2 節では、2 つの中学校で、利用指導に含まれる知識や技能の習得度を測るための質問紙調査を行った。調査にチェックリスト（自己評価）とテストを併用した結果、同じ項目を扱った問いでも、自己評価と正答率に大きなずれが生じたことから、自己評価に頼って生徒の能力を判断することは難しいと分かった。このような傾向を踏まえつつ、調査結果を読み解くと、知識の習得とその活用が必ずしも結びついていないことが確認できた。例えば、索引の特徴について知識がある生徒の半数が、索引の使い方に関する問題に答えられなかった。また、生徒が習得に自信を持てていない項目として、「背ラベルと配架のルール」「インターネット上の情報の信憑性を評価すること」「引用と要約を区別すること」があり、実際に正答率が低かった項目は「司書の役割に関する知識」「検索キーワードの作り方」「背ラベルと配架のルール」であった。

これらの項目を「利用指導の内容（25 分野 119 項目）」に対応させると、「03-01 図書館の意義と役割を理解する」「03-02 学校図書館を利用する」「04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す」「04-04 書架を見ながら資料を探す」「07-02 図書を使って調べる」「11-05 検索エンジンを使って調べる」「15-01 複数の情報を比較する」「15-02 情報の信憑性を判断する」「17-02 図書から情報を読み取る」「21-01 引用する」「21-02 要約する」が該当する。この中で、文献調査の結果、教科で指導できる項目になっているのは「15-02 情報の信憑性を判断する」と「21-02 要約する」であるが、本調査の結果を踏まえると、教科の枠組みだけでは十分指導できていない可能性があると言える。

3 章 3 節では、探究学習にうまく取り組んだ高校生に対するインタビュー調査を行い、課題に取り組む過程で、どのような知識や技能を活用したか、また、それらをどのような機会に学習したのか尋ねた。分析の結果、生徒は教科学習を通じて習得したさまざまな知識や技能を探究学習に活用していることが分かった。例えば、出典を記録することや、マッピングの手法を用いてテーマを検討することなどである。一方、個人的な経験によって習得した知識や技能が、学習過程で重要な役割を果たしている場合もあった。そのような知識や技能のうち、利用指導の項目に含まれるものとしては、「03 図書館の使い方」「04 図書館での資料の探し方」「15 資料（情報）の評価の仕方」の分野と、「17-01 目的に応じて読み方を変える」「17-02 図書から情報を読み取る」「21-01 引用する」「21-02 要約する」「21-05 論理的な文章の書き方」の項目があり、これらは、教科の枠組みで習得しにくい知識や技能であると推測される。

以上の結果を、2 章 3 節で作成した「学校図書館利用指導の内容（25 分野 119 項目）」の一覧表と対応させると、図表 4-32 のようになる。まず、課題にうまく取り組んだ生徒が、教科の枠組み以外の機会に習得し、探究学習の過程で活用していることが明らかになった項目として、「03 図書館の使い方」「04 図書館での資料の探し方」「15 資料（情報）の評価の仕方」の各分野に含まれる知識や技能がある。これらの項目は、桑田他の先行研究で「指導できる」と答えた学校図書館員が多く、且つ、教科書や教師用指導書であまり取り上げられていない（教科書分析で B または C のグループに属する）ことから、利用指導の内容として優先的に取り扱うことが必要であると言える。

また、「06 情報探索の見通しの立て方」「07 図書を使った調べ方」「11 電子メディアを使った調べ方」「13 その他の調べ方」「14 情報検索の仕方」「16 記録の仕方」「17 資料（情報）の読み方」「19 情報の分析の仕方」「21 情報を使った文章の書き方」「22 まとめ方」に含まれる知識や技能の一部は、探究の過程で活用されているが、教科書や教師用指導書では十分取り上げられていない項目も含まれる。すなわち、生徒が必要とする能力を習得できるよう、学校図書館員が教員と一緒に指導にあたることが求められるだろう。

一方、「15-02 情報の信憑性を判断する」や、「21 情報を使った文章の書き方」に含まれる「21-02 要約する」「21-05 論理的な文章を書く」のように、教科書や教師用指導書で取り上げられ、教科教員が指導することが期待されている項目でも、生徒が授業ではあまり習わなかったと回答しているものもあった。

中学生と高校生に対する量的・質的研究の結果から、学校図書館員が優先的に指導すべき項目が明らかになると同時に、教科書や教師用指導書で取り上げられている知識や技能であっても、教科の枠組みだけでそれを指導することが難しいという課題を見出すことができた。次章では、学校図書館員と教員が、実際に何を指導し、何を指導できていないのか、両者の役割分担という観点から分析する。

図表 4-33 図書館利用指導の内容とこれまでの分析結果

25 分野	119 項目	①教科書調査	②先行研究(塩谷)	③先行研究(桑田)	④質問紙調査	⑤聞き取り調査
01 学習計画の立て方	01-01 学習計画を立てる	A				○
02 テーマ設定の仕方	02-01 テーマを決める	A		◎		○
	02-02 課題を明確にする	B		◎		○
03 図書館の使い方	03-01 図書館の意義と役割を理解する	C		◎	×	◎
	03-02 学校図書館を利用する	B		◎	×	◎
	03-03 公共図書館を利用する	B		◎		◎
04 図書館での資料の探し方	04-01 適切な目録を選択する	C				◎
	04-02 カード目録を使って資料を探す	B				◎
	04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す	B			×	◎
	04-04 書架を見ながら資料を探す	B			×	◎
	04-05 文献リストを使って資料を探す	C				◎
	04-06 自館にない資料を探す	C				◎
	04-07 雑誌記事を探す	C				◎
	04-08 新聞記事を探す	C				◎
05 図書館以外の施設の使い方	05-01 専門図書館を利用する	C				
	05-02 文化施設を利用する	B				
	05-03 公的機関を利用する	B				
	05-04 さまざまな施設を利用する	B				
06 情報探索の見通しの立て方	06-01 情報探索の見通しを立てる	B	○			○
	06-02 目的に応じた調べ方を選択する	A				○
	06-03 目的に応じたメディアを選択する	B		◎		○
07 図書を使った調べ方	07-01 図書を積極的に利用する	B		◎		
	07-02 図書を使って調べる	B		◎	×	○
08 参考図書を使った調べ方	08-01 参考図書を使って調べる	B		◎		
	08-02 百科事典を使って調べる	B	×	◎		
	08-03 事典を使って調べる	B				
	08-04 図鑑を使って調べる	C				
	08-05 辞典を使って調べる	A		◎		
	08-06 統計を使って調べる	B	×			
	08-07 年鑑を使って調べる	C				
	08-08 地図を使って調べる	A				
	08-09 白書を使って調べる					
	08-10 便覧を使って調べる	C				
09 新聞・雑誌を使った調べ方	09-01 新聞を使って調べる	B		◎		
	09-02 雑誌を使って調べる	C				
10 視聴覚メディアを使った調べ方	10-01 視聴覚メディアを使って調べる	A				
11 電子メディアを使った調べ方	11-01 電子メディアを使って調べる	B				
	11-02 コンピュータを利用する	A	○			○
	11-03 インターネットを使って調べる	B	○			○
	11-04 インターネットを安全に利用する	B				○
	11-05 検索エンジンを使って調べる	C			×	○
	11-06 CD-ROM を使って調べる	C				
	11-07 オンライン・データベースを使って調べる	C				○
12 その他の資料を使った調べ方	12-01 情報ファイルを使って調べる	C				
	12-02 その他の資料を使って調べる	C				
13 その他の調べ方	13-01 インタビューで情報を収集する	B	○			○
	13-02 アンケートで情報を収集する	A	○			○
	13-03 手紙で問い合わせる	A				
	13-04 FAX で問い合わせる	C				
	13-05 電話で問い合わせる	C				○
	13-06 電子メールで問い合わせる	A				○
	13-07 フィールドワークで情報を収集する	B				
14 情報検索の仕方	14-01 検索戦略を立てる	C	×			○
	14-02 検索式を作る	C		◎		
	14-03 検索に適したキーワードを作る	C		◎		○
	14-04 検索結果を評価する	C				
15 資料(情報)の評価の仕方	15-01 複数の情報を比較する	B	×		×	◎
	15-02 情報の信憑性を判断する	A		◎	×	◎

4章 「情報の探索と利用」に関する知識・技能と生徒の習得状況

	15-03	情報の妥当性を判断する	B				◎
	15-04	情報の適合性を判断する	B				◎
	15-05	情報を読み解く	B				◎
	15-06	情報を批判的に読み解く	B				◎
16 記録の仕方	16-01	目的に応じた記録方法を選択する	A				
	16-02	カードやノートに記録する	B		◎		○
	16-03	写真で記録する	B	○			
	16-04	ビデオで記録する	B				
	16-05	録音する	C				
	16-06	コンピュータで記録する	C				○
	16-07	出典を記録する	B	×			○
	16-08	文献リストを作成する	B				○
17 資料（情報）の読み方	17-01	目的に応じて読み方を変える	B		◎		◎
	17-02	図書から情報を読み取る	B		◎		◎
	17-03	精読する	A				○
	17-04	統計データを読み取る	C				○
	17-05	図表やグラフの情報を読み取る	A		◎		○
18 情報の整理の仕方	18-01	情報を取捨選択する	A	×	◎		
	18-02	収集した情報をファイリングする	B				
	18-03	収集した情報を保存する	B				
19 情報の分析の仕方	19-01	情報を分析する	B				○
	19-02	収集した情報を分類する	B	○			○
	19-03	収集した情報の重要な箇所を抜き出す	B				○
	19-04	事実と意見を区別する	A				
	19-05	仮説を検証する	A				○
	19-06	統計処理をする	C				
20 情報の加工の仕方	20-01	抄録を作成する					○
	20-02	解題をつくる					
	20-03	翻訳する，翻案する					
	20-04	映像を編集する	A				
	20-05	音声を編集する	B				
	20-06	画像を編集する	A				
	20-07	グラフを作成する	A				○
	20-08	図表を作成する	B				○
21 情報を使った文章の書き方	21-01	引用する	B		◎	×	◎
	21-02	要約する	A	○	◎	×	◎
	21-03	図表やグラフを利用する	A				○
	21-04	事実と意見を区別して書く					○
	21-05	論理的な文章を書く	A	×			◎
	21-06	分かりやすい文章を書く	B	×			
	21-07	出典を示す	C				○
	21-08	ルールに則って書く	A				○
22 まとめ方	22-01	適切な表現方法を選択する	B				
	22-02	アウトラインをつくる	B	×			○
	22-03	レポートにまとめる	B	×			○
	22-04	文書を作成する	B				○
	22-05	スライドを作成する	A				
	22-06	ホームページにまとめる					
	22-07	新聞形式にまとめる	B	○		×	
	22-08	ポスターにまとめる	A				
	22-09	パンフレットにまとめる	A				
23 発表の仕方	23-01	シナリオ（原稿）を書く					
	23-02	提示用の資料を作成する	B				
	23-03	配布資料（レジュメ）をつくる					
	23-04	分かりやすく話す	B	×			
	23-05	機器を使って発表する	B				
	23-06	話し合いをする	B				
24 情報モラル	24-01	著作権に配慮して情報を利用する	A	○			
	24-02	適正に情報を発信する	B				
25 学習成果の評価の仕方	25-01	学習の成果を自己評価する	B				
	25-02	学習の成果を相互評価する	B				

- ① 教科書分析の結果，教科でも指導（A），利用指導の一部を教科でも指導（B），教科では指導しない（C）
 ② 塩谷・堀田の研究で，中・高等学校の教科の中で習得できる項目（○），習得しにくいと考えられる項目（×）
 ③ 桑田他の研究で，国語科教員よりも学校図書館員のほうが「指導できる」という回答が多かった項目（◎）
 ④ 中学1年生に対する質問紙調査の結果，十分習得できていないと考えられる項目（×）
 ⑤ 高校2年生が探究学習で活用している知識や技能（○），特に教科で指導しにくいと考えられる項目（◎）

 注・参考文献

- 1 庭井史絵. 中学校社会科(地理分野)における「調べ学習」の検討. 青山学院大学教育人間科学部紀要. 2011, no.2, p.81-100.
- 2 永野和男. 情報教育の目標と評価方法の課題(情報教育の成果と課題). 日本教育工学会論文誌. 2006, vol.30, no.3, p.157-162.
- 3 枝元益祐. 公教育に於ける学力を巡る考察：学力形成と学校図書館のクロスロード. 同志社大学図書館学年報別冊. 2011, vol.22, p.32-57.
- 4 塩谷京子, 堀田龍也. 小学生に情報活用スキルを習得させるためのガイドブックの開発と効果. 教育情報研究. 2009, vol.24, no.4, p.15-26.
- 5 塩谷京子, 堀田龍也. 児童生徒の情報活用スキルの習得と司書教諭の指導効果に関する検討. 教育メディア研究. 2011, vol.17, no.2, p.25-39.
- 6 全国学校図書館協議会. 学校図書館の充実に関する調査. 全国学校図書館協議会, 2008, 68p.
- 7 村山功. 学校図書館調査における学力テストの解釈問題. 静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学篇. 2007, vol.58, p.251-264.
- 8 国立教育政策研究所. “平成 23 年度全国学力・学習状況調査解説資料中学校国語”. 2011-09. http://www.nier.go.jp/11chousa/11kaisetsu_chuu_kokugo.pdf, (参照 2017-01-10).
- 9 国立教育政策研究所. “平成 21 年度全国学力・学習状況調査調査結果のポイント”. 2009-12. http://www.nier.go.jp/09chousakekkahoukoku/01chousakekka_houkokusho_point.pdf, (参照 2017-01-10).
- 10 国立教育政策研究所. “平成 24 年度全国学力・学習状況調査調査結果のポイント”. 2012-08. http://www.nier.go.jp/12chousakekkahoukoku/02point/24_chousakekka_point.pdf, (参照 2017-01-10).
- 11 文部科学省. “情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて（情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 最終報告）”. 1998-08. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801.htm, (参照 2017-01-10).
- 12 文部科学省. “初等中等教育の情報教育に係る学習活動の具体的展開について”. 2006-08. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/09/07/1296864_2.pdf, (参照 2017-01-10).
- 13 高比良美詠子, 坂元章, 森津太子, 坂元桂, 足立にれか, 鈴木佳苗, 勝谷紀子, 小林久美子, 木村文香, 波多野和彦, 坂元昂. 情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本教育工学雑誌. 2001, vol.24, no.4, p.247-256.
- 14 高橋純, 木原俊行, 中山実, 武田一則, 桑山裕明, 宇治橋祐之, 佐藤知条. 小学生向け情報活用能力のチェックリストの開発. 日本教育工学会研究報告集. 2008, vol.2008, no.3, p.5-10.
- 15 小田和美, 永野和男. 情報活用能力育成モデルカリキュラムの開発と公開. 教育情報研究. 2012, vol.27, no.4, p.29-38.
- 16 田中耕治. “第 5 章 評価方法の原理と新しい評価の方法”. 教育評価. 岩波書店, 2008, p.135-167.
- 17 高橋純, 木原俊行, 中山実, 武田一則, 桑山裕明, 宇治橋祐之, 佐藤知条. 小学生向け情報活用能力のチェックリストの開発. 日本教育工学会研究報告集. 2008, vol.2008, no.3, p.5-10.
- 18 稲垣忠, 鈴木克明. “第 8 章 学習指導と評価(2) 目標に応じた評価方法の実際”. 授業設計マニュアル:教師のためのインストラクショナルデザイン. 北大路書房, 2011, p.87-97.
- 19 Gagné, Robert Mills; Wager, Walter W.; Golas, Katharine C.; Keller, John M.; 鈴木克明, 岩崎信. インストラクショナルデザインの原理. 北大路書房, 2007, 462p.

- 20 全国SLA研究調査部. 特集 '09 子どもの読書と学校図書館の現状: 2009 年度学校図書館調査報告. 学校図書館. 2009, no.709, p.34-52.
- 21 次の3冊を用いた。(1)堀川照代. 学習指導と学校図書館. 新訂, 日本放送出版協会, 2010, 282p. (2)渡辺重夫. 学習指導と学校図書館. 第2版, 学文社, 2008, 183p. (3)全国学校図書館協議会「新学校図書館学」編集委員会編. 学習指導と学校図書館. 全国学校図書館協議会, 2010, 134p.
- 22 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_013.pdf. (参照 2017-01-10). 引用は p.29.
- 23 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_013.pdf. (参照 2017-01-10). 引用は p.16.
- 24 文部科学省. “中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編”. 2008-07. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_013.pdf. (参照 2017-01-10). 引用は p.98.
- 25 文部科学省. “今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (中学校編)”. 2010-11. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/1300534.htm, (参照 2017-01-10).
- 26 文部科学省. “今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (中学校編) 第1編 2章-1”. 2011. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/02/17/1300464_3.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.25.
- 27 文部科学省. “今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (中学校編) 第1編 2章-2”. 2011. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/02/17/1300464_4.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.35.
- 28 庭井史絵. 教科による情報活用能力育成と「図書館利用指導」の比較: 教師用教科指導書の記述を手がかりとした分析. 教育情報研究. vol.32, no.2, p.13-24.
- 29 速水敏彦. 総合人間科の実践による学習動機づけの変化. 名古屋大学教育学部紀要. 1996, vol.43, p.23-35.
- 30 高橋亜希子, 村山航. 総合学習の達成の要因に関する量的・質的検討: 学習様式との関連に着目して. 教育心理学研究. vol.54, no.3, 2006. p.371-383. 引用は p.371.
- 31 根本彰. 探究学習と図書館:調べる学習コンクールがもたらす効果. 学文社, 2012, 157p. 引用は p.85-86.
- 32 中橋雄. 総合的な学習を支える「課題解決技能」育成のカリキュラム. 日本教育工学会誌. 2001, vol.25, p.199-204.
- 33 大作光子, 嶺坂尚. ルーブリックによる自己評価の分析を通じた探究学習の支援のあり方. 日本図書館情報学会誌. 2015, vol.61, no.4, p.232-251.
- 34 桑田てるみ, 眞田章子, 庭井史絵, 野村愛子, 大木理恵子, 山田英雄, 法土明子, 五十嵐卓司, 黒瀬卓秀, 木之下瞬, 五十嵐佐知子. “言語能力の育成に学校図書館が果たす教育的役割の研究と教材開発”. 2010-09. <http://www.hakuhofoundation.or.jp/Portals/0/resources/foundation/subsidy/pdf/4th02.pdf>, (参照 2017-01-10). 引用は p.40.
- 35 関口靖広. 教育研究のための質的研究法講座. 北大路書房. 2013, 242p.
- 36 例えば, 玉川学園では中学3年生を対象に「学びの技」というカリキュラムが用意され, 探究プロセスをたどりながら, 情報の探索と利用に必要な知識や技能を体系的に習得できるようになっている。(後藤芳文, 伊藤史織, 登本洋子. 学びの技: 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション. 玉川大学出版部. 2014, 145p.)
- 37 庭井史絵. 「学校図書館利用指導」で取り扱われる知識と技能. 現代の図書館. vol.53, no.4, p.175-183.
- 38 速水敏彦. 総合人間科の実践による学習動機づけの変化. 名古屋大学教育学部紀要. 1996, vol.43, p.23-35.

³⁹ 文部科学省. “中学校学習指導要領”. 2008-03. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/_icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf, (参照 2017-01-10). 引用は p.8.

⁴⁰ 文部科学省. 中学校学習指導要領解説国語編. 2008-03. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/04/15/1234912_2_1.pdf. (参照 2017-01-10). 引用は p.50.

⁴¹ 例えば,中学校学習指導要領解説国語編の p.52 には,“引用の際には,かぎ(「」)でくくることが,出典を明示すること,引用する文章が適切な量であることなどが大切である”と書かれている。(文部科学省. 中学校学習指導要領解説国語編. 2008-03. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/04/15/1234912_2_1.pdf, (参照 2017-01-10)) .

⁴² 庭井史絵. 中学校教科書における「学び方」指導: 学校図書館利用指導の可能性を求めて. 青山学院大学教育人間科学部紀要. vol.3, p.105-124.

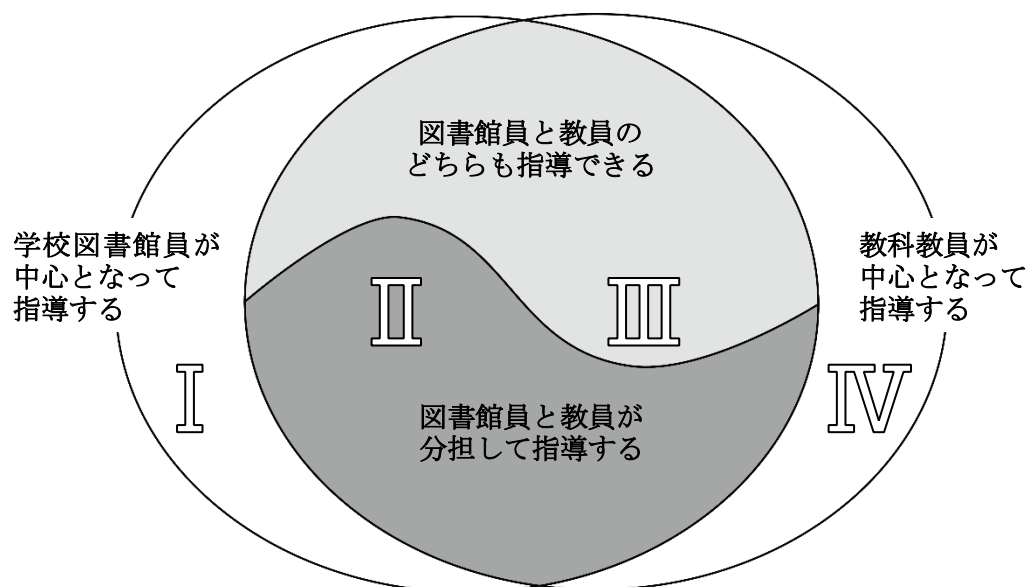
⁴³ 塩谷京子. 児童生徒の情報活用スキルの習得と司書教諭の指導効果に関する検討. 教育メディア研究. vol.17, no.2, 2011. p.25-39.

5章 学校図書館員と教科教員の協働による 「情報の探索と利用の指導」

はじめに

2章と3章の文献調査から、学校図書館利用指導（以下、利用指導）を、司書教諭や学校司書（以下、学校図書館員）だけが行う教育活動と捉えるのではなく、教科教育に含まれる「情報の探索と利用の指導」と関連付け、教員と役割分担して行うことを考え、「学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）」（図表 5-1）を作成した。また、学校図書館関係の文献と、各教科の教科書と教師用指導書それぞれの記述を比較し、図表のⅠ～Ⅳの各領域に「利用指導の内容（25分野 119項目）」を分類した。

図表 5-1 学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）



この図表の目的は、学校図書館員が教員と共に「情報の探索と利用の指導」を行うことによって、「学び方」など探究学習や言語活動で求められる知識や技能をより包括的に指導できることを示し、学校図書館員が教育活動に参加する必要性を表すことである。しかし、学校図書館員と教員がどのように役割分担するのか、あるいは、ⅠからⅣの各領域にどの項目を分類することができるのかは、学校図書館関係の資料や教師用指導書など文献上の取り扱いを根拠に決定するのではなく、学校現場での協働から導き出した知見を反映させなければならない。

そこで本章では、学校図書館員と教員が、教科や「総合的な学習の時間」の中で協働するとき、どのように役割を分担し、それぞれ何を指導しているのか、両者の役割分担はどのように決まっていくのかを明らかにすることを目的として、ティーム・ティーチングを実践している図書館員と教員双方への聞き取り調査を行った。

5.1 研究の目的と方法

5.1.1 研究の目的

本章の目的は、「役割分担の構造（仮）」で示した、学校図書館員と教員によるティーム・ティーチングのあり方を、現場での実践をもとに検証することである。この図は、「情報の探索と利用の指導」において、学校図書館員と教員が、それぞれの専門性に基づく指導領域を一部重なる形で有していること、指導にあたっては、一緒に指導するだけではなく、同じ項目を異なった観点や方法で指導することによって補完し合えることを示している。

ティーム・ティーチングとは、単に複数の教員が手分けして指導にあたることを指すのではなく、お互いの専門性が指導を補い合うという性質を持つ¹。教科教員と学校図書館員の連携においても、それぞれの専門性を生かした役割分担の形を示す必要がある²。

本稿 3 章で分析したように、図書館利用指導に含まれる内容は、教科の領域と重なりが大きい。そのため、教科の内容を教科教員が教え、「学び方」の指導を学校図書館員が担うという単純な役割分担ではなく、教科に位置付けられている「情報の探索と利用の指導」に対する、学校図書館員独自の関わり方を明らかにすることが求められる。言い換えれば、教科教育と図書館利用指導に、文献上多くの重複があることを踏まえた上で、学校図書館員が教員と一緒に指導にあたる意義を示さなければならない。

1 章のレビューで明らかにしたように、これまでの研究では、学校図書館員は何ができるかという観点から、指導すべき項目が検討されてきたが、教員との役割分担、特に、教科教育と利用指導、両方に含まれる項目を一緒に指導する意義については検討されていない。日本における学校図書館員と教員の連携のあり方を考えるためには、学校図書館員が指導すべき内容を論じたり、連携の意義を主張するだけではなく、両者がお互いをどのように補完しているのか実証的に研究する必要がある。

そこで本章では、教員と協力して指導にあたる学校図書館員が、授業のなかでどのように役割分担しているのか、教員との分担はどのように決まるのかを分析し、このモデルが、学校図書館員と教員の連携のあり方を説明し得るかどうかを検討する。まず 2 節では、実際の授業を対象とした分析を行い、学校図書館員と教員が何を指導しているのか、どのように役割分担しているのかを明らかにする。また、学校図書館員と教員は、自分の指導領域や相手の指導領域についてどのように認識しているかも検討する。3 節では、学校図書館員に焦点を当てて、どのようなプロセスで教員との役割分担という関係を構築するのか、両者の関係を阻害したり、促進したりする要因は何かを分析する。

5.1.2 研究の方法

学校図書館に関する書籍や雑誌を見ると、学校図書館員が教員とともに、指導的な役割を果たしている事例が紹介されている。本章では、学校図書館を利用した授業で、生徒を直接指導している学校図書館員が担う役割を明らかにすることを目的としているため、このような先進的实践を分析することによって、学校図書館員と教員がどのように役割分担しているのか、両者の関係はどのように構築されるのかを明らかできると考える³。

また、学校図書館員と教員の役割分担の様相と、役割分担に対するそれぞれの意識、役割分担が形成されるプロセスを捉えるために、“教育現象を生成・維持・変容させているプロセスの中身－質的な側面－を組織的に探究する研究法”⁴として、「質的研究法(qualitative

research methodology)」を採用する。学校図書館を使った授業で、教員と学校図書館員がどのように役割分担したかというデータを収集するにあたっては、指導案や教材等の資料を収集した上で、授業を担当した教員と学校図書館員に対する半構造化インタビュー (semi-structured interview) を行った。

具体的には、2011 年から 2015 年までに発行された学校図書館専門の雑誌 3 誌 (『学校図書館』(全国学校図書館協議会)、『学図研ニュース』『がくと』(学校図書館問題研究会)) において、学校図書館を利用した授業実践を報告している中学校と高等学校の中から、①学校図書館員が指導的役割を果たしていること、②授業を行う教科が偏らないようにすることを基準として、調査対象となる学校を抽出した。また、学校図書館支援センターや訪問先の学校から紹介された学校も追加しながら、校種や公私の別、司書教諭と学校司書のバランスを配慮して 16 校に調査を依頼した (図表 5-2)。2012～2013 年度に 3 校で予備調査 (pilot study) を実施した後、2015 年度に 10 校で本調査を実施した。さらに、役割分担形成のプロセスを分析する際 (5 章 3 節)、正規雇用の学校司書の事例を増やす目的で、2 校の学校司書に対して、質問事項を絞った追加調査を行った。

予備調査と本調査に先立ち、図書館を使って行われた授業の「指導案」と「教材」を入手し、生徒が行う学習活動を時系列で整理した。また、各活動で必要となる知識や技能の一覧を作成した。その後、インタビューガイドを作成した上で、授業を担当した教員と学校図書館員、それぞれに対して 1 時間から 1 時間半の半構造化インタビューを行った。インタビューでは、事前に整理した学習プロセスを確認しながら、その中で必要な知識や技能の指導を、教員と学校図書館員のどちらが行ったのかを聞いた。また、指導の方法、分担の根拠、生徒の様子なども尋ね、自由に意見を述べてもらった。インタビューは録音し、すべて文字起こしして分析データとした。

図表 5-2 インタビュー対象校と対象者

司書教諭 (N=6)

学校 ID	公私	校種	図 ID	経験年	免許・資格	勤務形態	実施日
A	私	中	司教 01	28 年	社会・司書教諭・司書	常勤／専任	2012 年 4 月
B	公	中	司教 02	8 年	国語・司書教諭	常勤／兼任	2015 年 8 月
C	公	小中	司教 03	30 年	英語・司書教諭	常勤／専任	2015 年 8 月
D	公	中	司教 04	39 年	国語・司書教諭・司書	常勤／兼任	2015 年 10 月
E	私	中高	司教 05	10 年	国社・司書教諭・司書	常勤／兼任	2015 年 12 月
F	公	中	司教 06	34 年	国語・司書教諭(退職)	常勤／兼任	2016 年 2 月

学校司書 (N=10)

学校 ID	公私	校種	図 ID	経験年	免許・資格	勤務形態	実施日
G	私	中高	司 01	30 年	司書 (教免なし)	常勤／専任	2012 年 4 月
H	私	中高	司 02	4 年目	司書 (教免なし)	常勤／専任	2013 年 7 月
I	公	中	司 03	28 年	司書, 司書教諭, 小	非常勤	2015 年 8 月
J	公	中	司 04	8 年	司書 (教免なし)	非常勤	2015 年 7 月
B	公	中	司 05	12 年	司書, 小	非常勤	2015 年 8 月
K	私	中高	司 06	3 年	司書 (教免なし)	常勤／専任	2015 年 3 月
L	公	高	司 07	4 年	司書 (教免なし)	常勤／専任	2015 年 8 月
M	公	高	司 08	30 年	司書 (教免なし)	常勤／専任	2015 年 8 月
N	公	中	司 09	36 年	司書教諭 (司書なし)	常勤／専任	2016 年 8 月
O	公	高	司 10	8 年	司書 (教免なし)	常勤／専任	2016 年 8 月

教科教員 (N=20)

学校 ID	公私	校種	教員 ID	経験年	担当教科	勤務形態	実施日
G	私	中高	教 01	—	社会科	常勤	2012 年 4 月
G	私	中高	教 02	—	社会科	常勤	2012 年 4 月
G	私	中高	教 03	—	社会科	非常勤	2012 年 4 月
A	私	中	教 04	—	社会科	常勤	2012 年 4 月
B	公	中	教 05	16 年	理科	常勤	2015 年 8 月
B	公	中		12 年	国語科 ※発言ナシ	常勤	2015 年 8 月
I	公	中	教 06	28 年	国語科	常勤	2015 年 8 月
J	公	中	教 07	40 年	国語科	常勤	2015 年 7 月
C	公	小中	教 08	16 年	社会科	常勤	2015 年 8 月
C	公	小中	教 09	14 年	理科	常勤	2015 年 8 月
D	公	中	教 10	4 年	家庭科	常勤	2015 年 10 月
D	公	中	教 11	3 年	理科	常勤	2015 年 10 月
E	私	中高	教 12	30 年	家庭科	常勤	2015 年 12 月
E	私	中高	教 13	12 年	理科	常勤	2015 年 12 月
F	公	中	教 14	8 年	国語科, 保健体育科	常勤	2016 年 2 月
K	私	中高	教 15	17 年	理科	常勤	2015 年 3 月
K	私	中高	教 16	16 年	保健体育科	常勤	2015 年 3 月
L	公	高	教 17	21 年	社会科	常勤	2015 年 8 月
M	公	高	教 18	7 年	保健体育科	常勤	2015 年 8 月
M	公	高	教 19	27 年	国語科	常勤	2015 年 8 月

5.2 学校図書館員と教科教員の役割分担

本節では、中学校と高等学校における、図書館を利用した 20 の授業について、学校図書館員と教員それぞれに答えてもらったインタビューデータを用いて、両者がどのように指導上の役割を分担していたか、お互いにどのような役割を相手に期待していたか、背景や意図を含めて分析する。

5.2.1 分析の方法

授業内で指導したかどうかを確認する内容は、本稿 2 章 3 節で作成した「学校図書館利用指導の内容 (25 分野 119 項目)」の各項目とする。まず、インタビューデータから、指導の内容や役割分担について言及している箇所をすべて抽出した後、図書館利用指導の内容 (25 分野 119 項目) を示すコードを振り、分類した。また、発言の内容を解釈して、それぞれ「指導している」「指導してもらいたい」「指導したい (すべき)」「指導していない」「指導できない」「他教科で指導」に分けて整理した⁵⁾。さらに、役割分担の背景や要因、課題を表していると思われる文言も別に取りまとめた。

5.2.2 結果と考察

5.2.2.1 指導の有無に対する認識

インタビューデータのなかで、学校図書館員と教員が、指導の有無について言及した 977 ヶ所を分類した結果、23 分野が取り上げられていた (図表 5-3)。

インタビューイーから言及されなかった項目は、「05 図書館以外の施設の使い方」「10 視聴覚メディアを使った調べ方」であった。「05 図書館以外の施設の使い方」は、例えば、D 校や L 校の総合学習で、博物館や市役所、その他の公的施設を訪問する活動が含まれていたが、インタビューでは訪問前の指導の有無について述べられなかった。「10 視聴覚メディアを使った調べ方」には、DVD 等映像資料を調査に用いることが考えられるが、今回調査した授業では、そのような調べ方について言及されなかった。

教員の半数以上 (19 人中 10 人以上) が「教科が指導している」と答えた項目は、「02 テーマ設定の仕方」「16 記録の仕方」「22 まとめ方」の各項目であった。また三分の一以上 (19 人中 7 人以上) が「教科が指導している」と答えた項目は、「11 電子メディアを使った調べ方」「15 資料 (情報) の評価の仕方」であった。

学校図書館員の半数以上 (14 人中 7 人以上) が「図書館が指導している」と答えた項目は、「02 テーマの探し方」「04 図書館での資料の探し方」「06 情報探索の見通しの立て方」「07 図書を使った調べ方」「電子メディアを使った調べ方」「15 資料 (情報) の評価の仕方」「16 記録の仕方」「21 情報を使った文章の書き方」「22 まとめ方」であった。また、三分の一以上 (14 人中 5 人以上) が「図書館が指導している」と答えた項目は、「08 参考図書を使った調べ方」「19 情報の分析の仕方」「24 情報モラル」であった。

教員の三分の一以上が「図書館が指導している」と認識している項目は、「16 記録の仕方」であった。学校図書館員の半数以上が「教科が指導している」と認識している項目は、「02 テーマ設定の仕方」と「21 情報を使った文章の書き方」であった。

一方、教員の三分の一以上が、「教科が指導していない」と答えた項目は、「02 テーマ設定の仕方」「21 情報を使った文章の書き方」「22 まとめ方」であった。しかし、教員が「図

書館が指導していない」と具体的に指摘する項目はなかった。

学校図書館員の三分の一以上が「図書館が指導していない」と答えた項目は「22 まとめ方」であった。また、学校図書館員の三分の一以上が「教科が指導していない」と指摘した項目は、「16 記録の仕方」「21 情報を使った文章の書き方」「22 まとめ方」であった。

図表 5-3 から読み取れる、指導の有無について学校図書館員と教員の言及した項目の特徴を指摘すると、以下の通りである。

まず、学習のスタートでもある「02 テーマ設定の仕方」については、学校図書館員も教員も指導の必要性を認識し、それぞれが指導しようとし、パートナーの指導も求めている。しかし、自ら十分に指導できていないと考えている教員も多い。次に、情報収集の場面における、図書館の利用については、主に学校図書館員が指導を担い、教員も学校図書館員が指導していることを認識している。しかし、インターネットなど電子メディアの利用に際しては、学校図書館員だけではなく教員も指導に加わっている。情報を取捨選択し、記録する段階では、学校図書館員と教員が共に指導にあたっている。また、まとめたり表現したりする段階も、両者が共に指導しているが、教科の指導が十分ではないと考える学校図書館員と教員は多く、学校図書館員が自ら指導することに対して否定的な意見もあった。

以上の結果を踏まえて、学校図書館員と教員の発言に着目しながら、考察する。

図表 5-3 授業における学校図書館利用指導に相当する内容の取り扱い

		図書館が指導している	図書館に指導してもらいたい	図書館が指導したい(すべき)	図書館が指導していない	図書館には指導できない	教科が指導している	教科に指導してもらいたい	教科が指導したい(すべき)	教科が指導していない	教科には指導できない	他教科に指導してもらいたい	他教科が指導している	図書館が支援、教科が指導
		教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図	教/図
01	学習計画の立て方	5/1					2/1			1/0				0/1
02	テーマ設定の仕方	6/10	1/0	0/3			13/7			7/3	1/0		1/0	5/2
03	図書館の使い方	1/4	1/0	0/1			1/3			4/0		1/0		
04	図書館での資料の探し方	5/12	4/3		1/0		4/0			2/0				0/1
05	図書館以外の施設の使い方													
06	情報探索の見通しの立て方	6/9	2/0	0/2			5/0			4/1	3/0			0/1
07	図書を使った調べ方	3/8		0/2			5/1	0/1		1/0	3/0		1/0	
08	参考図書を使った調べ方	3/6		0/2			3/0	0/1						0/1
09	新聞・雑誌を使った調べ方	0/1					1/0							
10	視聴覚メディアを使った調べ方													
11	電子メディアを使った調べ方	1/7		0/2	0/1		8/0			2/0		1/1	0/5	0/1
12	その他の資料を使った調べ方	3/0												
13	その他の調べ方	1/0					2/0							
14	情報検索の仕方	0/3		0/1		0/1	0/1			0/1		1/0		
15	資料(情報)の評価の仕方	2/11		0/3		0/1	8/2	0/1	1/0	2/3	1/0	1/1	1/0	0/1
16	記録の仕方	8/13	2/0	0/1	0/1		11/3			7/6	3/0	1/0		0/5
17	資料(情報)の読み方	1/4	0/1			0/1	3/1			1/1		1/0		
18	情報の整理の仕方	0/1			0/1		1/0	0/1		2/0				1/0
19	情報の分析の仕方	4/6					3/2			4/3	1/0			0/2
20	情報の加工の仕方						2/2							
21	情報を使った文章の書き方	1/7		0/1	0/2	1/2	7/7		0/2	8/5	1/0	3/0	2/1	0/4
22	まとめ方	4/7	1/0	0/1	0/6	0/2	10/3		0/1	8/6	5/0	2/0	2/0	1/3
23	発表の仕方	2/0		0/1	0/1		4/1			1/1		1/1		
24	情報モラル	0/5		0/1			0/1		0/1	0/1				0/1
25	学習成果の評価の仕方	1/1					1/1			0/1				

※表中の X/Y は、X が教員、Y が学校図書館員(司書教諭と学校司書)の人数

※教員(T)は 19 人、学校図書館員(L)14 人(内、司書教諭 6 人、学校司書 8 人)

5.2.2.2 学校図書館員と教科教員の役割分担

学校図書館員と教員の指導内容を、25 分野だけではなく、それぞれに含まれる 119 項目に対応させて検討した結果、両者の役割分担には、以下の 4 つのパターンがあることが分かった。

- 学校図書館員と教員が同じ内容の指導をしている
- 学校図書館員と教員が同じ内容を、異なった視点や手法で指導している
- 学校図書館員が中心となって指導している
- 教員が中心となって指導している

まず、学校図書館員と教員が同じ内容の指導をしている項目として、「22 まとめ方」があった。両者共に、「レポートにまとめる」、「ポスターにまとめる」を取り上げ、主に、レポートの構成や書式に関する指導と、見やすいポスターを制作するための視覚的工夫に対するアドバイスをを行っている。一方、コンピュータでスライドを作成したり、新聞を作成したりするための指導は行われていなかった。

レポートの書き方では「一般的なレポートの書式」「序論・本論・結論」の指導が中心である。ポスターの描き方は、“レイアウトというか、通り一片のレイアウトですけど、見やすく書こうとか、色を使おうとか、字ばっかりにならないように図を入れようとかね（司教 06）”や、“大見出し、小見出しみたいなのをつけて書くっていうのは（指導）してんですけど（教員 07）”という発言から分かるように、見やすくする工夫として「ポスターの構成」や「視覚的工夫」が中心で、レイアウトのルールには踏み込まず、前年度の作品を見せるといった指導にとどまっている。

次に、同じ分野内で学校図書館員と教員が異なった指導をしている項目を挙げる。これらは、学校図書館員と教員が同じ目標を有していることを意味するが、それぞれ異なる方法で指導をしているものである。

「02 テーマ設定の仕方」は、学校図書館員と教員が共に指導している項目であるが、学校図書館員が「基礎知識を獲得する」、マングラートなどのワークシートを使って「テーマを絞り込む」ことを教えているのに対し、教員は、あらかじめ限定的なテーマを与えたり、「興味のあることを挙げる」方法を採用している。一方、“私のほうで、6 人班を構成して、6 つほどトピックを挙げておいて。ここからどうするのって。（具体的なトピックを）なんでもいいから決めなさいって（教諭 10）”のように、テーマ設定の仕方を具体的に指導していないと答えた教員も多い。その場合、教員は、テーマを自由に決めさせており、必要に応じて個別にアドバイスしている。

「11 電子メディアを使った調べ方」では、教員は、「インターネット上の情報の特徴」としてウィキペディアの利用に注意を促したり、“こっちの都合なんですけど、こっちがねらっている授業というか、授業のねらいに合うサイトを厳選して（教諭 09）”のように、特定のウェブサイトを指定して利用させたりしている。学校図書館員も同様の指導を行うが、一部は「検索エンジンを使って調べる」方法や、「オンライン・データベースを使って調べる」ための指導したと述べている。一方、コンピュータ操作や ID／パスワードの管理については、情報科で指導していると答えた学校図書館員が多い。

「15 資料（情報）の評価の仕方」も、図書館員と教員が同じように指導しており、その

内容は、インターネット上の情報の真偽を確認する必要性や、複数の資料を利用することが中心である。しかしながら、教員は特にインターネット上の情報を念頭において指導しているのに対し、“インターネットで調べただけでも、スカイツリーの本も何冊か渡して、その奥付に値する情報なのって聞くと、ばーっとみてどこにも書いてないって。じゃあだめだねとなる（司教 03）”のように、学校図書館員は本や新聞など印刷物も含めた指導を行うという傾向があった。

さらに、学校図書館員が中心となって指導している項目を挙げる。これに該当するのは、「04 図書館での資料の探し方」「06 情報探索の見通しの立て方」「19 情報の分析の仕方」であった。これらは、教員の多くも「図書館が指導している」、「図書館に指導してもらいたい」と回答していることから、両者が学校図書館員の指導領域として認識している項目であると言える。

「16 記録の仕方」は、学校図書館員が指導しているとする回答も、教員が指導しているという回答も多かった。それぞれの発言から指導の内容を見てみると、学校図書館員が指導していると述べているのは、「16-02 カードやノートに記録する」、「16-07 出典を記録する」、「16-08 文献リストを作成する」といった項目であった。教員も、出典を書くよう生徒にアドバイスしているが、“使った資料を書きなさいとは言ってたけど。やはり欄を作って、そういうふうに（正しく）書かせるべきだと思いますけど、そこまできちんと指導はしていません（教諭 12）”のように、書誌情報の見方を指導したり、生徒が自発的に出典を書くようなワークシートの工夫をしている例はなかった。この項目に対して、学校図書館員が「教科が指導していない」という印象を持つのは、教員の指導が単なる声掛けに止まっているからだと考えられる。両者の指導内容を比較すると、記録の仕方の指導も、学校図書館員が中心となって教えている項目のひとつと数えてよいだろう。

図表 5-4 「16 記録の仕方」で言及された項目

	学校図書館員が 指導している	教員が 指導している	学校図書館員が 指導していない	教員が 指導していない
16-02 カードやノートに記録する	4 人／7 人	3 人／2 人	0 人／1 人	2 人／0 人
16-07 出典を記録する	7 人／10 人	7 人／0 人	0 人／0 人	4 人／3 人
16-08 文献リストを作成する	1 人／7 人	2 人／2 人	0 人／0 人	2 人／2 人

※「はい」と答えた教員／学校図書館員の数

一方、教員が中心となって指導していると考えられるのは「21 情報を使った文章の書き方」である。この分野で学校図書館員が指導しているのは、引用の形式的なルールに関することが中心で、要約の仕方や論理的な文章の書き方、論文の構成は教科の指導領域と考えられている。ただし、担当するのは国語科という認識も両者に共通しており、指導していないと答えた教員はすべて国語以外の教科であった。また、図書館で指導していると答えた学校図書館員は、国語の免許を有する司書教諭であった。

5.2.2.3 司書教諭と学校司書の認識の違い

調査対象となった学校図書館員の内訳は、司書教諭 6 名、学校司書 8 名である。それぞれをグループに分けて分析すると、2 つの項目で、両者の指導や認識の違いが認められた。

まず、「15 情報の評価の仕方」は、司書教諭全員が指導していると答えたのに対し、学校司書は半分以下であった。また、「21 資料（情報）を使った文章の書き方」は、一人を除くすべての司書教諭が指導していると答えているが、指導していると述べた学校司書はいなかった。

指導できる項目について、ある学校司書（ST04）は、“どういったところで（指導が）必要かっていう、こちらが気づいたことは先生にお伝えし、先生のほうからそういった部分は指導していただいています。調べ方、本の使い方っていう部分は私がサポートできるんですけど、それ以外のところは、私はそれを教えるような単位をとってきてないです”と述べている。このように、教員ではない学校司書の多くは、司書教諭に比べて、図書館で資料を探す以外の項目で、自ら指導を行うことに消極的であった。

5.2.2.4 特定の教科への期待

探究学習を取り入れた授業を行う教員の多くは、指導しなければならない知識や技能が思ったより多いことに気づき、それらをすべてひとつの単元で取り扱うのは難しいと考えていた。例えば、社会科教員（T02）は、“中 1 の社会の授業では情報収集をやって、国語のここでは要約をやって、理科の実験で事実と意見を分けることもやって、その後にレポート書こうとなったらできるかなと思うんですけど、そういう状況にない中で、社会科が全部やろうとすると、あっふあっふになりますね”と述べ、探究学習を取り入れた授業の難しさを指摘している。

特定の教科で取り扱うことが期待されている項目は 2 つある。一つ目は、「11 電子メディアを使った調べ方」の中の、コンピュータの操作や、ID／パスワードの管理に関する指導である。学校図書館員は、Web サイトの評価や、検索エンジンの使い方は自ら指導するが、コンピュータ操作やセキュリティに関する指導は技術科で取り扱ってもらうことを期待していた。

二つ目は、「21 情報を使った文章の書き方」である。5 章 2 節で述べたように、学校図書館員も国語以外の教科教員も、国語科での指導を期待しており、国語科教員も自ら指導する必要性を認識していた。

5.2.3 結論

日本の学校教育は、探究学習を取り入れ、情報リテラシー教育をすすめることを目標の一つに掲げている。学校図書館が長年取り組んできた利用指導は、探究学習に必要とされる知識や技能、思考、態度の育成を目指しており、学校教育と共通の目標を有する。

図書館利用指導の対象は、課題の設定から情報収集、整理・分析、まとめ・発表まで各領域に広がっており、指導する項目也多岐にわたっている。しかし、探究学習における学校図書館員と教員の役割について聞き取り調査を行った結果、学校図書館員が実際に教えているのは、利用指導の内容とされている項目の一部にすぎないことが分かった。

学校図書館員が焦点を合わせているのは、「テーマ設定の仕方」、「図書館での資料の探し方」、「情報探索の見通しの立て方」、「図書を使った調べ方」、「電子メディアを使った調べ方」、「資料の評価の仕方」、「記録の仕方」、「情報の分析の仕方」、「まとめ方」の各分野である。具体的には、「概要を知ってからテーマを考える」、「テーマを絞り込む」、「書架で本を探す（分類と配架、本の主題）」、「調べ方の種類や特徴」、「目的に応じたメディアを選択

する」、「目次や索引を使う」、「インターネット上の情報の特徴」、「複数の情報を比較する」、「責任表示から信憑性を判断する」、「情報カードに記録する」、「奥付の見方」、「書誌情報の読み取り方」、「出典を記録する」、「参考文献リストを作成する」、「カードを使って情報を整理（比較、分類）する」、「レポートの書式」といった知識や技能は、学校図書館員が中心となって指導している。

文献上の役割分担と比較しながら、学校図書館員が実際に指導している項目を検討すると、「本の主題」、「調べ方の種類や特徴」、「目的に応じたメディアを選択する」の3つは、教科の指導領域には見られず、図書館利用指導独自の内容と言えるもので、それをその通り指導している。しかし、その他の項目は、文献上、教科の内容に含まれている。すなわち、文献調査の結果、教科で取り扱っていると判断した知識や技能の中には、実際には教員が指導していない（できない）ものがあり、学校図書館員の指導領域は、文献調査の結果よりも広いと推測される。

一方、学校図書館員の指導項目が、文献上の内容よりも限定的である理由を、インタビューの発言を踏まえて検討すると、時間的・物理的な制約、図書館利用指導に対する教員の認識、学校図書館専門職の制度的問題、という3つの課題が浮かび上がってくる。例えば、探究的な学習に取り組むのに十分な授業時間数が確保されていなかったり、インターネットにアクセスできるコンピュータが学校図書館に整備されていない場合、必要な知識や技能を教えることは難しい。また、情報の探索と利用に際して、特定の知識や技能を指導する必要があると考えていない教員も多く、彼らは、生徒に「自由に」調べたり書かせたりするような授業計画を立てがちである。さらに、教科教員と兼任している司書教諭は、探究学習を行う授業に加わる時間が取れず、教員ではない学校司書は、授業の内容に意見を述べたり、教員と共に指導にあたることを躊躇する結果、効果的な利用指導が実践できない。

学校図書館に関する資料では、誰がどのように指導するのかという問題には踏み込まず、情報の探索と利用に関するさまざまな知識や技能を網羅し、利用指導の内容としている。今後、学校図書館員と教員が役割分担という観点から各項目を整理し、理想と現実のギャップを埋める「図書館利用指導のための新しい基準」を考えることが必要であろう。

5.3 役割分担の形成プロセス

学校図書館を活用した授業で、一緒に指導にあたっている教科教員と学校図書館員は、「役割分担の構造（仮）」が示すように、それぞれ独自の指導領域を有している一方、ある項目については同じように指導し、また別の項目は異なるアプローチで指導してお互いを補完していた。しかし、学校図書館員が、常に特定の知識や技能を指導しているわけではなく、また、指導の必要を感じていても実践できていない場合もあり、何を教えているのか明確な基準は見いだせなかった。このことから、「情報の探索と利用」の指導における、学校図書館員の教員の役割分担は、それぞれの専門性だけではなく、授業における両者の関係性などさまざまな要因によって授業ごとに決定されると考えられる。そこで、本節では、役割分担という関係が形成されるプロセスから、学校図書館員が何をどのように指導しているのかについて知見を得ることを目的とし、インタビュー記録の中から、特に学校図書館員の発言に焦点を合わせた分析を行う。

5.3.1 分析の方法

本節では、学校図書館員と教員の役割分担に影響を与える要因と、学校図書館員が教員と協力関係を構築していくプロセスを明らかにすることを目的とした質的分析を行う。分析手法として、木下康仁による「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)」⁶を採用した。M-GTA は、従来のグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) と異なり、データの切片化によって文脈性を破壊するのではなく、文脈も含めて解釈・意味づけするため、人と人との相互関係に伴う変化やうごきを、背景や要因も含めて説明する理論を導き出すことに優れた研究法とされている⁷。それゆえ、学校図書館員と教員がさまざまな条件のもとで、指導上の役割を分担していくプロセスを明らかにするという本調査の目的に対して、そのステップとなる要素を「概念」や「カテゴリー」として生成する M-GTA が、分析手法として適当であると判断した。

M-GTA では、まず“研究テーマ”に沿ってデータを収集した後、全体を概観した上で、“分析テーマ”と“分析焦点者”を絞り込んで分析を行う。本調査では、「学校図書館を使った授業における教員と学校図書館員の役割分担」が“研究テーマ”であり、「学校図書館員が教員と一緒に授業を行うとき、自分が教える内容をどのように決定していくのか」が“分析テーマ”である。“分析焦点者”は、「学校図書館を利用した授業で、資料提供以上の指導的役割を果たしている学校図書館員」とし、収集したインタビューデータのうち、司書教諭と学校司書の発言に着目した分析を行う。そのため、インタビュー対象者は、15 校の司書教諭 6 名と学校司書 10 名（1 校は司書教諭と学校司書の両方）となった。

M-GTA は、分析焦点者を設定する意味について、“方法論的限定として、（中略）その結果が責任を負う範囲を「人（限定集団）」により条件付ける」と説明している⁸。本調査では、司書教諭と学校司書という二つの職種を分析の対象としているが、両者を「図書館利用指導を行う者」と捉え、共に分析焦点者とする。なぜなら、実践事例を概観した結果、積極的に教員と連携しようとする学校図書館員は、司書教諭であれ学校司書であれ、共通の目標や問題意識を有していると考えられるからである。ただし、分析の過程で、それぞれの職種に基づいて解釈することが自然であると判断した場合は、それを明示する。

5.3.2 分析の手順

M-GTA を手法を用いた分析の手順について述べる。まず、インタビュー記録を用いて、オープン・コーディングの作業を行った。これは、データの中のある部分に着目し、その意味を解釈して（定義）、より抽象度の高い言葉（概念）で表現することである。

M-GTA では、概念一つにつき 1 枚の「分析ワークシート」を作成することを推奨している。ワークシートには、概念名、定義、具体例であるバリエーション、解釈の過程で検討したことを記録する理論的メモの各欄を用意する（図表 5-5）。

例えば、分析テーマに関連する箇所として、指導しない理由を述べた発言“先生たちのほうができるんじゃないだろうかとか。例えば国語の先生だったり、専門なんだし。そのへんは、なんかちょっと、怖くてできないみたいなどころがありますね。実際にいいのか私でいいのかって（司書 06）”に着目した場合、教えることが専門ではないことに対して不安を感じていると解釈して定義欄に記入し、概念名を「専門外という意識」とした。その後、他にも利用指導を行うことに対して不安を感じている発言があるか、別のインタビュー一のデータを見ていき、該当する具体例をバリエーション欄に加えていった。

この研究における概念とは、取り上げた具体例に共通する特質を説明する言葉であり、一定程度の多様性を説明できることが求められている。そのため、具体例を増やす過程で、それらを包括的に説明できる概念名と定義になるように適宜修正する必要がある。一方、包括的な概念名を志向しすぎて、データが示す内容を超えた一般的な言葉を充てないようにすることも重要である。そのため、インタビュー一の発言をそのまま概念名に用いるような、in-vivo 概念を検討することも推奨されている⁹⁾。図表 5-5 の例では、この概念の具体例が、司書教諭の発言からは確認できず、学校司書だけに見られたことから、定義に「司書教諭や教員と比較して」という説明を加え、概念名も「司書が指導することへのためらい」に修正した。

また、M-GTA では、各概念ごとに、対極例があるか、別の解釈が可能かどうか、常にデータに戻って確認することが、解釈の偏りや恣意性を取り除くために必要とされている。図表 5-5 の例では、「ためらい」の対極例として、指導に自信を持つケースを考え、そのことを理論的メモに記録した上で、具体例が見つかるかどうかデータを確認した。その結果、「資料提供に対する責任や自負」「教えるための学習経験や資格」といった概念を、対極例として生成することができた。

以上の作業を繰り返し、最終的に、データの中から新しい概念や解釈が生まれず、各概念に具体例を加えても定義と概念名に変化が見られなくなった時点で理論的飽和に達したと判断して、分析を終了した。

次に、生成した概念を用いて、選択的コーディングの作業を行った。これは、生成した概念同士を比較し、概念間の関係を示すカテゴリーを作成することである。分析に際しては、概念生成時に残した理論的メモを手がかりとした。

最後に、カテゴリー間の関係を説明することによって事象の変化や動きを捉え、本調査の分析テーマである「学校図書館員が教員と一緒に授業を行うとき、どのように自分の役割を決定していくのか」というプロセスを明らかにしていった。また、学校図書館員が教員との役割分担を形成するプロセスを、結果図としてまとめた。

図表 5-5 分析ワークシートによる作業の例

概念名	専門外という意識→司書が指導することへのためらい
定義	(司書教諭や教科教員と比較して、司書は) 教えることが専門ではないことに対して不安を感じていること
バリエーション	先生たちのほうができるんじゃないだろうかとか。例えば国語の先生だったり、専門なんだし。そのへんは、なんかちょっと、怖くてできないみたいなどころがありますね。実際にいいのか私でいいのかって。(司書 06) いや、本来は、お断りしないといけないと思っています。いろいろな方から何う話だと、私は司書なので、司書教諭ではないので。それは杉並区内でも言われる部分でもあるんですよね。授業をやることが司書ではないからって。だけど、授業ってどこまでなんだろうって。(司書 04) 現実的にやれっていわれたらやりますし、やってます。でも私としては、そこは、司書の本分ではないんじゃないかって思うところがあります。(司書 04) 2 年生の国語科の先生は、他で司書教諭をされたこともある先生だったので、何をやるの、どうするの、何を言うのって聞かれると、私もドキドキしちゃって。今までそういうことしてもらったことないんだけどって言われると、私も不安になって、これをこういう流れでって説明して。(司書 03)
理論的メモ	● 司書教諭にはこの発言が見られないとすると、学校司書であることに由来する概念であると言えるか。 ● 反対に、教えることに自信を示す例があるか。それはどのような場合か。 ● 教員とのコミュニケーションや役割分担に影響を与えている。 ● 自信がなくて指導しない場合と、それでも指導する場合がある。

5.3.3 結果と考察

司書教諭 6 名、学校司書 10 名、合計 16 名の学校図書館員に対するインタビューデータを分析した結果、学校図書館員と教員の役割分担に影響を与えていると考えられる 45 の概念を生成し、それらを 7 つのカテゴリーとしてまとめることができた (図表 5-6)。司書教諭や学校司書は、教員からの依頼に基づいて授業に関わっていく中で、自分が指導すべき領域を把握したり、生徒に対する利用指導の必要性を認識したりするようになる。しかし、自ら指導することに対しては、自信と迷いの両方を感じている。学校図書館員の自信や迷いは、授業における教員との相互作用に影響を与えており、関係を構築した結果、学校図書館員は自分なりの授業への関わり方を見出す。

5.3.3.1 では、具体例を示しながら、各概念と、いくつかの概念を包括するカテゴリーについて説明する。また 5.3.3.2 では、カテゴリー間の関係を図示しながら、学校図書館員と教員が指導上の役割分担という関係を構築していくプロセスを示す。

文中では、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを < >、概念を「 」, 事例として示すインタビューの発言を“ ”の記号を使って表す。また、発言者は、司書教諭を (司教)、学校司書を (司) と表す。尚、発言に含まれる () 内の言葉は、発言内容を分かりやすくするために筆者が加筆したものである。

図表 5-6 生成した《カテゴリー》＜サブカテゴリー＞「概念」の全体像

カテゴリー	サブカテゴリー	概念
自分の役割探し	教員の意図	教員から期待されていること
		教員から制限されていること
		教員が持つ学校図書館員のイメージ
	調整を要する条件	ねらい達成のための優先順位
		授業時間という制約
指導必要性の認識	—	生徒が未習得のスキル
		観察による知識・技能不足の発見
		生徒の能力に対する教員の認識不足
		教科での不十分な取り扱い
		教員の指導に対する疑問
指導領域の線引き	—	教員の調べ学習観に対する違和感
		図書館の「内」と「外」意識
		教科での指導に対する期待
授業を支援する自信	学校図書館員としての資格や経験	資料提供に対する責任や自負
		資料準備による内容理解
		教えるための学習経験や資格
		研修で得た知識
	背中を押すもの	教員のポジティブな受け止めやサポート
立ち位置に対する迷い	事務職としての学校司書	授業を成功させたいという気持ち
		成功体験
		司書教諭と学校司書の違い
	—	専門ではない
		学校司書が指導することへのためらい
		指導ではなく支援
	学校図書館員が必要とされない	司書教諭と教科教員の二重構造
		支援・指導の必要なし
		協働に対する教員の認識の希薄さ
教員との関係構築	—	教員自身のやり方
		教員に遠慮する気持ち
		授業を手伝う意識
		授業を通したやりとり
		図書館を使ってもらうこと優先
自分なりの授業への関わり方	主体的な授業参加	教員と一対一の関係
		必要と考える指導の実践
	間接的・二次的な授業参加	積極的な提案
		生徒一人一人への支援
		ワンポイントレッスンとしての指導
		日常業務の延長線上の指導
		探索ツールの事前準備
	教員への働きかけ	担当授業での指導
		教員に教える
	自分の領域自覚	教員の見本になる指導
		「丸投げ」防止
		コーディネーターとしての役割
		教科との棲み分け

5.3.3.1 概念とカテゴリー

自分の役割探し

《自分の役割探し》とは、学校図書館員が、授業の中でどのような役割を果たすべきか、さまざまな条件のもとで検討している状態を表すカテゴリーである。学校図書館員は、＜教員の意図＞や＜調整を要する条件＞と折り合いを付けながら、授業への関わり方を考えている。

＜教員の意図＞とは、図書館を利用して授業をする教員が、学校図書館員に対して示す希望や要望のことである。＜教員の意図＞は、「教員から期待されていること」と「教員から制限されていること」の相反する概念を含んでおり、それらは「教員が持つ学校図書館員のイメージ」に影響を受けていると、学校図書館員は考えている。

「教員から期待されていること」とは、授業を担当する教員が学校図書館員にしてほしいと望む指導や支援である。“生徒が図書館に行くので、図書館のなかで資料を探す手伝いをしてあげてほしい（司 04）”のように教員から直接依頼されることもあるが、“図書館が支援できることを学年ごとに柱を立てて、先生たちに乗っかれるものはありませんか、コラボレーションできるものはありませんかって、希望調査したんです（司 10）”のように、学校図書館員が事前に働きかけてニーズを探る場合もある。「教員から期待されていること」が、学校図書館員が授業に関わるきっかけとなる。

「教員から制限されていること」とは、学校図書館員に関わる必要はないと教員に思われたり言われたりしていることである。例えば、“著作権について（説明する場合）は、奥付のことを話さなければならないし、引用のことも話さなければいけないしって言うと、引用は国語でするから、それは外してって言われて（司 03）”のように、教員が学校図書館員の指導を求めないことがある。

「教員が持つ学校図書館員のイメージ」とは、学校図書館員が果たす役割について教員が持っている印象や考えである。学校司書 10 は、“その先生が持っている司書のイメージというのがあって。司書は資料を提供するもんだっていう考えがあったんだと思います。本を用意してくれたらいいと（司 10）”と述べ、資料提供という依頼は、それが学校図書館員の役割だと教員が考えていることに因ると受け止めている。

＜調整を要する条件＞とは、授業を支援するにあたって、学校図書館員が確認する、考慮すべき条件で、「ねらい達成のための優先順位」「授業時間という制約」「生徒が未習得のスキル」がある。

「ねらい達成のための優先順位」とは、授業の目標に沿って、指導する項目を絞り込むことである。例えば、“調べるところに力を入れたいという思いが（教員に）あったので、まとめるところはできるだけ時間を取らないようにするにはどうしたらいいかって相談をして（司教 02）”など、学校図書館員は、教員と相談しながら、授業のねらいを踏まえて重点的に扱う項目と、そうでない項目を区別している。

「授業時間という制約」とは、指導できる時間が十分に取れない状況である。例えば、“4時間という設定でそれ以上は取らないからって言われた段階で、そこまでをお願いするのは難しいかなと（司 04）”のように、学校図書館員は、限られた時間でできることを選択している。

「生徒が未習得のスキル」とは、その授業で必要とされているにも関わらず、生徒がま

だ身につけていない知識や技能のことである。学校図書館員は、“総合学習の中で要約を練習する機会はあったんですけど、一年間のカリキュラムの後ろのほうだったんです。体育で課題をやったときは前期だったので、1年生は（要約の練習を）まだやってなくて知らないと思いますってこちらから提案して（司 10）”など、生徒ができないという情報を教員に提供し、それを補う方法を考えている。

このように、学校図書館員の授業への関わりは、《自分の役割探し》によって始まる。学校図書館員は、＜教員の意図＞や＜調整を要する条件＞を把握しながら、何を支援し、どのような指導を行うか検討している。＜教員の意図＞は、学校図書館員の授業への関わり方に大きな影響を与えているが、学校図書館員がその意図に従って役割を果たすこともあれば、意図とは違った関わり方を模索する場合もある。それは、＜指導を要する条件＞に配慮した結果であることもあれば、以下の項で示すようなさまざまな要因と結びついてある場合もある。

指導必要性の認識

《指導必要性の認識》とは、学校図書館員が、どのような指導が必要か認識するきっかけを表すカテゴリーである。認識するに至る過程では、＜観察による知識・技能不足の発見＞や＜教員に任せられない＞という気付きがある。

＜観察による知識・技能不足の発見＞とは、学校図書館員が授業に参加し、生徒の様子を観察するなかで、資料を探せないとか、引用のルールを知らないなど、課題を遂行するために必要な知識や技能を習得していないと気づくことである。

例えば学校司書 08 は、“いや、書いてある本を渡してあるからって言うんですけど、書いてないって。えっと思って。書いてないんじゃないかって、読めてないんですよ。一緒に読んであげなければ、一度に大量のものを読むっていうことができないんだって気付いたんですね。この子たち読めないんだって、かなりショックでしたね（司 08）”と述べ、自分が想定していたレベルに生徒が達していないことに驚きを示している。また司書教諭 04 は、“字の大きさとか、情報量とか、見せるんだから見える字でとか。そこらへんの区別もやっぱりよく分かってなくて、ぐちゃぐちゃと、ただ小さい紙を持ってしゃべっているとか。指導時間をとって、本当はやってあげないと（司教 04）”と、発表の様子を見ながら、発表に必要な知識や技能を生徒が習得していないことや、指導が必要であることに気付いたと述べている。

一方、＜教員に任せられない＞とは、教員による指導だけでは、生徒が必要としている知識や技能を習得させられないと学校図書館員が考えることで、「生徒の能力に対する教員の認識不足」、「不十分な教科での取り扱い」に気付いたり、「教員の指導に対する不安」、「教員の調べ学習観に対する違和感」を感じた時に生じる思いである。

「生徒の能力に対する教員の認識不足」とは、課題に必要な知識や技能を生徒が習得していないことを教員が理解していない状況を示す概念である。学校図書館員は、“国語辞典の使い方であったりとか、図鑑の使い方であったりとか、先生が当たり前に使えても思っているけど、使えないこともある（司 03）”とか、“レポートにしても、新聞にしても、生徒はきっと書けるだろうというイメージで教科の先生はポンと出されるんだけど、実際に生徒は、どの手順で書いたらいいのか、形としてのレポートの項目は分かるんだけど。その項目のどこから書いたらいいのかとか分かってなくて、手順（の指導）は案外スルーされ

ていることが多いから（司教 02）」と述べ、生徒ができないことに教員が気付かないまま、課題が出されていると指摘している。

「教科での不十分な取り扱い」とは、必要な指導が、教科で取り扱われていないという学校図書館員の認識を表す概念である。例えば、“国語の教科書のなかに、本当の調べ方はあまり載ってないですね。まとめるとか、調べようっていう指示はあるんだけど、段階は（示されていない）（司教 04）」とか、“意外と、情報の授業ではやらないんです。著作権も、本当はやってもらったら助かるなとは思いますが（司 08）」のように、学校図書館員は、情報の探索や利用の指導に関して、教科書の内容が不十分であったり、授業のなかできちんと扱われていないと考えることがある。

「教員の指導に対する疑問」とは、授業のなかで教員が行っている指導方法や内容に対して、学校図書館員が感じる違和感や疑問である。“先生、丸写しですよって言っても、まあいいや書いているだけでも、っておっしゃる場合もありました（司 03）」とか、“参考資料（の指導）が抜ける先生がいますね。あとは、一所懸命書いているけど、丸写しが多いなっていうときは、（引用や要約を）指導しているのかなって思いますね（司教 06）」という発言から、学校図書館員が、教員による指導の問題点を意識していることが分かる。

「教員の調べ学習観に対する違和感」とは、調べ学習の指導に対して教員が持っているイメージへの違和感や疑問である。“図書館で調べるっていう学習センターの概念がないんですよ。それで、図書館に行って、アメリカならアメリカって背表紙に書いてある本を探して、みんなで写す、要点をまとめるというような授業で、その間は自分は静かにしているっていうのを期待してるような感じで（司教 04）」という教員の態度は、学校図書館員自身の調べ学習観とは異なっている。

このように、学校図書館員は、実際に授業に参加して作業の様子を観察する中で、生徒の能力不足によるつまずきに気付く一方、必要な指導を教員が行っていないという状況を把握した結果、《指導必要性の認識》を持つようになる。

指導領域の線引き

《指導領域の線引き》とは、学校図書館員が、特定の知識や技能の指導に関して、自分や教員の専門領域を区別して捉えている状況を示すカテゴリーで、「図書館の「内」と「外」意識」と「教科での指導に対する期待」という概念を含む。

「図書館の「内」と「外」意識」とは、学校図書館内で行われる授業と、教室やコンピュータ教室など図書館以外で行われる授業とで、学校図書館員の授業への関わり方や、学校図書館員に対する教員の期待が異なっている状態を表す。例えば、“記録のためのワークシートみたいなものがあると思うんですけど、それはもう理科の先生が図書館を使わずに教室でやっているの、手に入らず、です（司教 05）」のように、図書館で支援した授業の続きであっても、教室で行われる授業には関わっていない場合や、“私のほうは、ほとんど、（教室での）授業に関係する必要はなくて。図書館に常駐してもらって、必要だと思った生徒が図書館に行くので、そこで資料を探す手伝いをしてあげてほしいと（司 04）」のように、図書館に来る生徒の支援だけを任されている場合がある。

「教科での指導に対する期待」とは、学校図書館員が、教員に確認したり打ち合わせをしたりしているわけではないが、指導しているだろうと期待している状態を指す。例えば、“国語の授業とか、あとは、夏休みの宿題でレポートを出す教科もあるので。そこで、各先

生ごとに、いろいろな指導方法でやってると思います（司教 05）”や“職業調べなんかは特にインターネットをよく使いますけど、その指導に関しては私はついていきませんし。それはそこ（コンピュータ教室）で、担任だったり、技術の先生がなさっていると思うので（司 03）”のように、図書館以外の授業では、教員が指導しているだろうと考え、指導の内容や方法については、大まかな理解にとどまっている。

このように、学校図書館員は、情報の探索と利用に関するあらゆる指導に関わるのではなく、図書館の中で行われる授業に対する支援を中心的な役割と捉えており、《指導領域の線引き》をしている。その結果、図書館以外で行われる授業や、教員が教科のなかで取り扱っている内容については、担当教員に任せ、積極的に関わっていない。

授業を支援する自信

《授業を支援する自信》とは、学校図書館員が教員と一緒に指導を行い、授業に貢献できると考える背景や要因を含むカテゴリーである。学校図書館員の自信は、＜学校図書館員としての資格や経験＞と＜背中を押すもの＞によって生まれる。

＜学校図書館員としての資格や経験＞とは、司書や司書教諭としての資格や職務、専門性を高めるための学習経験や、これまでの指導経験を表し、以下の 4 つの概念を含む。

「資料提供に対する責任や自負」とは、学校図書館員が、授業のなかで資料を提供したり、探し方を教えたりすることを自分の職務と捉え、その役割を果たすことに責任を感じていることである。“資料の探し方はこっち（司書）に任せて頂いて（司 02）”や、“どこにどんな本があるかは私が分かっているの、こういう本がほしいって言われたら、それは私がここらへんを見てごらんとか、そういうふうに言うとか、そんな棲み分けを（理科の教員と）しています（司教 05）”のように、学校図書館員は、生徒に資料を提供することが自分の専門領域であり、教員から期待されている役割であると考えている。

「資料準備による内容理解」とは、授業のための資料準備を通して、どのような情報が必要で、どのように探したらよいか理解することである。司書教諭 02 は、“こういうことを調べたい、ああいうことを調べたいって、理科のほうから（事前に）出してもらって資料集めをしたので、資料のなかからこんなものもあるんじゃないって、事前に集めていたから言えたかな（司教 02）”と述べ、情報提供や探し方の指導を適切に行える理由が資料準備にあるとしている。

「教えるための学習経験や資格」とは、学校図書館員が、資格取得の過程で、生徒を指導するために必要な知識や技能を獲得していることを表す概念である。“探すとか、本の扱い方に関しては。やっぱり一応、図書館学でやったみたい。ちゃんと学んだという前提があるっていう（司 06）”のように、生徒に教えられる、あるいは教えてもよいと判断する背景に、「教えるための学習経験や資格」を有しているかどうかがある。

「研修で得た知識」とは、業務に関する研修に参加して獲得した知識や技能のことである。“個人的に勉強しているので、こういった事例がよく使われてますよとか、こういうワークシートはどうでしょうかっていうような、そういうふうに持ってくることはできますけど（司 04）”のように、学校図書館員は、学んだ成果を自分の指導に生かしたり、授業の支援に用いたりしている。

＜背中を押すもの＞とは、学校図書館員が授業を支援しようとする気持ちを後押しする要素を表し、以下の 3 つの概念で構成されている。

「教員のポジティブな受け止めやサポート」とは、学校図書館員が授業に参加することに対して、教員や管理職が肯定的な感情や態度を表明することである。学校司書 10 は“この先生もこのところは賛同してくださって、協力してくださって（司 10）”と述べ、教員の理解と協力を得ることによって、一緒に指導したり新しい提案を行ったりしやすくなったと説明している。

「授業を成功させたいという気持ち」とは、図書館を使った授業を効果的にすすめてもらいたいという学校図書館員の願いである。学校図書館員は、“私としては子どもたちがなるべく調べやすいようにっていうのを考えるので、それでいくと偏ってしまう、課題が偏ってしまうからこのほうがいいよって（先生に）アドバイスしたんですけど（司 09）”と、生徒の作業を考えて、授業のやり方を変えるよう教員に提案したり、“先生も図書館を使って、思うようなところに行ってほしいし、生徒にもできたなって実感をもってもらいたいので、そのために、どう工夫するかっていうところ、事前の相談をかなり一生懸命やりました（司教 02）”のように、図書館を使った授業が、生徒にとっても、教員にとっても、満足できる内容になるように働きかけたりしている。

「成功体験」とは、教員に教材や指導案を提供したり、生徒に直接指導したりしたことによって教育効果があがったというプラスの経験である。“小論とか、面接とか、こういう資料を探しているんですけど、書き方が分からないんですけどって（生徒に）相談されたときに、論理的な構成を考えるワークシートを提供したら、すごく分かった、書きやすいと（司 10）”のように、成果があったという体験が、次の提案や働きかけを後押ししている。このように、学校図書館員が「授業を支援する自信」を示す場合、その背景には、資格に基づく専門性や、業務を通して得た知識や経験がある。また、パートナーである教員の評価や自らの成功体験が、図書館を使った授業を支援しようという気持ちを後押ししている。

立ち位置に対する迷い

《立ち位置に対する迷い》とは、司書教諭や学校司書が、授業における学校図書館員の役割や位置付けについて逡巡したり、生徒に対する積極的な指導をためらったりする要因を含むカテゴリーで、＜事務職としての学校司書＞＜司書教諭と教科教員の二重構造＞という制度的課題と、それらに起因した＜学校図書館員が必要とされない＞＜対等ではない＞という状況を含む。

＜事務職としての学校司書＞とは、学校司書が、自分は教員や司書教諭のような教育職ではなく、授業を行わない事務職であると意識していることを示し、以下の 4 つの概念を有する。

「司書教諭と学校司書」とは、司書教諭と学校司書の違いや役割分担に対する意識のことである。“あなたの授業でここがちょっと問題だから、課題があるから、こうしたほうがいいというのはムッとされる。司書教諭が言うと、ああっていうふうになって大丈夫なんです（司 10）”のように、学校司書が、司書教諭のほうがやりやすいことがあると考えている場合や、“司書さんが、私が授業できますって、完全に授業をやろうという人もいるから、それは怖くなって思いますね（司教 04）”のように、司書教諭が、学校司書の仕事を教員と区別している場合がある。

また、学校司書は、教員免許を取得していないとか、教授法を習っていないという理由から、指導することは本来自分の「専門ではない」と考えている。“調べ方、本の使い方

という部分は私がサポートできるんですけど、それ以外のところは、私はそれを教えるような単位をとってきてないですし。私が教えるのは無理ですって思います（司 04）”のように、具体的に教職課程を履修していないことを指す場合や、“要約のしかただったり、論文みたりとか、そういうのは、やっていいのかなって思っちゃうんですよね。なんか自分が勉強したわけでもないし、半端な知識で教えていいものだろうかって（司 06）”のように、学習経験のなさを指している場合がある。

「司書が指導することへのためらい」とは、指導する場面で、学校司書が感じる不安や違和感を示す概念である。例えば、“本当は自分が教えていいものかなって、司書として罪悪感ももちながら、不安を抱きながらも子どもたちに伝えたいと思うんですよね（司 04）”という発言から、学校司書が、指導したいという気持ちと、指導を躊躇する気持ちの間で葛藤していることが分かる。

このような罪悪感を解消する手段として、学校司書は、自らの活動を「指導ではなく支援」と捉えて、指導・教授と区別している。例えば“あくまでも私は支援なので、（生徒が）聞いてこないのに、積極的にあしらいたい、こうしたいいいって言わないです（司 03）”や、“自分では教えると言ってないというか、思っていないというか。情報提供と思って。教えるっていうのは、生徒の中に入って行って、これはこっちのほうがいいんじゃないかとかを言い出すと教えるのかもしれないですけど（司 10）”など、学校司書は、教員が行う指導や教授と、自らの関わり方とに一線を引く捉え方をしている。

一方、司書教諭は、＜司書教諭と教科教員の二重構造＞を意識している。これは、司書教諭が、学校図書館員として教えることと、教科教員として教えることの両方の立場を有していることを表す。“最近、国語の教科書にもそういうのが出ているから、自分の意識としては、境界があいまいになっているんです（司教 04）”のように、教科の内容と利用指導の内容が重複する場面において、立場の違いを意識するのは難しい場合と、“国語となると、文章表現のほうに重きを置いて、という感じになります。図書館となると、（国語のように）文章表現についてとかはもう言わないで、ひたすら、情報を探す力とか、図書館らしいことのサポートになります（司教 05）”のように、明確に区別している場合がある。

《立ち位置に対する迷い》は、学校図書館員自身によって意識されているだけではなく、パートナーである教員の認識からも生まれる。その一つは＜学校図書館員が必要とされない＞という状況である。これは、図書館を利用して授業をしようとする教員が、学校図書館員による支援を必要としない状況を表し、3つの概念を含む。

「支援・指導の必要なし」とは、教員が、図書館の利用のしかたや情報の探し方について指導が必要だとは考えていないことである。例えば、“他の先生と共有するのはつらい時がありますね。やらなくちゃいけないですよね、でも、形だけやったらいいよねみたいなところはあります（司教 04）”のように、重要な指導と見なされなかったり、“こういうふうに図書館を利用したりしない学校から移動されてきた先生があると、なんでそんなオリエンテーションが必要なの、そんなのいいよって言われるから。そこを、どう取ってもらうか。よそから来られると、自分の貴重な1時間を取ってほしくないって言われるので（司 03）”のように、協働の経験がないために、受け入れてもらえなかったりする場合がある。

「協働に対する教員の認識の希薄さ」とは、教員が、学校図書館員と一緒に授業をするイメージを持っていない状態のことである。“教科の先生が、図書館にそこ（司書教諭による指導）を求めているかって言われると、みんなが求めているわけではないので。使うイメー

ジもない先生もいっぱいいるし（司教 02）”や“これを必ず言ってくれとか、やってくれと言われることはないですよ（司 04）”のように、学校図書館員を指導上のパートナーとは考えていない教員は、支援してほしいことを挙げられない。

「教員自身のやり方」とは、授業の内容や進め方について、教員独自の手法やこだわりがあることを示す概念である。“社会科の先生って、割と、自分のスキルや資料でばんばんいかれる人が多いので（司教 02）”や、“やっぱり自分の授業にそこまで入ってほしくないっていう先生はいるなって感じですね（司 10）”のように、教員の指導方針がはっきりしていると、学校図書館員は、その意向を尊重し、授業に関する提案をしたり、一緒に指導することを控えている。

＜対等ではない＞とは、学校図書館員が、教員と対等なパートナーとして、授業に関わることを躊躇する気持ちを表し、2つの概念を含む。

「教員に遠慮する気持ち」とは、教員に対して積極的な働きかけを控えようとする気持ちのことである。“実はこれ（情報カード）があるんですけどって私が言えばよかったんですけど、そんなにたくさんの文章を先生は書かせるつもりはなかったのかなって思って（司 03）”のように、＜教員の意図＞を酌んで遠慮する場合と、“私は司書で、先生じゃないので、こんなあつかましくしていいのかって（気になります）（司 03）”のように、＜事務職としての学校司書＞であることを意識して遠慮する場合がある。

この「教員に遠慮する気持ち」は、「授業を手伝う意識」を生み出している。学校図書館員は、“ほとんど打ち合わせといっても、先生のやりたいことを伺って、そのために図書館が何をできるのか、私が何を手伝えるのかっていうことをすり合わせる打ち合わせだったんですね（司 04）”や、“教科の先生に、どこまで関わったらいいですかってお伺いして。あとは、どれくらい関わったらいいですかって聞いて、そんなの（司書教諭による支援）は必要ないですって言われたら、資料を用意するだけです（司教 05）”のように、授業のなかに図書館のねらいを組み込んだり、指導したいことを伝えたりして一緒に授業をつくるというよりは、教員の授業を部分的に支援することに焦点を合わせる。

このように、《立ち位置に対する迷い》は、学校図書館員が指導的な役割を担うことを躊躇していることを表すカテゴリーである。＜事務職としての学校司書＞という意識は、教育という場において、教員と＜対等ではない＞という引け目を学校図書館員に感じさせている。一方、教員である司書教諭は、＜司書教諭と教科教員の二重構造＞によって、時間的な制約を受けたり、専門性を自覚できなかったりするという課題を抱えている。また、＜学校図書館員が必要とされない＞場合も、学校図書館員が授業に参加することを難しくする。

教員との関係構築

《教員との関係構築》とは、学校図書館員と教員の役割分担が、両者の人間関係や、お互いの立場や意図を理解するためのやり取りに左右されながら構築されていくことを表すカテゴリーで、3つの概念を含んでいる。

「授業を通したやり取り」とは、学校図書館員が、授業の途中や後で気づいたことを教員に伝え、次の指導につなげるための話し合いを重ねることを表す概念である。“このつまずきをどうしたらいいんだろうって言われて二人で考えて、こっちじゃなくてこの方向からいったほうがいいのかもかもしれませんねとか、それもいいかなってやり取りをしていく感じ

です（司 08）”や“こうしていこうとか、お互いに、出てきたレポートを見て、今度はこういうふうと言おうとか、そうなります（司教 05）”のように、授業と一緒に指導した経験を踏まえた情報交換が、積極的な指導や役割分担をつくり出す要因になっている。

「図書館を使ってもらうこと優先」とは、学校図書館員が、図書館で授業が行われることを最優先に考えていることを表す概念である。“出典を書くメモもあるから使つてとか、そういうふうにするさく言うと思つてくれなくなるので、そのへんの兼ね合いもあるんですけど（司教 04）”のように、相手によって言い方を工夫したり、“（調べ学習の時間を）とってくれるだけありがたいということもあつて、何とも言えないところなんですけど（司 04）”のように、問題点を指摘することを遠慮する場合もあるが、図書館を使ってもらうことが、授業に関わる第一歩と考えて、教員に対する働きかけの度合いを調整している。

「教員と一対一の関係」とは、図書館の利用に積極的な教員や、コミュニケーションを取りやすい教員とは連携しやすく、そうでない先生とは難しいと考えていることを表す概念である。“先生にもよるんですけど、去年その竹取（物語）をやった先生とは、あまりお話しできなかったんですね。人間関係の問題ですね。聞く耳持つ先生と持たない先生がいるってことですね（司 09）”や、“私が見ていたのは、総合とか、同じ国語科とか。ここで授業をする保体とか。あとは、相談してくれれば見ることもできますが、相談しないでやっている場合は、あらつていうときはありますね（司教 06）”のように、図書館を使った授業であっても、協力しやすい教員と、そうでない教員とでは、学校図書館員の関わり方が異なっている。

このように、授業の中で何をどのように指導するかを決める過程では、図書館を使ってもらいたいという学校図書館員の思いや、学校図書館員と教員との人間関係に左右されながら、授業を通したコミュニケーションによって、学校図書館員と教員の関係が構築されている。

自分なりの授業への関わり方

《自分なりの授業への関わり方》とは、図書館で行われる授業に、どのような形でどの程度関わるか、学校図書館員によって幅があることを表すカテゴリーで、4つのサブカテゴリーから成る。

＜主体的な授業参加＞とは、学校図書館員が必要だと思う指導を実践しようとしたり、教員に提案したりすることで、2つの概念を含む。

「必要と考える指導の実践」とは、教員とは異なるアプローチであっても、学校図書館員が、生徒に必要と考えている指導を行おうとすることである。“理科の先生は、すぐに「ここだよ」って教えて。私は、生徒になるべく、見つけ出す時間を、自分で探す力をつけてほしいなつてけっこう意地悪して言わないんですけど（司 03）”や、“私のほうは、整理の仕方を知ってもらいたかったんで、先生がそれを全部言っちゃうと、生徒も全然勉強にならないから。だから、最初に整理を自分でさせてから、あとで先生にこうしたらいいんじゃないのつて言ってもらいたかったんですけど（司 10）”のように、資料の探し方から整理分析の仕方まで、学校図書館員は、情報を利用するさまざまな局面で、生徒に必要と考える指導を実践したり提案したりしている。

「積極的な提案」とは、学校図書館員のほうから、指導の内容や方法を教員に提案し、授業に取り入れてもらうことである。“プリントをこっちで作つて、こういうことを説明し

て下さいって。これも図書館で使ったやつを渡して、これを先生もお願いしますって（司 06）”のように、教材を作成したり、授業案を見て修正を依頼するなど、自分の意見を指導に反映させようとしている。

＜間接的・二次的な授業参加＞とは、主たる授業者である教員の補助に徹しつつ、可能な指導を行うことで、5つの概念を含む。

「生徒一人一人への支援」とは、生徒全員に指導するよりも、調べている生徒個人に寄り添って、問題解決のために手を貸すことを表す概念である。“フィンランドの本は持ってきた、でもどこを書いたらいいか分からないという場合ですね。ここがいいんじゃないとか、小学生といっしょで、こっちの頁のここを読んでご覧とか、そういうことを個別にしていますね（司 09）”のように、授業のなかで個別にアドバイスをする。

「ワンポイントレッスンとしての指導」とは、授業で、指導する項目を絞って短時間で説明することである。“ひとつずつで5分ずつ、10分ずつでもいいので、ちょっと私がこういうことを言いたいんですけど、説明させていただいてもいいですかって形で（司 04）”のように、教員に授業時間の一部をもらって、最も必要なことを選んで指導している。

「日常業務の延長線上の指導」とは、図書館業務として行っていることを生徒に伝えるというかたちの指導である。“普段やっている分類作業の延長で。いろいろな、例えば、民族の棚にも食があるし。こういう視点もあるよ、こういう視点もあるよって、どんどん本を通して、いろいろな視点を持てるというのが、生徒から見たらおもしろいかなって思います（司 07）”のように、分類に関することなど、日常業務につながる内容は、指導しやすいと考えられている。

「探索ツールの事前準備」とは、情報収集や利用の場面で使えるツールや教材を用意しておくことで、直接指導できなくても、必要な技能を補完できるようにすることである。“ここ（図書館）にいつも、こういうの（情報カード）を置いているんですけど。何気なくおいているんですよ。いつ、どこで、何をっていうのを書いておかないと。これを書くのは大事だよってというのは、総合の時間もやっているの。ここに書く紙を置いとくから使ってねとか（司教 04）”のように、情報カードを準備している学校図書館員は多い。

「担当授業での指導」とは、司書教諭が、他教科の授業で指導時間をとってもらいよりも、自分が担当している授業のなかで指導してしまおうとすることである。“それ（参考文献の書き方）は1年生の最後にレポートを書かせるので、そこで教えていますね。自分の国語の中で（司教 06）”のように、国語の授業で扱ったことを、他教科での調べ学習で生かすよう意識している。

＜教員への働きかけ＞とは、学校図書館員が、教員の調べ学習に対する認識や指導の仕方を変えようとして行うアプローチで、3つの概念を含む。

「教員に教える」とは、調べ学習の指導の仕方を、直接、教員にアドバイスすることである。“テーマを絞り込まないと、具体的にならないとできないというのを分かってない先生に教えることが多いです。そうしないと、具体的に、調べられないんですよっていうのと言って、テーマの絞り込みをさせましょうっていうことが多いです（司教 04）”のように、積極的に教える場合と、“いや、えーっと、ちょっと自信がないので。どういったところが部分が必要かっていうので、こちらが気づいたことは先生にお伝えし、先生のほうからそういった部分は指導していただく。（司 04）”のように、控えめに伝える場合がある。

「教員の見本になる指導」とは、学校図書館員が生徒の前で指導する場合に、今後の教

員の教え方の参考になるように意識することである。“今、司書教諭の時間をもらっているのでこれだけ入れますけど。なくなれば、どのクラスにも、どの教科にも入るってことはない。一回入れば、経験してもらおうと、次からは T2 にならなくてもいけるところはあるんじゃないかなって思いますけど（司教 02）”のように、時間的な制約から自分が授業に入れない場合を想定して見本を見せる場合と、“子どもにその能力を身につけさせるためには、同じようにその授業をやっていただきたいと思います。私がいなくても、先生が、そういうふうに関心するに合わせたうまく授業をやっていただきたいって（司 04）”のように、どの教員も学校図書館員と同じように指導できたほうがよいという考えに基づいて、見本となる場合がある。

「丸投げ」防止」とは、教員が、学校図書館員に必要な指導をすべて任せてしまうことを避けようとする意識である。“総合なんかが入ると、もう丸投げになるので。スキル指導が。今年の 1 年生の総合の担当の先生が、いつもいつも私が T1 で入って、他の先生はなんとなく T2 でいるだけって感じになっているので、もう少し学年団の先生にも入ってもらいたいから（司教 02）”のように、指導案の中で学校図書館員だけが主たる指導者にならないよう意識したり、“じゃあ、あなたお願いします、1 時間丸々あげるから、その部分を教えてあげてちょうだいって言われても、ちょっと私はできないですね（司 04）”のように、教えられる内容であっても、自分が主でやってはいけないという気持ちを持ったりする。

<自分の領域自覚>とは、学校図書館員が、教員とは違う独自の指導領域や役割を自覚することで、2 つの概念を含む。

「コーディネーターとしての役割」とは、教科に分散した情報の探索と利用に関する指導項目を見渡し、当該授業に必要な知識や技能を生徒が見につけているかどうか把握することを示す概念である。“科目としての部分と、それを調べ学習や探究型の学習に落とし込んだときに、どの部分を科目のなかでやってもらいたいのか、っていうのは、ある程度、こっちが見ておかなきゃいけないかなっていうのがあります。（司 04）”や“教科の年間計画を見ると、こっちを先にやっておくと、家庭科のここでもうまく生きるのになんていうのにずれているのがけっこうあるんですよ。なんで、これを教えてないのに、こっちが先に出るのかなって（司教 04）”のように、探究学習に必要な知識や技能の習得状況を、教科を横断して把握し、指導計画に生かそうと考えている。

「教科の内容に踏み込まない」とは、“私は、社会科教員じゃないので、そこまでは、私としての意見というか、評価法というのはないんですけど。その付けたい力、本時のねらいに対して、資料として適切なものがあるかないかのほうに、私（司書教諭）はシフトするというか（司教 03）”のように、教科教員の専門性に依る内容と、学校図書館員として関わる内容を区別している。

このように、《自分なりの授業への関わり方》には、教員をリードするような主体的なものから、現実的にできることから始めるような間接的・二次的なもの、あるいは、教員に指導法を学んでももらったり、教員がカバーしていないことを担うなど、各々の取り組み方に幅があるものの、学校図書館員それぞれが、自分なりの授業への関わり方を工夫した結果見出した役割であると言える。

5.3.3.2 役割分担のプロセス

本節では、カテゴリー間の関係や、各カテゴリーの位置づけを分析し、学校図書館員が

教員と役割を分担していくプロセスを示す。以下の各項では、学校図書館員と教員による役割分担形成のプロセスを、学校図書館員が「何を求められているか探る段階」、「どのように関わるか考える段階」、「多様な関わり方を見いだす段階」に分けて説明する。

何が求められているか探る段階

学校図書館員は、図書館を使った授業が始まる前に、自分がその授業のために何をすればよいか情報を収集し、《自分の役割探し》をしている。《自分の役割探し》は、授業を担当する＜教員の意図＞を把握したり、授業のねらいや時間数など＜調整を要する条件＞と折り合いをつけることによって行われる。

一方、学校図書館員は、＜教員の意図＞が、「教員が持つ学校図書館員のイメージ」－例えば、必要な資料を準備したり、生徒に資料を紹介したり、生徒が資料を探す手伝いをすることが学校図書館員の職務であるという考え－に影響を受けていると感じている。つまり、教員の依頼は、その授業で学校図書館員ができることや貢献できることと必ずしも一致しないため、依頼以上の関わり方を検討する余地がある。学校図書館員に対してどのようなイメージを持っているかは、教員によって違いがあるが、資料提供や、情報探索はもっともイメージしやすい学校図書館員の仕事である。そのため、どの学校図書館員にとっても、授業に必要な資料を準備して提供することや、生徒が資料を探すときの支援が、授業に関わる最初の足がかりになる。

学校図書館員が、教員から期待された役割以上の関わりを意識するきっかけとなるのが、《指導必要性の認識》である。学校図書館員は、実際に授業に参加し、学習の様子を観察する過程で、生徒が課題の遂行に必要な知識や技能を習得していないこと、また、教員がそのような指導を十分に行っていないことに気づき、指導の必要性を意識する。

一方、図書館における自分の役割に関心をもつ学校図書館員も、教室やコンピュータ教室など、図書館外で行われる授業に対しては、《指導領域の線引き》を行い、積極的に関わっていない。その場合、「教科での指導に対する期待」を漠然と持ち、自らは図書館の中で行われる学習に焦点を合わせている。

どのように関わるか決める段階

知識や技能を習得していない生徒に対する《指導必要性の認識》を持つに至った学校図書館員が、実際に指導的な役割を引き受けるかどうかは、《授業を支援する自信》の有無と、《立ち位置に対する迷い》の強さに関係している。

学校図書館員は、指導すべき内容が＜学校図書館員としての資格や経験＞に結びつく場合、あるいは、授業に関わろうとする時に＜背中を押すもの＞がある場合に、《授業を支援する自信》を持つことができる。一方、＜学校図書館員が必要とされない＞状況を感じたり、＜事務職としての学校司書＞という立場から、教員と＜対等ではない＞という意識が芽生えたり、＜司書教諭と教科教員の二重構造＞によって関わり方を逡巡したりする場合、《立ち位置に対する迷い》が生じる。

自信と迷いという相反する気持ちが、《教員との関係構築》に影響を与え、どのような役割を担うかという学校図書館員の決定を左右している。

《教員との関係構築》においては、「授業を通したやりとり」が必要であるが、学校図書館員の自信と迷いの強さによって、働きかけが積極的になったり消極的になったりする。

また、学校図書館と教科の連携は、学校全体のカリキュラム設計ではなく、「教員と一対一の関係」によって生み出されるため、同条件であっても、両者の人間関係や状況によって関わり方は変化する。また、学校図書館員には、「図書館を使ってもらうこと優先」という気持ちがあり、自分自身のねらいや意図を伝えるよりも、教員に気持ちよく図書館を使ってもらい、次の利用につなげようとする場合がある。

このように、《教員との関係構築》は、学校図書館員自身の状況に影響を受けながら、教員との相互作用により具体化していく。

多様な関わり方を見出す段階

《教員との関係構築》の結果、学校図書館員は《自分なりの授業への関わり方》を見出している。例えば、《立ち位置に対する迷い》から積極的な指導を躊躇する場合は、＜間接的・二次的な授業参加＞によって生徒を支援し、《授業を支援する自信》が強い場合は、＜主体的な授業参加＞によってリーダーシップを発揮する。また、今後の役割分担を変化させるための＜教員への働きかけ＞や、うまく役割分担するための＜自分の領域自覚＞もみられる。

《自分なりの授業への関わり方》は、《教員との関係構築》の結果であるため、連携の機会があるたびに同じプロセスが繰り返され、パートナーとなる教員ごと、あるいは授業ごとに、役割分担の形は柔軟に変化する。

5.3.4 結論

本調査では、学校図書館員が、図書館を使った授業の中で、教員と指導上の協力関係を構築していくプロセスを明らかにすることを目的とし、指導的役割を果たしている学校図書館員を対象とした質的分析を行った。その結果、役割分担形成の過程を示すモデルを図表 5-7 のように描くことができる。

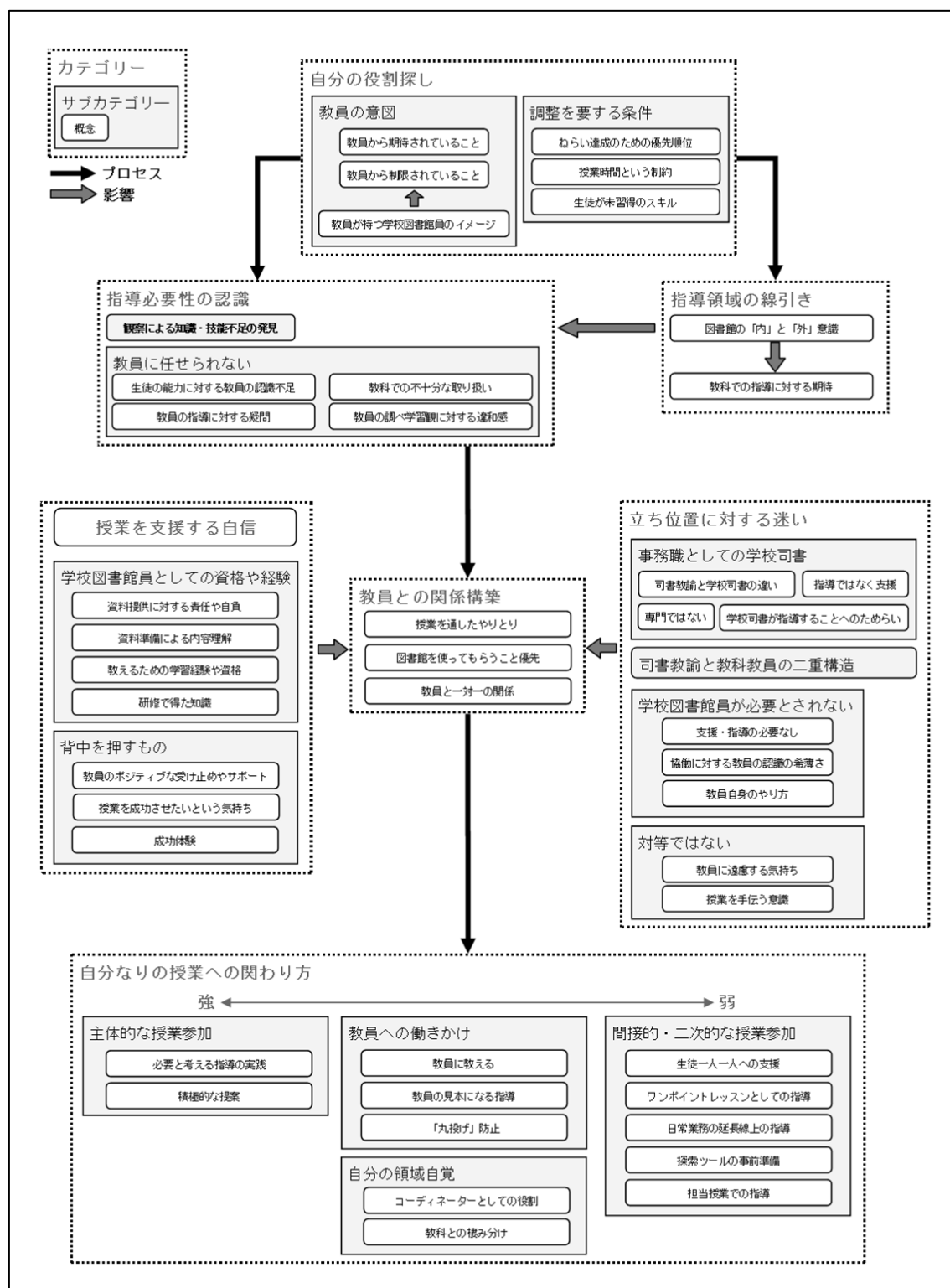
司書教諭や学校司書は、教員からの依頼に基づいて授業に関わっていく中で、自分が指導すべき領域を把握したり、生徒に対する利用指導の必要性を認識したりするようになる。しかし、自ら指導することに対しては、自信と迷いの両方を感じている。このような自信と迷いは、授業における教員との関係構築に影響を与えており、どのような役割を担うかを左右する要因となっている。最終的に、学校図書館員は、担当教員との役割分担に着地点を見出し、自分なりの授業への関わり方を決定する。

学校図書館員と教員の役割分担とは、それぞれの専門性に基づいた、明確な指導領域の分化を指すのではなく、両者が、授業の目的とお互いの役割を計りあいながら、もっとも効果的で納得のいく関係を構築していくプロセスであると言える。

本調査の意義として、学校図書館員と教員の連携においてこれまで課題とされてきた、“同僚性” 欠如や、学校図書館員の“受動的な存在” という意識を、関係構築のプロセスに影響を与える要因として抽出できたことがある。今後、学校図書館員が、教員と共に、情報の探索と利用の指導に積極的に関わり、生徒の情報活用能力の育成に貢献するためには、このような負の要因を取り除く方策を考えることが必要である。

一方、本調査では、教科を担当する教員に対する学校図書館員の関わり方に焦点を合わせて分析したため、総合的な学習の時間のように、教科横断的で、複数の教員が指導に携わるようなケースでも同じようなプロセスが見られるのかは確認できなかった。

図表 5-7 学校図書館員が教員と役割を分担していくプロセス



5.4 本章のまとめ

本章では、教科教員と協力して指導にあたっている学校図書館員が、授業のなかでどのような役割を担い、何を教えているのか、教員との役割分担はどのように決まるのかを明らかにすることを目的とし、学校図書館を使った授業で一緒に指導している教員と学校図書館員に対するインタビューを行った。

5 章 2 節では、役割分担のかたちに焦点を合わせて分析した結果、学校図書館員が教えているのは、利用指導の内容とされている項目（25 分野 119 項目）の一部にとどまることが分かった（図表 5-8）。学校現場で、学校図書館員の多くが指導しているのは、「テーマ設定の仕方」、「図書館での資料の探し方」、「情報探索の見通しの立て方」、「図書を使った調べ方」、「電子メディアを使った調べ方」、「資料の評価の仕方」、「記録の仕方」、「情報の分析の仕方」、「まとめ方」の各分野に含まれる知識や技能で、具体的には、「概要を知ってからテーマを考える」、「テーマを絞り込む」、「書架で本を探す（分類と配架、本の主題）」、「調べ方の種類や特徴」、「目的に応じたメディアを選択する」、「目次や索引を使う」、「インターネット上の情報の特徴」、「複数の情報を比較する」、「責任表示から信憑性を判断する」、「情報カードに記録する」、「奥付の見方」、「書誌情報の読み取り方」、「出典を記録する」、「参考文献リストを作成する」、「カードを使って情報を整理（比較、分類）する」、「レポートの書式」であった。

これらを、教科における「情報の探索と利用の指導」の内容と比較すると、「書架で本を探す（分類と配架、本の主題）」、「調べ方の種類や特徴」、「目的に応じたメディアを選択する」の 3 つは、教科の枠組みでは取り上げられておらず、利用指導独自の内容と考えることができる項目で、実際に学校図書館員が中心となって指導していることが分かった。しかし、それ以外の知識や技能は、文献上、教科の指導領域に位置付けられているものを、教員ではなく学校図書館員が指導していると言える。このことから、2 章と 3 章の文献調査の結果に基づいて教科の領域に分類した知識や技能の中には、実際には教員が指導していない（できない）ものがあり、教科による「学び方の指導」が必ずしも学習指導要領や教師用指導書の内容通りに行われていないことを裏付ける結果となった。

一方、学校図書館員も常に特定の知識や技能を指導しているわけではなく、また、指導の必要を感じていても実践できない場合があるなど、利用指導独自の領域を示す明確な基準は見いだせなかった。このことから、「情報の探索と利用の指導」における、学校図書館員の教員の役割分担は、それぞれの専門性だけではなく、授業における両者の関係性などさまざまな要因に左右されながら決まっていくと考えられる。

そこで 5 章 3 節では、インタビューデータのうち、学校図書館員の発言に焦点を合わせた分析を行い、役割分担という関係が形成されるプロセスを検討した。その結果、「情報の探索と利用の指導」における学校図書館員の役割は、単に必要かつ指導可能な項目を担うというのではなく、教員との相互作用を経て決定されることが分かった。すなわち、司書教諭や学校司書は、教員からの依頼に基づいて授業に関わっていく中で、自分が指導すべき領域を把握したり、生徒に対する利用指導の必要性を認識したりするようになる。しかし、自ら指導することに対しては、自信と迷いの両方を感じており、それが、授業における教員との関係構築に影響を与え、どのような役割を担うかを決定づける要因となっている。最終的に、学校図書館員は、担当教員との役割分担に着地点を見出し、自分なりの授

業への関わり方を決定している。

このように、学校図書館員と教員の役割分担とは、それぞれの専門性に基づいた、明確な指導領域の分化ではなく、両者が、授業の目的とお互いの役割を計りあいながら、もっとも効果的で納得のいく関係を構築していくプロセスであると言える。

3 章で生成した「役割分担の構造（仮）」では、図書館利用指導における学校図書館と教科の役割を、それぞれの専門性に基づく領域（ⅠとⅣ）と、両者が重なり合う領域（ⅡとⅢ）として捉え、重複部分は、学校図書館員と教員が同じように指導できる領域（Ⅲ）と、両者が異なった観点と手法で指導することによって補完し合う領域（Ⅱ）の二つに分けて表した。そして、文献上、それぞれが指導すべきとされている知識や技能を、各領域に分類することを試みた。しかし、4 章や本章の結果を踏まえると、利用指導に求められる内容は文献上求められるものより広く、学校図書館員と教員の関係は相互作用を経て柔軟に変化するものと捉え直す必要がある。

次章では、学校現場から得られた知見をモデルに反映させながら、「情報の探索と利用の指導」における学校図書館員の役割や利用指導の意義について、総合的に考察する。

図表 5-8 図書館利用指導の内容とこれまでの分析結果

25 分野	119 項目	①教科書調査	④質問紙調査	⑤聞き取り調査(生徒)	⑥聞き取り調査(教員)
01	学習計画の立て方	01-01 学習計画を立てる	A	○	
02	テーマ設定の仕方	02-01 テーマを決める	A	○	II
		02-02 課題を明確にする	B	○	II
03	図書館の使い方	03-01 図書館の意義と役割を理解する	C	×	◎
		03-02 学校図書館を利用する	B	×	◎
		03-03 公共図書館を利用する	B	◎	
04	図書館での資料の探し方	04-01 適切な目録を選択する	C	◎	I
		04-02 カード目録を使って資料を探す	B	◎	I
		04-03 コンピュータ目録を使って資料を探す	B	×	◎
		04-04 書架を見ながら資料を探す	B	×	◎
		04-05 文献リストを使って資料を探す	C	◎	I
		04-06 自館にない資料を探す	C	◎	I
		04-07 雑誌記事を探す	C	◎	I
		04-08 新聞記事を探す	C	◎	I
05	図書館以外の施設の使い方	05-01 専門図書館を利用する	C		
		05-02 文化施設を利用する	B		
		05-03 公的機関を利用する	B		
		05-04 さまざまな施設を利用する	B		
06	情報探索の見通しの立て方	06-01 情報探索の見通しを立てる	B	○	I
		06-02 目的に応じた調べ方を選択する	A	○	I
		06-03 目的に応じたメディアを選択する	B	○	I
07	図書を使った調べ方	07-01 図書を積極的に利用する	B		
		07-02 図書を使って調べる	B	×	○
08	参考図書を使った調べ方	08-01 参考図書を使って調べる	B		
		08-02 百科事典を使って調べる	B		
		08-03 事典を使って調べる	B		
		08-04 図鑑を使って調べる	C		
		08-05 辞典を使って調べる	A		
		08-06 統計を使って調べる	B		
		08-07 年鑑を使って調べる	C		
		08-08 地図を使って調べる	A		
		08-09 白書を使って調べる			
		08-10 便覧を使って調べる	C		
09	新聞・雑誌を使った調べ方	09-01 新聞を使って調べる	B		
		09-02 雑誌を使って調べる	C		
10	視聴覚メディアを使った調べ方	10-01 視聴覚メディアを使って調べる	A		
11	電子メディアを使った調べ方	11-01 電子メディアを使って調べる	B		
		11-02 コンピュータを利用する	A	○	IV
		11-03 インターネットを使って調べる	B	○	II
		11-04 インターネットを安全に利用する	B	○	
		11-05 検索エンジンを使って調べる	C	×	○
		11-06 CD-ROM を使って調べる	C		
		11-07 オンライン・データベースを使って調べる	C	○	I
12	その他の資料を使った調べ方	12-01 情報ファイルを使って調べる	C		
		12-02 その他の資料を使って調べる	C		
13	その他の調べ方	13-01 インタビューで情報を収集する	B	○	
		13-02 アンケートで情報を収集する	A	○	
		13-03 手紙で問い合わせる	A		
		13-04 FAX で問い合わせる	C		
		13-05 電話で問い合わせる	C	○	
		13-06 電子メールで問い合わせる	A	○	
		13-07 フィールドワークで情報を収集する	B		
14	情報検索の仕方	14-01 検索戦略を立てる	C	○	
		14-02 検索式を作る	C		
		14-03 検索に適したキーワードを作る	C	○	
		14-04 検索結果を評価する	C		
15	資料（情報）の評価の仕方	15-01 複数の情報を比較する	B	×	◎
		15-02 情報の信憑性を判断する	A	×	◎

5 章 学校図書館員と教科教員の協働による「情報の探索と利用の指導」

		15-03	情報の妥当性を判断する	B		◎	
		15-04	情報の適合性を判断する	B		◎	
		15-05	情報を読み解く	B		◎	
		15-06	情報を批判的に読み解く	B		◎	
		16-01	目的に応じた記録方法を選択する	A			
16	記録の仕方	16-02	カードやノートに記録する	B		○	I
		16-03	写真で記録する	B			
		16-04	ビデオで記録する	B			
		16-05	録音する	C			
		16-06	コンピュータで記録する	C		○	
		16-07	出典を記録する	B		○	I
		16-08	文献リストを作成する	B		○	I
17	資料（情報）の読み方	17-01	目的に応じて読み方を変える	B		◎	
		17-02	図書から情報を読み取る	B		◎	
		17-03	精読する	A		○	
		17-04	統計データを読み取る	C		○	
		17-05	図表やグラフの情報を読み取る	A		○	
18	情報の整理の仕方	18-01	情報を取捨選択する	A			
		18-02	収集した情報をファイリングする	B			
		18-03	収集した情報を保存する	B			
19	情報の分析の仕方	19-01	情報を分析する	B		○	I
		19-02	収集した情報を分類する	B		○	
		19-03	収集した情報の重要な箇所を抜き出す	B		○	
		19-04	事実と意見を区別する	A			
		19-05	仮説を検証する	A		○	
		19-06	統計処理をする	C			
20	情報の加工の仕方	20-01	抄録を作成する			○	
		20-02	解題をつくる				
		20-03	翻訳する，翻案する				
		20-04	映像を編集する	A			
		20-05	音声を編集する	B			
		20-06	画像を編集する	A			
		20-07	グラフを作成する	A		○	
		20-08	図表を作成する	B		○	
21	情報を使った文章の書き方	21-01	引用する	B	×	◎	III
		21-02	要約する	A	×	◎	IV
		21-03	図表やグラフを利用する	A		○	
		21-04	事実と意見を区別して書く			○	
		21-05	論理的な文章を書く	A		◎	IV
		21-06	分かりやすい文章を書く	B			
		21-07	出典を示す	C		○	
		21-08	ルールに則って書く	A		○	
22	まとめ方	22-01	適切な表現方法を選択する	B			
		22-02	アウトラインをつくる	B		○	IV
		22-03	レポートにまとめる	B		○	III
		22-04	文書を作成する	B		○	
		22-05	スライドを作成する	A			×
		22-06	ホームページにまとめる				
		22-07	新聞形式にまとめる	B	×		×
		22-08	ポスターにまとめる	A			III
		22-09	パンフレットにまとめる	A			
23	発表の仕方	23-01	シナリオ（原稿）を書く				
		23-02	提示用の資料を作成する	B			
		23-03	配布資料（レジュメ）をつくる				
		23-04	分かりやすく話す	B			
		23-05	機器を使って発表する	B			
		23-06	話し合いをする	B			
24	情報モラル	24-01	著作権に配慮して情報を利用する	A			
		24-02	適正に情報を発信する	B			
25	学習成果の評価の仕方	25-01	学習の成果を自己評価する	B			
		25-02	学習の成果を相互評価する	B			

- ① 教科書分析の結果，教科でも指導（A），利用指導の一部を教科でも指導（B），教科では指導しない（C）
④ 中学1年生に対する質問紙調査の結果，十分習得できていないと考えられる項目（×）
⑤ 高校2年生が探究学習で活用している知識や技能（○），特に教科で指導しにくいと考えられる項目（◎）
⑥ インタビュー調査の結果，学校図書館員が中心となって指導（I），学校図書館員と教員が分担して指導（II），学校図書館員と教員が臨機応変に指導（III），教員が中心となって指導（IV）している項目

注・引用文献

- ¹ 新井郁男, 天笠茂. 学習の総合化をめざすティーム・ティーチング事典. 教育出版. 1999, 307p.
- ² 例えば, 障害者教育の分野では, 役割分担のあり方が分析されている。
- ³ 関口靖広は, 教育研究におけるサンプリングの方法として「理想的事例の選出」を挙げ, “研究者が関心をもっているなんらかの特徴に関して理想的な状態にある事例を選ぶ”利点として, 新しい教育課程や指導法, 教育制度の検証に役だつと述べている。(関口靖広. 教育研究のための質的研究法講座. 北大路書房, 2013, 242p. 引用は p.102)
- ⁴ 関口靖広. 教育研究のための質的研究法講座. 北大路書房, 2013, 242p. 引用は p.5
- ⁵ 本調査で, 「指導」の語は, 生徒(全員)に対して図書館利用指導を行う場合に用いる。また「支援」の語は, 資料の探し方や書き方を個別にアドバイスしたり, 資料を手渡すなど生徒に対して行うフロアワークや, 資料準備など教員の依頼に応じて行うサービスを含む行為に対して用いる。「サポート」は, 概念名として, 具体的な「支援」だけではなく「支持」の意味を含めたい箇所にのみ使う。いずれの語も, 先行研究やインタビューからの説明や引用においては, 執筆者や発話者の使った用語をそのまま用いる。
- ⁶ 例えば, 木下康仁著. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い. 弘文堂, 2003, 257p.や, 木下康仁著. ライブ講義 M-GTA―実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂, 2007, 306p.など。
- ⁷ 池田吏志. 重度・重複障害児の造形活動の指導原理・方法に関する質的研究(III): ティーム・ティーチングにおける各教員の役割の理論化に向けて. 美術教育学. vol.35, p.93-106.
- ⁸ 木下康仁著. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い. 弘文堂, 2003, 257p. 引用は p.158.
- ⁹ 木下康仁著. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い. 弘文堂, 2003, 257p. 引用は p.179.

6章 協働の構造が示す学校図書館利用指導の意義

はじめに

本論文は、筆者が中学校で取り組んできた学校図書館利用指導を主題とし、司書教諭や学校司書が、何を、どのように、なぜ指導するのかという問題意識のもと、教科の内容と利用指導の内容の関係という観点から、利用指導のあり方について検討した。

1章では、利用指導研究の文献レビューを行い、日本では、主に利用指導の歴史、利用教育モデルの適応可能性の検討、利用指導の教育上の効果という観点から研究がすすめられてきており、学校図書館員と教員の連携が必要とされているものの、両者の役割分担については検討されていないことを明らかにした。

2章では、ガイドラインや体系表を分析し、国内外の学校図書館で行われている利用指導の内容と方法を整理した。また、利用指導の理論的根拠となっている利用教育モデルについて検討した。さらに、学校図書館を主題とした資料の中で、利用指導の内容とされている知識や技能を、25分野119項目に分類し、「文献上の「学校図書館利用指導の内容」としてまとめた。

3章では、教科や総合的な学習の時間に含まれる「情報の探索と利用の指導」の内容を、学習指導要領、同解説、教科書、教師用指導書を用いて分析し、「利用指導の内容一覧」と比較した。その結果、利用指導の項目は、教科等でも扱われているもの、教科等でも一部が扱われているもの、教科等では取り扱われていないものがあることが分かった。2章と3章の結果を踏まえて、学校図書館員と教員が役割を分担して「情報の探索と利用の指導」を行う「学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）」を導出した。

4章では、情報の探索と利用の過程で生徒が必要とする知識や技能を明らかにするために、中学生を対象とした質問紙調査と、高校生を対象としたインタビュー調査を行った。その結果、「利用指導の内容一覧」に含まれている知識や技能のうち、学校図書館員が優先的に指導すべき項目が見出された。また、教科の内容に含まれている項目のなかに、生徒が習得できていないと考えられるものがあることが分かった。

5章では、15校の学校を対象として、チームで指導にあたっている教員と学校図書館員をインタビューし、役割分担のあり方と、両者の協働が構築されていくプロセスを分析した。その結果、利用指導の内容に含まれる知識や技能には、学校図書館員が中心となって指導しているもの、教員が中心となって指導しているもの、両者が一緒に指導しているものがあると確認できた。また、一緒に指導している項目は、両者が同じ内容を教えている場合と、それぞれが違う内容を教えている場合があった。また、学校図書館員は、授業の目的と生徒の能力、教員の意図を酌み取りながら、もっとも効果的で納得のいく協働関係を構築しようと、自分の役割を調整していることが分かった。

以上の結果を踏まえ、6章（本章）では、「学校図書館利用指導における役割分担の構造」が示す利用指導のあり方―学校図書館員と教科教員がそれぞれの専門性に基づく指導上の役割を分担しながら、協力して「情報の探索と利用の指導」にあたること―の意義について考察し、協働の有効性を確認するとともに、結論と今後の課題について述べる。

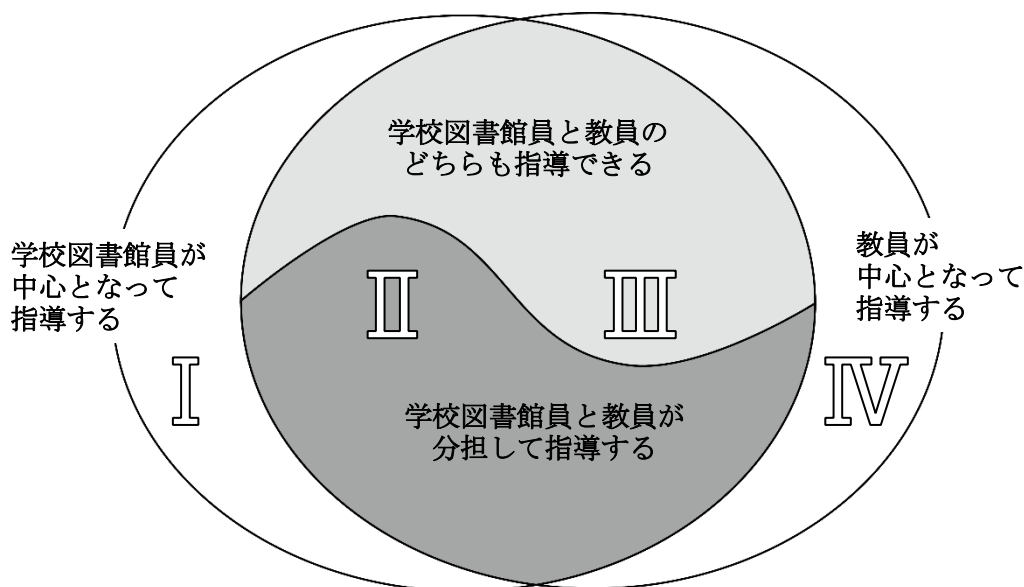
6.1 「学校図書館利用指導における協働の構造」の導出

本節では、4 章と 5 章の研究成果を踏まえ、「学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）」（図表 6-1）が、学校図書館員と教員の役割分担のあり方を説明できるかどうかを検討する。

利用指導の内容は、2 章で作成した一覧表（25 分野 119 項目）が示すように、情報の探索と利用の過程で求められる様々な知識や技能を包含している。これらを、教科における「情報の探索と利用の指導」の内容と比較した結果、利用指導と教科教育に間に共通点と相違点があることが明らかになった（図表 6-2 の①の列に示す）。このことから、学校図書館員と教員が協力して指導にあたることで、情報の探索と利用に必要な知識や技能を、より広くカバーできるという仮説を立てることができる。

3 章では、この仮説を基に、学校図書館員と教科教員による役割分担の構造について検討した（図表 6-1）。まず、学校図書館員と教員は、それぞれの専門知識に基づいて指導できる領域を有する。図表 6-1 では、学校図書館の専門領域をⅠ、教科の専門領域をⅣと表し、前者は教科が扱わない図書館独自の利用指導を、後者は教科の内容に含まれる指導を示す。一方、学校図書館と教科が、共通の項目を指導している領域がある。図表 6-1 でⅡと表した「分担して指導する」領域では、学校図書館と教科が同じ項目を異なるアプローチで指導することでお互いを補完している。また、Ⅲと表した「どちらも指導できる」領域では、両者が同じ項目を同じように指導をすることができ、どちらかが指導してもよい。

図表 6-1 学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）



4 章と 5 章では、利用指導の内容（25 分野 119 項目）をⅠからⅣの領域に位置付けられるかどうかを確認するために、二つの観点から実証的研究を行った。

一つ目は、25 分野 119 項目に含まれる知識や技能のうち、生徒が学習過程で実際に用いているものは何か、そしてそれは、どのような機会に習得しているのかという観点である。中学生に対する質問紙調査の結果、小学校の教育課程で習得しにくい知識や技能があると

いう示唆が得られた（図表 6-2 の④の列に×を記す）。また、探究学習に取り組んだ高校生に対するインタビュー調査の結果、学習の過程で活用している知識や技能が確認できた（図表 6-2 の⑤の列に○で記す）。さらに、そのような知識や技能の中に、教科学習以外の機会に習得したと考えられるものがあつた（図表 6-2 の⑤の列に◎で記す）。このような知識や技能は、教科の枠組みでは指導しにくい、あるいは指導していない可能性があると言える。

もう一つは、現場における学校図書館員と教員のチーム・ティーチングで、どのような役割分担が行われているのかという観点である。インタビュー調査の結果、図表 6-1 が示すように、学校図書館員と教員がそれぞれ指導している項目と、両者が役割分担したり、どちらかが指導したりしている項目があることが確認できた（図表 6-2 の⑥の列にⅠからⅣで記す）。

しかし、教科書や教師用指導書に掲載されている項目（図表 6-2 の①の列の A）のなかに、教員が指導していない、あるいは指導しにくいものがあつたり、教科の内容に含まれないため図書館員がカバーする必要がある項目（図表 6-2 の①の列の C）のなかに、学校図書館員が指導していないものがあるなど、文献調査の結果に基づく役割分担が、そのまま実践に当てはまるとは言えなかった。

さらに、学校図書館員が常に特定の知識や技能を指導しているわけではなかったり、指導の必要性を感じても実践できていない場合があることも確認された。すなわち、119 項目の中から学校図書館固有の指導領域を抽出するための明確な基準は見出せなかった。

特に、両者の専門性が重なり合うⅡとⅢの領域では、パートナーとなる教員の担当教科や指導経験によって、学校図書館員が担う役割が変化していることが明らかになった。具体例を挙げると、「21-01 引用する」という学習は、文献上、教科の内容に含まれているが、引用に必要な知識や技能の一部は図書館利用指導でのみ取り扱われている。そのため、生徒を指導する場合、教員の指導に学校図書館員が加わることで必要な内容をカバーできる、と言える。しかし、実際には、教員の専門性や指導経験によって、引用に関する指導をすべて学校図書館員が行ったり、逆に教員だけが行ったりことがある。すなわち、「21-01 引用する」という項目は、文献上、図表 6-1 のⅡの領域に位置付けられるが、実践の場においては、Ⅱの場合もあれば、Ⅲの領域になる場合もあるということである。

以上のように、文献調査の結果から導出した「学校図書館利用指導における役割分担の構造（仮）」を、生徒の学習と、図書館や教員による教授の両面から実証的に検討した結果、学校図書館員と教員の役割分担の構造を 4 つに分類して説明することは妥当であるものの、利用指導の内容（25 分野 119 項目）を、それぞれの領域に明確に分類し、位置付けることはできないという結論に至った。両者が共に関わっている項目は、理論上、それぞれの専門性に基づいて役割分担することが期待されるが、実際には、両者が一緒に指導したり、どちらか一方だけが指導したりすることがある。また、どの項目がどちらの領域に含まれるかはっきり線引きすることは難しく、学校図書館員と教員の属性や両者の関係性によって、位置付けが変化することが分かった。

図表 6-2 利用指導の内容（25 分野 119 項目）の教科と利用指導での取り扱い

25 分野		119 項目		①教科書調査	④質問紙調査	⑤聞き取り調査(生徒)	⑥聞き取り調査(教員)
01	学習計画の立て方	01-01	学習計画を立てる	A		○	
02	テーマ設定の仕方	02-01	テーマを決める	A		○	II
		02-02	課題を明確にする	B		○	II
03	図書館の使い方	03-01	図書館の意義と役割を理解する	C	×	◎	
		03-02	学校図書館を利用する	B	×	◎	
		03-03	公共図書館を利用する	B		◎	
04	図書館での資料の探し方	04-01	適切な目録を選択する	C		◎	I
		04-02	カード目録を使って資料を探す	B		◎	I
		04-03	コンピュータ目録を使って資料を探す	B	×	◎	I
		04-04	書架を見ながら資料を探す	B	×	◎	I
		04-05	文献リストを使って資料を探す	C		◎	I
		04-06	自館にない資料を探す	C		◎	I
		04-07	雑誌記事を探す	C		◎	I
		04-08	新聞記事を探す	C		◎	I
05	図書館以外の施設の使い方	05-01	専門図書館を利用する	C			
		05-02	文化施設を利用する	B			
		05-03	公的機関を利用する	B			
		05-04	さまざまな施設を利用する	B			
06	情報探索の見通しの立て方	06-01	情報探索の見通しを立てる	B		○	I
		06-02	目的に応じた調べ方を選択する	A		○	I
		06-03	目的に応じたメディアを選択する	B		○	I
07	図書を使った調べ方	07-01	図書を積極的に利用する	B			
		07-02	図書を使って調べる	B	×	○	
08	参考図書を使った調べ方	08-01	参考図書を使って調べる	B			
		08-02	百科事典を使って調べる	B			
		08-03	事典を使って調べる	B			
		08-04	図鑑を使って調べる	C			
		08-05	辞典を使って調べる	A			
		08-06	統計を使って調べる	B			
		08-07	年鑑を使って調べる	C			
		08-08	地図を使って調べる	A			
		08-09	白書を使って調べる				
		08-10	便覧を使って調べる	C			
09	新聞・雑誌を使った調べ方	09-01	新聞を使って調べる	B			
		09-02	雑誌を使って調べる	C			
10	視聴覚メディアを使った調べ方	10-01	視聴覚メディアを使って調べる	A			
11	電子メディアを使った調べ方	11-01	電子メディアを使って調べる	B			
		11-02	コンピュータを利用する	A		○	IV
		11-03	インターネットを使って調べる	B		○	II
		11-04	インターネットを安全に利用する	B		○	
		11-05	検索エンジンを使って調べる	C	×	○	I
		11-06	CD-ROM を使って調べる	C			
		11-07	オンライン・データベースを使って調べる	C		○	I
12	その他の資料を使った調べ方	12-01	情報ファイルを使って調べる	C			
		12-02	その他の資料を使って調べる	C			
13	その他の調べ方	13-01	インタビューで情報を収集する	B		○	
		13-02	アンケートで情報を収集する	A		○	
		13-03	手紙で問い合わせる	A			
		13-04	FAX で問い合わせる	C			
		13-05	電話で問い合わせる	C		○	
		13-06	電子メールで問い合わせる	A		○	
		13-07	フィールドワークで情報を収集する	B			
14	情報検索の仕方	14-01	検索戦略を立てる	C		○	
		14-02	検索式を作る	C			
		14-03	検索に適したキーワードを作る	C		○	
		14-04	検索結果を評価する	C			
15	資料（情報）の評価の仕方	15-01	複数の情報を比較する	B	×	◎	II
		15-02	情報の信憑性を判断する	A	×	◎	II

		15-03	情報の妥当性を判断する	B		◎	
		15-04	情報の適合性を判断する	B		◎	
		15-05	情報を読み解く	B		◎	
		15-06	情報を批判的に読み解く	B		◎	
		16-01	目的に応じた記録方法を選択する	A			
16	記録の仕方	16-02	カードやノートに記録する	B		○	I
		16-03	写真で記録する	B			
		16-04	ビデオで記録する	B			
		16-05	録音する	C			
		16-06	コンピュータで記録する	C		○	
		16-07	出典を記録する	B		○	I
		16-08	文献リストを作成する	B		○	I
17	資料（情報）の読み方	17-01	目的に応じて読み方を変える	B		◎	
		17-02	図書から情報を読み取る	B		◎	
		17-03	精読する	A		○	
		17-04	統計データを読み取る	C		○	
		17-05	図表やグラフの情報を読み取る	A		○	
18	情報の整理の仕方	18-01	情報を取捨選択する	A			
		18-02	収集した情報をファイリングする	B			
		18-03	収集した情報を保存する	B			
19	情報の分析の仕方	19-01	情報を分析する	B		○	I
		19-02	収集した情報を分類する	B		○	
		19-03	収集した情報の重要な箇所を抜き出す	B		○	
		19-04	事実と意見を区別する	A			
		19-05	仮説を検証する	A		○	
		19-06	統計処理をする	C			
20	情報の加工の仕方	20-01	抄録を作成する			○	
		20-02	解題をつくる				
		20-03	翻訳する，翻案する				
		20-04	映像を編集する	A			
		20-05	音声を編集する	B			
		20-06	画像を編集する	A			
		20-07	グラフを作成する	A		○	
		20-08	図表を作成する	B		○	
21	情報を使った文章の書き方	21-01	引用する	B	×	◎	III
		21-02	要約する	A	×	◎	IV
		21-03	図表やグラフを利用する	A		○	
		21-04	事実と意見を区別して書く			○	
		21-05	論理的な文章を書く	A		◎	IV
		21-06	分かりやすい文章を書く	B			
		21-07	出典を示す	C		○	
		21-08	ルールに則って書く	A		○	
22	まとめ方	22-01	適切な表現方法を選択する	B			
		22-02	アウトラインをつくる	B		○	IV
		22-03	レポートにまとめる	B		○	III
		22-04	文書を作成する	B		○	
		22-05	スライドを作成する	A			×
		22-06	ホームページにまとめる				
		22-07	新聞形式にまとめる	B	×		×
		22-08	ポスターにまとめる	A			III
		22-09	パンフレットにまとめる	A			
23	発表の仕方	23-01	シナリオ（原稿）を書く				
		23-02	提示用の資料を作成する	B			
		23-03	配布資料（レジュメ）をつくる				
		23-04	分かりやすく話す	B			
		23-05	機器を使って発表する	B			
		23-06	話し合いをする	B			
24	情報モラル	24-01	著作権に配慮して情報を利用する	A			
		24-02	適正に情報を発信する	B			
25	学習成果の評価の仕方	25-01	学習の成果を自己評価する	B			
		25-02	学習の成果を相互評価する	B			

- ① 教科書分析の結果，教科でも指導（A），利用指導の一部を教科でも指導（B），教科では指導しない（C）
 ④ 中学1年生に対する質問紙調査の結果，十分習得できていないと考えられる項目（×）
 ⑤ 高校2年生が探究学習で活用している知識や技能（○），特に教科で指導しにくいと考えられる項目（◎）
 ⑥ インタビュー調査の結果，学校図書館員が中心となって指導（I），学校図書館員と教員が分担して指導（II），学校図書館員と教員が臨機応変に指導（III），教員が中心となって指導（IV）している項目

協働の構造を表した図表 6-3 において、Ⅱの「分担して指導する」領域は、教員と学校図書館員が協力し、お互いを補完して指導に当たることを説明している。Ⅲの「一緒に、あるいはどちらかが指導する」領域は、学校図書館員と教員のどちらが指導してもよいことを表している。しかし、ⅡとⅢの領域は、現場の状況によって、学校図書館員が指導を担うことも、あるいは教員に任せることもある。

学校図書館員が中心となって指導する

学校図書館員と教員が一緒に、あるいはどちらかが指導する

学校図書館員と教員が分担して指導する

教員が中心となって指導する

221

完することができる（領域Ⅱ）。さらに、教員と一緒に指導することも、状況に応じて教員に代わって指導することもできる（領域Ⅲ）。一方、学び方の指導や情報活用能力の育成が教育課程に組み込まれることによって、「情報の探索と利用の指導」は学校図書館員だけの専門領域ではなく、教員もそれぞれの教科に応じて指導にあたることが求められている（領域Ⅳあるいは領域Ⅱの一部）。学校図書館員が、指導上の役割を柔軟に変化させることによって、どの教科でも、情報の探索と利用のプロセスを組み込んだ授業が可能になる。

学校図書館で用いられている既存の利用教育モデルは、生徒の学習プロセスに着目して、必要な知識や技能を提示したり（例えばアイゼンバーグらの **Big6 Skills**）、教員と学校図書館員の協働を統合の程度によってレベル分けしたりする（例えば、モンティエル - オーヴァーオール of 協働モデル）のに対し、「協働モデル」は、教科と利用指導の内容を関連づけ、教員と学校図書館員の役割を表すことによって、情報の探索と利用に必要な知識や技能の指導に、学校図書館員が不可欠の存在であることを示している。

6.2 協働型学校図書館利用指導の意義

「学校図書館利用指導における協働の構造」で示したのは、利用指導を、教育課程における情報の探索と利用に関する指導の一つと捉え、学校図書館員と教員がそれぞれの専門領域をゆるやかに交差させながら、生徒が必要とする知識や技能を協力して教える、というかたちである。情報の探索と利用の過程で必要な知識や技能は、「学び方」や「ものの考え方」「情報活用能力」として各教科の内容に含まれているが、教科では指導が難しい項目もあり、学校図書館員が利用指導を行うことによって、より包括的な教育が可能になる。

このような協働型学校図書館利用指導では、学校図書館員は、教科にない項目を指導したり（モデルの領域Ⅰ）、教員の指導を補完したり（モデルの領域Ⅱ）、教員の教科や経験、授業のねらいに応じて臨機応変に指導にあたったり（モデルの領域Ⅲ）することができ、授業ごとに関わり方を見極め、必要なかたちで指導に加わる。学校図書館員が有する専門知識の一つに、情報メディア、情報探索プロセス、情報利用のルールを熟知していることが挙げられるが、これらの知識や技能を用いて、主体的に情報を利用しようとする生徒を指導したり支援したりするのである。

このような役割分担によって生み出される「協働型学校図書館利用指導」の意義を、先進的な取り組みが行われている学校（A校と称する）の事例を取り上げながら述べる。A校では、司書教諭が、さまざまな教科の授業で、教員とのティーム・ティーチングを行っている。学校図書館を担当しているのはベテランの専任司書教諭で、国語／社会の教員免許状の他に、司書資格を有している。生徒への利用指導を、社会科、音楽科、家庭科、国語科、宗教科など、教科の授業のなかで教科教員と一緒にやっている。

例えば、中学1年生の社会科（地理的分野）「世界のさまざまな地域の調査」という単元では、全10時間のうち4時間が学校図書館を使って行われる。この単元では、社会科教員が「①世界の国々に生きる人々が、どのような生活をおくっているのか、どのような問題を抱えているのかを考える、②調べて得た情報どうしにどのような「つながり」があるか、見つける」という目標を、司書教諭が「①資料の中から必要な情報をきちんと取り出すことができる、②参考資料のデータ（書名、著者名等）を記録する習慣をつける」という目標をそれぞれ設定している。

これらを、利用指導の内容（25分野119項目）に照らし合わせると、社会科の目標が「19情報の分析の仕方」、学校図書館の目標が「16記録の仕方」、「17資料（情報）の読み方」に当てはまる。具体的な知識や技能としては、社会科が「19-01情報を分析する」、学校図書館が「16-07出典を記録する」、「17-02図書から情報を読み取る」、「17-04統計データを読み取る」、「17-05図表やグラフの情報を読み取る」、「19-03収集した情報の重要な箇所を抜き出す」を扱う。「19情報の分析の仕方」という利用指導の内容が社会科の目標にも含まれていることから、司書教諭も社会科教員と一緒に当該項目の指導にあたっている。

司書教諭が社会科教員に提案したり、授業のなかで生徒に直接指導している知識や技能は、目標から読み取れる項目以外にも、次のようなものがある。

- 「01-01学習計画を立てる」調べ学習のプロセスを見通す
- 「06-02カードやノートに記録する」
- 「07-02図書を使って調べる」目次・索引、序章を利用する

- 「08-06 統計を使って調べる」
- 「08-07 年鑑を使って調べる」
- 「14-03 検索に適したキーワードを作る」 目次や索引をひくための言葉を考える
- 「15-01 複数の情報を比較する」 複数の資料を使う
- 「15-02 情報の信憑性を判断する」 奥付など責任表示を見る
- 「15-03 情報の妥当性を判断する」 奥付などから情報の新旧を判断する
- 「19-03 収集した情報の重要な箇所を抜き出す」
- 「21-01 引用する」 括弧を使って抜き書きする
- 「21-02 要約する」 箇条書きにする、複数の情報を自分の言葉でまとめる
- 「23-01 シナリオ（原稿）を書く」
- 「23-02 掲示用の資料を作成する」
- 「23-04 分かりやすく話す」 発表の構成、話し方、
- 「25-01 学習の成果を自己評価する」 自己評価シートを使う

教室の授業では、グループで分担して調べた結果を用いて、それぞれの関連性を見出す作業と、結果をまとめる作業を社会教員が指導している。これらを、利用指導の項目と照らし合わせると以下のものが当てはまる。

- ☐ 「19-01 情報を分析する」 因果関係を見出す
- ☐ 「20-08 図表を作成する」 地図を使ってまとめる
- ☐ 「22-01 適切な表現方法を選択する」 まとめ方を決める

本單元における司書教諭の関わり方で特徴的なのは、図書館における本の分類や配架、インターネット検索など、資料の探し方に関する指導時間が設定されていない点である。この点について司書教諭に尋ねると、生徒は、あらかじめ図書館が用意したり指定したりした資料を使うとのことであった。この授業では、社会科教員が地図の活用を推奨しているのに対し、司書教諭は、年鑑や統計等、キーワード検索では見つけるのが難しい参考図書（レファレンスブック）をあらかじめ準備し、それらを活用する課題を与えることによって、利用の仕方を生徒に習得させている。また、「19-01 情報を分析する」方法として、「比較する」「原因と結果に分ける」ためのワークシート（ひな形）を司書教諭が用意し、教員の指導を補完している。

一方、音楽科とのティーム・ティーチングでは、司書教諭の指導上の役割がより大きくなっている。この授業で生徒は、音楽家ベートーヴェンの生涯や作品について知ることを目的として、レポート執筆に取り組む。音楽科の目標は「①ベートーヴェンについて調べ、その生涯や作品を知る、②自分のテーマを持ち、それについて探究する、③「レポート」という形式を学ぶ」である。また、学校図書館の目標は「①資料の中から必要な情報をきちんと取り出すことができる、②事実と意見を区別して書く、③参考資料のデータ（書名、著者名等）を記録する習慣をつける」で、①と③は、前述した社会科の目標と同じである。

この授業で、司書教諭が指導したり、教材のなかで取り上げている項目は以下のとおりである。下線部は、地理科で指導した内容と重複しているものである。

- 「02-01 テーマを決める」気になったことを書き出す
- 「02-02 課題を明確にする」疑問文にする
- 「06-02 カードやノートに記録する」
- 「15-01 複数の情報を比較する」複数の資料を使う
- 「15-02 情報の信憑性を判断する」責任表示を見る
- 「16-07 出典を記録する」奥付の見方,
- 「16-08 文献リストを作成する」
- 「17-02 図書から情報を読み取る」
- 「19-04 事実と意見を区別する」
- 「21-01 引用する」括弧を使って抜き書きする
- 「21-02 要約する」箇条書きにする, 複数の情報を自分の言葉でまとめる
- 「21-05 論理的な文章を書く」根拠を示す
- 「22-03 レポートにまとめる」レポートの構成, 章立て, レポート用紙の使い方
- 「24-01 著作権に配慮して情報を利用する」コピー＆ペーストについて

この授業で、音楽科教員が指導している利用指導の項目はなく、情報の収集からレポート作成に至るまで、主に司書教諭が教えている。ただし、鑑賞文の書き方について（時代背景を踏まえて、曲が書かれた状況を想像しながら音楽を解釈すること）は、音楽科からのアドバイスが教材に載っており、教員が指導している。

音楽科教員は、司書教諭を「情報を扱う専門家」と捉えており、情報の収集だけではなく分析やまとめまで、すなわち、情報カードに記録したり、引用や要約をしながら書いたり、レポートの形式にまとめたりすることも、司書教諭が指導可能な領域と考えている。すなわち、ベートーヴェンという音楽家を知るために「調べ学習」を行うという授業は、司書教諭とチームを組むことによって実現している。

この授業でも、社会科の授業と同様、資料を「探す」ための指導は行われていない。資料の探し方について指導する機会が別の授業であるかどうか聞いたところ、どの授業も、調べ学習をするには短い時間数しかないため、必要な資料を図書館側が用意し、資料の探し方は、必要な生徒に個別にアドバイスするだけになってしまうとのことであった。図書館で資料を探すことは、中学生にとって負荷が大きい上、うまく情報収集できないとその後の作業がすべて滞ってしまい、教科の単元目標を達成できなくなることから、必要な情報を選択したり、引用や要約しながらまとめたりするなど、情報の扱い方を指導することに焦点を合わせている。

司書教諭は、この他にも、家庭科、国語科、宗教科の教員とチーム・ティーチングを行っているが、指導する項目は教科ごとに異なっている。また、司書教諭は、学習の過程で必要であるにも関わらず教員が教えない（教えられない）知識や技能の指導を担ったり、指導を行わなくても生徒が困らないような支援の仕方（例えば、資料を事前に用意して別置するなど）を考えたりする。教員は、専門性に基づいて指導できる領域については自ら指導し、そうでない項目は、司書教諭に指導を依頼したり役割分担したりしている。「協働型学校図書館利用指導」によって、どの教科でも、調べ学習や探究型の学習が可能になっているのが、A校の実践である。

6.3 本論文の成果と課題

本論文で設定した課題は、学校図書館利用指導という教育活動において、司書教諭や学校司書が何を、どのように教えるのかを明らかにすることである。情報の探索と利用の指導が教育課程に取り入れられ、各教科がその役割を担うことが求められている一方、学校図書館が長年取り組んできた利用指導は、学習指導要領上も、情報教育の手引き等でも、存在感を示すことができていない。また、学校図書館員の教育的役割に対する認識を、共に教育に携わる教員や管理職と共有することも難しい。

図書館の利用者教育は、“図書館が持つ固有の領域の専門知識や技術の中で一般の人々に必要な部分を伝えること”¹とされているが、何が「図書館が持つ固有の領域」足り得て、何が「一般の人々に必要な部分」なのかを明らかにすることが求められる。また、利用者教育を情報リテラシー教育のひとつに位置付け、情報の収集から活用に至るプロセスを教育の対象とするとき、他分野との関係性において、図書館や学校図書館員が果たす役割を明示する必要がある。

野末俊比古が、学校図書館員の専門性と利用者教育の関係について、“例えば、図書館で調べたことをどのように活用してゆくか、といった情報の管理・加工・伝達などに関わる知識・技能は、可能性としては（利用者教育の内容に：筆者注）含まれるとしても、現実の図書館の諸業務に関わる知識・技能には通常含まれておらず、まして図書館に「固有なもの」とみなされているとはいえないだろう”²と述べているように、学校教育という文脈で利用指導を進めていく場合、教科の内容を踏まえつつ、司書教諭や学校司書が何を教え、それは教科教員の指導をどのように補完するのか説明する必要がある。

利用指導は、戦後長く取り組まれてきた、学校図書館における重要な教育活動の一つであるが、学校図書館員が何をどのように教えるのかを明示するための研究が行われてこなかった。そのため、利用指導の必要性を主張する論考は数多あっても、それを説得できる根拠や指針がないままであった。そういった意味で、本論文は、従来より利用指導の内容として考えられてきた項目を、教科の内容を踏まえて見直し、学校図書館員と教科教員の役割分担のあり方を「学校図書館利用指導における協働の構造」として示したことを成果として挙げることができよう。このモデルは、最初に設定した問い—学校図書館員は何を、どのように、なぜ指導するのか—に対する答えを説明するために有効である。

まず「何を」であるが、本モデルのⅠ、Ⅱ、Ⅲに含まれる項目が優先的に取り扱うべき内容になる。特に、教科では取り扱われないⅠ、教科では必要な内容がカバーされないⅡの項目は重要である。また、指導上のパートナーとなる教員の専門性や経験によってはⅢの領域が広くなり、学校図書館員が中心となって指導にあたる必要のある項目が増える。ただし、利用指導の内容（25分野 119項目）をどの領域に位置付けるかについては、項目ごとに明確な解があるわけではない。学校図書館員が教えるべき項目は、協働相手となるパートナーの専門領域や経験によって柔軟に変化するのである。

次に「どのように」であるが、モデルで示したように、教員と学校図書館員が役割分担することによって、利用指導の内容をより幅広く網羅できる。情報の探索と利用の指導は、学校図書館員に固有の領域ではなく、教科教員が担う場合もある。学校図書館員に求められるのは、單元ごとに教員との役割分担のあり方を考え、最も適した指導の方法を決めていくことである。

最後に「なぜ」についてであるが、モデルのⅠやⅡのように、情報の探索と利用の指導において学校図書館員だけが指導している領域があり、教員の指導を補完することができるから、とというのが答えになるだろう。

教育課程で、探究的な学習や言語活動の充実が謳われているなか、「学び方」の一つとして、情報の探索と利用に関する知識や技能を生徒に習得させることは重要である。学習指導要領では、利用指導が教科の内容と関連づけられていないが、教科の枠組みだけで必要な知識や技能を指導できないことは、本モデルで示したとおりである。特に、「情報の収集」や「情報の評価」に関する知識や技能は、学校図書館員が果たす指導上の役割は大きい。文部科学省も“様々な資料から必要な資料を探し出すための技術やスキルを学ぶためだけでなく、その情報の中から主体的に目的にあった情報を選び取り、それを分析・評価して情報を再構成、検証し発表していくことが重要”³と述べているが、教員が教科や総合的な学習の時間に必要な項目を組み込んで、すべて自ら指導することは難しいだろう。学校図書館員を指導上のパートナーと位置付けることによって、当該授業の目標が達成されることは、6章2節の事例からも明らかである。

最後に、今後、本論文の成果を実践へと結びつけるために視点を四点挙げる。

一つ目は、学校種の問題について検討することである。本論文では、筆者の実践から生じた問題意識に基づき、主に、中学校を対象とした分析を行った。利用指導の内容を検討するにあたっては、より基礎的な項目を取り扱うであろう小学校段階や、発展的な学習が可能になる高等学校段階を検討する必要がある。5章の聞き取り調査では、高等学校の司書や司書教諭を含めてインタビューを行ったが、中学校と高等学校における利用指導の内容の相違点に踏み込んだ分析まではできなかったので、学校種に応じた利用指導のあり方については今後の課題としたい。

二つ目は、より幅広い科目を対象に、それぞれの特性に着目した分析を行うことである。本論文では、学習指導要領や教科書を点検した結果、利用指導の内容（25分野 119項目）を含む科目として、主に、国語科、社会科、技術・家庭科と総合的な学習の時間を取り上げて分析した。しかし、理科における「科学的な探究」など、その他の教科における「情報の探索と利用の指導」についても、利用指導との関係を検討する必要がある。国語科や社会科で行われる、文献調査やフィールド調査を中心とした探究学習は、資料提供という観点から学校図書館と連携しやすいという特徴があるが、実験や観察を主とする科学分野の探究においても、学習の各段階で連携することができるだろう。実践事例の少ないジャンルではあるが、今後、取り組んでいきたい。

三つ目は、新学習指導要領に向けた対策について論じることである。2016年12月21日、文部科学省中央教育審議会が『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』を取りまとめるなど、次期学習指導要領改訂に向けた議論が活発化している。「生きる力」の基本理念は継承しつつ、より「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められるなど、学びのプロセスを重視し、知識だけではなく「資質や能力」を育むことに主眼が置かれている。情報教育の分野では、「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」が設置され、2016年4月に中間取りまとめが公表されているが、学校図書館がこのような情報教育の領域に含まれない傾向は続いている。新しい学習指導要領の改訂に合わせて、利用指導の内容と、教員との役割分担のあり方について見直す必要があるだろう。

四つ目は、利用指導を行う主体としての、司書教諭と学校司書の専門性について検討することである。本論文では、利用指導を学校図書館の職務の一つとして捉え、“専門的職務を掌る”とされている司書教諭、並びに、“専ら学校図書館の職務に従事する職員”とされている学校司書⁴を区別せず、学校図書館員の語で総称してきた。本来、司書教諭は教諭、学校司書は学校事務職員であり、両者の学校における位置付けは異なっているが⁵、利用指導の実践事例を分析する過程で、公私、校種、勤務形態の別によって、両職種の役割や業務内容は多様であることが分かり、単純に二職種に分けて分析することが難しいと判断した。2014年の学校図書館法改正により、学校司書が法律上位置付けられたことを踏まえ、同年、学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議が『これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について（報告）』を取りまとめた。また、学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議が、学校司書の資格・養成等に関する作業部会による議論を経て、学校司書養成のモデルカリキュラムを作成している。今後、これらの議論を踏まえて、司書教諭と学校司書が有すべき技能を明らかにした上で、利用指導における両者の関わり方について検討したい。

本論文の執筆を終えた後、筆者のフィールドである学校図書館現場に「協働モデル」を持ち帰り、新しい利用指導カリキュラムを作成する。1章で述べたように、15年にわたって司書教諭として独自の授業を持ち、年間指導計画を作成してきたが、最近では、社会科（地理的分野、公民的分野）、国語科、理科、英語科などと直接間接に連携し、「情報の探索と利用の指導」の一翼を担っている。「協働モデル」を導出する過程で得た知見を踏まえ、他教科と協力しながら、学校図書館利用指導のあり方について再検討し、実践し、その効果を検証することが、現場に戻ったあとの自分の役割であると自覚している。

注・引用文献

- ¹ 丸本郁子. “図書館サービスとしての利用者教育の意義”. 図書館における利用者教育: 理論と実際. 日本図書館学会研究委員会編. 日外アソシエーツ. 1994, p.7-30. (論集・図書館学研究の歩み)
- ² 野末俊比古. “情報リテラシー”. 情報探索と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p.229-278. 引用は p.243.
- ³ みずほ総合研究所. 教科書の改善・充実に関する調査研究報告書 (国語). 平成 18, 19 年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」. 文部科学省, 2008-03. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002.htm, (参照 2017-01-10).
- ⁴ 2014 年の学校図書館法改正により, 学校司書を“専ら学校図書館の職務に従事する職員”とする第 6 条が新たに加えられた。但し, 学校司書の資格や養成のあり方については, 今後の検討課題とされ, 学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議による報告書がまとめられている。(学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議. これからの学校図書館の整備充実について (報告). 文部科学省, 2016-10. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/10/20/1378460_02_2.pdf, (参照 2017-01-10))
- ⁵ 文部科学省. 「司書教諭」と「学校司書」及び「司書」に関する制度上の比較. 2015-02-08. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/sisyo/1360933.htm, (参照 2017-01-10).